
your earth

白亜迦舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

your earth

【NZコード】

N0947E

【作者名】

白亜迦舞

【あらすじ】

‘夢’降る夜の寝物語。一匹の猫、チヨ、は、姿を人間のそれと変え、ただ一人街を彷徨う。かつての飼い主、ツミ、を追うため。世界を変えるため、世界を悪夢で塗りつぶしていくツミ。彼の語らない想いを知るために、チヨは旅をし、時に戦う。月神と向き合う 大地の代理人として。

幕前（前書き）

この小説は「my moon」の続編です。初めての方の為にあらすじを付けましたので、どうぞ。尾ひれ付けてあります、そこは読み飛ばして結構です。

「こじは自立^{かつてじできた}夢^{ムカシ}離^{ハシ}子^コ学園^{ガクラン}。幼稚園から大学院まで何でもありの学園の中の、共通図書棟の第七小閱覧室。

がらがらと木の戸が開かれ、詰め襟^{タカラヅ}の黒学生服に巨躯^{ヨウク}を包んだ少年、高等部所属コランド・クーフナーが入ってくる。

「あ、いた。瀬理^{セリ}、何か面白い本教えてくれ」

不躾にコランドが呼びつけた、瀬理という女性は簡素なカウンターに身を収めて本を読んでいた。茶のブラウスに灰のロングスカート、そんな私服が三瓶瀬理が大学部の学生であることを主張していた。

「年上には敬語が基本だと思つけど……まあいいでしょう。コランド君が読みそうな物は……」

カウンターから出た瀬理が書棚から一冊の本を選択した。

「『your earth』……って、何だこの本。B5裏表刷りの紙に一つ穴明けて紐で結んであるだけじゃねえか」

「自費出版……というより、人の思念だけで蔵書が増えるこの図書館ならではの物ね。どう?十五禁^{おあつし}なシーンがなくて、戦闘の多めなコランドの好きそうな内容だけど、読まない?」

「コランドはどうあえずはじめの数ページを読んだ。

「現^{うつ}への侵攻は、さながら星を落とすこと、或いは種を蒼芽吹かせることに似ている。 なあ、この本前作があるんじやないのか?」

「そう言えば……前作の題名^{インテックス}は、確か『my moon』。あら、

棚はないわね」

その時、扉が開き新たな人物が入室してきた。

「その本はね この間クーフナー先生が借りてたよ」

高等部の制服を着用した虹彩異色オッドアイズの少女、彼女の名は立浪・架夜。
チェック柄のスカートを指定よりも短くしているのが目立つ。

「ラングドが言う 「クーフナー先生が? あの人、本読むんか?」
瀬理「一月に一冊読みます、クーフナー先生は。でも、その間は期限が過ぎようと絶対に返却されません」

「まじかよ。なら違う本を……」

「私、前に読んだ。だから、あらすじ教えてあげる」と架夜。

「いや、別の本読むし」

「それなら私が」

「おい!」

* *

その宇宙には、一つの大きな世界と無数の小さな世界と、二種類の世界が存在した。大きな方を現うつ、小さな方を夢まぼろし、人々は謂われも知らず一つをそう読んでいた。

現の世界では、一般に人々は魔術等の神秘的事象を扱うことを知らなかつた。鉄の兵器と科学の炎、人々はそれで生活を豊かにすると同時に争いを続けていた。終わりのない無為な戦争をしている者達がいれば、飽食と怠惰の平和に腐れる者がいた。

無数にある夢の世界まぼろし、そこはせいぜい一つの街程度の広さしか持

たない世界だつた。泡沢のよう^{うたかた}に生成と消滅を繰り返す世界。そこ

に住む人間はすべて現から来た者達だつた。彼らの中には、精神の

深部に秘められた特殊な能力に目覚める者もいた。

夢は通常互いに孤立して、行き来することができない。しかし、時折接触すると、夢同士は戦争をしなければならない。勝った方のみが存続を許される、それが宇宙の節理の一つだつた。

物語の舞台は、そんな夢の一^{まほろ}つ。天戸の宅^{あまとのやね}と名を持つ一軒の家がある夢だつた。五人の女性が暮らしていた日々に、現から一人の少年が入り込んだときから始まる物語。

その男、物語の主人公となる者はツミと名乗つた。夢で暮らす多くの者がそうであるように、彼は現での名前を忘れた。

小説『my moon』は全六幕にまとめられていた。

第一幕。夢に来たツミが初めて会つた女性は、炎を使う赫い髪の若い女だつた。戦いを知らなかつたツミは『戦わねば世界もろとも死ぬ』という現実を受け入れ、アカの能力を解放し、同時に月の魔力を使ふするという自分の能力も覚醒させ、彼にとつての初陣を見事勝利に運んだ。また、風を従える少女キズオトと、水の術を使ふする女ササヤキと知り合う。

第一幕。予知能力を使う娘サキと、彼女に献身する女ネガイは、七日の間ツミから姿を隠していた。ネガイから古刀 天乃常立^{あめのところたち}を得たツミは、それに秘められた強大な力を操る術を学び始める。また、自分を含め六人の人間を家族と見なして生活していくと決め る。

第三幕。ツミとキズオトが秋の森へ狩りに行く。そこで 淡島 の存在を知る。

第四幕。ササヤキの中に隠されていたもう一つの人格、ナゲキと接觸する。ササヤキの上位人格だというナゲキは、アカを凌ぐ術力とそれを使いこなす知性を持つていた。

第五幕。ツミとキズオトは他の夢から侵入してきた少年ヨミと出会つ。ヨミはツミ達の夢を歪めさせる存在だった。現実に苦悩するツミを前に、アカはヨミを殺害した。

第六幕。冒頭でササヤキ・ナゲキが死亡し、キズオトも姿を消した。意識を田覚めさせた天乃常立はツミを主と呼び、彼に宇宙を変えるための神となることを勧める。ヨミをはじめとし、二人の家族を失つたのはこの宇宙の節理のせいだと結論したツミは、三年住んだ家を去り現へと下ることを決断した。アカは彼を引き留めるもかなわず、彼の計画を妨害する為に現へ行く。サキとネガイは、最後の一人、を待つて二人きりで残ることにした。

それぞれの幕の間では、‘最後の一人’、^{ハーフ・キャット}猫人のチヨがサキから昔話を聞き、またチヨが夢を見る様子を垣間見せた。終幕でチヨはツミを追い旅に出る。‘すべての想いを知る為に’、チヨは旅立ち、またサキとネガイも旅立つた。

* *

「ずいぶん細かく教えてくれたな
眠そうな顔でコランドが言った。

瀬理「そう？まあ、サービスよ。細かいところは『my mo o』『本編を読まないとわかりませんよ』

架夜が言った「あらすじは出来事だけ。この小説は、大部分がツ

ミの主觀で描かれ、彼の心情が多くつづられているよ。作者の白亜
迦舞は、ツミの独白を記しただけ、とも言つてゐる。とにかくそんな
感じで、テーマが自分たちが生きる為に他の存在を滅ぼす事への苦
惱だったり、一緒に住む女人の人達との交流だったりするよ

「この物語には、古事記や日本書紀などに記された伝承の要素が
含まれているわ。知らなくてもいいし、知つてているとちょっと樂しく
なるかな」

一息。これまで三者は書棚を前にずつと立っていたので、四人用
のテーブルへと移動した。

そうそう、と瀬理が言つ。

「この物語の人達はみんな一つずつ属性を持つて術を使うけど、
基本的にこれらは系統化された魔術・呪術の類とは違うの。特に、
ア力とキズオトは術というより超能力みたいな感じね。日常生活で
は呪いを使つているような描写がある。他に、ササヤキ・ナゲキは
微声詠唱魔術、通称‘囁き’を使うことがあるわ」

「ランドの臉が半開きになつてゐる。彼は別に人の話を聞くと眠
くなる類の人間ではない。まるで、催眠魔術でもかけられたかのよ
うであった。

架夜はそれに構わず話す。

「そりいえば、あのお話の中で、封印術、を使ってたよね
静かに扉が開かれ、四人目の人物が現れた。

架夜と同じ制服の少女、名を紫部・陽子といつ。身こなしが落ち
着いた、しかし目が生き生きと輝いている少女だ。

「あ、クーフナー先輩、立浪先輩、三瓶さん。皆さんおそろいで
何を話されているんですか？」

「陽子、良いところに来たわ。さあ、そこに座つて封印術について話して下さい 封魔士^{フリーズ・プローサム}」と瀬理。

陽子は空いていたコランドの横に座つた。その気配に、コランドの目が少し開かれた。

『『your earth』ですか。私『my moon』から両方とも読みました。そう言えば、みんなきなり封印術使うときがありましたね』

*

封印術、封術とは平易に言うならば対象の力（主に術力）を抑制し、それを使用不能まで持ち込む術である。魔術・呪術・法術などのように系統化されてはいるが、特に不自由がないので混同して使われている場合も多い。

封術は大きく十の系統に分けられる。それぞれ、一から十の番号で呼称される。

『『my moon』作中に出でてきたのは、一一（荷）式と九（吸）式の一つ。どちらも、ネガイが力を暴走させた者に対し使った。キズオトに対し使われた一（荷）式。力を抑制する能を持つ道具の効果を発現・強化する。

天乃常立を鎮めた九（吸）式。術者が自身の体内に、もしくは術者が開いた、穴、に、対象の力を吸收させるもの。

封術は攻撃としても使える一方で、保護や援護の術としても使える。そのため他の術と併用して習得しておくのも良いが、封術単体で習熟させることで攻防一体の戦闘が可能となる。

*

「私は十（凍）式をよく使います。自分を中心に神秘靈力^{ヒナジー}の流れを凍らせる結界を張る術だけど、一と九と違つて自分も術が使えなくなります」

瀬理「まあ、そんなにややこしいものではないはずです。よっぽど気になつたのなら作者に御一報を。きっと反省して何とかするでしょう」

「そういう言えども、この小説をここに誤字脱字がありますよね」

陽子の言葉に架夜が答える。

「そういうときも、作者にメールしてあげたらいいかな。きっと喜ぶよ。感想欄に書くのもありだね」

そして三人の女性が立ち上がる。クラシンドは机に突っ伏して静かな寝息を立てている。

「さて、少し長く話しそぎたかな。私、家に帰らつかしら」

「三瓶先輩、クーフナー先輩はどうするんですか？」

「そつとして置きましょう。ここに鍵は開けたままでよいですか」

「う

瀬理はクラシンドの耳元に囁く。

「良い夢を」

あれ、と架夜が首を捻つた。

「そういう言えども、『my moon』の中で、‘夢’と書いて、まぼろし」と呼んでいたけど、あれにはやっぱり意味があるんだよね」

「それはそういう。現から発せられる負のエナジーが形成する世界・夢、言つなれば世界の悪夢でしょう。ツミが現に夢を送り込むことは、世界に悪夢を返すことに等しい。それにどういう意味があるのか、ところが『your earth』の核心の一つな

「闇の中に沈む想いもある」

「そうよ、陽子。『your earth』のテーマは、すべての想いを知ること。主人公となつたチヨが、一体悪夢に沈む世界でどんな想いを見付けたのか？」

「それは読んだ人だけが知っているのね」

三人が去る。

残されたコランドは、夢の中で一つの寝物語を聞いていた。

真っ黒なビロードの上に、金剛石の欠片が散りばめられている。それらの中心には、丸い銀の鏡が一つ。音のない、比類なき光を放つそれは、

僕の月。

自己紹介を 否、『そなたら愚民に我という存在を教えよう』、と言つべきだらうか。

僕の名前はツミ。月の神、夢の王、現に仇為す侵略者、暴虐にして冷淡な夜闇君主。それらが、僕に与えられた称号。

そう、僕という存在は今、数多の夢を指先だけで操り、無知な人々が住む現を侵略するものとなつたのだ。そして僕の為したことによつて、現は、今やどこであろうと等しく妖化した人間や異形によって戦火が絶えない大地となつた。

現への侵攻は、さながら星を落とすこと、種を蒔くことに似ている。小さな世界・夢を現に降ろすのだ。現に降ろされた夢は、その神秘な性質を周囲にひろげ現を夢化させる。そして、現は侵略される 世界は一つになるのだ。

宇宙は僕の思うがままの姿になる。だけれども 否、だからこそか 僕はもはや物語の主役ではない。僕は悪なる敵役であり、惨めな裏方でしかない。

街に火の手が上がる。炎は、僕がもたらせた夜の闇を照らし出す強い光を放つ。そして、あれに呑み込まれて無力な人々が幾人も死んでいく。

火は赫い。流される人の血、焼かれて爛れる人の肉も赤い。

そういうえば、かつて僕がツミという、人間、だった頃、僕は一人の女性の所有物となっていた。

燃えさかる火炎の色、‘アカ’が彼女の名前だった。
別れる日の少し前に、彼女から愛の告白を聞いた。

僕は彼女を愛していなかつた。好きだつたが 人として生きている間に会つたすべての人間より好きだつたが 愛してはいなかつた。

アカは、とても心の強い、気丈な女性だつた。紅珊瑚色の瞳にまづすぐな光を宿している。しかし、その心の芯には脆さを隠していた。初めて出会つたときなどは、自らの火炎に恐怖を抱いてさえいた。

そういうつたところが、僕は好きだつた、気に入つていた。決して成熟した精神など持つていない、青い彼女が僕は好きだつた。

断つておぐが、僕はアカを蔑んで憐れんでいたわけではない。
そしてここで思う。彼女は僕のどこが好きだつたのだろうかと。

普通の恋人同士なら、二人でそんなことを語り合うのだろう。だが、僕らにその様な会話はなかつた。アカは恥じらつて話そうとしたが、僕は彼女が側にいてくれるだけで不足はなかつたからなかつたし、僕は彼女が側にいてくれるだけで不足はなかつたから敢えて聞こうとも思わなかつた。

しかし、最終的に僕はアカを好いてはいたが愛することはなかつた。そして、僕の心がそこから動くことはもう無い。なぜなら、僕は神となり人としては死んだからだ。

かつての人間二十年、僕が唯一愛した存在は一匹の猫だった。彼女の名前、僕がつけた名前は、チヨ、という。

人として生まれて十四年目の頃、僕は母を失った。隠げな悲壮感と大きな喪失感から立ち直るまでの間、心を閉ざしていた僕とチヨは共にいてくれた。彼女が傍にいれば、僕の心は自然と安らいだ。離れていても、彼女のことを思うだけで不思議と胸が温かくなつた。夢にいた頃、僕は彼女の名前を忘れていた。思い出せないでいた。だからこそ、僕はア力をいや、止めておこう。これを言つるのは卑怯というものだ。

そして今、どういう運命の巡りか、チヨは人間の姿を得、僕の住んでいた夢まぼろしを訪れたあと僕を追つて現に戻ってきた。飼い猫に僕は追われ、またかつての恋人のア力も僕を追つている。

この他にも僕を追う縁ゆかりのある一人がいる。未来視をする盲目の女性今は男性になつた サキという人間と、いかなる契約に因るのかは謎だがサキに仕える黒い女性ネガイ。この四人こそが、これからはじまる物語の主役だ。

*

「おつとめ御苦労さまでした、月の御方」

「ごくろうさま、我が主様」

現うつにも僅かながら非科学の事象に通じ、夢の侵攻に気付いて抗してくる勢力がある。

今もそうした一群を殺戮したところだ。僕自身と比較すれば赤子

のような者達を、天乃常立の一振りで蹴散らした。僕の周りは、半径四百メートルが円状に真っ平らになつていて。

「ダウンロード
降着の準備を」

「「わかりました」」

僕の共をしている一人の女性。一人は鏡に映つたように同じ姿をしている。背丈は僕より少し高く、起伏は控えめ。滄い髪は短めで、ややたれた眼の虹彩は藍色。面長だが、各部品の調和は取れている整つた顔。

二人は水と氷を使う。黒い大地の上に、銀色の水が、ダウンロード降着、夢を現に降ろす儀式ヒナのための法陣を描き、紅い氷が必要な神秘ミツバチ靈力を蓄え始める。

準備が終わると、頭上に大きな星が出現する。現に顯在化した極彩色の光を放つ夢が、ゆっくりと僕の立つ場所に降りてくる。こうして夢が一つ降りれば、現の混迷はまた一つ色濃いものとなり多くの命が奪われる。

僕の大罪。

「来ると良い、我が民よ。地上うつを追われし悪夢の一欠よ。我が汝らの罪を背負う、故に、汝ら躊躇うことなく現へ帰り来るが良い」

しかし、僕は王だ。民の為に罪を背負うのは当然。そして、世界を変えよつと思つたのは他ならぬ僕自身なのだから。

声が、聞こえた。

「また夢が現に混ざった……！ ツミ、いつまでもあなたの思い通りにはさせない！」

憎悪の炎の向こうから、アカの声。

「相変わらず、躊躇つ」との少ないお方ですわね。すべてが終まるまでには辿り着きませんと」
惑わしの閃光の中から、サキの声。

「『主人様、どこにいるの？ ボクは、どこにいるの？』
地上の迷宮から、チヨの声。

* *

さて、皆せんには『』でお暇申しあげることにしましょう。今後、
僕が物語ることはない。ここからは、彼女たちが物語つていいくこと
でしょ。

さよなら、皆さん。そして

開幕の刻です。

開幕（後書き）

こんには、白亜遊舞です。

いよいよはじめました、『your earth』。基本的に、前作でできなかつたことを詰め込みつつ前に進んでいこうというのが目的です。

前作を呼んでいない方。あらすじを読んで解らなかつたら読んで下さい。前作は生温く十五禁だつたりします。

今回はそう言つたシーンも断ち切つて、戦闘場面を多くしていこうと思つています。早速、次回から戦闘を入れるつもりです。……とは言つても、大して格好いい物になるとも思えませんが。未熟者ですが、最後までお付き合いで下されば光栄です。

1・1 「迷い猫」

たくさんの中の音。
たくさんの人の顔。

あふれてうねる、人いきれ。
うねつてあふれる、街の灯り。

街は明るい。赤や黄色、勿忘草色に躊躇色の光達が踊っている。
ボクが歩く大通りには、暗いところは一つもなく、文字だつて、色
だつて、何だつて昼間のようにはつきりと見ることができる。
でも、見上げた空の星は幽か。人よりもっと良い目を持つてい
るボクでも、こんな地べたからは数えられるくらいの星しか見えな
い。

見えない。見えない。

そして、見えないのは星だけじゃない。

すれ違う人達の顔。みんな、何を考えているのかわからない。疲
れた顔の大人達。若い人間達は笑っているけど、心は閉じられて瞳
に光るものがない。

みんな心を殺して生きている。

怖いと思った。どうしてみんな生きているの？ そんな誰とも分
かり合えることのない世界で。きっと、この人達にとつては、生
だなんて牢屋みたいにしか感じられないんじゃないかな。望みを失
くして、ただガツガツと生きている。まるで、何かの罰みたいに。
街に来たのは初めてじゃない。人ごみの中を歩いたのも、これま
で何回かあった。

でも、その時はボクは一匹じやなかつたよ。いつもご主人様の腕
の中で、誰かに踏まれないように、大切に抱きかかえられて歩いた。

ご主人様、どこにいるの？

飼い猫は、飼い主を探して歩く。

ボクは、どこにいるの？

ボクは一匹。周りには数え切れなくくらいの人人がいるけど、ボクは孤独だった。ボクを見る人がいない訳じゃない。けど、その目は珍しがるものばかり。ボクを気遣ってくれるものじゃない。ショーウィンドウに映るボクの姿。背は日本の女人にしては少し高い。髪は灰色で、瞳は金色。肌はちょっと茶色。他の人間とは違う。でも、ボクが変なのはもつと別なところ。

耳。頭の横についてるけど、灰色の毛が生えてとがってる。
それに尻尾。こっちも髪の毛と同じ灰色の毛が生えている。ボクの思い通りに動かすことができる。

半襦袢と、その上に市松模様の着物。下の丈は膝上で、袖も短くされている。パンツは穿いている。服装も、古めかしくて周りから浮いている。

寂しいよ。

サキはどうしているんだろう。ネガイと一緒にだから寂しくないのかな。

でも、ボクは独り。寂しい。

*

テレビモニターがたくさん置いてあるところに来た。電気屋さんの前。何も映していないテレビ、スポーツを映しているテレビ、一番多いのはニュースを、それも同じやつを流しているテレビ。

「昨夜起きた北海道××市の大規模火災の続報が入りました。市の約八分の一を消失させたこの火災ですが、救急隊により新たに四百五十六名が遺体で発見されました。これでこの火災による死者は二千三十六名、重体が千百一名、行方不明者が三千九百九十一名となりました。救急隊は自衛隊との連携を強め、行方不明者の迅速な救助に臨む姿勢です」

嘘だ。

理由も根拠もないけど、ボクはそう直感した。ニュースで言つていた街で火事なんて起きてない。もっと別な災害が、そう……

……降着。
ダウントロード

頭の中に、そんな言葉がとっさに浮かび上がった。けど、ボクにはそれが何のことだかわからなかつた。

直感したことはそれだけじゃなかつた。もう一つ、その災害にはご主人様 ツミが関わっているのだと、ボクは感じた。

なんて、恐ろしいことなんだろう。

道を早歩きで行き交う人達は、このニュースに目を留めない。でも、何人かの人は足を止めてこれを見ていた。

「最近多いよな、こういう事件」「一体、これで何人死んだんだ?」「この街にも起こらなきや良いけど」「いつそのこと、全部壊れちまえばいいんだ、ハハハ……」

見れば、このニュースを耳にした人は、みんなちょっとずつ表情が変わつてゐる。

やっぱり、ご主人様は悪いことをしてゐるんだ、と思つた。サキか

ら少し聞いていたけど、実際に現に来て耳にすると衝撃がある。

「ご主人様のやつてること、人は死んでしまうし、生きてる人の心にも何かの戸惑いを作っている。みんな、静かに暮らしていたのに。

「ご主人様は、何をしたいんだろう？」

夢 同士の戦争をなくす、それが目的だつてサキは言つていた。でも、このまま行けば現はぼろぼろになつてしまつ。きっと、ご主人様はその事に気付いている、気付いていないはずがない。そして、そのためにご主人様が何をするのか、ボクにはわからない。

ボクは知りたい。ご主人様のすること。見ているだけじゃなくて、関わっていく為に。

だから、行こう。寂しいけど、どこへ行けばいいのかもわからないけど、とにかく行こう。

深呼吸するみたいに、息を大きく吸う。

大きな音を立てて走る車の排気ガス、人間達が頭に付けている薬、道ばたの糞やゴミ、食べ物屋さん……たくさんのにおいの向こう、ボクは一つのにおいを嗅ぎ取つた。

妖化した　夢に住んでいた人が化け物のようになること　人達のにおい。

狙われている命を感じて、ボクは走り出した。

身体が軽く、普通の人間では無理と思つ速さでボクは走った。

走る先は大きめの公園。

街の光から遠ざかり、周りはちょっとずつ暗くなつてくる。この目は人間のものとあまり変わりがないから、色のない暗闇にちょっと戸惑う。

でも、ボクは止まらない。ようやく見付けた目的地に繩り付くみたいに。夏の虫が、灯火に寄せ付けられるみたいに。

暗がりの中に浮かぶ影、木立と遊具のものその他に、人の大きさの

ものが五つ。

猫の耳を澄ます。聞こえる息づかいからして、普通の人間は一つだけ。あとはみんな妖化した人間。四人の妖化した人は、その一人を取り囲んでいた。脅かすみたいに。

でも、その普通な人も全然騒いだりしてなかつた。変だと思つたけど、ボクはとりあえず周りの妖化した人を倒すことにした。

走り続けた勢いのまま、ボクは地面を蹴つて飛び上がる。高さ二メートルちょっととから、敵と定めた人の後ろ頭に飛び蹴りを入れた。蹴る瞬間に足を右に振つたので、ボクは彼に邪魔されることなく一人だけの普通の人間、女の子の横に着地した。

「 大丈夫？ 怪我してない？」

ボクが女の子に聞くと、彼女はボクに驚いて身をすぐませながら、でも答えた。

「 い、いいえ。それより、あなたは 」

この人達は、とボクは言いかけて、止めた。

残つた三人が目を紅く光らせている。ゴツゴツした岩みみたいな顔に、怒りや悪いを浮かべている。

あ、そういえば。

今倒した一人に意識を向ける。死んでないかな、と心配したけど、ちゃんと息をしているみたいだった。妖化も解けてないし、気を失つていいだけみたいだ。

ボクはここで誰の命も失わせるつもりはなかつた。ツミは誰かを殺さないと自分たちを守ることができなかつた。でも、ボクは違う。ここをうまくやり過ごして女の子を連れて逃げるだけで良いんだから。

「えっと……とりあえず説明はあと。少し暴れるから、後ろに下がつて」

ブレザーにひだのスカート、制服姿の女の子は黙つて頷いた。

三人の意識はボクにある。言葉こそ話さないけど、ギラギラした視線はとても人間くさい 言つなればチンピラ。

と、そんな風に冷静に分析してみるけど、実際のところボクはそんなに戦い慣れているわけじゃない。猫時代でもなるべく他の猫と喧嘩しないようにしてきたし。

だから、ボクは先手を打つ。駆け引きなしの戦いのために、この身体の高い能力で相手が反応する前に攻撃する。

「いっくよー！」

十歩くらい離れた相手の胸に、握り拳を突き出して飛びかかる。妖化してる相手の身体は固い。けど、身体を一本の棒のようにして、鳥のような速さで突っ込むボクの一撃は彼の胸を大きく軋ませて、彼の身体を吹っ飛ばした。

着地と同時に、左右斜め後ろから拳が飛んできた。残ってる二人が、腕を伸ばしたんだ。

高く飛び上がってかわす、紙一重なんてできないから。地上三メートルくらいからとんぼをきつて一人の頭を蹴飛ばした。着地。ボクに蹴飛ばされた人も、地面に倒れて落ち着いた。最後の人は腕を四本にして、それをめちゃくちゃに振り回しながらボクに迫ってきた。

「う……これは読むしかないのかな」

いくら高く飛んだり走り回ったりしても、それだけで攻撃するのは難しいと思う。足元を見る。彼の振り回す手は地面にも届いているけど、すこしは隙がある。

「 今！」

スライディング。彼の鱗の生えた足を横に払う。倒れる。四本の腕は身体を支えない。

ボクは鱗の一本足を掴んで投げ飛ばした。

「それー！」

脳しんとう、胸骨かんばつ、頭がい骨骨折、全身強打。みんな重傷みたいだつたけど、生きてはいた。妖化していれば回復力も高いはずだから、ボクは手当てすることなく女の子だけ連れてその場を離れた。

七色の光に飾られた大通りを横切り、建物の間で立ち止まつた。

「追つてくる足音はしないね。もう、大丈夫かな」自分の手下とも言える妖化した人が倒されて、シミは何と思うのかな。まさか出てくるとは思わなかつたけど、現実に出でこないとなるとやっぱりちょっとだけがつかりした。

そして、あの人達。あの人達はどうなるのかな。傷が治つてそのままどこかに帰ればいいけど、誰かに見つかつたり鉢合わせたりしたらどんな事になるのだろう。また、誰か普通の人を傷つけたら嫌だなど思う。そういえばさつきのテレビみたいにニュースを変えてしまう人がいるのだから、もしかしたら現うつにも妖化した人間というものを知っている人がいるのかも知れない。その人達が彼らを殺してしまつうのかな。

そんな事を考えていると、目の前の女の子は怪訝そうな目でボクを見ていた。まずはこの女の子をどうにかしないと、と思ってボクは考えるのを止めた。

女の子は濃いめのお化粧をしていた。新橋色のアイシャドーがされた黒い瞳の目で、ボクを挑みかかるように見ている。

「あなた、何なの？　さっきの奴らは人間じゃなかつた。あなた

の動きも、普通の人とは思えなかつた。 助けてもらひて呉つ

もあれだけど、あなたは何者なの？」

口紅をぬつた紅玉のよつた唇を突き出して、彼女はボクを問いつめた。

やつぱり、怖いよね。

絶え間のない雜踏の音が、失望と手を取り合つてボクの心に押し寄せる。

「……人のいる場所をたどつて帰つてね。いろいろ危ないことがあるみたいだから」

ボクが質問に答えなかつたことが気に入らなかつたのか、女の子は眉を顰めた。けどボクは、さよなら、と言つて彼女に背を向けた。

「待つてよ」

待たない。

ボクは彼女と違つ。どちらかと言えば、彼女を襲つたあの妖化した四人と同じ者だから、彼女と一緒にいてはいけないと思つ、やっぱり。

「待ちなさいよ！」

その瞬間、お尻に強い痛みが走つた。

「痛い！」

女の子はボクの百十センチメートルくらいの尻尾を引っ張つていった。尻尾を掴まれたままでは振り返れない。ボクの背中に向けて、彼女は怒鳴るように言つた。

「別にあんたのことキモイとか言つた訳じゃないでしょ！ 答えづらいことがあるんだつたら答えなくてても良い。でも、これだけは答えて あなた、帰る場所はあるの？」

帰る場所。

ふと、ボクは猫だつた頃にご主人様と暮らしていた家を思い出した。兄弟もお母さんもいなかつたけど、お父さんはいた。人一番悲しみに弱い人だつたけど、お父さんは今も元気にしているのかな?何にしても、今のボクには帰る場所どころか寝る場所もない。

「家に来てよ……。お礼、したいから」

女の子の声には、寂しいような、切ないような、そんな感じがあつた。ボクの尻尾を掴む手も、なんだか縋り付くみたいな……。

「手、放してくれる? それ 本物だから」

「え……」「じめん」

女の子とボクは向かい合ひ。じつと、窺うようにボクを見ている。

「私、別に怖がっているわけじゃないからね……」

黙りこんだ彼女に、ボクは笑つて見せた。

「ボクの名前は、チヨ。ただのチヨだよ」

「 乾・優見」

ボクたちが黙ると、車の走る音が遠く聞こえた。眠らない街。優見の瞳に踊る街の光たちは、ちょっとやわらいで見えた。

「うち、お父さんもお母さんもいないから……誰もいないから……」

⋮

「 行こ?」

優見の手をとつた。銀の指輪がはめられたその手は、とてもやわらかかった。

友達になれるかな?

もちろん、ご主人様を探すのなら彼女とは別れないといけない。

……それ以前に、ボクはまずサキと合流しないといけないんだけど。でも、そんなことは関係なく、ボクはこの出会いがうれしかった。手を結んだとき、胸の中に走つたのがさよならの予感だとして

も、ボクは優見と会えたことをとても喜んだ。

優見がボクの手を引いて案内してくれる。
街の明かりが、雑踏が、怖くなくなつた。

1・1 「迷い猫」（後書き）

第一幕です。とりあえずチヨをメインに四話構成で行こうと思います。

『my moon』の時は背景を色々弄り回してみましたが、『your earth』では地味に行こうと思います。

都会。私も五歳の頃まで北の都会で育ちました。今はちよっと引っ越しんだとこころに暮らしていますが。田舎は良いっス。
……孤独な人間は、何処にいても孤独。神になろうと猫になろうと、自分から絆を結んでいかないと。

1・2 「彼女の名前」

優見の家は小さなアパートの一室だった。

アパートは、階段が錆びて、外の壁はひび割れがあちこちに見られた。けど、

「中はキレイなんだね」

「もう、莫迦にしないでよ。一人暮らしだからつて散らかしてなんてないわよ」

「ううん、そうじゃなくて……このアパート自体のことと言つてるんだよ」

ボクの言葉を違うふうに見た優見は怒ったように返事したけど、訂正すると照れくさそうに笑つた。

ここに来るまで街を歩いている間、優見と少しお話をすることができた。ピカピカしているお店を一つ一つ訊ねるとか、変な服を着ている人がいるとか、そんな他愛のないことを選んで話した。彼女はボクと話すとき、街を歩くたくさんの人と違つて、瞳をキラキラさせて心を開いててくれた。話題を選んでいるボクに対しても、きちんと受け答えしてくれる優見が嬉しかつた。でも、だからこそボクは見てしまう。そんな心を開いた彼女の瞳に、時々悲しい色の影が過ぎるのを。

玄関から上がるとき、ボクは自分の足が泥だらけなのに気がついた。ボクの履いている靴は、ご主人様がある夢の家まほね 天戸あまととのやね の宅に置いていった運動靴だつたけど、それはボロボロになつてしまつた。その上靴下も履いていなかつたから、足が汚れ放題だつたんだ。気遣いの細やかな優見がこれに気付いた。

「 む、チヨ、そこで待つてて。今タオルを持ってくるから」

優見はパタパタと家の中に駆けていき、蛇口からジャーと水を流

す音のあと、白い布を手に戻ってきた。

「足出して」

「え、自分で拭くよ」

「いいから！」

言われたとおりまず左足を出した。優見は真っ白なタオルでボクの足を、指の間一つ一つまで丁寧に優しく拭いてくれた。右足も同じだった。

ボクがお礼を言うと、優見はほほえんだ。

「命の恩人だからね。気にしなくて良し！」

次に彼女は眉を立てて、ボクを頭の先から爪先まで眺め回した。

「全身も泥だらけね……。まずはシャワーに入つて。着物は洗えないから、替わりに私の服に着替えてね」

*

温かい雨。

石けんのにおい。

白い湯気。

毛皮じゃない素の肌は敏感。その肌をとおして、ボクはそれらを幸せと一緒に感じていた。

人間の身体になつてシャワーを浴びるのは初めて。猫だった頃は、一月に二・三度ご主人様と一緒に風呂に入つた。子供の頃から慣らされていたせいか水は怖くなかったけど、水を吸つた身体が重くなるのは好きじゃなかつた。

人間の身体は毛がないから、素肌の上を水が流れしていくのは逆に気持ちが良かつた。こわこわしてた髪の毛も尻尾の毛も、シャンプーでやわらかくなつた。

あ、背中の毛……。

手を回すと、意外と洗えた。ボクの身体は筋力もすごいけど、柔

らかさも人より上みたいたつた。

シャワーのコックを閉め、優見の出してくれたバスタオルで身体を拭く。毛皮の部分はドライヤーで乾かしたいけどそうはいかないので、よく拭くだけにした。

「着る物出したからね。ちゃんとチヨが着れるように大きいの出したよ」

優見はボクより少し背が低いので、彼女が服を出してくれるのなら大きめの物にしてくれないといけない。

脱衣所に置いてある籠に入っていたのは、ボクの物ではないパンツとブラジャーと、パジャマ上下。優見は下着もボクに貸してくれることみたいだ。

とりあえずパンツを穿く。元のボクのパンツは股上が長く取られていて尻尾をとおす穴を開けてあつたけど、優見のパンツには当然それはない。しょうがないので、尻尾はお尻の下に挟んで我慢。次にブラジャー、つて

「優見い……これどうやって付けるの……？」

パン、と勢いよく脱衣所の扉が開けられた。

「これ、つてブラのこと？ うーん、そんなものかしらね」
ボクはこれまで晒し布を巻いて胸を押させていた。ブラジャーはその形は知つても着けたことはない。

優見がブラジャーを手に、ちょっと呆れたみたいに笑いながらボクの後ろに回った。

「まず腕をとおす。……そう、その紐の間。で、パットを胸に当てる後ろのホックを……！」

キ、キツイ。胸全体にまんべんなくかかる圧力に、ボクは息が止まりそうになつた。

「ちよつとチヨ、あんたどれだけ胸デカいのよ。私のブラが壊れちゃうじゃない」

優見が慌てたような怒ったような声で言つた。

ボクの身体からブラジャーが外され、優見が眉間にしわを寄せてボクの前に出てきた。

「あきれた……」これじゃブラは無しね。でも、あの布は洗濯してあるし。とりあえず家の包帯でも巻いとく?「

「ボクの胸つて、そんなに大きい……?」

ボクにとって比較できる女の人はネガイしかいなかつた。ネガイはボクよりちよつと大きかつたけど……。

優見の皿の色が変わつた。ボクの前で、はじめて怒つたような表情になつた。

「大きいわよー。トップで九十はあるんじゃないの? 何とかしないと、パジャマも着せられないわよ

そしてドシドシと足音を立てていなくなつたかと思うと、何かをひっくり返す音のあとに包帯を手に戻つてきた。

「ああ、ギリギリ巻くわよ。 その馬鹿乳を弾圧してやる!」

「優見、皿が怖いよ……」「問答無用!」

*

「ふふ、かわい。猫舌なんて、本当に猫だったのね」

あれから包帯を巻かれパジャマを着せられたボクは、丸いちやぶ台を前に正座して優見と一緒にインスタントラーメンを食べていた。理解できない怒りを込めて巻かれた包帯は、ヤマタノオロチみたいにボクの胸を締め付けてる。

インスタントラーメンの味はシーフード。生の魚介類には比ぶべくもないけど、それなりに味わいのある海産物の香りと、濃いめの醤油味がおいしい。でも、優見の言つとおり猫舌のボクはちよつとずつしか食べることができない。そんなボクを、優見は楽しそうに見ていた。

ちなみに、ボクの舌にはちょっとだけザラザラが付いてる。猫の時ほどいつもぱいは付いていないけど。

「人間のジャンクフードっておいしいの？」

「うん、人間になつたときに色々切り替わったみたいで。味覚自体変わつたし、猫の時なら気になつた調味料のにおいも平氣なんだ」

優見にはボクの事情を要領をまとめて全部話した。現の人には縁遠い　というか知りもしない　ボクの話を彼女は無表情に聞き、聞き終わつたあとは何事もなかつたみたいにインスタントラーメンを出して食べている。嘘をついているみたいな薄っぺらい笑顔で、他愛のないこと話をそつとしていた。

家の明かりの下で、優見はお化粧をおとした素顔でいる。ちょっと蒼白い優しい色の肌に、細くてまつすぐな眉。花は少し低め。髪の毛は黒の混じつた梶子色くわなしき。脱色、したのかな？　今はあまり手入
れがされてないみたいだつた。

ボクがじゅうそつさまを言つと、無地で若竹色のパジャマを着た優見が空の容器を手に立ち上がつた。

殊の外静かなその背中に、ボクは言葉では表せない空氣の重さを感じる。

優見は絶対何かに憤つてゐる。それはボクに対してではないみたいだけど、少なくともボクに関する事、ボクが話したことに関係する。だから、ボクは後ろめたいような気持ちがして、自然と顔は下の方を向いてしまう。

「私の思つてることが気になる？」

その声は、夕立の雨垂れのようにせわに振つてきた。

「うん」

ボクが額くと、優見は立つたまま堅い声をボクに告げた。

「私ね、怒ってるの。わかると思うけど。でも、それはチヨにじやない。私は、チヨの話してくれた、ツミ、つて人に怒っているの。

私は、その人を憎むわ」

優見の座る気配と一緒に、カタン、と木と木を打ち合させる音がした。視線を上げると、そこに額縁に納まつた一枚の写真が、ボクに見えるように置いてあった。

写真には一人の女の子。共に寄り添い笑う、仲の良さそうな二人。一人は優見。髪が今より明るい茶色で、これまた今とは違う健康そうな肌に良く映えている。もう一人の女の子は、優見と同じくらいの背丈だった。髪は少し長い綺麗な黒で、それをまっすぐ降ろしている。肌は白い。枯葉色のスプリングコートを着て、裾に黒いラインの入った白いロングスカートを穿いている。何より目立つのは、丸い眼に収まつた彼女の千歳緑の瞳。人とは一層違う個性の持ち主だと感じさせる光が宿っている。

「この子は葉名^{よな}。本名は青野・葉名。私の親友で、私は、ヨウ」と呼んでいた。

ヨウはちょっと人とは違う心で動いてる子だった。友達は作ろうとしなかつたし、私には他に友達がいたから出席番号が近くなかつたら話もししなかったと思う。でも、私達は話した。そして、私はヨウのことが大好きになったの。

化粧も、服も、流行の物じゃなくて自分で選んで着ていた。お買い物が嫌いで、私は良く遊具もない山の公園に連れてかれた。私のことを、ユウ、と呼んで、無邪気に笑つてた。

けど、ヨウはもうこの世界にいない。ヨウはおばあちゃんの家に行くつて、山の向こうの村に行って、そのまま死んだ。村ごと大きな火事になつたつて……」

「私はそれをニュースで知った。聞いた直後には、私の足はヨウの行つた村の方へ動き出していた。電車に乗つて、バスに乗つて。でも、村まであと少しつてところで、私は自衛隊に止められた。村は危険だつて、それだけ言われて行く手を阻まれた。私は大人しく帰るしかなかつた。

誰かが何かを隠しているのはわかつた。でも、私にはそれが何だかわかるはずもなかつた、探る方法もなかつた。そして、今やつとわかつたわ。私からヨウを、お父さんもお母さんも奪つたのがチヨの、「ご主人様」だつて

ボクは優見の方を見ることができず、うつむいたまま彼女の話を聞いていた。彼女の言葉は、容赦なく降り注ぐ雨だつた。怒りに激しくなることはなく、ただ悲しみに冷やされた水がボクの心を濡らして重くさせた。

ボクは悲しかつた。大好きなご主人様がたくさんの人を殺し、たくさんの人を悲しませていることが。ご主人様は、一人でいることが多かつたけど優しくて誰かを思う心持つていた。なのに　今はもう変わつてしまつたのかな！？

「ねえ、チヨはどうしてその人に会いに行くの。会いに行つてどうするの」

優見は決して声を大きくして怒鳴つたりしない。今もただ、はつきりと落ち着いた声でボクに問う。でも、それは逆に偽ることを許さないものだつた。

「会いたいから、もう一度。それから確かめたいんだ。どうしてご主人様がこんなひどいことするのか」

「その人は、その……夢まほんとかつて言う世界から戦争をなくすためいろいろしているんでしょ？　よくわかんないけど。　どう

して、なんてわかりきつていることじゃないの?」

違う、とボクは半分感情に任せて反発する。

「違うよー。ご主人様はわざといいやつてひどいことが起きるようにしてくる気がするんだ。だつて、現に夢を帰すだけならいいまでもひどいことにならないはずだもん……!」

「どうして、そう言い切れるの?」

ボクは言葉に詰まった。

でも、でも……理由はないけど……

「ねえ……今『現に夢を帰す』って言つたよね? 現と夢は別々のものなんじやないの? もしそうなら、帰す、とは言わないよね」優見の質問は鋭い。ボクが熱くなつてとつさに言つたことを、冷静に聞き逃さず返してきた。

「……チヨは何を知つてているの? 何がわからないの?」

「わかんない……わかんないよ、優見。ボクが知つてているのはサキから聞いたことだけだもん。サキは、夢が現を侵略するつて言つてた。ご主人様のやつていることは、だいたいが天乃常立あめのとじたちから聞いたことで、現でひどいことがおきるのも避けられないことだつて……」

「じゃあ、どうしてわざみたいなことが言えたの?」

ボクは口から言葉を出るに任せ、根拠のないことを言つ連ねていたのだろうか? ボク自身、それが本当だと思い込んで。

耳を塞いで逃げ出したいような、途方もない気持ちが胸に沸いてきた。真っ黒い何かが、ボクの頭をスッポリと覆つてしまつたみたい……。

「チヨ……もつ止めようか

混乱したボクが時の流れを感じられなくなつたとき、優見の手が、そつとボクの頭をなでた。

「たつた一人でなれない場所に来て、チヨは疲れているんじやないの？ 今日はもう考えるのは止めて、一緒に寝よ

穏やかな声での提案を、ボクは畳みかけるみたいな質問で返してしまつ。

「 どうして？ どうしてそんな優しいことが言えるの？ ボクは優見の友達を殺したツミの飼い猫なんだよ。ツミが憎いんじよ？ なのに、どうしてボクに怒つてないの？ どうして 泣いてもいの？」

優見はほほえみに少しの寂しさを漂わせて、ボクの頭をなで続けながら答えた。

「私がチヨに怒らないのは、私がチヨのことが好きだからよ。チヨだって、ご主人様からはぐれて一人つきりになつてしまつていて。私が親しい人たちを失つてしまつたみたいに。もしかしたら裏切られたのかもしれない、もうその人は変わつてしまつたのかもしれない。けど、チヨは、ご主人様のこと信じようとしてる。私は、それが間違つたことだとは思えない。だから、チヨにひどいことは言えない」

「…………」
「私が泣かないのは……どうしてかな。泣き疲れちゃつたのかな？ 悲しいことは悲しいけど……今は、ほら、チヨがいてくれるから

ボクは、やっぱり優見から離れるべきなんだろう。

優見はボクに遠慮して泣かないんじやないかと思う。ボクが好きだつて、ボクを哀れんで、ボクを傷つけないようにしてくれているんじやないのかな？

でも、ボクは結局優見に甘えてしまう。ボクは、頭をなでて引き

留めてくれる人から離れられるほど強くはなかつた。

ベットは一人で寝るにはちよつと狭かつた。おまけに、ボクの体は女子にしては大きめだ。

猫の体に戻れたらいいのに。

ちよつと悩んだボクの顔を見て、優見はほほえんだ。

「明日は服を買いに行こうね。靴も帽子も。あちこち歩いて回るのに、そんな格好じや目立つだけでしょ？」

うん、とだけ返事をしてボクは瞼を降ろした。

目を閉じた闇の中でも、優見はもちろんそこにいる。

その事実をしつかり手に握り締めながら、ボクは眠りの中に落ちて行つた。

1・2 「彼女の名前」（後書き）

悲しみを表現することができない、と気付いたこの頃。

それなりに悲しむ人もいますが、なかなか……

「ここは悲しむところかな？」とか、「悲しんだら泣けばいいのかな？」とか考えるんですよね。怒るときは火みたいに怒らせればいいのですが、悲しみはそうはいきません。

例えば、今回の優見のように、「悲しんでいるように怒っている」とか、難しいことをしてくれる人が多いです。
結局は私の未熟さに帰結するのですけど……。

1・3 「真昼の街中で」

ふと、目が覚めると、ボクは布団の中にいた。

いた、というよりは、掛け布団の中につっぽりと覆われている感じ。一方向に、優見のお腹が壁のようにある。

身体が小さくなってる？

ボクは猫の身体に戻っていた。

耳は優見の心臓の音から、筋肉がちょっとずつ動いている音まで聴く。

鼻は汗のにおいから息のにおい、布団に隠れた微かなびのにおいを嗅ぐ。

目は光のない布団の中でも物陰を見る。

全身に毛があり、顔に髭も生えてる。

ほつとするものを感じる一方で、ボクは焦った。

なぜなら、このままでは、主人様を探すのに不便が出るかも知れないから。人間の世界を歩いて回るのなら、やっぱり人の身体が一番なんだ。

もしかしたら、夢かも。

そう、そうに違いない。五感は妙にリアルだけど、これは夢に違いない。

夢なのだ。

そう自分に言い聞かせて、ボクは身体を優見にすり寄せ丸くなつて眠つた。

次に目が覚めたとき、またしてもボクは布団の中に埋まつて丸くなつていた。でも前と違うのは、布団の端から足とが尻尾が出ていること。また身体は大きくなつて人間の物となつてた。

けど、違つこともあつた。優見がいない。

ちよつと不安になつて身を起こすと、エプロン姿でひびき台と台所を往復する優見を見ることができた。

「あ、やつと起きたわね寝ぼすけ猫さん。ご飯にするから服を着てベットから出てきなさい」

「服？」

気が付くと、ボクは一切の服を着てなかつた。

「え、ええー！ なんでボク裸なの？」

「知らないわよ。言つとくけどね、私は朝起きたら床の上だつたのよ。まったく、人をベットからたき出すわ、服を脱ぐわ、どういふ寝相してゐるのよ」

優見の口調は叱りつけるそれだつた。本能的にボクは耳を垂らし、いそいそと服を着はじめた。

「優見い、胸に包帯巻くの手伝つて」

「いいわよ、めんどくさいから。パジャマだけ着て出でてきなさい」「言われたとおり、ボクは裸の胸のままパジャマをはおつた。胸の前でボタンを留めると、ボタンは胸の張りで思いつきり横に引っ張られた。

ちやぶ台の前に正座。ボクの胸に手をもつた優見が一言、

「エロい……」

「え、何か言つた？」

優見はブンブンと手を振つた。

「な、何でもない。や、熱いうちに食べよ」

献立は、主食がパン、おみそ汁、サケ（と言つかるマス）の焼かれた切り身、サラダにツナのオムレツ。

どこかあり合わせと感じられるメニューだけビ、優見が一生懸命作ってくれたんだなとわかつた。

「おいしいよ、優見」

ボクが素直な心で言つと、優見は一コツと笑つた。

「よかつた、朝ご飯なんて久しぶりに作ったから自信なかつたんだけど。張りきつて作つたから、全部食べてね」

「うん……！」ちよつと多いけど。

「今日は、もう少し日が昇つたら買い物に行きましようね。新しい服とか靴とか、バックとかも買ってあげる」

優見は心底嬉しそうに声を弾ませて言つた。女の子はお買い物が好きというのは本当なのかな？

「あ、でも……ボクお金無いよ。優見にも、そんなに迷惑かけ」「人の好意は素直に受け取る！　いいのよ、私には必要以上の、望んだ物じゃないお金があるから……」

優見はたくさんのお金を持つている。けど、その由来を聞いちゃいけない。　言葉を尻っぽみにして黙り込んだ優見の顔が、ボクのそう悟らせた。

なるべく、明るい雰囲気を作りたいと思つた。

「……あとで言われても、返せないよ？」

ちよつとおどけて言つと、優見はフフツと声を出して笑つた。

「もちろんよ。ちゃんと必要分は残して使うから、心配しないで」

つやの出た木田のフローリングの上に、白い光がさざめく朝。静かで穏やかな、世界の目覚めの時間。ボクと優見は、一人きりでその平和を味わっていた。

*

午前十時。平日の街中。

季節は七月の真ん中ほど。梅雨は終わった。アスファルトの上を

走る湿った風が、これから四時間ほどで訪れる蒸し焼きのよつた暑さを予告している。

深いビルの谷間では、今日も多くの人達がせわしなく歩き回って、車がびゅんびゅん走ってる。優見は「やつぱり人が少ない」とか言つてたけど、ボクには充分たくさん的人が歩いているように感じられた。とくに耳から拾える音、ガラスとコンクリートで出来た塔を木靈する色んな音が、ボクを圧倒した。

ボクが今のところ着ているのは白のポロシャツに灰のジーパン。ジーパンは裾が足りないので冬用のブーツでこまかしてある。もちろんすべて優見の物、ボクの着物はたたんで家に放置してある。耳は、開き直つて、出してある。優見曰く「お洒落だと思うかも」とのこと。尻尾は流石に田立つのでジーパンの下に隠してある。

そう言ひ優見は、青いラインのセーラー服に、黄色のアクセントがちょっとだけ付いた白いスカートを穿いている。靴は真っ白なスニーカー。昨日の夜はめていた銀の指輪はない。

「あー、この髪何とかしないとな……」

手入れされてなかつた茶髪には黒が混じつて、あまり見栄えが良くないことになっていた。脱色し直す暇もその薬もなかつたから、紅いラインの縁なし帽で隠してる。

結論：一人とも変な格好をしてる。

まずボクらは十一階建てくらいの「デパート」に入った。ひやりとしたクーラーの空気を迎えいられながら、エスカレーターで三階に上がる。そこにあるのは下着屋さんだ。

「あの、優見。一つ気が付いたんだけど……」

「なに？ チーム」

「ボクも、背中に毛皮あるでしょ。店員さん、見て驚かないかな……」

…？」

ボクもそつだけど、優見もこのことに気付いてなかつた。ボクらは店の前で立ちつくしてしまつた。

優見の表情が、驚きと焦りをまぜまぜにした物になつてしまつてゐる。

「な、なんとかならないの？」

「うーん」

普通に考えてなんとかならない気がする。でも、せつかく優見が連れてきてくれたのだから、なんとかしたい。

「とりあえず、中に入る」

ボクがそう言つと、優見は顔を思いつきりしかめた。

「なんで？ その身体は……」

「大丈夫。ボクを信じて」 その根拠はないけど。

半信半疑な優見の手をボクが引いて、ボクが店員さんの前に歩み出た。

「いらっしゃいませ。何か御用はありますでしょうか？」

ちょっと高めの、かすれた声。サキの声に似てる。

「あ、あの……バ、バストのすす寸法を測つてもらいたいんですけど」

「どう

緊張してきたあ。

後ろでは優見がハラハラしてる。

店員さんはそんなボクらの心の内など知るよしもなく、「かしこまりました」と小さくお辞儀してボクに更衣室を示した。鼓動の音が大きい。ボクは意識を、あること、に集中させて、気を鎮めながら服を脱ぎだした。

「お客様。私どもは肌着の上から測ることもできますよ」

なんですと。

でも、ボクはもう準備万端で予定を変えるわけにはいかなかつた。一方、部屋の隅に立つた優見の顔には、店員に従えと書いてあつた。集中、集中。

見よ、この背中……！

*

「どうやつたの？」

「人間」として、無事下着を買ったボクは、お金を払うと早々に店から離れた。店員さんには背中の毛皮を見せることにはなかつた。

優見はもちろんその方法を聞いてくる。

「あの時ね、ずっとボクは心中で『自分は人間、自分は普通の女の子』って念じてたの。 実はねボク、今朝寝ているとき猫に戻つてたの。 それはボクが寝る前に『猫に戻れたらなあ』って考えたからだつたの。だから、さつきはその逆をやってみたの」

あの時、ついでに尻尾もなくなつてた。耳はそのままだつたけど。優見が感心しきつた顔になつた。

「へえ……。じゃあ、今はどうなの？」

「今は元通り。多分、今の状態がボクの普通なんだと思つ」

「ま、とにかく良かつたんじゃないの？」 次は洋服ね

そう言つて、優見はボクの胸元に手を留め一瞬だけ複雑そうな顔を見せてから歩き出した。

測つたあとは優見と店員さんに任せていたから良くわからないけど、買つてもらつた青いブラジャーには、F、というフダガ付いていた。ホックは前にしてもらつた。毛皮の上にホックが来るのは嫌だつたから。

そのあと、ボクらは途中でお昼ごはんを挟みつつあちこちを回つた。じつくりゆつくり服を見て選ぶのはそんなに楽しいことは思えなかつたけど、優見が元気そうにしているのでボクも嬉しかつた。彼女の黒い瞳にも、悲しい影が走ることはなかつた。

お昼ごはんはハンバーガーだつた。ボクが食べたフィッシュバーガーは白身魚のあじが素朴でおいしかつたけど、タルタルソースは

好きになれなかつた。あと、コーラのパチパチにもちょっと困つてしまつた。

最終的に揃えられたボクの服。パークー付きのショルピンクの半袖シャツにコーラルレッドのベスト。下はオレンジのジーパン生地の短パン。靴はバー・ガン・ティーの化纖ブーツ。帽子は無し。尻尾は今のところ意識してしまつて、あるけど、穴の開けられるパンツを買ってきて家に帰つたらお裁縫して出せるようにしようと優見は言つてる。

「巨乳猫娘。萌えよ、萌え！」

どうも優見の言動が妖しい。つていうか、モエって何……？

気が付くと、たいぶ太陽は傾いて空が朱っぽくなつてきていた。その空の下、優見が背伸びする。

「さて、これからどこに行こうか？」

「え……まだ、どこか行くの？」

ボクが暗い声で言つと、優見はくすりと笑つた。

「そんな困つた顔しないでよ。私も久しぶりに太陽の下を歩いて疲れだわ。家に帰つて、今日はお風呂を汲んで入りましょう」

その時、ボクらの視界にソフトクリーム屋さんが入つた。

優見が「なんにする？」と聞いた。

「じゃあ……チョコチップ！」

梅雨明けの宵の刻は、ソフトクリームを食べるにはちよつと涼しそう。

広場にベンチを見付け、そこに一人でソフトクリームを持つて座つた。

少しづつ暗くなつていく青い空。その彼方をぼんやり眺めていると、となりで優見の声がする。

「チヨ、聞いてもいい……？」

なあに、とボク。振り返つて見た優見の顔には、もの悲しい表情があつた。

「チヨの『ご主人様つて、優しい人だつたの？』

「……うん。ご主人様は友達がいなかつたしお父さんともあまり話さなかつたけど、ボクには優しくしてくれたよ。時々勉強を聞きに来るクラスメイトにも、親切に教えてあげてたよ」

ボクが答えると、優見は目を反らして俯いた。次に顔を上げたとき、優見はさらに申し訳なさそうな顔をしてボクに尋ねた。

「じゃあ、聞くよ。もし、今その人が心から変わつてしまつていて、本心からみんなを傷つけるのを楽しんでいたら、チヨはどうする？」

優見の問い、まっすぐにボクの心に突き刺さつた。答えるのは難しいし、辛い質問。でも、心優しい優見が無神経にこんな質問をしているはずはない。彼女は、ツミへの憎しみとボクへの優しさの間で揺れている。辛いのはボクだけじゃない。
だから、ちゃんと向き合わなきゃ。

「もし、本当にご主人様が悪い心を持つて酷いことをしているのなら、ボクはそれを止めるよ。みんなを守る為に、ボクは『ご主人様を止めるべきなんだ』

「でも、どうやって？ その人は街一つ軽く壊せるのよ。チヨは運動神経は良いみたいだけど、他にすごい超能力があるわけじゃない。かないっこない」

心配した顔の優見。

「それでも、やるよ。ずっと考えてたから、そのことは

ボクはソフトクリームのコーンを口に押し込み、立ち上がつた。

「それにね、ボクにも力はあるよ。感じるんだ、大地の鼓動を。

ほら、昨日ボクはちょっと変なことを言つてたでしょ。『夢を現まほらしつつ

に帰す』とか『ひどいことにはならない』とか。あれはね、みんな大地が教えてくれるんだ。その声はまだおぼろげで、はつきり聞こえるわけじゃないけど』

優見は黙つて何も言わなかつた。

しばらぐして、また問いかつた。

「もう一つ。もし、私が、ツミを絶対に許さない、ツミを殺して、て言つたら……どうする？」

残酷な言い掛け。でも、それで傷ついたのはボクの心じゃなく、彼女の心だったと思う。

「その時は、ボクは頑張るよ。ご主人様と優見が仲良くしてくれるように」

ゴーと風が吹きはじめた。

風の訪れと一緒に、世界が騒りはじめた。

夜が来る

「まるで、調停者チヨウテイシャ、だな、月に愛されし四つ足の子よ」

少し離れたところに、いきなり人間が、銀のマントに全身を包んだ三人の人間が現れた。時を早めてやつってきた夜の闇に、星みたいに輝いている。

「誰だ？ もしかして、ご主人様の……」

マントの一人、小柄な人がにやりと口を歪ませてマントから手を引き出した。……優見に向かつて。

光の矢が放たれる。

「優見！」

ベンチごと吹っ飛んだ優見。ボクが駆け寄つて抱き上げると、右胸からいっぱい血を流していた。

「嘆くなよ。喜べ。俺たち双方にとつて主であるお方が、お声を下さるぞ」

はつとして見上げた夜の上に、蒼い月があった。
弓張りの月は、嘲笑うみたいに半開きになつた口のようだつた。

1・3 「真昼の街中で」（後書き）

なかなか前に進めません。これでは今年いつぱいはかかってしまいそうです。

チヨのバスト・ネタが多く、正直どうしようかなど悩みましたが、結局このままです。その妥協が命取りなんんですけど。

‘調停者’というのは流石に強引でしたかね。もっとじっくり来るのを次はやってみます。

第一幕は次回で終わりです。すこし派手に行きます。

1・4 「初めての殺し合い」

蒼い月はボクらを、この夜空の下にあるすべてのものを見下していた。

冷たい、とても偉ぶった感じ。腕に抱えた優見の身体が流す赤いぬくもりを感じながら、ボクは月に叫んだ。

「どうして？ どうしてみんなを傷つけるの、ご主人様。そんなことをしても誰も喜ばない、ご主人様は嫌われるだけ。なのに……」

天上から目を降ろすと、目の前の地面にご主人様が立っていた。

「！？」

別れたときと同じ、女の子っぽさのある優しい顔立ち。甘い琥珀の瞳。髪が白く、見慣れない青い蓮の花が描かれた白い着物を着てる。おまけに目の前の姿は現実のものじゃなく、光の作る幻だった。けど、その人はボクのよく知る、ご主人様、だった。

「チヨ、久しぶりだね。ずっと会いたかったよ」

「ご主人様……！」

ご主人様の手がボクの頭に触れる。幻の手でも撫でられる感触があつて、覚えず喉がじろじろと鳴りだした。

「、ご主人様、か。君は僕をそんなふうに呼んでいたんだ」「うん……」

わけもなく嬉しくて、ボクはただご主人様が頭を撫でてくれるに任せていた。

「相変わらず可愛いよ。女の子の姿になつても、君の愛らしさに変わりはない。 本当は肉の身体で来たかつたんだけどね、忙しいんだ。だから、焦らさずに君の問いに答えてあげる」

ずしり、と心に重いものを感じた。顔を上げてご主人様の顔を見

ることができないで、ただボクは彼の話すのを聞いた。

「僕はね、みんなに教えてあげているんだよ。悲嘆や慟哭、憎悪や悔恨というものを。それはすべてかつて夢に住んでいた者達が味わつたもの。こんどは現の者達に教えてあげる。そうして、悪夢によつて世界を平らなものにしたいんだ。 僕が王になる為に」

木陰のような優しい声で、ご主人様は言った。

「王、さま……？」

「そう、僕は月の照らす千年王国の統治者となる。誰も傷つかない、眠るように安らかな国を築くんだ。この動乱は、そのための通過儀礼なんだ」

誇らしげに言つご主人様。ボクも、それに無条件で賛成したかった。でも、ボクの考えることのできる心が、それを必死に否定していた。

「そんなの……ダメだよ。ずるいし、間違ってる。『ご主人様はみんなを恐がらせて言うことを聞かせるの？ そんなの、変だよ！』

ボクはご主人様の目をしつかり仰ぎ見た。彼は、ボクの視線を受けて寂しそうに笑つた。

「では、君ならどうする、チヨ？ 君なら、平和な世界を創る為に何ができる？」

ボクは答えられなかつた。

ご主人様はボクに背中を向け、肩越しにボクに言った。

「ボクの可愛い猫。今夜は君に、戦うことを、殺し合つことを教えてあげる。 答えを探し旅をする為に、戦つことは必要だからこれから、あの三人と戦うんだ。その女の子、乾・優見の命を賭けて。もし、君が彼らの命を奪つたら、その対価に彼女の命を助けてあげる」

そこで、ご主人様の姿がふつと消えた。

ボクの、敵、 戦うべき三人は、ボクとご主人様が話している間、ずっとひざを折り頭をたれてご主人様に従順をあらわしていた。

やがて立ち上がった三人が口々に言つ。

「なんと美しく、泰然としていらっしゃるのでしょつ……」

「今宵の月もまた冴えわたつてゐる。我らは、この蒼き月下にいらっしゃることを至福と思う」

一人がフードの中から、白く不気味に光る両目をこっちに向けた。その人は野太い声でボクに話しかける。

「聞いたな、月に愛されし四つ足の子 よ。我らは今より命の奪い合いを始める。規則はない。あるとすれば、その無力な娘を傷つけではならんということ。われらの戦いが始まれば、その娘は月光の盾で守護されるだろう。 何も心配はいらんよ」

にやり、と歪んだのは墨みたまに黒い口だった。

ボクは断じて殺し合いなんてしたくなかった。でも

「構えよ……！」

何とかしてみよう。

三人からは威圧するような恐怖を感じる。全身が粟立つて、今にも逃げ出したい気分になる。この身体が人間のものじゃなかつたら、

優見という守るものがなかつたら、ボクはきっとそうしていた。けど、今は何とかするしかない。だれも殺さず、ボクが勝利するために。目の前の人たちはご主人様みたいな術を使うかもしれないけど、この身体の運動能力なら避けられるはず。隙を突いて、の人たちを抑えつける……

「じゃあ、まずは私から……」

声からして女人の人、そうさつき優見を撃つた人だ。一番小柄なその人が、マントから抜き出した手をこっちに向かって。

「来たれ、星数の矢！」

よけなくちゃ！

考えるよりも早く、身体が左に動いた。

避けた直後には、ボクの立っていた場所はアスファルトが碎かれて滅茶苦茶になつてた。優見の周囲だけは、円く守られて無傷だった。

小柄なマントの人は、片手から光の洪水を出し続け、それでボクを討とうとしていた。ボクはその人を中心に円に走つて逃げ、隙を窺う。

「そろそろ……」

だん、と地面を鳴らして蹴り、進む方向を垂直に曲げる。距離は十五メートルくらい。できる限りの速さで彼らに走り寄る。

「阻め」

若い男の人の声が聞こえた。それと同時に、急に足が重くなつた。その人とは別の、大柄なマントの人人が大きな槌を振り上げた。

「砕けろ　すべて！」

ボクに向かつて槌は振り下ろされる。急ブレーキをかけ、ボクは慌ててバックステップする。

地面にめり込む槌。その瞬間、ボクの目の前が弾けた。

「うああああああ！」

受け身を取れずに、三十メートルくらい吹き飛ばされた。激しい痛みを全身に感じた。アスファルトを剥がされたむき出しの砂利の上で、ボクは身動きができなくなつた。

「無謀だな、月に愛されし四つ足の子。力を使わず、その身のみで挑みかかるとは。さあ、選ぶがよい。そのまま伏して死を待つか、立つて我らの喉笛に食らいつか」

ボクは優見を守らなきや。

「主人様を止めなくちゃいけない。ボクは、死ぬわけにはいかない。

「死にたくない！」

ズ……ン！

ボクの叫びに応え、地面が跳ねた。

「おい、すごい量の神秘靈力^{エナジー}が動き始めたぞ！」若い男の人の声が、焦った感じで叫んだ。

ボクは感じる。身体中に傷があり、熱い血が流れることを。傷に入り込んで疼かせる土や砂が、ボクに力の使い方を教えてくれる。

「『黒き牙……母なる大地……』、食べられろー！」

せりあがつた岩の角が、三人を包囲した。

「く……守れ！」

突き出された岩の角を、見えない壁が碎いて阻む。けど、その時にはボクは動き出していた。右手に何十キログラムもの土砂を纏わせて、彼らに突っ込む。

「退け！」

「潰れちゃえ！」

ボクの手の土砂と槌が激突する。衝突の刹那、ボクは土砂の重さを解き放つ。十キログラムほどの槌は大量の土砂に飲まれ、地面に落ちて埋もれた。

「ハアッ！」

左手を猫のものに変化させる。爪を振るいながら彼らの間を走り抜けると、人間の柔らかい肉を引き裂き骨を断ちきった感触がした。

「うぐあああああ！」

絶叫したのは若い男の声の人。彼のマントの左側は大きく裂かれ、足下に左手が落ちている。バタバタと、血が地面を打つた。

濃密な血のにおい。ボクの意識は高揚し、鋭くなつた目が落ちた左手の断面を凝視していた。

食べたい。

愉しい。

戦い。

ダメだ！

「そのまま頃し合いをしたら、ご主人様と同じになつてしまふ。ボクは、ご主人様に酷いことを止めて欲しくて戦つてるんだ。だから、彼と同じことをするわけにはいかない。

「お願い、大地よ。ボクらに道を教えて。みんなが幸せになれる道を……！」

ボクは心を鎮め、一心に祈った。

応えはすぐにあつた。ボクを包んでいた、激しい火山のよつな力が消え、かわりに雨上がりの泥濘ぬかるみみたいなやわらかさがボクを包んだ。そして、それは癒しの波となつて周りにも広がりはじめた。

「傷が……腕が！」

大地の慈しみの波動は、ボクの周りにあるすべてを癒しはじめる。折られた木、燃えた花、地面に横たわる優見からマントの三人まで、分け隔てなく。ほどなくして、みんな破れた服さえ治されていた。
「これで……これで、ボクらが殺し合つ必要はないよ」

「甘つちよろいことを！」

野太い声の人人が猛り、槌を失くした手で拳を作つて走つてくる。その拳にも碎きの力がこもつてゐる。下手に受けければ危ない。

戦いを終わらせる方法、ボクは答えを求めて足下の大地に意識を向けた。目を閉じ、軽く開いた両脚の裏をしつかり地面につけ、心の耳を澄ます。

「『六（陸）式封印術。眠れ、大いなる地の腕に抱かれ！』」

ズン、と周囲の空気が重くなる。重力がここだけ強くなつたんだ。

そして

「来たれ星数の矢　？　しまつた、術が発動しない」

地の氣脈をボクが抑えたから、ボク以外誰も神秘靈力エナジーを使う術が使えなくなつた。

ボクは三人に求める。

「ここはもうボクの勝ちだよ。あなた達はもう帰つて。 できれば、もう一度どご主人様のお手伝いなんてしないで」

ふざけるな！ ボクの求めははねつけられた。

「月の御方より離れると言うのか！ 御方の元で争いない世界を作るのは我らが悲願。 我らがこれまで負ってきた苦しみ、知らぬお前がほざくな！」

「……ボクは、知ってるよ」なぜなら、大地が伝えてくれるから。でも、それじゃダメなんだ。痛みを知ったから、他の人にも味わわせるなんて、絶対に間違つてる！

「みんな少し休も？ 疲れて、ちゃんと考えられなくなつてる。だから『コンシール石化！』」

想いをふりしぼつて、ボクは彼らが足を留め休むことを願つた。

*

三人が真っ黒い石像になつたのを確認して、ボクは優見の方を見た。傷の癒えた優見は、既に立ち上がりつて服の埃をはたいてた。

「チヨ、髪が黒くなつてゐる」ボクを見た優見が言つた。

「うん……大地の力を使えるようになつたからだよ」

髪だけじゃない、全身の毛が黒く、豊壌な土の色になつた。瞳の色もやわらかな木の葉色になつてることを力で鏡を作つて確認した。

「優見、どこか痛いところはない？」

ボクがそう尋ねると、優見はほほえみと一緒にゆるゆると首を横に振つた。

「大丈夫、チヨが治してくれたから。 感じたよ、チヨがみんなを大切にする、想い、を」

そして優見は月を見上げた。月は優しい鬱金色だった。

冷たい夜風が、スッと駆け抜けた。

「私ね、ずっと寂しかった。大切な人がみんないなくなつて、どうしたらいいかわからなくなつてた。あの変な奴らに囮まれて、もう死んでもいいかなつて考えたとき、チヨに会つたの」

優見が、月の下で告白していた。

「真っ暗だった私の日々に、チヨは差し込んだ一筋の光のようだつた。その光を憎く思つた瞬間もあつた。でも……たつた一日のつきあいだつたのに、どうしてだらう？ チヨのことを、こんなにも身近に感じるなんて」

優見と田があつた。くもりのない黒瑪瑙オニキスの瞳から、光が一粒落ちた。

「行くのね、チヨ。私を置いて」

「うん」

ボクの返事は涙声だつた。次々と溢れ出した涙で目の前が歪んで、優見が近づいてくるのも見えなかつた。

細い指がボクの目の下をなぞつて涙をすくつた。

「チヨ、約束して。全部終わつたら、また会いに来てくれるつて。それまで、私待つてるから。また、学校に行って、新しい友達作つて一人じゃなくなるから」

優見は泣いているのかな？ 自分の涙で、ボクは何も見ることができない。

ボクの目にハンカチが当てられた。

「ほら、涙を拭いて。泣きっぱなしじゃ、話もできないわ」
ようやく晴れた視界の中、優見は笑つてた。赤い目をしていたけど、満面の笑みで、ボクを見上げてた。

「そのハンカチはあげる。……あと、お金もあげるね。あんまりないから無駄遣いしないように、でもけちけちして浮浪者みたいになつてもダメだからね」

ボクは受け取ることしかできない。それは、優見に会つた瞬間からそうだった。彼女の身を守ることはできても、ボクはそれ以上何もできない。

だから、ボクは約束する。

「わかったよ。全部終わつたら、絶対に会いに来るから」

そう言つと、優見は笑つて頷いてくれた。その笑顔はまるで、春に咲く桜草のようだブリムローズた。

そしてボクは歩き出す。優見から離れ、サキに会い戦いをはじめ
る為に。

大地が、地球が回る。運命も同じ。でもボクは独りじゃない。
だから、迷わずに歩き出せる。

1・4 「初めての殺し合」（後書き）

プリムローズの花言葉は『私を信じて』です。決して『はじまり』とかではありません。しかし、‘プリ’（プリム），は‘一番’を表す前置詞なのですから始まりでも悪くないと思います。

今回はそこそこ泣いてくれましたね。どうやら、私の小説の登場人物は死別よりも生別を悲しむ傾向がありそうです。みなさんはどうですか？

これで第一幕はお終いです。第一幕はサキとネガイをメインにした話です。ちなみに、第三幕はアカがメインです。

感想をお待ちしております。

2・1 「闇に沈む街」（前書き）

これはボク、チヨとサキが再び会つまでの、一日前から一日前にかけて起きたこと。サキはこの話をまるで人がのように話した。ボクは、聞いたままにここに記す。

2・1 「闇に沈む街」

蒼い月。

月に従う銀の星々。

満ちきつた円かな月は、太陽の代わりをするかのように傲慢不遜な光で地上を照らしていた。

小さく瞬く、星の光はそれに比ぶべくもない。しかし、青黒い空をびつしりと埋めつくした星々は、地上に立つものを威嚇する勢いがあった。

「雨は上がったようですね、ネガイ」

月光の漏れ入る廃ビルのエントランスに、一いつの影があった。闇の中の影。一方は背丈が百五十センチメートルもない小柄な影で、もう一方の背丈はそれより頭一つ高く日本人であれば標準といえるものだった。

「はい、サキ様。雲一つ無い夜空で御座います」

低い声 男性であれば標準であろうが、口調に男性的な要素はなかった。黒い空間に溶け入るような、上品なアルト・ボイスであった。

「……では、少し外を歩くことにいたしましょう」

はじめの問いの声と同じ、中性的な声。推断するにはこの声の主が、サキ、なのである。

闇の中では小柄な影が動き始めた。エントランスの硬い床を歩く、叩くような澄んだ音が響く。その影は月光の密な入り口の方へ進んでいく。

「ああ……綺麗な光ですね」

サキの声が言い、続けて吐息する。恍惚ともらされた溜息は、しかし自動ドアの立てた鈍い駆動音にかき消された。

月下に現れた小柄な人間。蒼い光の中で、その者の髪と肌は蒼白く照らされる。おそらく本来は雪のような純白を持つのだろう。月を見上げる、円らな眼の憂いのこもった瞳は天色。顔立ちは、輪郭が丸めの曲線を描いており、鼻が小さめで慎ましやかで、全体的に雅やかな趣がある。黒いスーツに身を包んだ全身は瘦躯で、一見すれば男性と見えるが立ち姿には女性的な雰囲気がある。

漂ひょう と音を鳴らす夜風。

風に押され、白い髪の者がよろめく。すると、その者に続いでドアをぐぐつた者が、肩を背後から支えた。

「サキ様、お気をつけ下さい。天候が変われば風は動きまするゆえ」サキと呼ばれた白い髪の者。サキは、もう、と声を鳴らしては背後の者を顧みた。

「そういう過保護はもうおやめなさいと、これまでも言つてますわよね、ネガイ？ 私は男性の身、そしてここは戦場わたくし、守られるだけでは駄目なのですから」

自らを男性と主張したサキ。彼の言葉の最後は、ほんの僅かだけ自らに言い聞かせる調子があつた。

「申し訳ありません、サキ様。以後、注意します」

ネガイ、と呼ばれたもう一方の人間は、サキに謝罪して一步退いた。

ネガイは女性であるようだつた。胸に豊かな脹らみがある。背の中程まで伸ばされた黒髪、黒い髪、そして褐色と呼べる濃い色の肌。加えて漆黒の留袖を纏っている。『闇』。彼女を形容するに、その一文字以外の言葉はすべて不相応だった。

「ネガイ。私、一つ思うことがありますの」

サキが月を仰ぎ見ながら言った。だが、彼は月の円な形を見ているわけではない。視力のない彼は、蒼い月光のみを感じられる。ネガイは「何で御座いましょう?」と言おうとした。しかし、その時、あること、が彼女の意識を惹きつけ、現実に彼女の口から言葉を出すことを遮った。

「　ネガイ?」

相槌のないことを訝しんだサキがネガイを見た。

ネガイは彼とは別の想いを込めた視線で空を仰ぎ見ている　否、

彼女の視線は立ち並ぶビルの稜線をなぞっていた。

「サキ様。あなた様は先程、御自分は戦場にいると、そう仰いましたか?」

「はい、ネガイ。　何か起きました?」

サキの問いに、ネガイは肯定の意を示す。

ビルの頂点に人影が現れた。一つ、二つ、三つ……両の手指では足りない、幾つもの影。

サキはそれを見て、ふつと笑みを零した。

「よろしいでしょ?　では、今の問いは彼らに答えて頂くとしますよう」

*

二人の周囲、五十メートル前後から着地音が聞こえた。

音の数と、じつところちらを窺う気配からサキは推測する。

「お客様の数は二十……一十三ですか?　ちょっと手間がかかりそうですね」

サキと背中合わせになつたネガイが答える。

「そのとおりです。敵勢力は総数一十三、すべて異形であります」

「異形が二十二……」

異形 人や動物、命あるものとはまったく異質の存在。破壊と殺戮のみを知る、宇宙の凶児。

風が動いた。

異形たちが走り出す。まずは五体。稻妻のような速さで一人へ肉薄する。

戦いが動き始めたことに一人は動搖しない。サキは黒いスーツ、ネガイは喪服。およよそ戦う者のなりではないが、一人は戦いを知つてゐるようだつた。

サキが流れるような静かな動作で、左腕をまっすぐ上げた。重力に従い、左腕の袖が落ち、彼の白い肌が露になる。

「spread……shining impulse」

露出された肌が光を放つた。その光は衝撃となり、向かってきた五体の異形の出先をくじいた。

「ひとつ、お聞きしたいことがありますの」

腕を下ろし、袖を直したサキが言った。戦いは終わつたわけではなく、光の衝撃に打たれた五体の異形もすでに姿勢を取り直し終えている。だがサキはその流れを無視したように何の構えも取ることなく問い合わせを始めた。

「あなた方は、この月がお好きですか？」

五体の異形は答えない、もちろんのことだ。再び稻妻の速さを取り戻した彼らは、サキの十メートル手前で空へ躍り上がつた。

「この月は美しいですね……私は目わたくしが不自由なのですが、それでも感じられますわ、蒼く澄み切つた眩いほどの光を」

そう、サキは目が不自由なのだ。けれどもなぜ、彼はこんなにも余裕綽々なのだろうか。

月光に異形の姿が露になる。その姿は 醜い。青黒い爛れてぬめた肌。紫の一つ目。赤い針のような爪。尻には長く黒い毛を生やし、その下の一一本足は鳥のそれに似ている。

跳躍した異形たちが落下を始める。落下点はサキだ。

ネガイの姿がない。

異形たちの姿が暗黒に飲まれた。唐突に彼らの姿は見えなくなり、一秒の後に同様の唐突さで彼らの姿が現れた。しかし、その身体に四肢と首はなかつた。

サキの足元に五体の屍が落ちた。出血は不自然に少ないが、落下の勢いでわずかな体液がサキの白い頬を汚した。

「……もう。ネガイ？ できるのならもっときれいな方法で戦つてくださいな」

「申し訳ありません」

月光が作るサキの影から、ネガイが湧き出るように現れた。彼女はそこでから白い布を取り出し、サキの頬の穢れをふき取つた。

穢れのなくなつた頬で、彼は少し笑つた。そして、新たに動き出した八の気配を、その風の動きを肌で感じながら、彼は唱えた。

「c o m e o n , d e f e n s i v e l i g h t」

サキの周囲に八つの光の球が出現する。

そこへ異形が突撃した。

光球が高速で動き出し、一つ一つが異形の頭部を貫く。すると、しわだらけの頭部は西瓜のように弾け、青紫の脳漿を撒き散らした。

「……でも、私、あの月を好きになれませんわ。何故なら、あの月は 私の物ではありませんから」

果たして、今度はサキに異形達の体液がかかった。

敵はまだ十いる。

新たな二体が姿勢を低く走り寄つてくる。また、彼らを闇が包んだ。

一瞬。

闇が晴れたあとも異形の姿に変化はなかつた。しかし、よく見れば彼らの顔からは紫の一つ目が消えている。もしその眼下を覗きこむ者がいたならば、その者は虚ろとなつた頭部の内側を見ることになるだろう。

「あなた方はどうお思いですか？　あの月はあなたの方の内、誰か一人だけの物ではありません。それでも、あなた方はあの月を好きでいらっしゃるの？　三十秒の制限時間を設けさせていただきます。過ぎれば……死んでいただきますわ」

サキが両手を天に掲げる。手と手の間に赤い光の球が生まれ、それはゆるやかにサキの頭上十メートル程まで上昇した。

「m i c r o w a v e o v e n…… c o u n t d o w n , s

t a r t !」

残り八体。彼らは身の危険を本能で感じ取り、しゃにむにサキとネガイを目指して駆けだした。

サキの頭上にある赤い光。そこから発せられているのはマイクロ波、電子レンジの中で発せられる電磁波の一つだ。電磁波は光、光を操ることのできるサキは、可視光だけではなく赤より波長の長い光も操ることができるのである。

一帯を強力なマイクロ波が照らしている。サキとネガイはどちらん照射の外にいるわけだが、中には避けようのない過熱状態にある。生体なら、体液が沸騰して破裂死する可能性が高い。

異形の爪牙がサキの姿を通過した。しかし、それは幻。聴覚と触

覚、そして先視の能力を最大限に活かし、彼は異形達の攻撃をかわす。

彼は自らの軌道に残像を残し、異形を惑わす。その光景は、まさしく光との輪舞だ。

「鬼さんこちら。ふふふ」

サキに習つてネガイも異形達を攻撃しない。わざと姿を現したまま、質量を伴つた闇の流れで敵を吹き飛ばしてはまた引き寄せていた。

「あと十秒ですわ。はやくお答え下さいな」

異形達の動きが少しづつ緩慢になってきた。マイクロ波を浴びていることで、体温が異常に上がり続けているからだ。

「五・四・三・二・一　　はい、では、b o i l！」

サキの言葉を合図に、異形達の体液が沸騰をはじめた。頭部を始め、首、胸、足、血液の多い場所がほぼ一斉に弾けた。

水風船を割るよつだつた。飛び散らされた体液、内臓の欠片からは、温かなしかし不快なにおいのする湯気が立ち上っていた。

「残念ですわ……色々な意味で」

足についてしまった体液をハンカチで拭いながら、心底残念そうに彼は言った。

*

「もう一つ、質問はありますのよ」

光のないスーパー・マーケットの中で、ネガイを伴い歩くサキは言った。二人が歩くのは食品売り場。冷却能力を失った保存機の前を過ぎ去り、二人は缶詰やレトルト食品といった保存食の類を集めて

いる。目の不自由なサキに闇を属性とするネガイ、一人とも光がなくとも何不自由ない様子だ。

「ネガイ、先ほどあなたは、夜空、という表現を使いましたわよね？ 昼の刻を奪われたこの町で、‘夜’という概念は存在しうるものなのですの？」

自分ならどうするのか、そんなことは一切棚に上げたような一方的な質問。

問い合わせながらもサキは食料を捨う。それは気のおもむくままといった様子で、自分が捨てた量を鑑みる様子はない。そして持つのは一切がネガイの役目。どれだけかこの中身が重くなろうと、サキにつき従う彼女。だが、彼女のほうにこのことを不満にする様子もない。 ネガイは下僕で、主人がサキなのだ。

「はい、確かにこの街にはもはや、昼、という概念はありません。サキ様と私がこの街に滞在している七日の間、一度も日の光がこの街を照らすことはありませんでした。しかし、私達は昼を忘れたわけではありませんし、この街の住民となつたわけでもありません。ですから、昼の概念が失われたというこの街の則に、私達が従う必要もないかと判断します」

サキはその答えに何も言わなかつた。声も立てずに、にこりと一人笑い、足を進めスーパー・マーケットを後にした。

二人の姿はいつたん月下を歩き、次に衣料品店へと入つた。

洗濯能力のない その気もない 二人は、下着を捨てては捨てて捨てては捨てとその繰り返しをしていた。今度も、まったくそのためにやつてきた。

「そういえばもう一週間になりますのね、この街に来てから。いいかげん、キズオトちゃんに会うために動き出す頃合ですわね」

天戸の宅を去り現に来た一人は、すぐにこの街にたどり着きそれから動いていなかつた。それはひとえにチヨを待つためだつたが……「思つたより遅いのですもの、チヨは。本当に、先の見えない未来を待つというのは、こんなにも焦がれるものでしたのね」

嘆息。

かつてサキの性別が女であつたときは、その先視の力は的確に近い未来を予見し、時には断片的ではあれ十年先まで見通すほどであった。しかしつみによつて男性の身体に変えられて以来、どれだけ意識をトバそとも、半口先を見るのがやつとだつた。

「まあ、なくしたものを悔やんでも仕方ありませんわ。代わりに、健康を得られましたもの」

シルセさんの仰つたとおりでしたわ。

彼は声に出さずにそう胸の中で言つた。まるで、大切なものを箱に入れたままそつと覗くかのように。

そして気がつけば、物思いに耽つたせいか足も手も止まつっていた。背後のネガイも、彼の影法師のように動きを止めていた。

「私つたら…… あら？ 生きた人におigaしますわね」

‘生きた人’というのは、‘異形ではない’という意味である。サキは猫並みの嗅覚を持つてゐるわけではない。しかし視覚の代わりに強化された嗅覚は、何らかの原因で人間が強い体臭を放ち始めたときには、離れていようともそれを嗅ぎ取ることはできる。そして今は

「これは……病気の方？ ネガイ、誰かいますか？」

闇の中では特殊な知覚能力を發揮できるネガイに、サキは問う。

「はい、発見しました。幼い少女が一人、ここより南十メート

ルの位置にある試着室の中で眠っています。体温の過剰上昇を感じます」

気配のするほうへサキは進む。ネガイはその後に従つ。

試着室のカーテンを開くと、そこにまず布の山があり、内部に少女が丸くなつて眠つていた。悪寒に身を震わせている。

サキは少女を覆う衣類をどけた。そして彼は少女の顔に手を伸ばし、遠慮する様子もなく、その造形を確かめるために撫で回した。

「まあ、なんてかわいらしい女の子」

触覚で感じた少女の面立ちは、日本人のものとは異なつていた。すらりとした鼻梁、全体に彫りが深い。しかし輪郭は愛らしい曲線を持つており、まるで人形のような可憐な顔だつた。

顔をなでられた感覚が少女の意識を覚醒させた。開かれた眼は、半開きながらもすばらしい大きさを持つていた。

「 誰？」 小鳥のよつた声が、眠そうに小さく問う。

「お邪魔してしまいましたか？ 私はサキと申します。わたし故あってこの街にしばらくどどまり、しかし明日ぐらには出立しようと考えていた者です。あなたに危害を加える意思はありません」

そう、サキはあやしつけるように囁いた。その甘い声音に、熱に浮かされた少女の意識はざるざると眠りの中へと帰つて行つた。

「どうやら、あまりよくない感じですわね。ここは一つ、この街を去る前に私たちで看病さしあげることにしまじょう。良いですわね、ネガイ？」

彼の下僕は反論しなかつた。

では、とサキは少女を両腕に抱き上げ言った。

「私とこの子は、きれいなダブルベットを探してそこで一眠りします。ネガイはこの子の服を探してきてください。なるべく、かわいらしいものにしてくださいね」

楽しげなサキ。彼は腕の中の少女の頬に唇を当てた。

ふるん、と少女の頬はやわらかい弾性を持つて彼の唇を押し返した。

2・1 「闇に沈む街」（後書き）

『my moon』の時も第二幕はサキとネガイがテーマでした。いきなり活躍してますね、サキは。彼は英語を話せます。ですが、スペリングがあつているかどうか不安です。

皆さん、電子レンジの原理は御存知でしょうか？

マイクロ波も光も、波長が違うだけでみんな同じ電磁波です。つまりサキは光ではなく電磁波を使うのです。その気になればラジオ放送もするかも知れません。

久しぶりに三人称で書きました。言葉遣いが変だったらご指摘お願いします。

2・2 「疑惑する孤独人形」

白いベッドの中、少女のような少年と、彼に抱かれる人形のよくな少女が眠つていた。

ここはある廃デパートの第六フロア。電気の明かりはないが、漏れ入る月の明かりはある。

眠れる一人を微かな月明かりが照らしている。
ベッドの脇には黒い女性。ネガイという彼女は、ただ静かに立て眠れる一人を見下ろしている。しかし、その姿にを照らし出す光はない。闇に身を包み一人を見守るネガイ。その顔はいかなる感情も表にしていなかつたが、彼女の雰囲気には別れを告げるような不可解な含みがあつた。

ともあれ、それから一時間ほど経過してから一人は目を覚ますことになる。

「誰……？」

少女の第一声。

少女は起きてすぐに、自分が見知らぬ人間に添い寝されていることに気が付いた。さらに、自分がパンツ一枚のみしか身にしていないことに気が付き、まだ起き上がっていないサキからシーツを奪い、それ隠れるようにぐるまつた。

「あら……恐がらないで下さい。私はあなたに悪いことをするつもりはありませんわ。あなたが熱を出されて眠つていらしたので、私とネガイで看病さし上げていきましたのよ」

彼の言葉を聞き、少女は自らの身を顧みた。なるほど確かに記憶の最後にある身体の熱っぽさが無くなっている。完全ではないにし

る、大分身体の調子も良くなっている。

少女の身体に巣くっていた病魔を退けたのはネガイだった。
‘闇’、その中に内包される、災い、の概念を使い、ネガイは少女の病魔を打ち消したのだ。

少女の様子を見て、サキは満足に思った。彼はベッドの縁に腰掛け、少女に無用のおびえを与えぬ為に腕一本分の長さを取った。さらに、立ちつくしていたネガイにも座るように促した。

「私の顔が見えますか……見えませんわよね。 明かりを点けてよろしいですか？」

どうやって、と少女は疑問に思いつつ、とりあえず首を縦に振った。

「では……」*I-i gaga t i n g*

三者のちょうど中心となる位置に、光の球が現れた。少女はすごいと思ったが、同時に驚くことではないとも思った。 少女は不可思議な力に対して見知りがあった。

明かりの中で少女はサキとネガイを観察した。サキは白い無地のTシャツに黒いスラックスという姿だった。ネガイは漆黒の留袖姿。サキは現の人間らしい姿をしているが、ネガイの格好は異質だと、少女は思った。

「眩しくありませんか？」

少女はかぶりを振った。

「では、まず服を着ませんか？ その前に、体をお拭きしないといけませんが」

見知らぬ人間に身体を触られることを警戒したが、二人に害意はないと言うことを信じ、その提案を受け入れた。

少女が自ら身にまとっていたシーツを脱いだ。その時、少女は小さく震えた。

「寒いのですね。少し我慢してください。 ネガイ、頼みますわ」

ネガイは頷き、用意していたお湯の張つた桶と薄紅のタオルを取り出した。

彼女が少女に近づくと、少女は怯えたよつてびくつと身をすくませた。

「安心してください。ネガイは私の言いつけ以上のことはしませんから」

サキの言葉に、少女はぎこちなく頷いた。

少女の肌は垢に汚れていた。しかしネガイが身体を拭き終わると、その全身は真珠のような輝きを持っていることが明らかになつた。自分の主人のそれに勝るとも劣らない物だ、とネガイは秘かに思つた。

次に着衣。自身が治したものが、少女がまだ病み上がりだということを考慮し、ネガイは少女の下着を厚めのものにした。その上から白と青のフリルが見事なドレスを着せついた。

「済みました、サキ様」

ネガイは少女から一歩退き、上品に頭を下げた。

「どうですの？　かわいらしくできました？」

「はい……良い仕事をさせて頂けたと思います」

ドレスの色は、少女のサマーグリーンの髪とフロースティブルーの瞳に合わせて選ばれたものだつた。思惑通り、シアンのスカートと瞳の色は共に引き立てあい、由い背中にはサマーグリーンの髪がさらりと流れ、少女の愛らしさを一つの人形の如き完成度に持ち上げていた。

少女の表情にも微かながら喜びの色がある。可愛らしい装いをすぐることができたという、女性らしい喜びだつた。サキはその表情を見るることはできなかつたが、気配は逃さず感じていた。

「喜んでいただけたようですね」

サキの問いに、少女は顔を赤く染めしかし答える。

「はい……ありがとうございます」

ぱつとサキは破顔した。

「ふふ、それはなによりですわ。少し、お腹が空きましたわね。

ネガイ、用意はできますか？」

ガスコンロで薬缶^{やかん}の水を湧かし、それでカツブ焼きそばを作る。サキは味の濃い焼きそばが好きだった。

少女は前掛けをつけ焼きそばを食べている。ネガイも伴食していた。

「お口に合いますか？」

少女は焼きそばを頬張りながら無言で頷いた。

「お腹が空いていらしたのですね。でも、まだ病み上がりですから、あまり詰め込んではいけませんわよ」

とサキは言うが、少女の持つている容器の内容は既に減らされている。減らされた分は彼が食べているのだ。

程なくして三者はほぼ同時に食べ終えた。全員の容器をネガイが回収し、離れた場所にあるゴミ箱まで捨てに行つた。

「現には便利な食べ物^{うつ}がある、そう思いませんこと? 数多くある現の保存食の中では、私はこのカップ焼きそばが一番気に入りましたわ。そう言えば、私は生の焼きそばを食べたことはありませんけど。あなたの好きな食べ物は何ですか?」

質問されたことに、少女は少し戸を見開いて反応した。他愛のない事柄だが、自分のことを話すことに少女は少し戸惑い、しかし邪氣の無いサキの表情にある程度の警戒は解くことにした。

「 キドニー パイ」

それは腎臓を中心としたパイ。イギリスの郷土料理だが、サキは全く知らなかつた。けれどもその事を顔には出さず、曖昧に微笑して返答とした。

そして、問う。

「お名前をお聞きしてもよろしいですか？ 私の名はサキ、そこの彼女はネガイと申します」

少女は顔を伏せ、上田遣いにサキを窺つた。じつと、最大限の觀察で彼を見る。そして、少女はあることに気が付いた。

「お姉様、御目が見えてないのですか……？」

え？ とサキは頓狂な声を出した。‘お姉様’。サキは始め堪えたが、しかし無理だつた。その中性的な声で、彼は大笑いしあげた。

「ええ、ええ、お兄様は目が不自由なんですね」

彼の哄笑に、少女は表情を凍らせてしまつていた。そこでようやく、サキは自制して笑いを収めることができた。

「…………驚かせて申し訳ありません。そうですわね…………現に来て大分声も低くなりまししたし、そろそろ口調もふさわしいものにしないとほかの人に誤解ばかり与えてしまふかもせんわ…………」

しゅん、と考え込む表情になつたサキに、少女は恐る恐る尋ねた。「その…………サキさんは、男の方なんですか…………？」

サキはほんの少し、さびしそうに微笑した。

「男性が怖いのですか？」

少女はさらに表情をこわばらせ、しかし重ねて問う。

「それで……」「はい、目は見えません。ほとんど、視力がないのです」

少女の顔から感情が消えた。今、少女は心中で、自分が男性である事と盲目であること、その二つを秤にかけているのだろうとサキは推測した。そして彼はそれが差別的なものの考え方だと思い、しかし少女もその事を多少なりとも感じingいて、それ故に迷っているのだろうとも思つた。

彼は問う。

「お名前を、教えてくださいまし」

ぎこちなく、少女の口が音を作つた。

「私……アケルナル。今は、そう言ひます」

では、とサキは真剣な表情を作り少女アケルナルに告げた。
「アケルナル、私を信じるのはお止めなさい。私とネガイは近いうちにこの街を去ります。そう　今すぐにでも

「いや！」

アケルナルが高く叫んだ。そして、ためらいもなくサキの腕に抱きついて言つ。

「行かないで……ぐださい。…………私、寂しいんです。私、兄さんを待つていて……兄さんはなかなか帰つてこなくて…………私、病氣して、誰かとご飯食べたのなんか久しぶりで、…………その…………」

断片的にたたみかけ、涙ぐみ始めるアケルナル。まだ下がりきつてない病の熱を片腕に感じながら、サキはあいている手を彼女の頭に置いた。

「そう、寂しかったのですね。　人を信じるということは難しいことです。私たちを疑つた事は人として当然の事ですから、お気にやむことはありませんよ。謝罪の言葉は、どうか胸の中にしまっておいてください」

サキはアケルナルのサマーグリーンの髪を撫でる。彼女は一瞬身をすくめたが、じつと彼に身をゆだねた。

「お兄様がいらっしゃるんですの？」

アケルナルが肯んじた。

「はい、兄さんは私にとつてたつた一人の家族で、私のそばにいてくれる唯一の人です。私たちの夢まほろしが、月の御方様に降着させられて見知っている人が現に散らばってしまっても、兄さんだけが私と一緒にいてくれたんです」

「今は、どちらにおられるのですか？」

一瞬、アケルナルは言葉に詰まつた。それは現の人間にならっても聞かせられないような秘密だつたからだ。サキは夢の人間のようだが、自分達とは立場が違う。しかし、彼の人格を信じ話してしまおうと、彼女は決心した。

「兄さんは……御方様の直属の部下ブラネスファイア月の子ムニチ」の一人として各地を廻つているんです。私は戦うことができないので、ここで兄さんの帰りを待つて居るんです。兄さんは、一週間に一度帰つてきます……」

一週間。しかし昼夜のないこの街で、その時はより長く感じられるだろう。幼い少女にとつては尚更のこと。サキは、そう心から同情した。

「いけないお方ですわ、こんな可愛らしい妹さんを一人にするなんて……」

サキの言葉に、アケルナルは激しくかぶりを振つた。

「いいえ、兄さんは悪くありません！ 私が戦うことを恐がつたら、兄さんは一人で戦わなくちゃいけなくなつたんです。寂しいのは、兄さんも同じです」

「……お優しいのですね。アケルナルちゃんは」

サキはそつと彼女を抱き寄せた。平たい胸に、アケルナルの小さな頭がもたれかかる。

「わかりました。こんな私達でよろしければ、お兄様が帰つてくるまでの間あなたの側にいましょう。 よろしいですね、ネガイ」

ネガイは黙つて頷いた。

「……ごめんなさい。サキさんとネガイさんは行くところがありますのに」

「お構いなく。 可愛い女の子と独りにするのは、滅すべき悪徳ですから」

サキの最後の言葉に、アケルナルは兄を思つて反駁しようとした。しかし、サキが晴れやかに微笑すると、つられてアケルナルも笑い言葉を呑み込んでしまった。

*

アケルナルを腕に抱き再び就いた眠りの中で、サキは先視をした。目を覚ました彼は、アケルナルを起こさないようネガイに睡眠術をかけさせ、そしてネガイを同伴してデパートの屋上へ行った。屋上階は硝子に囲まれた部屋があり、その外にコンクリートの床と空があつた。硝子の扉の向こうには、銀のマントに身を包んだ三人がいて、彼らはしきりに何かを話し合つているようだつた。サキとネガイが近くに寄ると、ぎょっとして一人へ振り向いた。

唐突にサキは言つ。

「アケルナルちゃんのお兄様はどちら様でしょうか？」

その問いに、三人はそれぞれ異なつた反応を示した。呆れる者と同情する者、三人の内二人がそれで、その感情は最後の一人に向けられていた。そう、その者が

「俺だ。アケルナルは俺の妹だ」

挑みかかるような口調と共に、声の主はフードをめくつた。高校

生くらいの、まだ少年と呼べる者。しかしその露わにされた顔は、妹と同様の造形美を持っていた。顔を包む、眺めの黒い艶やかな髪に、妹と同じフロスティブルーの瞳。鼻は高く美しい三角形をなしている。

サキはその顔を見ることはできない。だが、やはり似通つた雰囲気を持つていて感じていた。

「妹様を大切に思つていらつしゃるのでしたら、今すぐにそのマントを捨て戦うことをおやめなさい。さもないと、痛い目にあつてもらいますわ」

いつになく強い口調のサキ。虚ろな双眸は閉じられ、眉間にしわを寄せている。

対するアケルナルの兄もまた表情を硬くしていった。譲れない物を心に秘めた両者。彼らのにらみ合いはしばらく続いた。

「俺は、月の御方の下で世界を創り替える。この歪んだ世界を正し、争いのない安らかな世界にするんだ。^{ブランズフィア} そうだ、俺は選ばれたんだ。全宇宙にたつた八十八人しかいない月の子^{ブランズフィア} の一人に。その為に‘エリダヌス’という名も授かつた。俺はエリダヌスだ！ 誉れる月の子の一人として、戦いを止めるわけにはいかない！」

「妹様を孤独にしてもですか！？ あの子は、この位街で一人きり、孤独から目を反らせないままあなたの帰りを待つていて。ごはんを食べるときも一人。病気をしても、誰にも診て貰えない。……それが、どれだけのことかわかりますの？ 私、怒つているのですよ！」 サキは叱責する。しかし、アケルナルの兄、エリダヌスもまた、沸々とした激情を胸に秘めていた。

「黙れ！ 月の御方の寵愛を受けながら御方に背き、ついには男の

身におとされた売女め。俺は妹を……アルを一時だつて忘れたことはない。だが、今は為すべきことがある。いずれ、麗しき月の王国ができた黄昏には、この孤独も過去の記憶となり忘れられるだろう……。先視の娘 よ、大局を見よ！」

「芝居がかつた口調で、「己の本音を隠そうとしているのですか……！」

憤りを堪え噛みしめていたサキの唇から、血が一筋流れた。

「そうですか、よくわかりました。 その直前で、己が身で償いなさい」

サキはエリダヌスに背を向け、ネガイに向き直った。

焦点の定まらない天色の双眸で、サキはネガイを見る。まるでそんなことは不可能なのが、目を合わせようとするよつて。そしてネガイもまた、虚ろなサキの瞳をじっと覗き込んだ。

「ネガイ、人間を捨てる覚悟はできてますか？」

2・2 「疑惑する孤独人形」（後書き）

第一幕はあと一話です。ちょっと詰め込む感じになりそうですね。（
なら止めるよ……）

今回はサキが怒りましたね。今まで怒るのはアカぐらいでしたが。
一人は少し似ているかもしません。

あんまり日本神話の要素を出せません。楽しみにしている方、申し
訳ありません。

2・3 「the blightness in the dark」

その時サキは、心身の両面でネガイと合一していることを感じていた。それは性交の部分的な合一とは違う、文字通りの合一。サキとネガイは、物質的な形を曖昧にして一つに溶け合っていた。

『私はイザナミ。死して黄泉に封ぜられた神の名を持つ人ならぬ者妖です』

初めて一人が会ったとき、彼女はそう言つた。出会いは、天戸の宅を訪れたサキを、ネガイが迎える形だった。

彼女の言葉に、サキはこう答えた。

『ずいぶん重い名ですこと。そんな名はお捨てなさいな。替わりに……そう、ネガイ」と名乗りなさいまし。私は、未来^{サキ}、あなたは

「願い」　　良いですね?』

あれから百年に近いときが流れた。一人だけだった生活に、キズオトが加わりササヤキが加わり……。彼女たちは終にネガイが人ではないことを知らずに、姿を消していった。だが、それは間違ったことではなかつたのだ。‘ネガイ’の名を持つ彼女は紛れもなく人間だったのだから。

人間を捨てる覚悟はできますか?

問いに、ネガイは、Y s e，と答え、その存在を消した。

もう、ネガイ、という存在は宇宙のどこにもない。今、サキの傍らにあるのは、昏き闇から湧き出る力だけだ。だが、サキは変わらぬネガイの、想い、を感じていた。

「「今こそ未来に願いを
希望を示す明星の光とならん!」

」

サキの身体が、眩く白い光と螺旋を描く黒い闇に包まれる。纏う衣服が再構築される。純白の長袖シャツに、漆黒のズボンとマント。

白い髪と天色の瞳は変わらない。だが、その額を縦に裂いて紫苑色の瞳が開いた。

そして彼の左手に一丁の散弾銃。磨き上げられた黒曜石のようなボディを基礎に、グリップはつやのない象牙質、トリガーは白金。虚のような銃口は十ミリメートルほど。バレルには祝詞が草書体で白く書き連ねられている。

砂利を踏むような音を立て、サキは銃を持ち上げ構える。その先はもちろん、エリダヌス以下三人の月の子^{プラネットファイア}だ。

「闇から生まれし光……これが私の生弓矢ですわ。……さあ、最初にぶち込まれたい方はどちらですか?」

月の子の一人、エリダヌスと同じ背丈のものがせせら笑つた。

「ほぞけ! めぐらのてめえに何ができる!」

やや低い男の声が囁つや、サキは彼に向かつて引き金を絞つた。

射撃される無音の衝撃。それはレーザではなく、放電する光の粒子。散弾は、その名通り拡散しながら敵へと飛来した。

月の子三人の手前で、光の散弾は不可視の壁と衝突した。

「防護、反射！」

やわらかな響きの女性の声が唱えた。

光の弾丸がまっすぐ跳ね返される。だが、サキはすでに位置を変えており、反射された光の弾丸は何にも当たらずに虚空を駆けていった。

彼は三人の側面に回り込んでいた。気負いのない動作で、第一の射撃をする。

「無駄よ！ 反射！」

三人を囲む結界が光った。

しかし弾丸は真っ向から結界にぶつからなかつた。四散し、八方へ飛び、あらゆる方位から三人を守る結界を叩き、砕いた。

「 うわあ！」

結界を碎かれた衝撃が、フードをかぶつた一人の顔を露わにした。顎の鋭い金髪の青年と、黒い髪の中年くらいの女性だつた。

「くそ、よくもあのお方から授かつた俺たちのマントを！」

金髪の青年がいきりたつて喰いた。

「油断するな、カリス・ミノル。相手は腐つても、かつて月の御方の側に侍つた者だ。どんな底力を秘めているかわからんぞ」

カリス・ミノルと呼ばれた青年は、空に手をやり何もない場所から長槍を引き抜いた。長槍の長さは一メートル超。馬蹄型の穂先を低く構え、彼は叫ぶ。

「いくぜニユーハーフ。 月の子 の一人、このカリスがてめえを穴だらけにしてやる

カリスとサキの距離は約五メートル。この距離なら、長槍を持つカリスは銃を持つサキと同程度の戦闘ができるはずである。

一閃。音速の突きを、サキは僅かに半身をずらしてかわす。

第二閃、これも微小の動きでかわす。

銃口はカリスに向けられ、しかし射撃されない。見下すようなサキの威嚇に、カリスは激昂した。

「 野郎！ これでもくらいやがれ！」

カリスが高速の連續突きを放つ。一秒間に八度繰り出される突きは、常人の目には花火のようにしか見えない。

しかしサキは余裕の表情でこれを防ぐ。彼の動きは特別速いわけではない。少し身体をずらしたり、銃のバレルで穂先の軌道を変えたり、それだけ。緩やかで、流れるような動きだった。

「氷刃！」

後方の女性が支援の攻撃術を放つた。

幾つもの氷の刃が飛来する。光の散弾が、それを迎撃した。

「 隙あり！」

背丈の差を利用し、カリスは槍をサキの首筋に向かつて突き下ろした。

だが次の瞬間、背後から流れてきた光の弾丸によつてカリスの両腕と槍は粉碎され、攻撃は中断された。

「ぐああああああああ！」

氷刃を跳ね返した光の散弾が、そのまま消えずに飛び続けていたのだ。光を操るのはサキの能力、そして

「お忘れではないですわよね？ 私が先視の使い手だということを。わたくしあなたの動きが一瞬先にでもわかつていれば、こちらから攻撃を当てる事は可能なんですよ。なぜなら、光は何よりも早く動く

のですから

彼自身はすばやく動けなくとも、光は速い。彼の反応に、時間差なく光は動く。加えて、彼の第三の眼。この眼が開いた事により彼の先視の能力は大幅に強化され、まさしく未来を‘見る’ことを可能とさせていた。

「見える、とは面白いことですね。あなたのその顔、ぞくぞくしましてよ?」

両腕を失い膝をつく自分を見下ろす、焦点の定まっている紫苑の瞳。カリスは恐怖に顔を歪ませてそれを見上げた。

「では、まずあなたから死んでください」

口の端を歪に引いて、サキは引き金を絞った。
水袋をたたき付けるよつた音。

横たわったカリス・ミノルの屍には、両腕と頭部、つまり上半身から生えている部位がすべてなくなっていた。その断面から流れ出す血液は、サキの黒い靴底を濡らした。

「 次は、そちらの女性の方ですわ

黒の散弾銃を女に向かつて構えなおす動きをつくると、それに伴い血に浸つた足下で水音がした。

「 させらるか!」

銀の両刃剣ナイフ・ソードを両手で構えたエリダヌスがサキに斬りかかる。

サキはその斬撃を先視して回避。銃を右手で持ちそれで彼を牽制しつつ、左手で空中に光の文字を書き始めた。

『The attack cannot hit me, because...』(その攻撃は私には届かない、何故なら……)

流れるような美しい筆記体。さらに、文の横に呪術的な意味のある文様を描いていく。

「ぐ、この……当たれ！」

エリダヌスの攻撃がサキに当たる様子はない。サキは顔を彼に向いていない、おまけに立ち位置もほとんどえていなかつた。

エリダヌス、離れて。

女がエリダヌスに念話で伝える。彼は、口惜しそうに渋々サキから離れた。

「、招来、烈火、朱雀！」

サキに向かつて鳥の形をした炎が放たれる。炎は床のコンクリートを融かすほどの熱を持っている。

一直線にサキに向かつて飛ぶ炎の鳥。

それは悠然と構えたサキの手前で、何の抵抗もなく進行方向を反転させた。

「な……反転術陣！？」

‘反転’は‘反射’とは違う。反転の術は反射の術よりも効果が高い。しかし反転の術は相手の術によって使い分ける必要がある。つまり、相手の攻撃を予測できなければ使うことはできないのだ。

サキにとつてその予測は何よりも得意とするところだつた。敵対した女が使う術が炎に関するものだと先視したサキは、このようなことを空に書いていた。

『Fire is born the south · So · it should return the south』（火は南で生まれる。なので、南に還るべきである）

これは陰陽道の術形態に則つた呪文。

蒼い月を背にした女が自ら放つた炎の鳥に襲われた。

「エリダヌス……アルちゃんを大切に……」

女の声はそこで途絶え、炎が晴れたときにはそこに塵もなかつた。

「あらあら……どうしますの、お兄様？　まだ私と戦いますの？」
軽い口調でサキは問う。エリダヌスは、憤怒に声を濁らせて答える。

「当たり前だ！　この　月の子　のエリダヌス。同士の無念を晴らさずに、退くことはない！」

雄叫び一つ、エリダヌスは己の足下に剣を突き立てた。
彼を中心に半径十メートルの床が一瞬で破碎した。砕けたコンクリートは粉体となり、煙幕のようにサキの周囲を覆った。

「　くだらない」

その煙幕の中ではもちろん視界が利かない。それに加え、バラバラとコンクリート片が落ちる音が聴覚を奪い、肌を叩く欠片が触覚も奪う。

エリダヌスの勝算はこうだ　いくらサキがこちらの攻撃を先視しようと、剣士である自分の方が彼が動くより早く攻撃できる。加えて、いま彼は感覚を奪われている。

サキの背後から斬りかかった。

が、彼の予測に反してサキは動いた。しかも、それは回避ではなく攻撃。上段に振りかぶったエリダヌスの腕を、サキは渾身の力で薙ぎ払つた。

仰向けに倒れたところで、剣を握った右腕を足で押さえられた。右の肩口に、ひやりとする銃口が押し当てられた。

「この右腕、要りませんわよね？」

感情のないサキの声。引き金にかかる指に、くつと力が込められるのをエリダヌスは見た。

「あがああああああああああああ！」

銃声はなく、響いたのは肉の弾ける音。

エリダヌスの右腕が、主を離れて飛んでいく。右腕は根こそぎ無くなつた。傷口は肺にまで達し、そこから覗くのは骨だけではなく、パイプのような大きな血管も断面を見せていた。

大量の出血。エリダヌスはほとんど即座に意識を失い、身体はぶるぶると震えはじめていた。

「あら……これでは死んでしまいますわ。 その前に、お話ししましよう」

サキは痙攣するエリダヌスの頭の上に膝をつき、彼の額に手を置いて脳に直接呼びかけた。

『選んで下さい。 Die or Live ?』

94

返事はない。彼は、死を望もうとしていた。

サキは重ねて呼びかける。

『では、妹様はどうしますよ？ そろそろ目が覚めて私がいないことに気付いている頃だと思いますが。 そうですね、あなたが死ぬのなら、あの子も後を追わせてあげましょう。それなら、誰も寂しがることもないですね』

脳に直接する会話に、嘘は吐けない。サキは本気だった。

エリダヌスの意識が震えた。

『あなたにとつて、何が一番大切なですか？』

彼の意識は迷わず答えた。アル、と。

『ならば、誓いなさい。金輪際ツミさんと袂を分かち、妹様の傍でのみ生きると。少なくとも、妹様があなたを必要としている間は、共にいて上げるべきではありませんこと？』

彼は恥じ入り、謝罪をはじめた。すまない、その言葉は彼の関わ

つたあらゆるものに向けられていた。

サキは立ち上がる。両手を組み合わせ集中し、眩い癒しの光を創りだした。

「さあ、あなたの願いを未来へと繋げましょう

*

アケルナルは暗闇の中、一人目を覚ました。
誰もいないデパートの寝具売り場、サキはどこへ行ってしまったのだろう。

夢だったのかかもしれない。

「兄さん……」

孤独感に抗うように、アケルナルは呟いた。
ベットから出る。自分がドレスを、それもなかなか可愛らしいものを身に着けていることに気付いた。

迷い子のお姫様、と彼女は自分を形容する。滑稽だと。

ふと、窓の外に目をやると空が白んでいた。昼の刻を奪われた終わるはずのない夜の街に、おどずれる優しい夜明け。硝子越しではなく直で見る為に、アケルナルは屋上へと向かった。

気がはやり、息を切らせて階段を登る。

屋上に出ると、やはり夜明けの薄桜の光が彼女を迎える。

太陽はまだ見えない。東から西にかけて、紅、珊瑚、白群、紺碧、藍、そして黒、美しいグラデーションの空。月が輝きを失い、星が一つ一つ消えていく様を、少女は息を詰めて見つめた。

じやり、と砂の噛む音。振り向くと、そこにアケルナルの待ち焦がれた人物がいた。

「兄さん……！」 「アル！」

アケルナルは兄に駆け寄り、腰の少し上に抱きつく。兄は抱き返してこない、否、自分の身体に巻き付くのは左腕だけで、右腕はと言つと

「兄さん、腕が……！」

エリダヌスは身体の右側に黒いボロ布を巻き付けているが、そこにあるべき厚みがなかつた。それに気付いたアケルナルの顔に衝撃が走る。彼女の兄は、腰を屈め笑いかけ、頭を撫でた。

「心配は要らないよ、アル。俺は何ともない。お前のことば、左腕一本でも守つていけるから」

そう言つて彼は妹を左腕で抱え上げ、東の空と向かい合つた。日の出は進行していない、だがそこにあつた。

曙光に照らされた兄の風貌は、すりきれた黒いズボンに裸の上半身といつたものだつた。その身体からは血のにおいがする。だが、それは戦の名残と言つべき痛みのにおいではなく、力強く脈動する命のにおいだと、アケルナルは思つた。

「俺は一番大切なものに氣付くまでにたくさんの時間を使つてしまつた。たくさんの命を失わせてしまつた。それらは取り戻せるものではないし、かといって俺が償いきれるものでもない。

でも、アル。お前が許してくれるのなら、これからはずつとお前の側にいたいと思う。これまでにあつたすべての過去を捨てて、一からこの世界でお前と生きたい」

兄の横顔には、一切の悔恨がなかつた。過去とのじがらみを斬り捨て、その上で過去と向き合つ、そんな潔さが彼の顔で光つていた。アケルナルに兄を罰する気持ちは欠片もなかつた。それどころか、兄がそこまで自分に献身してくれることに後ろめたさを感じてさえた。

だが、彼女はそんな気持ちを表現できるほど大人ではなかつた。

「……ずっと一緒にいてね、兄さん」

幼い笑みの言葉。夜明けに照らされて、一つの顔が笑っていた。

* *

輝く地平線を左手にサキは歩く。

「まもなくこの夜明けは終わり、また夜に戻ることでしょう。違いますか、ネガイ？」

だが、彼の傍らにその女性はない。黒い散弾銃の銃床で、彼は頭を搔いた。

「寂しいものですね、独りは。ツリさん、あなたはどうなんですか？」

白い骨色の胸に向かつて独り言。そして彼はたゆまらず歩き続けた。

月の子 ブラネスファ
というのはそのまま星のことです。エリダヌスは、太陽

神アポロンの子供が落ちた川の星座、アケルナルはエリダヌス座の中で一番明るい星らしいです。見たことはありません。

彼らの名前はツミから『えられたもので、前は別の名前でした。これからは、どんな名を名乗つていくのでしょうかね。

……そう、実はツミ君の本名を考えていません。最終話に向かう為には必要な鍵だと思うんですが……。

次回からは予定を変えて、バトル全開で行こうと思います。アカはでますし、水と氷の一人も登場です。

3・1 「想いと立場」

そして、チヨ^{ボクら}とサキは再び巡り会った。

相変わらず、サキはいたずらっぽい雰囲気を漂わせていた。声が低くなり、服も巫女服じゃなくなつたけど、サキはそのままだつた。

「^{わたくし}私と離れている間、寂しがつてくれました？ 切なくて、自分で慰めたりしました？」

一人でいるときはサキと優見のことを半々、そして「主人様のことをちよつと想えていた気がする。サキのことだけを考えていたわけでもないけど、それを言うのは何気に酷いと思う。

何とも言えず曖昧に笑つていると、サキは背を伸ばしてボクの唇を奪つた。首の後ろに手を伸ばして引き寄せ、ぐいぐいと濃厚なキスをした。

ネガイはいなくなつてしまつたんだろうか？

きっとそうなんだろう。何となくだけど、ボクの直感が教える。死んでしまつたわけではないと思うけど、もつサキのそばで言葉を交わしたりしない。

淋しいのかな、と思つて意識せずにサキを抱きしめた。すると、彼は唇を離してボクの胸に顔を埋めた。

サキは独りになつて淋しさを感じた。

サキは声が低くなつて、新しい自分に戸惑つている。

サキは余裕そうに振る舞うのをやめ、少しだけ素直になつた。

そんな気がして、ボクは彼のことを愛おしく感じた、ちょっとだけ。

ひとしきり再会の喜びを分かち合つたあとは、とりあえず廃墟となつたファミリーレストランに行って休むことにした。

真つ暗な中、ボックス席に向かい合って座る。サキが明かりを点けた。

ファミリーレストランに食べられる物は残されていなかつた。けど、無菌処理のミネラルウォーターとインスタントコーヒーはあつたので、それを飲みながらお互の旅の話とかをした。もちろんコーヒーを飲んだのはサキだけだ。

「私が怒つたのなんて、もう三十年位前の気がしますわ。それくらい可愛らしいお嬢さんでしたのよ、アルちゃんは……食べちゃいたいくらいでした」

サキがそれを言つと、何故か冗談に聞こえない。

彼の話を聞き終わつてから、ボクが話した。

「優見さん、ですか……。敵ですわね、那人。チヨは身も心も私の物のはずなんですよ」

「ボ、ボクはツミの飼い猫だよ」

ボクは真剣に言つたが、サキはとも面白い冗談のように笑い飛ばした。

「またまた……ああ、でもあなたの黒い髪。確かに、私達の家に来たばかりの頃のツミさんを思い出させますわね」

サキがボクのそう長くない髪に手を伸ばす。そして立ち上がりたかと思うと、こちらの席まで来てボクを押し倒した。

ボクの胸に頭を押しつけるサキ。

「や、やだ。ボク、こんな場所は……」

心臓がバクバクいってうるさい。サキも、きつとこの音を聽いている。

「ふふ、あなたはかわいいですね、相変わらず。少し疲れたので、このままお休みさせてくださいまし」

そう言って、サキは目を閉じて本当に眠り込もうとした。

やつぱり、淋しかつたのかな？

さつき話をしていたとき、ネガイさんが銃になつてしまつ下りで
もサキは声を乱すことなく、何でもないようになつて話していた。でも、
二人は何十年も一緒にいたんだ。やつぱり、いなくなつて淋しくな
いわけがない。

「サキ、この体勢はさ、ボクも辛いから膝枕してあげるよ」
優しく彼の耳に囁く。サキは起き上がって、ボクの太ももの上に
頭を載せる。そして一言、「すみません」と言つて、彼は瞼を下
ろした。

微かな寝息。誰かといふことへの安息感。ボクも目を閉じて、サ
キと呼吸を合わせながら眠りの中に降りていった。

*

目が覚めると、窓硝子の外が赫かつた。夕焼けかな、と思つたけ
ど、その赫はゆらゆらとせわしなく揺れていた。

火！？

耳を澄ませばパチパチと爆ぜる音が聞こえる。店の片隅には、も
う既に火が入つてきている。

「サ、サキ起きて！ 火事だよ火事！」

膝の上の頭を掴んで揺さぶると、うー、と眠そうな声を出してサ
キが起きた。

「んー、火事ですわね……。まあ、じつとすればいいんじゃあり
ませんの？ きっと、揉め事が起きてるのでしょうから」

「な、なに言つてるんだよ、サキ。もうこの店が燃えはじめてるん
だよ。早くここから出ないと」

不承不承起き上がりつたサキの手を引いて、ボクは出入り口に向か
う。途中に火の手はあつたけど、出入り口自体に火はなかつた。

出たところの駐車場では、運転手を失つて放置された車が何台も

燃え上がっていた。いつ爆発したりするかわからないので、ボクはそこから離れて交差点に行こうとした。

けど、サキがボクの手を引いて立ち止まつた。

「サキ？ どうかしたの？」

し、とサキは鋭く言いボクの口を塞いだ。

「ここにじつとしていましょう。厄介なことになりますわよ」

ボクは理解できない。

と、そこに第三者からの問い合わせがあつた。

「セレニに誰であるのかや？」

「いいえ、誰もおりませんわ」

て、サキ、自分から何してるんだよ。

「……おとなしく出でよ。話へらには聞いてやるわ」

聞いたことのある声だった。ちょっと前、ボクが天戸あまとのやなの宅にいた頃に見た夢の中……。

言われたとおり、店の影から出る。両側四車線の大通りの真ん中で僕らを待っていたのは、やっぱり見覚えのある人だった。長い三つ編みの黒髪に、翡翠色の瞳。背はボクと同じくらい高くて、濃い色の肌の上に重たそうな黒いドレスを着ている。そう、この人は名を呼ばれた彼女が、驚いて目を見開いた。

「何故名乗りもしていない妾の名を……。お主ら、何者？」

ボクは、と名乗ろうとしたとき、斜め上から炎が飛んできた。サキが素早い動きで腰から散弾銃を抜き、空に向かつて撃つ。大

きな光の球は炎の球とぶつかり、相殺して消えた。

「何しているの、糸鶴。^{シノヘ}口を動かしている暇があつたら手を動かしなさい」

炎を纏つて空から降りてくる赫い髪の女人。彼女は、地面に降り立つと金の双眸でボクを見て、サキを見た。

「お久しぶりですね、アカ。私にとっては五年ぶりですが、あなたはどうですか？」

機先を制すように、先んじて話しかけたサキ。

アカは眉を顰めて答える。

「四年ぶり、ね。変わらないみたいね、あんたは」

「ええ……。アカは変わりましたわね。大人らしく、綺麗になられましたわ」

サキはついこの間まで夢^{まぼろし}にいたから歳をとつていな。でも、アカは現に来て四年経つから、その分歳をとっている。

サキの言うとおり、今のアカは綺麗で凜々しい雰囲気を持つていた。赫い髪は豊かな波をうつて腰まで伸び、パリッとした黒いスースを着ている。切れ長の眼に長い睫毛、瞳の色は金。鼻は高く、でも大きすぎない。唇には口紅を塗り、薄化粧の頬は薔薇色だ。そう、しげしげと彼女を見ていると、強く睨み付けられた。

「誰？ その女。人間じゃないわね」

むき出しの敵意。けど、ボクはひるまず答える。

「ボクはチヨ。シミの飼い猫だよ」

「シミの？」

反射的、といった動作でアカが右手を振り上げそこに火を呼んだ。サキが挑発的に言つ。

「そう、チヨはシミさんの飼い猫。あなたさえも愛さなかつたシミ

さんが、生涯たつた一つ愛した存在。

私との約束を忘れても、

彼女の前には姿を現すほどですからね」

サキの言うのは、実はご主人様はサキが現に来たら一度会いに行くと言つたのに、その約束が果たされていないということだ。ボクには会いに来てくれた、けどサキには会つていらない。

それを聞いたアカの雰囲気が変わった。さっきまでの雰囲気は、言つなれば純粹な破壊衝動だとしたら、今はそれにどす黒くて粘つこいものが混じつた感じ。嫉妬じやない、そんなものは比較したら生温く感じられる、渦巻く憤怒。

彼女はボクに問う。

「それで？ あんたは何の為にここにいるわけ？ あんたも、あいつの馬鹿みたいな理想郷を創りたいと思つていてるわけ？」

「ううん、ボクは、ご主人様を止めたいたんだ。ご主人様は悪いことをしようとしている。そんな必要もないのに。だから、ボクが止めさせる」

ハン、とアカは鼻で嗤つた。馬鹿にしきつた眼でボクを見た。

「じゃあ、あんたはツミを殺すのかい？ 違うんでしょ？」

「うん、もちろん違うよ。殺したり、殺されたり、そんなんじゃ何も解決しないから」

アカはサキの方を見た。

「サキ、あんたもそうなんでしょう。 まったく、いい連れ合いじゃないの」

だけど、サキはゆるゆるとかぶりを振つて言つ。

「いいえ、アカ。私はツミさんをこの手にできなかつたら、あの人を殺すつもりですわ」

その言葉に、アカは一瞬虚を突かれた表情になつた。サキはそれ

に満足そうにほくそ笑み、散弾銃を鳴らして構えた。

「まあ、それはともかく。……私達とあなた達は敵同士と言つ」と
ですわ。かつての友であろうとも、一切容赦しませんわ」

「 上等」

「 業」とボクらの前に炎のカーテンが引かれた。迫り来る火勢は、
そのままアカの敵意と激情だつた。

「 一つ言つておくわ」 火の向こうからアカは言つ。

「 今私の名は、紅鳥、よ。氷室・紅鳥、それが私の名前。ついで
に、そのパートナーは紫部・糸鶴。私達は月の子ムーン・レスを狩る
漆黒の守護者。夜の星々を覆い尽くす、漆黒」

炎が猛る。ボクは大地の助力を請いつつ、アカの声を聞いた。

「 さあ その罪」と焼き尽くしてあげる

戦いが始まった。

3・1 「想いと立場」（後書き）

今回はちょっと短いです。

まあ、このあとはバシバシ戦つてもらおうかと思います。残り四話
が予定ですが、五話になるかもしれません。

漆黒の守護者 …… これでよかつたのかなあ。こういう組織の名
前を考えるのは難しいです。

3・2 「激突のはじまり」

火が走る。火が踊る。火が叫ぶ。

実体のないそれから放たれる光は、夜を退け月の色を奪つ。

渴いた風が荒れ狂い、眼や肌を痛くする。

「いけー、重力！」

光を呑み込んで黒くなる、小さな重力の球がボクの手に生まれる。これの持つ力は小さいけど、当たれば痛い。

重力球をアカの足下を狙つて放つ。アカがそれをかわす。その瞬間を計つて、重力球を破裂させた。

変化した重力に引っ張られて、跳躍したアカの動きが乱れた。

そこにボクは走り寄つて拳を叩き込む。

「く！」

直線的なボクの攻撃を、体勢を立て直したアカが身をよじつてかわす。まずボクの軌道を空けるように身体を四分の一だけ回転、ボクが過ぎたあとはこちらから見て向こう側に一步下がる。鮮やかなフットワーク。なにがしかの体術を習つているのかもしれない。

「火雷撃！」
[カライゲキ]

高温のあまりプラズマ化した炎の一撃。白い光の塊は、普通の土砂ならすぐに熔かすほどの熱を持つ。

「『盾となれ雲の母』 ボクを護つて！」

地面から雲母だけを取り出して盾とする。

黒い雲母の盾もプラズマを完全に押さえられる訳じゃない。でも、穴だらけになりながらも何とか受け止めた。

「砕けて！」

赤熱していた盾が碎ける。熱い欠片は、すべてアカに向かつて飛びように操作する。

アカがひるむ。その彼女に一瞬で肉薄し、拳を繰り出す。彼女が腕を交差させてボクの拳を受け止めるとき、その骨からミシンツと嫌な音がした。

「 つ！」

さらにボクはガードの下から拳を打ち上げる。拳はアカの鳩尾を一撃し、アカは後ろに吹き飛ばされ、そして嘔吐した。

「やつてくれるわね……。こんなに手こずらされたのは久しぶりだわ」

そういうアカの瞳には、揺るぎない闘気のみがあつた。口を拭い背筋を伸ばす彼女は、完全に一人の戦士と化していた。

アカの全身が炎に包まれた。何かと思った次には、アカはボクの頭より高い位置に浮かんでいた。

「いくわよ……朱連流星！」

空中から火球の連続射撃。

始めての一発は盾で防ぐ。でも炎の温度が高く盾が持たないので、走つて逃げることにした。

ボクは普通の人より高い運動能力を持つている。加えて重力制御で身体を押して動けば、文字通り目にも留まらぬ速さで動ける。距離を取つてから、背後に重力を持つてきて急ターン。一気にアカの真下まで引き返し、オーバーヘッドキックを放つた。

「 緋雲壁 近寄るな！」

咄嗟に発生された炎の風で、吹き飛ばされた。

一回転して、着地。アカは傲然とボクを見下ろしている。

「なかなか速いじゃない。でも、速さはあんただけの物じゃないのよ。行くわよ 焰翼飛翔！」

「**暴**、と大きな音を立ててアカの全身が火炎に包まれ、撃ち出されたかのようにこっちに向かつて飛んできた。

速い！

とりあえず避ける。ボクの傍を飛び去る彼女が、熱い空気を残していった。

けれど、ボクを通り越したアカは慣性を無視した動きで反転して、またこちらに飛んできた。

衝突！ まるで溶岩に飲まれたような感覚。

ボクは叫びながら吹っ飛ばされた。

「お返しよ！」

倒れ込んだボクの上から、すかさずアカが拳を振り下ろす。拳には炎が纏っていた。

「 反重力！」

咄嗟にボクは叫ぶ。引き寄せの反対の力が、アカの身体を空に向かつて押し出す。

「 突き上げて、大地の角！」

無我夢中で喚いた。そんなボクにも大地は力を貸してくれて、隆起した岩の塊がアカの身体を打つた。

けど、浮かされているアカに下からの攻撃は威力が低い。僅かに押されただけのアカは、炎の推力で重力を無視して体勢を立て直した。

「**爆碎弾**！」

いそいで地面を蹴つて反動で動き出し、彼女に向けた背中を守る

盾を呼ぶ。

盾となつた壁の向こうで爆発があつた。

「……重力、ちょっと強めに」

重力を戻して、立つてアカと向かい合つ。少し強めにしたのは身体の強いボクが有利になる為だけど、アカは火炎の推力で浮かび上がっているからあんまり意味はなかつた。

「楽しませてくれるじゃない。じたばたしたつて、焼かれるときは一瞬よ」

ボクとアカはにらみ合つ。彼女からひしひしと殺氣を感じる。

「ボクは……負けられない」

そう言つと、彼女の双眸がぎらりと光を放つた。

「それは私も同じよ！」

彼女の闘気に呼応し、また炎が燃えさかつた。

* *

一方、サキは糸鶴と交戦していた。

糸鶴はチヨ達のように強力な術を持たない。その代わり、彼女は細い鋼の糸を使って戦う技術を習得していた。

縛り、締め、切る。

長さ七メートルの程の糸を、一時に七本操る糸鶴。その戦闘技術は変幻自在、近距離から中距離まで己の全方位を攻撃範囲とし、糸に触れたものはすべて切り刻まれた。

彼女はもちろんすべての糸の軌道を把握している。その上で、今サキとの戦いで思った。

完璧じやな。

自分の技がではない。サキが糸を避け動き続ける軌道である。糸鶴が捕捉している己の死角と言つべき、糸のない位置。そこをサキは逐一なぞつて動いているのだ。

「これならどうじゅや？ Silver Wave！」

糸鶴の鋼線が数を増した。束となつた糸がほぐれ、面状に広がる、うねりながらなびく様はまさしく銀の波。鋼の波はコンクリートを飛沫と変えながらサキに迫る。

美しい技ですわ、とサキは一言。そして気負いのない動作で銃身下のフォアグリップをスライドさせてコシ キング。すると散弾銃全体に書かれた祝詞の文字色が、白から赤に変わった。

「では」ちからも brandish laser！

闇の覗く銃口から幾百のレーザーが束になつて放たれる。しかし指向性の強いレーザーは視認することができないため、傍田からはうすぼんやりした光が射撃されたようにしか見えない。

その薄い光は、銃口から直線に五十ミリメートルほど進んだ後、地面に対し扇状に拡散した。すると、光の当たつた部分は深々と切り裂かれ、そこにあつた銀の波も一直線に断ち切られて動かなくなつた。

断頭台の刃のようじや、と操りを失い動かなくなつた糸の束を見て糸鶴は思った。

「なかなかどうして、お主には敵じそうにないのう」

両手を下ろして諦めたように糸鶴が言つて、サキはこくりと微笑した。

「あら、そんなんふつに言つてしまつていいんですの？」

「妾は己の欲るところは素直に認める主義じや。向こうの赫い娘と違つてな」

そう言って、齡一十九の糸鶴は、肉体的には六歳ほどの違いしか

ないアカを見る。

アカとチヨの戦いは緩やかに加熱し続けていた。チヨは大地の神^ヒ秘靈力を直接炸裂させ、アカも負けじと火炎の爆発をつくつていた。じつと立つていれば、その衝撃は離れていても伝わってくる。

「どうしますか？　このまま休んで二人の戦いを観戦しますの？」

サキは余裕のある口振りで問う。

「いや……あいにくじゃが、戦うのが今の仕事でな、怠けるわけにはいかないんじや。お主にはもう少し付き合つてもらつぞ」

糸鶴が手を上げる。新たな鋼線がその指から垂れていた。

「私……本気を出しましようか」

珍しく恥じ入るようにサキが言ひ。糸鶴はそれに苦笑で答える。

「いや……どうじやうひ。殺されそうじやからな。妾はまだ死ぬわけにはいかない。このまま生きて、少しでも多く月の子ブランエスファイアどもを駆逐したいからな」

「あら、そうですの……」

一人は遠慮がちに笑みを共にする。一人の間には、なにがしか通じ合える物があるようだ。

「では、再開しますか」

音を鳴らして、サキは銃を構え直す。

と、その瞬間、彼は目の前の対峙者とは無縁の危険を感じ取るや、刹那にして引き金を絞つた。

銃口から飛び出す大きな光の球。光球は一人のちょうど真ん中で四散する。

「ずいぶんせつかちじやの！」

糸鶴は鋼の糸をなびかせ光の散弾を弾く。だが、彼女のその行動はサキの意図を全く取り違えたものだった。　彼女は気付くべきだった。光の散弾はサキの方へも飛び、そして天へと放たれたことに。

天へと放たれた散弾は、その射線で何かを迎撃していた。

「氷……！？」

現状に気付いたときにはもう遅い。降り注いだ非情な氷の刃が、糸鶴の腹部を背中から貫いた。

儚い声を発し、糸鶴が崩れ落ちる。彼女が身体を曲げると、腹部の氷は脆く折られた。

「糸鶴さん！」

サキが糸鶴に駆け寄り抱き上げる。内臓を切断されている彼女の体内を額の眼で透視し、慎重に治癒の術をかけ始める。

「お主……もしかして妾を……？」

「喋らないでくださいまし」

糸鶴が氣付いたとおり、サキは彼女を守ろうとした。糸鶴は詫びようとしたが、それはぴしゃりと遮られた。

「ずいぶん酷いことをなさるのですね、ササヤキさん、ナゲキさん

姿なき者への呼びかけ。否、俄に降り始めた冷たい雨と共に、二人の和服姿の女性が姿を現した。

「お久しぶりね、アカ、サキ。そしてはじめまして、チヨ」

* *

「コウティエンブ
紅帝炎舞！」

炎の閃きが駆け抜けると、アカの周囲が一瞬で灼熱と変わる。ボクはそれを岩の陰に隠れてやり過ごす。

それにもアカはすごい。もうこれだけ周りの建物がドロドロ

になるほどの炎と熱を生み続いているのに、力尽きるどころかいやまして燃え盛つてゐる感じだ。ボクはそろそろ疲れてきたのに。

これが彼女のツミへの想いなんだろうか。そう思つて彼女を覗き見ていると、アカの頭上で何かが融けて蒸発したのが目に入つた。

「 つ！」

直感的にバツクステップして立ち位置を変えると、一瞬前まで立つていた場所に鋭い氷が落ちてきて突き刺さつた。

そして、聞きなれない声。その声はアカとサキに再会を告げ、ボクに初見を教えた。

「まさか……生きていた　　いえ、生き返つたの！？」

驚愕するアカの視線の向こう、いつしか降つていていた雨にいち早く冷やされた瓦礫の中に立つ、まったく同じ顔の二人の女の人。

二人は同じ蒼い留袖を着ていて、髪も同じく短くて滄かつた。背はボクくらい高くて、胸はおとなしくて全身がすらつとしている。瞳は藍。ちょっと長い綺麗な顔に、浮かべている表情だけがちょっと違う。一人は憫笑。もう一人は物憂い。

対照とも言うべき雰囲気を纏うことに気付いたとき、ボクの頭の中でサキの物語りがよみがえり、一つの名を呴いたのはアカと同時だつた。

「「ササヤキ・ナゲキ」」

にっこり一人が笑い、一人は無表情に頷く。そして前者がまず名乗りを上げた。

「そう、私がナゲキよ。そしてこっちがササヤキ。私達はツミの手で蘇つた、全宇宙で最も月神に近い存在。今は月の子として、私がアクエリアス、ササヤキがピスシスの二つ名も与えられている。つまりね」

ナゲキは頷いてササヤキを促す。俯きかげんのササヤキは顔を上げ、ボクらを一瞥したあと毅然とした口調で言つ。

「私達はここにいるすべての人の敵としてここに来たわ。ツミの邪魔をする者として、あなた達すべてを排除します」

ナゲキが芝居がかつた仕草で両腕を上げる。その袖には、大きな口を開けて叫ぶ龍の絵が描かれていた。

「さあ、古き世界の立つ者達よ、蒼き刃の間近にいられる私に嫉妬しなさい」

3・2 「激突のはじまり」（後書き）

戦いを一つに分けたのがちょっと面倒でした。別にアカとチヨの戦いだけでも良かったのですが、糸鶴をなるべく活躍させてやりたかったのでこうなりました。

サキの散弾銃の形式はスライドアクション銃と言つらしいです。別に実弾撃っているわけではないのでコッキング（装填・排莢）は必要ないのですが……気分ですね。

キズオトが出てきませんね……。予定では第五幕まで待たないといけないので。間幕でも挟みますかな。

3・3 「光と水の懷古」

ササヤキとナゲキが現れたことで、戦いは新たな局面へと移行した。

まず糸鶴が撤退。サキの応急処置を受けた彼女は、一人の月の子^{ファイア}を前に口惜しそうに退いていった。

そしてアカがササヤキ・ネガイを標的に定め襲いかかると、ナゲキがこれに応戦。アカがナゲキに狙いを絞ると、ナゲキはチヨを巻き込んだ攻撃を開始し、三者入り乱れて戦闘を始めた。

残るはサキとササヤキ。両者は激突を繰り返す三名から距離を取り、静かな路地裏に立つて無言で向かい合つた。

闇の濃い路地裏の上には、蒼い月がかかっている。

サキは攻撃されない。何故なら先視を持つ彼はどんな攻撃も回避し、そこから反撃を可能としているからだ。そして同時にササヤキもまた攻撃されない。ササヤキはサキのような先視はできないが、彼を上回る術能力を持つため油断ができない。

その状態を膠着という。そんな中、サキがおもむろに口を開いた。

「相変わらずお美しいですわ、ササヤキさん」

「ありがとう、サキ。あなたもまだまだ可愛くて女の子らしいわよ
ササヤキの作る表情は意外に軽く明るいもの。儂い雪の頬笑み、
そうサキはほんやり思った。

「それで、どうなんですか？ ツミさんのお側にいらっしゃるとい
うのは？」

突然の問い掛け。单刀直入の問いか方は、思わずぶりな態度を好む
サキには珍しいものだった。

ササヤキは少し考え、おもむろに答え始める。

「そうね……まあ、だいたいはあなたの想像通りだと思うわ。私とナゲキはツミの側近として蘇らせられ、彼の傍にいることを常として、時には夜伽をする」ともある

それを聞いたサキはなおも問う。

「……かつて 天戸の宅^{あまとのやな} に暮らしていた頃、‘家族’と言いつつも何かと色事の多かつた私達の中で、ササヤキ、あなたは一番ツミさんと潔癖でありますわね。そのあなたが、今や私やアカをさしておいでツミさんの間近にいる。その気分とはどういうものですの？」

この問いに、ササヤキはやや不快そうに柳眉を逆立てた。
しばしの黙考の後、彼女は、

「それに答える前に、私からも一つ聞いても良いかしら？」「何ですか？」

ササヤキは一息吸い、問う。

「今こりうして私達は集つている。私達は生まれもその時代すら違うけど、同じ夢^{まぼろし}に集められ、そして散らばつた仲。^{ねえ、}何故私達のかしら？ たつた一つの夢に住んでいた私達は、それぞれが強力な力を持ち、今や私達七人で世界を回していると言つても過ぎた表現じゃないわ。 サキ、あの私達の住んでいた夢は何だったの？ 私達がこの世界の、特別、になってしまったのは、きっとあの夢に住んでいたせい。教えて、あの夢について」

二人は視線を合わせ、互いの思いを探り合つて見つめ合つた。はじめ感情の乏しかつたササヤキの瞳は今は雄弁で、対するサキの双眸は何も映しておらず、第三眼も冷えきつた光を湛えていた。

「ツミさんは何か仰つてまして？」

「いいえ。あなたに聞けど、ツミは言つたわ

ふ、とサキは吐息を一つ漏らした。しばし視線を虚空に投げやつたあと、彼はゆっくりとした口調で答え始めた。

「確かに、あなたの言うとおりあの夢は特異でした。まほろび天戸の宅とは、日神ひのかみを隠しその前に神々の集う天岩戸あまのいわとの事。そこにイザナミの名を持つ妖ネガイが住んでいて、彼女は天之常立神の宿る刀を持っていた。そして、家を取り巻くそれぞれの地形にも神の名が与えられていた。その他の事象も含め、あの夢は疑いようもなく何かの運命的なものに仕組まれた特殊な力の場でした。

しかし、私達わたくしがそこに集ったのは、結局は偶然といえるでしょう。特に、ツヨミさんとチヨ以外の私達は、ただ単に一人と共にいただけ。そして私達は一度散逸し、ここで各々違う立場と想いを持って集つてしているのです」

言葉をそこそこに打ち切つて、彼はネガイの遺した散弾銃を構える。その動きの意味するところは一つ。ササヤキもそれを感じて術の準備を始めた。

戦いは唐突に再開される。

「phantom star！」

立て続けに三度トリガーが引かれ、光の散弾が大量に撃ち出される。一帯を埋めつくす散弾は、すべてが同時に射線を曲げ全方位からササヤキに襲いかかつた。

『波打つ護り、美しく、光を散らして』

囁く声に応じ、彼女を水の膜が包む。無作為に反射された弾丸は、狭い路地裏の壁を削り欠片を飛ばした。

「 ぱん、と小気味よい音を立てササヤキを包むものが弾ける。その音とは対照的に無音で動く彼女は、サキに正面から肉薄し水の刃を叩き付けた。

「 今のシミと一緒にいる」とが、よもや楽しこうだと思つてないわよね」

斬撃に付加された問い掛け。サキは敢えて避けずに銃身で受け、それから身を回して逃げたあの銃撃で答える。

「 そうですの？ あの人行動に賛同できないのならば、あなたが諫めてさし上げれば宜しいことではありますな？」

水圧の弾丸が光を弾いてサキへ直進する。

「 私は戒めを受けているのよ。シミとナゲキから、彼に逆らわないように」

サキは水の弾丸を紙一重でかわす。コッキングで銃身の文字色を青に変え、極太の青の光砲を放った。

「 そしてあなたもそれに甘んじている そうでしょうか？ 別に恥じることではありませんわ。あなたはシミさんをほとんど弟のように考えていたのでしょうか？ 姉として、弟のわがままを許したくなるのは間違つたことではありませんもの」

ギチ、と奥歯をならすササヤキに苛立ちの表情。跳躍一つでメートル飛び彼の光砲をかわすと、落とせずにそこに留まった。

「 知つたふうに言わないで。私も、シミも、みんな苦しんでるのよ。あなたたって、そうじやないの？」

見上げるサキは、拒絶の意思を露に言葉を返す。

「 苦しんでいる、ですって？ 私は苦しんでなんかいませんわよ。^{わたくし} たとえ苦しんでいたとしても、それに甘んずる事はありません。ましてや、それに乘じて偽悪を行つなど、笑止千万ですわ」

一度目の光砲。表情を殺したササヤキが、それをよけずに受けた。貫かれる身体。しかし、飛沫するのは血ではない。

「まさかとは思いましたが……あなたも人であることを捨ててしまふとは」

「私は人を捨てたわけじゃないわ。蘇らせられたとき、更なる力を得るために仕方なくやつたのよ」

ササヤキの身体は水の塊だった。その肉体も服も、水を固着させたもの。形をなくし水となつた彼女は、嵩を増やしながらサキの頭上に降り注いだ。

路地裏に洪水が発生する。大海のような滄の水は、重圧で敵を圧し量で窒息させようとすると。

「brilliance jet . . . let , s fl y !」

地面に向かつて光砲を撃ち、その反動でサキは飛び。

彼を見上げた水面が、追つて無数の水の棘を射出する。

サキは散弾銃の推力を巧みに使い、鮮やかに宙を舞い攻撃をかわした。

「ところでササヤキ。あなたはチヨについてどこまでご存知ですか？」

形なき水が答える。

「ツミの飼い猫ということしか……。ああして今、人の姿でいるといふことは、彼女も妖なんでしょう？」

渦巻く水を見下ろして、サキは十三階ほどのビルの上に立つ。陣を展開させ高出力の術に備えつつ、サキは言ひ。

「まあ、あやかし妖と言えば妖ですわ。でも同じ妖だったネガイと比べ、チヨは非常に豊かな心を持っています。笑い、泣く、私達人間と寸分変わらぬ心。その上で、彼女は何かを信じ続ける心を、絶望せず、

向き合い続ける強さを持っている。 そう、遙か天にある月の魔力を司り所詮絶望するしかないツミさんと違つて、チヨは大地と語り未来を切り開く力を持つているのですよ」

滄い水面が驚愕に揺らめいた。

「まさか……あなたはツミを否定しているの……？ そして、チヨをぶつけて、ツミを……！」

「チヨをツミにぶつけたところで、血が流されることは絶対にありませんわ。 そう、でも確かに私はツミさんを否定しています。けれど、それは私が彼を愛しているからこそです。わかりますよね？」

しかしササヤキにはサキの姿勢が不可解であるようだった。否、理解を拒んでいるのだろうか。とにかく、彼女はその拒絶の意を、姿を禍々しい大魚に変えることで示した。

「意外と、あなたも曇昧な女性なのですね。 その盲目さ、その身をもつて償いなさい」

迫り来る大魚を眼前に、サキは銃口を天に掲げ術を完成させる。輝く術陣は空に巨砲を形為す。

下方を向く巨砲に宿るのは、水蒸気すら残さず分子レベルまで破壊する超出力レーザーの光。水そのものであるササヤキに効果的な痛手を与える為には、分子まで破壊する必要があるのだ。サキはためらいなく散弾銃のトリガーリードを引く。

巨大な光柱が天地を貫いた。

* *

ドオオオオオン。

轟く音はボクらから少し離れた場所からだつた。振り返れば、眩い光の中ビルが一つ崩壊している。あそこにはサキとササヤキがいたはずだ。

「まったく、離れるとすぐこれね。そろそろ、遊びも終わりかしら」そう言つのはナゲキ。彼女の言つのはササヤキのことだろうか。意識を澄ませて大地の情報網を使い周囲の状況を確かめると、ササヤキの気配がすごく希薄になつていて。大きなダメージを負つたのだろうか。ナゲキもそれを感じているみたいだけど、その割に彼女は落ち着き払つて、口元には冷たい笑いを浮かべていた。

「なに余裕がましているのよ！ 爆碎弾！」

ボールを投げる動作で、低空飛行するアカがナゲキに火球を放つ。あれは半径十メートルは吹き飛ばすやつだ。

「 燃えるなーー！」

突然、ナゲキが大声で叫んだ。

その瞬間、アカの投じた炎、及び周りに燻つっていた火がすべて消えた。

ボクらの戦場に限定して、炎のエナジーが凍結させられていた。一つ属性を完全封印する術はそう長くは続かないだろうけど、その短時間でもアカは無防備になつてしまつ。

「 っ！」

ナゲキがアカに躍りかかる。

突進するような動きをアカはすれ違つてかわす。交差の瞬間にナゲキの後頭部に拳を入れようとするがそれはフェイントだった。

「……かは」

ナゲキの左肩から生えた氷が、アカの胸を深々と突き刺して背中まで貫通していた。

貫かれたのは心臓、それともその近くの大動脈だろうか。一撃で意識を飛ばされたアカは、指先で空を搔いたあと力なく崩れ落ちた。

「アカ……っ！」

彼女に駆け寄ろうとするや、氷の檻が行く手を遮った。冷たい格子の向こうで、ナゲキがボクを嘲笑っていた。

「ねえ、チヨちゃん。あなたにとつてツミとは何なの？」

「ボクの『』主人様だよ」即答した。

「では、何故あの人逆らうの？ 矛盾しているじゃない。私達と共に来なさい。きっと、ツミは喜んであなたを受け入れてくれるわよ」

誘惑するような言葉。でも、ボクの想いはもう定められている。「『』主人様は間違ったことをしている。そして、自分のしていることを誰かに止めもらいたがっている。ボクのするべき事は、馬鹿みたいに彼に従うことではなくて、一緒に新しい道を探していくことだと思うんだ。だから、ボクはナゲキ達とは一緒に行けない。ボクは、ボクの力でいつか『』主人様に会いに行く」

「猫風情が、生意気な！」

彼女の言葉と同時に、氷の檻が棘を作り始めた。ボクを穴だらけにするつもりだ。

ボクは足の裏全体を使って、地面を踏みならした。ドン、と大地が応えて大きく弾んだ。

地震で檻が崩れたあと、ナゲキの姿はもう無かつた。

場が鎮まつた。

戦いが一段落すると、一帯に死んだような静寂が詰めかけていた。月は相変わらず蒼い光を、黒い天の中で皓々と放っていた。風は無表情に、眠気をはらんで流れはじめる。

アカは目を見開いたまま仰向けに倒れている。胸からはまだ血が流れてい、黒いスースを重くしていた。

「アカ…………大丈夫？」

大丈夫なわけはない。ただ、まだ彼女の命はあつた。ボクは彼女の身体をそつと腕に抱き上げ、大地の力を呼び出して治療をはじめようとした。

その時、聞き親しんだ声が警告してきた。

「彼女から離れなさい、チヨー！」

「何で…………っ！」

ぼ、と腕の中の身体が発火した。

おどろいてアカを腕から落とし立ち上がつたところで、熱い風がボクを突き飛ばした。

炎が風となる。力の抜けたアカの身体が浮かび上がると、炎風は空に駆けのぼり、そして

夜を碎いた。

突然の太陽。灼け付く白い光の中で、人の声が獣じみた咆吼をあげていた。

3・3 「光と水の蒙古」（後書き）

なんだかサキばかり戦っている気がする……。

言い忘れてましたが わざわざ言つ必要もないかもしれません
サキとナゲキの 月の子 の名前はそれぞれ魚座と水瓶座のことです。

あと一話になります。暴走したアカをどうチヨが止めるのが、ご期待下さい。

3・4 「大地の強さ」

「！」

天の焰と地の焰。呼応し合い、ひたすら荒れ狂う金色の影。

「アカは……いつたいどうなつてるの？」

聞けば大地は答えを送つてくる。けどあまりの量の情報が一度に寄越されてくるから、ボクの頭では捌ききれなかつた。

四方を炎に囲まれた土の上、辛うじて張つた結界の中で呆然としていると傍にサキが来た。彼も光の盾で身を護つている。

「知りたいですか？」

こころなし硬い表情のサキ。

ボクは彼を促した。

「つまり、アカの力は小さな火に限らない。彼女の火は太陽に由来するものだつたということです。普段は意識的にかそれとも無意識的にか、自分の力を固く封じてるので彼女の太陽の靈力が発動することはありません。けれど、生命に危機など緊急事態に陥り意識が乱れると、彼女の解放された靈力は暴走をはじめるようなのです」

生命の危機というか、さっきのは……

「アカはほとんど死にかけていた。でも今は元気そう。彼女は死なないの？」

サキの瞳に険しい光が宿る。

「死なない、と言うよりかは、死にづらいと言つた方がよいでしょう。火は根本を断たない限り火 자체を切つても搖らめくだけです。

そのように、火の属性とは暴力的な破壊生と復元性。そして、その上位としての太陽の属性は

「死と再生。昇つては沈む太陽の巡りと同じ」

アカの咆吼が途絶えた。

降り注ぐ、太陽の光と共に、たつた一人の女性の憎悪が熱い。一人の人間がこれほどの力を持ちうるものだろうかと、ボクは半ば感心しつつ思った。

真っ白な炎天の中心に、彼女は大きな金の双翼を羽ばたかせ留まっていた。高さは五十メートルほどだろうか。見上げると首が痛い。そのまえに眩しくて眼が痛い。

太陽を背にして、彼女は憤怒を込めて下界を見ている。

「まずい……アカはここいら全部を火の海にする気だよ」

そう、あの高みから見渡せるすべての範囲が彼女の攻撃対象だ。額面通り、今のアカに見境はない。

「力に溺れた者はすべからくああなるものですね。……逃げますわよ、チヨ」

「ええ！？　だめ　絶対だめ！」

ここいらは、ついさっきまでご主人様の支配していた夜の境界、その端のほうだった。ちょっと行つたところには、何も知らされていない人達が暮らしている。

「彼女を放つて置いたら、きっと何も知らない人達の街を襲つてしまつ。

それにあの炎に焼かれたら大地そのものが大変なことになる……夢が帰つてきているせいで現の大地の力は弱つてゐるから、最悪何百年も草一本育たない場所になっちゃう。ボクは、大地に力を借りるものとして、そんなこと許すわけにはいかない」

「サキはサキと向かい合つた。

「サキ、ボクはここに残るから、サキは逃げて。……正直、できるかどうか自信ないから」

「わかりました。終わりましたら迎えに来ますわ。ですから、死なないでくださいまし」

ふいとサキは踵を返し、ボクに顔を見せずに行ってしまった。恐いのだろうか？ ボクの恐いけど、それ以上に、アカをなんとかしなければと言う想いがボクを踏みどどまらせていた。

天に昇ったアカの方を見る。

太陽の靈力を、暴走状態とはいえ行使する彼女は力の大きさだけならツミに匹敵する。対して、ボクはまだまだ大地の力を使いこなせない。力の差、互いのいる場が天と地に分かれていること、術者としての位の差。そういうものがボクの力を彼女から遮る。

ボクはアカを倒すことはできない。

ボクにできることは一つ、彼女の力と想いを受け止めること。足を肩幅に開く。すでに熱によつて砂となつてきた地表は、足を滑らせるとザリと音を立てる。

大地の力が変化している。

地殻の内奥に蠢くマグマが、アカの力に呼応して騒いでいる。攻撃的な大地の力。でも、ボクの必要とする力はそんなものじゃない。

「『大地、其は搖るきなきもの』」

昂ぶり続ける大地を抑える一言。

「『大地、其は盤上なるもの』」

攻撃に備え防御力を高める。

「『広き大地、力強き腕はすべてを受け止める』」

そしてこれが本命の言葉。

けれど、昂ぶりを止めようとしない大地はボクの望む状態にはなつてくれようとしている。

なら、ここからは術を使う。

「『我と絆結びし大地。我が声に耳を傾け、我が命に従え……！』」

術とは、自身の制御下に置いた存在の力行使すること。言うなれば、術のパワーソースは自分より下位の存在と見なされる。でも、ボクと大地の関係はそうじやなかつた。ボクが命令しなくて、大地は想い一つで応えてくれた。

けど今ボクは大地を術の対象とした。そのことに大地は驚き、微かに震えはじめていた。

「お願い、力を貸して。代わりに、ボクの命を取つてもいいから」

戸惑い、同情、理解に貪欲。様々な大地の思いがあつて、しかしそれらすべてがボクに向かられて一つになる。そうして、ボクの準備は整いはじめる。

ボクはアカに呼びかける。

「アカ！ ボクはアカを受け止めてみせるよ。でも……でも、できるならアカとは戦いたくない。力をぶつけ合つても想いは伝わらないから。ボク達は戦う前に、話し合うとかできることがあると思うんだ」

ボクの言葉は地面の震動に増幅されてアカに届けられる。アカは反応した。うるさそうに、地上を見下ろした。

滅びろ

音ではない言葉。言葉は火の矢となり、地面に降つて爆発した。

「 つ！」

半径200メートルに及ぶ大規模な爆発。爆心はボクではなかつたけど、範囲内には入っていた。衝撃はとっさのバリアで防ぐけど、その一秒後には息つく間もなく次の爆発があった。

滅びろ

滅びろ

滅びろ

爆発の連打。それは時に全然遠い場所でも起きる事があるけど、多くはボクをのみこんでいる。

地面が揺さぶられ、削られていく。巻き上げられた土砂は爆発に翻弄され、終には地面に変えることなく融けて蒸発してしまるものもある。荒れ狂う嵐のような爆裂の中、バリアを張つて必死に耐える。

だけど、アカの力はまだまだこんなものじやない。彼女の本気を引き出すべく、ボクは大地の怯えをなだめつつアカに再度呼びかける。

「ねえ……アカは何がしたいの？　ただ復讐したいの、ツミに？」

復讐に何の意味があるの？　暴力だけじゃツミにたどり着けない。激情だけじゃ、大切な人に想いは伝わらないんだよ、アカ！」

「うるさい！　あんたなんかに、何がわかるのよ！－！」

それは理解を拒む言葉。

アカは狂っている、そうボクは思う。そして同時に、彼女はただの泣いている少女なんだとも。

彼女は恋した人に捨てられ、泣くだけの少女。それから彼女にとって五年経つたけど、時間の経過は身体を成熟させただけで心には届かなかった。宇宙とか、世界の在り方とか、そんな大きなものが

彼女の心から慰めの時間を奪つたんだ。

「 その炎こそ始原の焰。万物生滅の権、すべてその焰にあり。
焰の力、我にあり！」

何より、あの燃える力こそアカを苦しめている。彼女の視界を遮り、激情を駆り立て続ける炎。

「 大地よ、其は碎かれぬ忍耐と慈愛もて己が上のものを支えるもの。ならば大地、絶対不屈の力、我が命の氣と引き替えに与え給え！」

「 受け止めるよ。

ただ、かわいそだだから。誰も慰めることのないアカを、ボクが抱き留めてあげる。

「シカイシヨウメツヒオウジン
四界消滅緋王塵！－！」

。。。

*

あとになつても、あれは何だったのかと思つ。

アカの攻撃に包まれた瞬間、ボクは抗うことなく白い流れに呑み込まれた。

それは炎ではなかつた。炎にしては熱すぎた。

それは熱ではなかつた。熱にしては眩しそぎた。

それは光でもなかつた。光にしては苛烈すぎた。

それは力。純然たる神秘靈力。清流のように澄んでいて、風のよう
に軽やかな暴力。

何もかも白い世界。そこに、何もなかつた。光のような熱のよう
な炎のようなものの中、ボクだけが在つた。
何もない。立っていた大地さえない。

アカはどうなつたのかな？

ちゃんと彼女を受け止めてあげられただろうか。
どうでもよくなつてきた。何しろ、ここには何もないのだから。
これが滅び。一切の消滅。ボクも、すべてと一緒に消えていきた
くなつた。

「 それがあなたの願いですか？ チヨ」

聞き親しんだ声、今は聞けないはずのネガイの声がボクに呼びか
けた。

そして、答える前にさらに呼びかけがあつた。

「あなたは、自分が誰のものか忘れているようですわね」

「……ボクはご主人様のものだよ」

その中性的な声は、ボクの所有を要求する。

ボクはそれが嫌だけど、そんな偽りのない彼が好きだつた。

「 サキ」

*

白い世界のあとは、包み込むような薄闇があつた。

身体の下には地面があり、ボクは大地に横たわりながら膝枕をさ
れていた。

「サキの力つて、光だけじゃなかつたんだ」

問いかけると、彼の手がボクの細い髪を撫でた。

「ネガイから受け継いだ、本当のものです。あの散弾銃は、ほんの見かけ倒しですわ」

一息。

「でも、本当は恐かつたんです。ネガイのくれた力は底知れないもの。わたくし私に扱いきれるか、心配だったのです」

でも、と逆説の詞。彼の気配が笑う。

「あなたは自分の力を恐れない。いつも目を反らさず、対話を続けている。だから、私も見習おうと思ったのです。そして、大地は闇と共に在るものです。なので、私もそのようにあるうと決めました」

サキはボクの手を取つた。小さくて、やわらかい手。

身体を起こして向かい合つと、薄闇の中彼の双眸の天色がよく見えた。

「ありがとう、サキ。でも、いいんだよ。大地はその内に闇を持つけど、その表はあたたかい光に温められている。だから、サキは闇と光どっちでも、サキの思う形でボクと共に在つて」

サキが照れたように顔を伏せた。珍しいことだ。

その瞬間、闇が消える。

ボクは二つの光を見た。一つはボクらを包む、優しい春の日差しのような光。もう一つは、その向こうにあるすべてを焼き尽くす焦熱の光。

大地はすでに大きなダメージを受けていた。けれど、今はサキの影から流れ出す闇に覆われて保護されていた。そして大地は自らの再生を後回しにして、ボクに力を送り続けてくれていた。

「ごめんね、みんな。これが済んだら、好きなだけボクの命の力を取つていいから」

しかし、大地は要らないと答えた。これからも力を合わせていこ

うど。

「……うん！ ボク頑張るよ。一緒に、頑張ろう」
大地が奮起する。目に見えないエネルギーの流れが渾々と湧きだし、足の裏を伝わってボクに流れ込んでくる。

「チヨ、アカの力を受け止めるのは不可能です。そして、無意味です」

黒い服の彼が言った。ボクはその真意を尋ねた。

「彼女は自分を見失っている。今の彼女にしてさし上げるべき」とは、それこそ自分と向き合わせて自らが何をしているのか自覚させること。そして、正気に戻れと殴りつけること。はつきり言つて、あなたのしようとしていることは単なる甘やかしであり偽善ですわよ、チヨ」

「偽善……」

サキはほほえむ。少し寂しそうに。

「あなたの人の好さ、優しいところは素晴らしいことです。私だって、できればアカを抱きしめて慰めてあげたい。それをしようとしたあなたの心意気、勇気は褒められて然るべきです。ですが、今それをする事は不可能なのです、チヨ。私達の力では彼女の力を抑えることができない。悔しいですが、現在の私達では彼女を抱きしめてあげられないのです。だから残ることは一つ。……理解してくださいますか？」

非情なものの考え方だと思った。でも、サキの言つことに反駁する事はできない。ボクの力は弱すぎる。

「……うん、わかった。でも、あまり酷いことは嫌だよ」

「ええ、同感ですわ。アカは私の友人なのですから」

彼と笑みを交わすことができた。大丈夫、なんとかできる。そう思えた。

「『鏡となれ大地よ。地上にある全ての事象を映す、曇りなき鏡に』」

「Light is energy. I reflect energy, as I am a person who can operate light」

（光は力なり。我、光操る者として、力を跳ね返す）

大地が鏡面化しそこにサキの力が加わり、あらゆるエナジーを跳ね返す盾となる。

二人の力を一つにして、アカの力を跳ね返す術を発動させる。それは、重いものを押し返す感覚に似ていた。

「いつつけ　！」

地から天へ、反射された力は光の塔をなし全てを貫き通す。空が震えた。

3・4 「大地の強さ」（後書き）

サキの心情がいまいちはつきり描けていない気がします。私自身、彼の気持ちを理解しているのかしていないのかはつきりしません。戦闘はどうだったでしょう。アクションが少ないので、もつと壮麗で派手なイメージを喚起できる表現にしたいものです。次回は二・三日後に提出します。

3・5 「もう一度」

決着のあと、空はもう白くも黒くもなく、晴れ晴れと青く澄み渡つていた。

大地は熱に焦がされた跡で、それこそ白かつたり黒かつたり。ところどころに爆発に抉られた深い穴があつた。ボクが再生を促すと、穏やかに振動を始め少しづつ慣らされはじめた。

「アカ……」

天空から撃墜された彼女は、一糸纏わぬ姿で地面に倒れていた。大地は墜落の衝撃を和らげてくれたようで、彼女に打撲系の傷はない。彼女の負傷は、所々の火傷、靈力の過剰消費による衰弱、そして

「髪が短くなつてますわね。 私と初めて会つたときから、ずつと長いまま保つていらしたのに」

短い髪のアカは、少し小さくなつたように見えた。泣き疲れて眠るような顔。やっぱリアカは、火を繰り戦う 漆黒の守護者 などではなく、大好きな人を追い続ける一人の女の子だと思う。

「大地……アカを癒す力を分けて。みんなを傷つけてしまつた人だけ、ボクは彼女を許してあげたいから。 アカは、ちょっと一生懸命になりすぎただけなんだよ。だからみんな、アカを許してあげて」

大地はボクの言葉を聞き入れてくれた。深く豊かな大地の力が、アカに惜しまれることなく流れ込みはじめる。

「……ありがとう、みんな」

どういたしまして、と大地。大地は笑っていた。
徐々に癒えていく地面。風は颶々と吹き渡り、日差しは穏やかで暖かい。盛り上がってきた黒い土が、その熱を吸收する。

世界は優しい。

静かに立つていれば、世界はこんなにも穏やかな顔を見せてくれるので、人々はせわしなく動いては波風を作ってしまう。

「ちょっといいですか、チヨ」

サキが腰を屈めて、座り込んでいるボクに話しかけた。

彼の両手には、彼が着ていたマントがある。

「えっと……もしかしてそれを？」

「はい、アカに掛けたさしあげようと思って」

「でも、それってネガイがくれた大事なものなんじゃ……」

「いいえ、と朗らかに笑いつつサキはアカの素肌を黒いマントで覆う。

白のYシャツに黒いスラックスという服装になつたサキ。しかし彼が自身の影に手をやると新らしいマントが手品のように引き出された。

「替えがあるんだね……」

ちょっとと気抜けして、タハハと笑いが漏れた。サキもボクと一緒にくすぐす笑つた。

と、歩いて近づいてくる足音が聞こえだした。剣を佩している男の人だ。ゆっくりと近づいてくる姿に、敵意は感じられない。

「私の名は名塚・鷺累。^{なつか}^{しづる} 漆黒の守護者 の代表、氷室・紅鳥の上司として彼女の身柄を取りに来た」

黒いスーツのような装甲服に包まれた身体はそんなに大きくない。歳も二十代後半くらいでまだ若そつて見えるけど、声はとても厳つくゴシゴシしていた。

「それは」「寧にどいつも。チヨ、治療はどうなりました？」
皮肉つぽく鷺累に言つた後、サキはこちらを見た。

「う、うん……」

ボクはア力を横抱きにして立ち上がる。ボクよりも少し背の高い
鷺累にア力を差し出すと、彼は無言でア力を両腕に抱き取つた。
そして沈黙。重い空気がボク達の間に立ちはだかる。
まず口を開いたのは鷺累だった。

「今のところ、私達が敵対する必要はない。だが、漆黒の守護者は
いずれお前達を排除する。私達は千人いるかいなかの小さな組織
故、お前達のような不確定要素を放置したまま戦う余裕はないのだ」

それに答えて、サキがにやりと悪つぽく笑つた。

「上等ですわ。いつかの戦い、楽しみにしています」

鷺累はそれ以上何も言わず、くるりとボクらに背を向けた。そのまま立ち去ろうとする彼に、ボクは言葉を投げかける。

「ねえ、漆黒の守護者は月の子を殺しているんでしょ？
ボク思うんだけど、やつぱり殺し合つのは良くないよ。だって、そ
んなことしても誰の想いも慰められないもん。戦いは、どちらかが
倒れきるまで終わらないよ」

彼の足が止まる。返答は肩越しによこされる。

「私達は慰安の為に戦つてゐるわけではない。潰し合いになるのなら、それで結構だ。漆黒の守護者は世を乱すものを排除する、それだけだ」

なんの感情もない、合理的な物言い。

ボクは言つ。

「だったら」

「そう、お前がなんとかしる。平和的な解決法など、自分で探すことを。だがお前が動けば必ず私達は対峙する。その覚悟はあるのか？」

ある、とボクは断言した。

「ならば、また会おう、大地の守護者 チヨ。迷いのない拳で、私達を打ち倒してみる」

「うん、もう一度。その時こそ、アカを抱きしめるから 鶩累の横顔が微笑した。

彼は歩いていく。ほぼ修復された真っ黒な土の上に足跡を残して。「ああ……やつと終わりましたわね。随分と長い戦いだった気がしますわ」

「これからも、こんな戦いがあるんだろうね」

アカ、ナゲキ・ササヤキ、糸鶴じづるに鶩累しづうら。ボクらはそれぞれを敵と見なし、泥沼のよつた戦いをはじめよつとしている。

ぽん、とボクの肩をサキが叩いた。

「まあ、頑張るしかありませんわね。私達は一人なのですから、問題ありませんわね」

ボクは力一杯頷いて答える。

「うん……！ 行こう、サキ。」主人様の ツミのところへ「まずはキズオトちゃんに会いに行きましょう。彼女の力も、運命も、私達の勝利の為に必要なものですから」

サキとボクは互いの手を取り合い歩き出す。

陽は高く、西の地平線に白い月。

乾いた疾風が、ボクらを鼓舞するように吹き抜けた。

3・5 「もう一度」（後書き）

鷺累君が登場しましたね。あんまり出番がなさそうな予感がします。一人を除いて、役者は揃いましたので、第四幕をインターバルっぽくして第五幕からはいよいよ核心と行くのでしょうか。（質問調ですね）

私生活ではテスト前で、レポートも課せられたのに調子が上がってきている感じです。北の大地は気温も上がってきたし、頑張つていこうと思います。

4・1 「紅色走馬燈」

私が持つ一番古い記憶は、赫い。

それは揺れる影、踊る熱。血ではなく、血すら燃やしきへしてしまつ炎の色。

何故燃えているのだろう?

それは私が放火したから。

どうして私は火をつけたのだろう?.....

「須藤さーん、お待たせしましたー」

*

年若の男、まだ少年と呼べる男が私の苗字を呼びつつ走ってくる。往来で大声を出すあたり行儀がなってないが、走る姿は軽やかでどことなく優雅だ。

季節は夏。巷を熱い風が吹きぬけ、耳を澄まさずとも蝉の鳴き声が聞こえる季節。まぶしい光の中、白く輝くワイシャツを彼はさつぱりと着こなしている。

そして彼は私の前で立ち止まる。はあはあと息を切らすことなく、一息で静の状態へ入る様もなかなか良い。

しかし

「すみません、須藤さん。父がなかなかしつこくて」

「……どうして敬語を使うの? それに、私のことは名前で呼びなさいと言ったわよね」

私が咎めの気持ちを前面にこめて言つと、彼はやたら嬉しそうに破顔した。それにもない、私の目線とほぼ同じ高さにある琥珀色の瞳が細められる。

「それは、僕が謝つているからです。僕が謝つている限りは須藤のほうが身分は上。須藤さんはそういうことはつきりさせないと怒りますからね」

「……あんたは別の事で私を怒らせたわ
彼の表情の変化を見る前に、彼の優面に拳を叩き込んだ。手加減はない。彼は顔を抑えて一・三歩後ずさった。

「い、いたあ！ 痛いよ、××！」

彼が私の名を呼ぶ。しかし、回想の中でその音は聞こえない。
「もつと殴つてもいいのよ、」

私の口から出た彼の名も、私の耳に届かない。
彼は身をすくませ言つ。

「結構です」

「ふん 行くわよ」

私は彼に先行して歩き出す。と、背後で彼の声が聞こえる。

「今日も怒つた顔が良い……」

「何か言つた？」

いいや、と彼は言葉をにじらせる。そして、長い赤のワンピースを翻しながら早足で歩く私に追いすがり、横に並んで彼は話しだす。

これは、そう、今は氷室・紅鳥と名乗る私が現に生まれて十八回目の夏の話。私は華族でもある裕福な家に生まれ、結婚を先延ばしにしつつ気ままに生きていた。

私とともにいる彼は、農家の実家と理系大学を行き来する貧しい学生であった。知性は人並み以上だつたけれど、所詮庶民である彼は、本来ならば私と口を利くことすら憚られた。

時代は昭和の十九年。神の風が吹き荒れる狂氣の夏。私は許されざる恋をしていた。

*

回想が途絶え、私は夢から覚める。

目覚めた場所は、すべてが灰色の部屋。灰色の寝具、灰色の天井、カーテンも灰色で仄明かりすら灰色だった。

「紅鳥、目が覚めたかや？」

私のベッドの横で、漆黒のガウンを着た糸鶴^{しゆる}が椅子に腰掛けている。私を見ていたのだろうか。

「水を頂戴」

「相変わらず偉そうじやの」

彼女は立ち上がり、近くの棚に置かれていたピッチャ―からコップに水を注いだ。

ほれ、と水は差し出された。喉が渴いていた。勢よく飲むと、口から水が溢れ裸の乳房の上に零が落ちた。

その感覚で、無意識に視線が下に引き寄せられた。と、そこにあるものを見た。

「何？ この黒い布……」

灰色のシーツの下で私の身体を覆う黒い布。厚めの生地だがつやがあり軽いそれは、手に取つてみるとマントであることがわかつた。「サキがくれたそうじゃよ。鷺累殿が言つておつた。妾がはがそうとしても、お主は嫌がつて放そつとしなかつた」

「私が……？」

サキのものだというマントを手に取り見る。私の胸の中に、思慕にも似た得も言われない感情が湧き上がってきた。

「……邪魔だわ。…………私のロッカーに入れておいて頂戴」「あいや、心得た」

糸鶴は黒のマントを小さくたたんで膝の上に置いた。そして、私をじっと見つめはじめた。

「何？ 何か言いたいことがあるの？」

私が視線を返すと彼女の緑の瞳が一瞬揺らいだが、しかし彼女は私を凝視しつづけた。

「一つ、尋ねたいことがある」

わざわざの前置き。

「だから、それは何って聞いてるの。殺さないから言ひなさい」「私は瞳にさらに強い力を込める。だが、糸鶴も目を反らさない。まるで飼い主に挑む犬の瞳だ。

「お主は、何故あの男、ツミに惚れたのじゃ?」「にらめっこで先に目を反らしたのは私だつた。

灰色のシーツに目を落とすと、先程の夢が私の脳裏に去來した。「ツミは……私の初恋の人に似ているの」

糸鶴が呆気にとられた声で言つ。

「初恋……。お主にしては、いやにセンチメンタルな名詞じやな」

「そうね。もう、四十年位前のことかしら。現では六十年以上前ね。夢まぼろしに行くと現での記憶がおぼろげになるし、現に戻つてきてもそれは元に戻らなかつたから、もう彼のことは名前すら思い出せないけど。

ツミと彼はよく似ていたわ。甘い顔、やわらかい声に華奢な指。瞳の色すら、二人とも珍しい琥珀色だった。振る舞いも、好みも。二人とも、私が怒っているところを見ては秘かに喜んでいたわ」

「ついえば、彼は私の肌を見ることはなかつた。

眼を閉じると、走馬燈は再び流れ出す。赫い記憶。揺らめくところはまるでパトランプのようで、私の胸を懐かしさと不快さで搔き乱す。

*

一夏の恋とは、一夏に終わるもの。

疎開先であつた私の家のある村の、その近辺に空襲があつた残暑の候、私の恋人は赤紙を受け取つた。

「今まで無かつたのが不思議なくらいだからね。やつと来たか、ぐらいな物だよ」

まるで他人事のように、飄々と彼は言った。

私は自分の頭に血が上るのを感じた。

「なに冷静に言つているのよ！ 死ぬのよ？ 恐くないのー？」

彼はにこやかにかぶりを振つた。

「恐くはないかな。恐がつても無意味だし。 それより、もう君に会えなくなる方が寂しいよ」

彼は私の顔に手を伸ばす。覚えず流れていった私の涙を、彼は指ですくい口に運んだ。

「僕は君のことが大好きだよ。良くなきらないけど、愛していると言つてもいい。 もつと君のことを好きになりたかった。でも、

それはもうかなわぬこと。それが、哀しい

しかし彼はほほえんでいた。

私は言葉を失つた。けれども必死に彼の言葉に答えたくて、ついにはこんなことを言つていた。

「抱いて。最後なら……私を抱いてよ」

彼は両腕を私の腰に回し、唇を重ねた。貪るような、情熱的な口づけだつた。

しかし、彼は私の耳に囁く。

「君と寝ることはできない。別に君に誠実さを示したい訳じゃないけど、僕は君を抱くことができないんだ。まだ、自分の気持ちが良くわからないから。……そのまま君を抱けば、ただ君を汚してしまう気がするから」

私はその言葉を拒むように、彼の胸を押して自ら離れた。

「私の気持ちは 私の想いどうなるの？ あんたはそんなお綺麗な想いのまま死ねばいいのかもしない。でも、私は……！」

搖らぎはじめた私の視界の中、彼の瞳は静かに私を見つめていた。自分の言つたことに一切の不安も不満もない、そう視線は語つていた。

「ごめん というのは卑怯かな。でも忘れないで欲しい、僕にとって一番大切で恋しい人は、君だということを」

私はその言葉、声と息づかいすら未だに憶えている。

* *

そして彼は戦火に散つた。

彼の死亡通知を、私はわざわざ彼の両親を訪ねて確認した。彼の両親及び姉妹達は、華族・須藤の姓を持つ私が来たことに驚きを隠さなかつた。

通知には、彼が、見事に、敵空母に突つ込み大破させたとあつた。

それからしばらくの間、私は部屋にこもりきりになつた。気持ちを整理する時間が欲しかつた。あの時の私はそれなりの冷静さというものを持つていた。私は死んだ者ことをいつまでも引きずつて生きるのは止めようと思つた。

私の両親は、私が自身の家柄とまったく不釣り合いな庶民の男と付き合つていることを知つていた。それは私の両親がこの恋が一時

の物であると思つたからで、事実その通りであつたが、しかし私がなかなか立ち直らないのを見て俄に焦りはじめた。いくら私のわがままを許していた両親とはいえ、やはり私がいつまでも婚姻を結ばないのは家の評判に響くと思つたのだろう。

ある夕刻、晚餐を前にして女中に呼び出された私は、屋敷の中に見知らぬ男がいるのを見た。中肉中背、スタイルは悪くないがにやけ顔の不快な若い男。

私の許婚だつた。両親は、明後日の吉日に婚姻するよう命じた。世界が息吹を失つた。しかし私は、自分の運命を無感動に受け入れた。

許婚は晚餐の間中、私にしきりと話しかけていた。金持ちにありがちな、蒙昧な男。話すことは自分の思い出と自慢ばかり。これの妻になれば碌なことにならないだろうと思つたが、いまさらどうする気も私にはなかつた。華族の家に生まれた者として、避けられざる事なのだから。

だが私は、許婚が婚姻を待たずして肉体関係を迫つてくるとは予想することはできなかつた。

それも私がすっかり眠り込んでからのことであつた。寝起きで力の入らない私をやすやすと押さえ込み、強姦するように私の処女を奪つた。

氣絶し、目覚めた。内股に残る白い精液と赤い血液を見たとき、心の中にはじめて憤りの想いが、そして故人への恋慕が湧き上がつた。

滅びてしまえ、なにもかも。

私は、生きている理由がないのに生きていられる人間じやなかつた。

そつと寝室から抜け出し、物置へと向かつた。この夜、不思議と

ただ一人の女中もおきていた。

灯油を持ち出し、ありつけ屋敷の壁に沿つて歩いて歩いた。屋敷は大きいし油の量も半端ではなかつたが、体力のある私にはそう難しい仕事というわけでもなかつた。

屋敷を一周すると残りの灯油を一斗缶に詰めて、玄関から私の部屋まで万遍なく撒き続けた。そうして部屋にたどり着くと、用意していた松明に火をつけて窓から投げ捨てた。

火はあつという間に広がり始めた。屋敷を包囲し、玄関を破つて侵入した赫い猛威に、狂乱する家の者たちの声が聞こえた。

死は怖くなかった。火がいよいよ私の部屋の戸をなめたとき、私は開放感から知らずとほほ笑んでしまうほどだつた。

*

「だが……お主は死ななかつたんじやな」

糸鶴が言った。

そのとおりだつた。わざわざ言つまでもない、わかりきつた事。

私はあの時、火炎の中から夢まほろへと飛ばされ、以来四十年近くサキ達と暮らしぷしと出会つた。そして夢を去りまた現へと来た。しかし、このことはいまさら語る必要もないだろう。

「……妾が、なぜ今になつてこの事を訊ねたか、わかるかや？」

簡単な質問だつた。

「私が負けたからでしょ。私の……私の狂気がどこに由来するのかを、今まで知りたくてしようがなかつた。でも」

「聞けば、お主の心は揺らぐ。聞いた者を痛めつけるか、自分を痛めつけるか、どちらかじやつた。妾も故あって月の子を狩る者。いたずらにお主を惑わせて、こちらの戦力が低下する事は避

けたかつた。　じゃが、今となつてはその気遣いもない。むしろ聞くべきときであったと妾は思う。お主が、敗れた戦場にまた挑むために「

言い終えると、糸鶴は席を立ち部屋に私一人を残して去つた。

私の心は脆く弱い。

根拠もない一つの感情に身をやだね、私は戦い、狂い続けた。私は狂女だつた。そして、狂つた刃は鋭くとも、脆かつた。

私がツミに焦がれたのは、初恋の男に似ていたのが第一の理由。けれども私は、ツミと過ごした三年間、いちいちその事を思うことはなかつた。ただひたすら、幼い少女のように私はツミに恋し、彼は黙つて私を受け入れた。

何の為に戦つっていたのか。何の為に想い続けていたのか。それは変わりゆく世界に無関係で、ただ私個人のためだつた。この世界がどうなるうと、知つことではなかつた。

しかし、その想いもくじかれた。今は言葉通り、「燃え尽きた」といった気分。憎しみも、子供っぽい恋も、天上にある蒼月に届きはしないのだと悟らされた。

する事もないので、ベットサイドに置かれていた灰色のローブを着て部屋を出た。あまり憶えのない建物の中、適当に歩いていると談話室に着いた。そこに一人の男がいた。

「おお、火巫女^{ひみこ}殿。お加減はよろしゅうか?」

漆黒の守護者の一人である魔術師。彼は日本人だが、所属は日本ではない。……まあ、こいつのことはどうでもいい。

「鷲累。手合させして頂戴。身体がなまつたから」

黒髪黒眼のもう一人の男は、今は普通の黒いスーツを着ている。

だが、黒ずくめな雰囲気には人を威圧する物がある。
「……わかつた、支度するか」

4・1 「紅色走馬燈」（後書き）

メインヒロインであるアカの、初めての主観文です。

思い出話を考えるのは結構楽しかったです。もっと書いても良かつたのですが、あまり長くてもだらだらするような気がして止めました。

第四幕は戦闘があまり多くないかもしません。湿っぽくならないように気をつけます。

4・2 「絶えない炎」

漆黒の守護者 日本支部は、東京のむる高層ビルの上階二つを占領している事務所だった。

漆黒の守護者 とは、現の人間が一般に知つてゐる、科学、の範囲外にある神秘現象を処理する国際組織 SEME の下位組織。現在世界を騒がせているツミとその配下である 月の子 に対処する為に、四年前に 漆黒部隊 は組織され、その中の戦闘部員が漆黒の守護者 と呼ばれていた。

守護者は世界に百人前後いる。月の子が八十八人のはずだから、頭数としては足りている。しかしおは月の子の他に、異形、を無数に従えているので、守護者は手が足りていない状態である。

日本には私を含めて七人の守護者が常駐している。しかし、今私がいる広い事務所には、私、糸鶴、鷺累、の三人しかいない。他の四人は滅多にここに立ち寄らない。

そんなわけで、屋上にある模擬戦場は使いたい放題。私と鷺累は現代魔術学の粹を集めて作られた黒の制服に着替え、結界に覆われた縁の空の下で向かい合った。

「剣、か。 手合わせといつより稽古になるな、これは」

鷺累が私の手にある物を見て一言。

私は武器として剣を持っていた。全長八百ミリメートルの反りがない片刃で、重さを一キロクラムに抑えた軽い剣。実戦にはあまり向かないだろうが、剣技の経験値が低い私にはこれくらいしか持てない。

「……たまにはね。接近戦闘をやううと思つたの」

時々訓練していたものの、私は近接戦闘はからきし駄目だった。炎を操る力があるので、それに頼りすぎていたせいもある。

鷺累が構える。無感情な視線が私を捉える。

彼の獲物は刃渡りだけで一メートルある直刃の剣。

「行くぞ……！」

一の太刀の動作は日本剣道にある正眼の面打。小細工はない。風を切る斬撃を、私は身体を右にずらしてかわす。その動作のまま、右の袈裟切りを放つ。

鷺累の剣が私の剣戟を迎撃つ。速い。まだ振り下ろしの半分も私は行つていない。

剣と剣がぶつかった瞬間、手首に強烈な衝撃が走つた。

剣を落としそうになるのを堪え、私は後退した。腰を落とし、横

一文字の斬撃を放とうとする。

だが、剣を右に溜めたときには、目の前に剣を突きつけられた。

勝敗が決した。

「未熟者。俺の剣を受ける腕力がないくせに、動作が遅くては話にならん。これ以上続けたいのなら、竹刀を持ってこい」

見下しの一言。だが、今の私に反駁する余地はない。

名塚・鷺累は、私を除いて、漆黒の守護者 の中で最高の戦士だ。殊に、武器を使うことでは私が敵うはずもなく、模擬戦にしろ術を使わないことには、彼の言つとおり話にならなかつた。

目の前から剣が下げられる。私は苦い思いを噛みしめながら剣を鞘に収めた。

「負けを認めるのか？」

「負けたままでいいのか、火巫女 殿

？」

挑発されていた。普段なら炎を呼び出して鷺累を吹っ飛ばしているところだったが、今私はせいぜい睨み付けるだけだった。

「……次まで憶えていなさいよ」

「そうさせてもううよ」

「こちらの精一杯の強がりに、彼は飄々と答えた。

私は驚異の視線の下を通して、模擬戦場を後にした。

*

事務所の中をあてもなく歩いていると、ビニからともなくギターの奏でが耳に入ってきた。クラシックの曲。

旋律が流れ来る元は、広い事務所の中の糸鶴の私有スペースにある音楽室。糸操る糸鶴は、己の能力に合わせてか数多くの弦楽器をたしなんでいる。

現代に言われるクラシック・ギターよりも弦長の短い古風なギターを使って奏でられるのは、十九世紀のスペインの作曲家ディオニシオ・アグアートの難度の高い曲。

高度な技巧で演奏される軽やかな旋律に耳を傾けつつ、私はドアの影に座つて考え方をすることにした。

例えば、糸鶴との出会い。

ツミと離別し現に来た私は、当然のことながら、変わりきった日本と世界に困惑した。

困惑した、と言つても、別に訳もわからずあちこちで暴れ回つたわけではない。私にも分別という物はある。食い扶持がないのでそちらの柄の悪そうなのを脅して金を巻き上げたり、古い服を着ている私をなめて釣り餌をこまかした店員を殴つたり……そんなところ。

現状として、ツミが夢を降着させ占領した土地は現全体で一割ほど。それもここ一月で急に増えたので、巷ではもはや、異世界、からの侵略を各国政府は隠しきれないでいる。

しかし今より五年前、私が現に来た五年前は、まだ現が降着するといった大規模な事件はなく、時々異形を連れた 月の子 がテロまがいの破壊行動をするだけだった。

現に来て三週間ほど経ったとき、私は偶然月の子と遭遇、戦闘し殺害した。正気のまま人の形をした人間を殺すのは久しぶりだつたけど、特に心乱されることはなかつた。

残つた異形を片手間に潰していると、突如として異形が見えない何かに切断され、絶命した。次いで私を守る炎が反応したかと思うと、私の周囲に焼き切られた鋼線が落ちていた。

蒼の月下で、銀色の糸を舞わす女、それが糸鶴だった。

「 紅鳥！？ 具合でも悪いのかや？」

我に返ると、長座していた私の左に糸鶴がしゃがみ込んで、驚きを露わにこちらの顔色を窺つていた。

「あ……別に。ちょっとと考え事していただけよ」

言葉を濁し、気遣う視線から逃げるように私は立ち上がつた。

糸鶴も立ち上がる。私より一回り背の高い彼女が、私を見おろす。彼女はフレアの付いた黒いドレスを身にまとい、普段三つ編みにしている長い髪は解いて下ろしていた。その髪のウェーブを眼にしたとき、私は今更ながら自分の髪が短くなつてゐることに気が付いた。別に良いけど。

彼女が何か言うだらうつと思い 彼女が何か言うのを期待して

私はあさつての方向を見て、彼女の言葉を待つた。

「 ……たまには一重奏でもするかや、紅鳥？」

「 そうね……」

彼女の誘いのまま、私は音楽室に入る。

音楽室には本当に沢山の、弦の付く物ならあらゆるものがある。

チェンバロ、二故、馬頭琴、ウード……。それらはガラスケースに

収めて整頓され、いつでも取り出せるようになつてゐる。しかし、

私の演奏できるのはただ一つだつた。

朱塗りの箏を取り上げ、青海波模様の絹布を床の上に敷いてから、置く。

箏に対し四十五度の角度に正座し、深呼吸。昔よく着ていた狩衣を懐かしく思いつつ、姿勢を調整する。そして丸爪を三つ、右手の親指、人差し指、中指に付ける。

調子は平調子の志越。志の弦を二の音に合わせ、十三弦まで調律する。

箏のことはサキに教わった。彼女と友と呼び合つほど親しかつた一時期、雨の日の遊びは箏を奏で合つことと決まつっていた。サキは、何故か私の前でのみ箏を奏でた。

糸鶴がギターを弾きはじめる。バロック音樂を彼女なりに編曲した、哀愁のある旋律。私はそれに合わせて箏を爪弾く。

和と洋の楽器が協奏する、不思議な音樂。それは私を、ゆるゆると回想へと導いた。

*

「く……届け！ 妾の糸よ！」

不規則な動きで、美しく舞う銀の糸。糸は速く私には見切れないが、私を守る炎が糸を焼き続ける。

「コウテイヒンカ
紅帝炎舞」

イメージは蓮花。花開くように広がる真紅の火炎は、周囲の糸を完全に焼き尽くし爆風で糸鶴を吹き飛ばした。

「ぐつ……お、おのれ……！」

並々ならぬ闘志を發揮し、全身を灼かれてもなお立ち上がりうと

する糸鶴。

だが、火になめられた手指はもう糸を操ることができなかつた。

「……あなた、自分が何者なのか言つてみなさい」

私が訊く。糸鶴は私を、敵意を込めて睨み付けた。

「聞いてどうするのじゃ、異邦の破壊者よ」

「私が質問しているのよ。……さつさと答えないのなら、その大事にしている指の先から焼くわよ」

彼女は唾を吐き捨てた。唾は、火に当たつて音を立てた。

「妾は 漆黒の守護者 ガ一人、糸繰りの糸鶴。シル月の子^{プラネスファイア} と名乗る不埒な破壊者を狩り、人の姿を捨てた異形どもを駆逐する、誇り高き現の守護者じや！ 狂信者め、妾の怒り、思い知るが良い！」

糸鶴は腰からヒ首を抜き出し、私に突進してきた。けれども、灼かれた身体の動きは鈍く遅い。

私はヒ首をかわし、足払いを喰らわせる。ヒ首を取り上げ、彼女の白い喉元に突きつけた。

「殺すならはやく殺せ」、とは言われなかつた。

彼女は私を睨む。その視線には、抗いと悔しさがあつた。死への覚悟なんでもはない。隙あらば逆転を狙う、不屈の闘志。

「あなた……面白いわね」

私がヒ首を投げ捨てるや、予想通り彼女は私を組み伏せた。底知れない憎悪を瞳に込め、私の喉を締め付ける。

彼女は面白い、そう心から思つた。何の為に戦うのだろうか？ その瞳の憎しみはどこから來るのか？

私は締められた喉から声を絞り出して彼女に話しかけた。

「わたしを……なかまに……しなさ、い」

糸鶴は驚き、一瞬締め付けが弱まつた。だがすぐに力は込め直さ

れ、彼女は呪うように私に叫ぶ。

「命乞いかや、月の子め。銀のマントめだかひびいた？ 貴様は、主君を裏切るつもりかや？」

腹の底から笑いがせりあがってきた。首を締め付けられて笑うことはできなかつたが、笑顔を作ることはできた。

「笑うな……！ 気色悪い……」

「わた、しは、つきのこ……じゃないわ。…………わたしも……シミをにくむ…………わたしは…シミシミ」すてられたおん、な……！」

視界がいい加減白くなってきた。このまま死ぬ気はなかつたので、爆風を作つて糸鶴を吹き飛ばした。

地面に頭から激突し、朦朧としている糸鶴。周囲に燐る炎が彼女の服や髪を焦がしていたので鎮め、私は彼女を見下しながら告げた。

「私の名前はアカ。かつてシミを愛し、しかし今は彼を憎む女。

漆黒の守護者 糸鶴、私を連れて行きなさい。あの蒼い月を、血と炎の赤で染め上げる為に」

糸鶴は半信半疑といった様子だった。言葉を無くし、抉るようこ私を見ていた。

私の望んだ答えは別のところからあつた。

「良いだろう、炎の色を自称する女よ。守護者の長たる私が、お前を招いてやうづ」

糸鶴の背後から現れた、長剣を佩した黒ずくめの男。

「私の名は鷺累。女よ、守護者になるにはその夢ゆめの名を捨ててもらう必要があるが、その覚悟はあるか？」

長身をいかして、私を睥睨する鷺累。無論、私は怖じ氣づかず見返す。

「いいわ。よろしく、鷺累」

*

回想から帰ると、すでに演奏は終わっていた。もちろん、私が一人奏で続けていたわけではないが。

「紅鳥……、お主は割と沈み込むたちなんじゃな」

私が回想に浸りきっていたのは、やはり端から見てもわかるらしい。それ以前に、今日の私に普段の霸気がないことなど、特に深い洞察が無くともわかることなのだろうが。

感情の起伏が大きいのよ、と一人結論づけて、糸鶴に言つ。

「あんたと初めてあつたときのことを考えていたのよ」

ああ、と複雑な顔になる彼女。矜持の高い彼女は、負けたことに正の感情を持たない。それは私も同じだが。

「あれからもう五年、早いものね。あの頃はひたすらお互いを無視しようとしていた私達が、今はこうして一重奏なんてしているの」
そうじやな、と糸鶴は苦笑した。

「じゃが……じゃが、妾はお主のことを見友だとか、そんな風に考えているわけじゃないぞよ。お主と仲間としているのも、お主の力が欲しいだけじゃ。お主がいつまでもくよくよしているような」

「もういいわ」

私は遮った。

「……素直じゃないのね」

「な……！ お主が言つ台詞ではないぞ、それは」

そのとおりだった。

そうして、私達は笑いあつていた。旧知の友であるかのように、静かに、談笑していた。

箏を持ち上げ、ガラスケースにしまつ。そのまま立ち去ろうとする、声を掛けられた。

「お主……何の為に戦つの、じゅ」

私は振り返らずに答える。

「もちろん、あいつをぶん殴るためよ」

「その想いが届かないものと思い知らされても、かや？」

「ふ、と思わず笑いがこぼれた。

「届かないのなら、届かせてみせるわ。何が理由であろうと、どんな形であろうと、この想いは本物だもの。ねえ、あなたと同じじゃない？」

糸鶴もまた、敵わぬ相手に戦いを挑み続ける者なのだから。

「……そのとおりじゃな

その時招集の放送があった。月の子 出現、と。

身体の奥に、また湧き上がつてくる激情を感じた。

そうだ、この想いがある限り私は戦い続けるのだ。

「さあ、行くわよ。私の想いは、まだ燃え続けているから」一度は破れたが、私は未だ戦場にあった。

4・2 「絶えない炎」（後書き）

アカが和琴を弾くところの「一の音」というのは、一長調の一、学校で教える音階で書いたところの「レ」の音です。アルファベットなら「D」の音ですよ。

どうも説明っぽくなってしまいますね。これまで全然、世界状況の説明もなかつたのでここいらで入れないわけにはいかないので、書いている立場としては、
しかしそれによつてアカが必要以上に落ち込んでいます。まだ、人に謝らないだけましですけど。
次回も、戦闘はありますが、だいたいこんな感じです。すみません、お付き合い下さい。

4・3 「描りぬく世界」

公式には、各國政府は、月の王国、シミとその配下 プラネスフィア 月の子の一派を総称してこういうによる侵略などない物としている。そのための情報操作も万全を期されている。が、先にも述べた通り、ここ一月でシミはその攻勢を一気に激化させ、もはや誰の目に、誰かが世界を変えようとしているのは明らかだった。

だがいくら一般人が騒ごうとも、漆黒の守護者 の活動は隠密が基本。夜の闇に紛れ現に徒なす 月の子 達を、さらなる黒い深渊に葬る。それが守護者の在り方。

そのはずだった。

私達が今回招集されたのは、月の王国の侵略によって荒廃した街でも、夢の降着によつて占領された土地でもなく、ごく平和そうに活氣づく夜の街だった。天上に昇る月が蒼くなかったら、私達は何の為にここに来たのか想像もできなかつただろう。

今、ビルの上に私達は待機している。夏の熱帯夜の風が運ぶには、排ガスや、腐つた食べ物や、はたまた芳しい化学香料のもの。見下ろす往来の人々は小さく、喧噪の音だけが大きく聞こえる。

「この服……暑いな」

鷺累がぼやき、糸鶴がそれに肯いた。気温は二十五度だった。

「私は平気だけどね」

「さすがは炎の女だな」

おもしろくなかったので拳を飛ばした。

「 で、どうこうことなの、姫鶴？ もしかして、これ全部が抹殺対象ってわけ？」

私達三人の他に、この場にいるもう一人の人間に尋ねる。名を四しむら

村・姫鶴といつこの若い男は、私達担当の伝令係兼情報収集係で、守護者ではなかつた。

小柄な彼は、生真面目に背筋を伸ばして私達に告げる。

「その御質問には、場合によつてはその様になる可能性があると答えます。

今回の任務とは、サジタリウスと名乗る月の子の排除。

目標の言動とは、その月の子はこの街の人々を扇動し、しかしその言動に実はなく、ただ我々を挑発するものだらうということ。任務の備考とは、月神の思想に染まつた者は、もはや現の民として不相応といふことなので抹殺の必要性があるということです」

「封鎖はできないのか、姫鶴？　いくら月神の思想に感化されたとはいへ、問答無用に殺すのは乱暴だと私は思うぞ」

鷺累が仕事用の固い口調で姫鶴に言った。　彼がくだけた口調になるのは、私と糸鶴に話しかけるときのみだ。

「漆黒部隊の行動の結果とは、封鎖も妨害も敵の攻撃によつて敵わなかつたということ。

ターゲット、サジタリウスとは、月の子の中でも黄道十二宮の名を持つハイレベルな敵です」

はあ、と愁いを含ませて糸鶴が溜息した。

「では、その者の下に殴り込んで、その場の人々を全滅させるといふことじやな」

「任務の備考其の式とは、その場の者の抹殺の判断は担当者にまかせるといつものです」

「上はかなり混乱していると見た」

私も糸鶴と同意見だった。

ともあれ、私達は任務の為に目標のいる場所を確認する。どうやらそのサジタリウスといつ月の子は、近くのデパートを占領しそこ

で大々的に講演をやつていいようだ。

デパートには念のため隱形の符を使って入った。

サジタリウスは吹き抜けの三階にいた。吹き抜けは十階まで貫く大きなもの。白い壁に、茶金石のような壁がハイカラなダンスホールのようで美麗だ。

私達は四階部に立つてその月の子を観察することにした。

月の子は例によつて銀のマントを纏いフードをかぶつているので、性別を判断することができない。背丈は、中肉中背といった感じだが。

「人が多いな……。いつたい何人いるんだ？」

「ざつと七千人じゃな。まだまだ来るぞ」

人の入りは絶え間ない。それでいて、人が転んだりぶつかつたりして混乱が起きる様子はない。統率されているのだ、月の魔力に。

「あやつらは、己の意志で月の思想を受け入れようとしているわけではないのじゃな。……あやつらを皆殺しにするのは、全くの無意味じゃ」

「そうだな。だが、あの月の子を殺しても影響が消えるかどうかわからんぞ」

三人が、それぞれ思案に耽りはじめた。

と、突然に電気の照明が消えた。そして、電灯に劣らないくらいの明るさをもつて蒼白い月光が降りてきた。

サジタリウスが話をはじめる。

「ようこそ皆さん。今日この場にいる人々に、月神の祝福のあらんことを！」

女の声だつた。割と柔らかい感じ。

続く歓声。だがすぐ止む。不自然だ。

「そう……よろしいです。月の王国とは静寂の国。むやみに大声を上げて喜びを表すことは、もう忘れ去られるべき習慣なのです」

また短い歎声。

そしてサジタリウスは話す。月の王国がどんなに素晴らしいものか、月神ツミがどれだけ慈悲深い神であるか。実のない言葉を、繰り返し連ねて。

「茶番ね」

「ああ、まったくだ」

鷺累は白のクロスボウを取り上げ、サジタリウスに向かつて構えた。

撃つ。無音の術をかけられた矢が、一直線に放たれる。しかし、矢はサジタリウスの手に握られて止まつた。

「 っ！ くそ、いくぞお前ら！」

私達はそれぞれ跳躍し、階下の吹き抜けに、サジタリウスに向かつて鷺累を先頭に、糸鶴、私と並んで着地した。

驚いた人々の輪が、僅かに広げられた。

「やつと来たか、現の守護者。どう？ この人々の集いようは。この者達は皆、月の王国の誕生を、安らかなる新しい時代を望んでいる。月光が誘わなくとも、人々は自ずから集つたでしょう。なのに、何故あなた達は抗う？」

サジタリウスと五メートルの距離を置いて対峙する鷺累が剣を抜いた。背後から彼がどんな表情をしているのか見ることはできないが、彼の大きな鬪気は感じられる。

「そうだな。確かに、お前達の王国は素晴らしいものとなろう。それは認めてやる。だが、欠点がないわけではない。同じ欠点がある世界なら、私は慣れた今の世界の存続を望む。それが私の動機だ」

鷺累の答え。私の動機とは異なるが、その搖ぎ無い言い切りに私は羨望に似たものを感じた。

「不变が現の意志ということか……。よろしい、では決闘を」

サジタリウスがマントの中から手を出す。その両手には銀の拳銃があつた。

鷺累が腰の剣の柄に手を掛けつつ、じちらを見た。

「決闘、だそうだ。お前ら手出し無用だ。 紅鳥、周りに火の境界を作ってくれ」

私はそのとおりにした。火は周囲の群衆を退け、戦いの場を守るリングとなる。

「 参る！」

一喝の気迫と共に、鷺累が初撃を放つ。

一メートル以上ある白の長剣を一息に引き抜き、豪快に上から打ちすえる。

対するサジタリウスは、剣撃をかわしてから両手の銃を射撃した。その銃弾は遅れてきた剣風に弾かれた。

「！」

流れるように足を滑らせると、鷺累は光のような突きを出されかかる。だが、突きは無数に続いていた。

「この……！」

一瞬を捉え、サジタリウスは銀のマントを翻して鷺累の剣の腹を蹴つた。彼の攻撃が乱れるや、サジタリウスは射撃しながら後方に跳躍した。

サジタリウスの顔が暴かれる。中国系の女の顔だった。

だが、相手が女であろうと鷺累の剣が揺らぐことはない。

鷺累は剣を下段に構えたまま、じりじりと相手にじり寄る。

サジタリウスは両手を軽く広げやや下に向けると、腕を角度を小さくしながら五回、左右十発の弾丸を床に向かつて放つた。

「 鷺累、下じゃ！」

「わかっている」

床にぶつかった銃弾は、そのままめり込みます、不自然な角度に跳

弾した。左右の下方からの攻撃だつた。

鷺累は慌てることなく、前進しながら一回、左右の下段からすくい上げるようにして剣を振つた。

つくられる一つ銀弧。それが十発の弾丸を切断した。

「！」

サジタリウスはあの攻撃が防がれたことはなかつたのだろうか？

動搖も露わに双銃で射撃するが、ただ撃つだけの攻撃が鷺累に通用するはずがない。

床面にほとんど擦り寄るようにして、敵の懷に飛び込む鷺累。先程の一回の剣撃からの動きで、真下から真上に銀弧を描いた。

それで勝敗が決した。

サジタリウスの銃撃が止まつたと思うと、その身体が赤い大輪を咲かせ二つに割れた。

「虎牙 一刀流奥義、慘烈」

技名を呴き、凍てつく雰囲気をまとわせたまま剣を収め戦いの終了を告げた。

「……帰ろうかや」

糸鶴が言い出した。

任務ではこの場にいる人間すべてを全滅させなければならない。だが、結局私達の誰もが、非力な者を殺したいとは思えなかつた。

その必要があれば、私達でなくとも、ミサイルでも撃ち込めばいい話だ。

しかし、私達が無関心にこの場を離れようとすると、その非力な人間達が私達を阻んだ。

「この人殺し！ 虐殺者！ 我らの未来を破壊しやがるのか！」

どうして、あいつの思想になびく者は大袈裟な口調になるのだろう？

「この場、このデパートの中と外、この街の人間すべてが私達を罵り、物を投じはじめた。

飛来物はひとまず糸鶴に落としてもうことにした。

そういうえば、蒼の月光はまだ降り注ぎ続けている。月の子を倒してもなお、ツミの魔力は途切れていない。この場の想いに呼ばれ続けているのだ。

「やれやれ、帰れないぞ、これでは」

鷺累がぼやいた。

鳴りやまない怒号。狂ったカーテンコールは、少しずつ私の心を揺らしはじめる。それは苛立ち。多くの者達があいつを讃えていることに対するものではない。この苛立ちのわけは。

「この野郎あおお！」

この苛立ちのわけ、それは私の進行を止める者がいるという事に対する怒り。

一人の男が、拳を振り上げながら私に向かつて突進してきた。

私はその拳を右手で掴んで止める。膠着の状態で男を睨めつけると、私の金の瞳を見た男がその表情を恐怖に歪めた。

「退きなさい、
陽弓^{ヨウキ}霸^{ウハ}」

私は怒りを力に変えた。

力は炎熱の波動となり、私の右手から一直線に男を貫きその背後まで駆け抜ける。そして、波動を浴びた者は自然発火をはじめた。

怒号のカーテンコールに、悲鳴のパートが加わった。

「別に、あいつを讃えたければそれでもいい。でも、私の邪魔は誰にもさせない。私の行く手を遮るのなら覚悟しなさい。私は、行く手にあるすべての邪魔者を焼き払うわ」

私の想いは誰にも負けない、邪魔させない。

そう確信したとき、私の中で何かが弾けるのを感じた。鍵を掛けてしまい続けてきた物が、封印を破壊して出てくるような感覚。そして、解き放たれた物は暴れることなく私の手の中に収まつた。

「『私の名は、アカ』。天照大神アマテラスのおおカミの力を持つ者』」

言葉が口から滑り出る。

吹き抜けの天上アツメイが砕けた。

そこから降りてくる太陽の光。力強い波動の光が私を包み、貫き、そして天へと導く。

高みから見下ろした街では、月の光が無くなつてもなお月の王国の到来を叫ぶ者達がいた。まるで、見知らぬ父親を呼ぶ孤児のように。一部の者達は自己を見失い、手当たりしだい身の回りの物を破壊していた。

「 鎮圧の浄炎」

私が望みを唱えると、街のあちこちで金色の炎柱が立つた。それを見にした人々は動きを止め、やがて己の手や隣人の顔を見て自らの行いを省みはじめた。

「太陽の靈力ちから……やつと操れるようになつたのかしら……」

これまで、私が太陽の力を使うときは、いつも私は我を失つた状態だった。けれど今初めて、私は自らの意志で太陽の靈力を行使した。

ふふ、と独笑が漏れた。

「これで、やつとあんたに勝てる見込みができるみたいね。ツミ

「 力を得ることができたのは、私が己の想いを定めることができただろうか。

そして、勝利の可能性を口にできたのは力を得たからだろうか。いずれにせよ、私はもう迷う必要はない。あとは、いつかの決着の時に全力をもってぶつかるだけだ。

「……帰ろう」

もうここに私の邪魔をするものはない。ここは私の戦場ではない。とまどいの街を眼下に、私は炎の翼をはためかせて事務所まで飛んで帰った。

4・3 「描きめぐ世界」（後書き）

サジタリウス（Sagittarius）は射手座のことです、十二星座の一つです。ツミの下僕たる星の子達にも順列があり、特に二人は高位だというのが裏設定です。十二人すべて登場するこはないでしょう。

もう一つ解説。

天照大神は（あまたらすのおおみかみ）が一般的な呼び方ですかね。ここでは音の関係で（あまたらすのおおかみ）にしてもらっています。要するに月神・月読命の名を持つツミに対抗するための名です。一応解説しますと、太陽神で偉い神様だということです。天皇の守り神みたいなものらしく、この物語では現の守り神、みたいな意味もあつたりします。

そんな感じで少しずつ盛り上がってきました。第四幕は次で終わりです。

4・4 「私の戦火」（前書き）

この作品はフィクションです。実在の人物・組織・事件などとは一切関係ありません。（ いまさら）

4・4 「私の戦火」

糸鶴を圧倒したその場で鷺累に招かれた私は、一一つ返事で 漆黒の守護者 となることを決めた。彼らの現を守るという理念に興味はなかつたが、ツミと戦う為に、彼らの持つ情報が欲しかつた。

守護者となる際、私は力を試された。それは守護者のトップ五人の中には糸鶴もいたので、彼女が棄権したことにより四人だつた との戦闘。五番目から一一番目までは容易い相手だつたが、最後に現れた鷺累との模擬戦闘は、死闘 となつた。

私達は互いに力をぶつけ合うことに我を失つた。鷺累の剣技はすさまじく、四肢は落とされることはなかつたが、それに近い深手を負つた私は、気が付くと彼ごと周囲一キロメートル半径を吹き飛ばしていた。

以来、私を知る者達から恐怖を込めて火巫女^{ひみこ}と呼ばれるようになつた。古い女王と同じ音で呼称されるのは、単なる当て字以上の意味もあつた。 月神に抗う、神に最も近き者。それが漆黒を名乗る者達にとつての私だつた。

サジタリウムを抹殺した三日後の晩、私達の事務所に客があつたといつて、私は鷺累に呼び出された。

この事務所には、一応 漆黒の守護者 の長である鷺累に用がある人間がやつてくる。しかしそれは私には関係のない事なので、普段私が来客の応対をする事はない。そして、時に私と話をしたいとやつてくる者もいるが、それも無視することが多かつたりする。鷺累もそれを知つている。なのに、何故今日はわざわざ私を呼んだりするのだろう。

「まあ、ちょっと偉そうな、というか本当に偉いやつが来たんだ。
さすがに俺も断り切れないほどのは、な」

というわけで、有無を言わせず連れてかれる。

事務所の応接間は、それなりに立派だ。厚いマホガニーの扉の向こうは、灰色の煉瓦の壁に足の長いカーペットの敷かれた部屋になつている。暖炉があり、最高級のクーラーがある。窓は大きく、しかし防弾・防衛の効果がある。

その木の戸を押して入る。そこには一人の人間が本革のソファーに座っていた。

一人は初老の肌の黒い男。二メートルはあるか背丈に上に肩幅も広く、スーツは窮屈そうにしか見えない。が、それ以外は特にどうという男ではなかつた。

もう一人の方が強く私の注意を惹く。北ヨーロッパ系の顔立ちをした女。歳は三十五を越しているだろうが、美しい。赤みがかつた金髪はさらさらと長く伸ばされ、透き通つた蒼い瞳にはまっすぐな光がある。肌は驚くほど白く、若さがある。ぴつたりとしたスーツの上からわかる全身の身体の曲線も、何もかもが完璧だった。そして、女は自身の座るソファーの右の腕掛けに、剣身が菊と同じ色の大剣をもたせかけていた。

私が何も言わず一人の前に座ると、男が立ち上がり手を差し出した。

「我的名前はマーク・カーランドと申します。S E M E の理事長を務めております。よろしく、紅鳥さん。私の日本語、これでいいですか？」

差し出された手に、私は握手はせずに答える。

「発音はいい。けど、日本人は普通、我、と自分のことを言わない。頭がおかしいと思われるわよ」

「そうですか。よろしく」

マークは握手を諦め座る。その振る舞いは気さくといったものだが、瞳の奥に隠されている刃のようなものを私は見逃さなかつた。

一方、女は立たず口を開いた。

「私はヨハンナ・リーベルト。ただの付き添いとしてきたから、これでいいわね？」

ヨハンナは日本語を話していない。口の動きを無視した音が、私には聞こえた。

「ならここから消えれば？ 目障りよ、あんた」

私の皮肉に、女はにこと笑つて応じた。

「私、傭兵なの。今は彼の傍にいるように傭われたから、ここにお邪魔させてもらつてているのよ」

彼女が動く様子は皆無だつた。

食えない奴。

とりあえずヨハンナのことは無視して、マークに用件を訊いた。

「そのですね……まず言いますことは、太陽の靈力を制御下に置かれたこと、おめでとうございます。先のおつとめ、そればかりでなく混乱していた街を鎮静化させたという報告も受けました。

そして、今日お伺いしましたのも、それに関わることなのです。あなたも見られたとおり、月の王国一派の存在は一般人にとつてはカルト的、文字通り世紀末の新興宗教となつています。確かにそれは無理のこと。二千年前のイエス・キリストと同じく、あの月神も各地で奇蹟を顯し続けているのですから。つまり……

あ、我の日本語、変じやないですか？」

「……問題ないわ

私が返答すると、彼は破顔してアールグレイ・ティーを啜つた。そのカップとソーサーはヴィクトリア朝の骨董品だ。

彼はわざと言葉を切つた、私はそう判断した。

静かにカップを置いた後、マークは蘇芳の瞳で私を見た。

「つまり、夢の侵攻に抗い続けるためには、現にも旗頭となる方が必要だと言つことです。

SEME の代表として、I order you as I am a master of the warrior who battle with xenomonsiter (外來の怪物達と戦う戦士達の長として、私はあなたに命令します)。 我らの旗頭として日神になつて下さい、氷室・紅鳥さん」

「…… I turn down it (断るわ)」

私が告げると、マークは一瞬の驚きの後それを隠すように無邪気を装つて笑つた。

「英語ができるのですか？ それはともかく お受けして頂けませんか？」

「私がここにいるのはシミと戦つ為だけ。神になる為ではない。現がどうなるかと、知ったこっちゃないのよ」

マークは不快そうに眉をよせる。表情はまだやわらかいが、眼光にはすでに穢やかではない色がある。

だが、私は彼に対し真っ向から想いを告げる。

「私は今私のまま戦いたい。 教えてあげる。私はね、もう、氷室・紅鳥、ではないの。私はかつて、あいつの呪縛から逃れたくてこの名を名乗ることにした。でも、結局それはかなわなかつた。何より私自身が彼のことを想い続けてきたから。……だから、決めたの。私は、かつて彼を愛した、そして今の彼を愛している、日神でも、火巫女でも、 漆黒の守護者 ですらない、ただのアカとして彼と戦つと。

だから、あなたの希望は却下」

「マークが一層強い視線で私を見る。だが、見返すこちらの視線が揺らぐべくはない。

場の雰囲気に殺氣じみたものが感じられはじめたこの時、動きを作ったのはヨハンナだった。マークの肩に手を置き、振り向いた彼に穏やかに言いつける。

「女の子に無理強いはダメよ、マーク。しつこい男は嫌われるものだわ。 わあ、帰りましょ」

そして左手でマークの襟を掴み、右手には大剣を持つてヨハンナは立ち上がった。

彼女に引かれるようにして立ち上がるマーク。

彼は一度顔を伏せ、再び顔を上げたときそこに剣呑な色はなかつた。最初の時と同じ、人の良さそうな笑みだけがあつた。

「お話を聞いてください、ありがとうございました。これでお暇します。もう一度とお目に掛かる事はないでしょうが、我はあなたが考えを翻してくれることを期待しています。 その時はまたお会いしましょう、Lady Himiko」

私は立たずに彼を見送る。

「昨日来やがれ、よ」

マークは破顔のまま頭を下げた。

そして一人が去っていく。その時、マークではなくヨハンナが一つの言葉を、問い合わせていった……。

*

「あ、紅鳥さん。これから次の作戦の説明をしたいのですが、よろしいでしょうか?」

私が応接間から出ると、待ち構えていた情報係の姫鶴がそう言つ

た。

客の応対に続き、ブリーフィング（作戦の説明）もあまり受けない私。しかし今日は姫鶴に頼みごともしてあつたので、その話を兼ねてブリーフィングを受ける事にした。

ブリーフィングルームは八人用の小規模なもので、リノリウムの床に簡素な長椅子五つにパイプ椅子が十数個ある質素な部屋だ。しかしプレゼンテーション用のパネルは投影型のスクリーンではなく大型のプラズマパネルで、これだけ豪勢な気配を放っている。

「では、はじめさせていただきます」

場にそろつたいつもの三人を前に、姫鶴がスクリーンを背に一礼した。

「まずお話します」とは、紅鳥さんから依頼されていた調査の結果です。

その調査の結果の内容とは、キズオトといつ風操術の能力のある女性の調査でした。そして調査の結果とは、該当する方が一名、鳥取の船上山の近くのさる高校に在学しているということでした。しかし同時に判明した事は、周辺の地脈に明らかに操作された痕跡があり、^{ダウントロード}降着の準備が着々とされているということ。それも二・三日中に95パーセントの確率で実行されるだらうということです。今作戦とは、端的に言って降着の阻止です。月の王国は降着の際、最高位の術使ないし月神自身、そして異形の大軍を繰り出します。このため作戦は困難を極めると予想されますが、ここにおられる皆さんの力量ならばと提示されました。また、他の守護者の応援要請も今なされています。

以上です。御質問は？」

私がまず問う。

「その、キズオトだと思つ子の説明をして」

「少女の名は相川・千風。公立諏訪高校の一年生。戸籍はあります

が、両親を含めすべての親族の存在が確認できない謎に包まれた少女です。中学校までは孤児院で暮らしていましたが、高校に入つてからは一人暮らしをしています。彼女名義の口座には少なくない金額が納まっており、それを生活費に充てているようです。

同校の生徒には知られていないようですが、彼女が使う風操術については SEME のデータベースに登録されました。そのデータベースの記述とは、彼女という存在が、紅鳥さんがこちらの世界に現れた五年前の時期と、丁度同じくらいの時期からはじまっていること。以上のようなことから、私は彼女が、キズオト、であると確信しました

苦労しているのかしら。

ふと、思った。

高校生になつていふことは、彼女は夢に住んでいたことなど隠して現に適応しようとしたということだろう。私と違つて。しかし、すでに七十年近く生きた彼女にとって、今更普通の子供として成長していくといふことはどういうことか。……きっと、並大抵ではない苦労があつたはずだ。

と、そんなふうに他人を思つた自分が少しおかしかつた。私らしい。そう、心の中で密かに自嘲した。

誰も質問をしなくなつたのでブリーフィングはお開きになり、姫鶴は資料を残して去つていつた。

「で、断つたのか？ 紅鳥」

鷺累がおもむろに尋ねてくる。

先程のマークとの話のことだろう。

「もちろんよ。旗頭なんて、面倒なだけ。それに、あいつらにも言つたけど、私はただの、アカ、としてあいつと戦うことになったの。余計な肩書きは、もうこれ以上必要ない」

「じゃあ……お前はもう紅鳥ではないのか？」

そう問い合わせ返した鷺累の瞳には、油断無い光が宿つてゐる。彼はきっと、私が今後も彼自身と同じ立場であるのかそうではないのか、探りを入れているのだろう。

「馬鹿じゃないの？」

私がはつきりそう口にするとい、鷺累はおどけた笑いを見せた。
「私はここにいてやるわよ。あんた達とはもう腐れ縁みたいな感じ
だけど、あんた達のことは別に嫌いじゃないし」

己の立ち位置を告げ糸鶴を見ると、彼女は退屈そうに欠伸をしていた。

「妾には、お主がそいつぢやろつと判つておつたよ。 鈍い上司」と一緒にしないでおくつや」

そして彼女は席を立ち姿を消した。あとには湯飲みに入った冷めたお茶が残されていた。

「鈍い上司か……、言われたな。いつか見返してやる

彼も立つ。

去りゆく背中に、私はふと思いついたことを尋ねかけた。

「ねえ、あのヨハンナって女は何者だったの？ 詳しくは名乗らなかつたけど、絶対只者じゃないわよね」

ぴたりと彼が動きを止める。その様子に、微かな緊張があるようを感じるのは気のせいだろうか。

「ヨハンナ・リーベルト。リーベルト家というのは代々女が頭首を務める傭兵の一族だ。独自の術科学技術を保持していて、世界のどこの組織にも属さず、独自の軍隊だけで戦争をする。奴らの戦場に場所と表裏の隔たりはない。でかい戦場にならじこにでも首を突つ込み停戦させる、世界平和を謳つおせつかいな一族だ。……一族といつてもまだヨハンナで三代目だけだ。

頭首は代々 ブロウ・フラウ という大剣を継ぐ。由来はわからんが膨大な魔力を秘めた剣で、それがあの一族、特に頭首を特異なものとしている。あのヨハンナにしろ、差しでの勝負なら、この地上の誰にだって劣りはしないだろう。

それで、なんか気になる事でも言われたか？」

訳知り顔で私に聞く鷺累。私はそうだと答えた。

「あの一族はどういつも気取り屋だからな。俺も昔、あの女と戦ったときに妙な問答をさせられたさ」

それがどんな内容だったのかは告げず、彼は戸口をくぐつて消えた。その後ろ姿に私は、ヨハンナの長い金髪が流れる後ろ姿を重ねた。

神にならない者にとって、神の力はさぞ重いものでしょうね。

そう、ヨハンナは問いを残した。

私は、いつだつて自分に重すぎる力を持つていたわ。

これが私の答え。ヨハンナには聞かせていないけど。

私は常に己の力を重く思っていた。恐れていた。初めて力に目覚めたあの時から、私の胸は一時も安らぐことなんてなかつた。

そうかなあ？　あたしは全然恐いなんて思わないけど。

懐かしきキズオトの声が、私にそう答える。

恐くない？　こんな見境なく火をつけて回れるような力が、恐くない？　……ふざけないで。私はこんな力いらないわ。こんな力、どうして目覚めてしまったの！？
かつての私が叫ぶ、感傷じみた嘆き。

キズオトが言う。

だって、アカは自分を護りたいと思つたんでしょう？　夢ではね、心の底から力が欲しいと思つたら、力が使えるようになるんだよ。理由なんて無い。

言葉は重ねられる。

それには、アカ。あたし達がここで生き続けるためには、よそから来る夢の人と戦争しなきやだめなんだよ。だから力が必要なの。……それとも、アカは戦わないでこのまま死にたいの？

少女のなりをした女が告げた、残酷な事実。

死、という一文字に恐怖した私は、結局他者を殺しながら生きることを望んだ。あの時、夢に来たことにより名前も何も失っていた私は、身に起きるすべてのこととに混乱していた。私はわけのわからぬまま死ぬのは嫌だった。だから……生きることを選んだ。

以来、力を使い続ける事への恐怖はいつも私と共に在った。いつこの炎の力が暴走して、何もかも焼き尽くしてしまったのが、恐れない時はなかった。

だけど、今、私は力を使うことを望んでいる。恐怖はなくなつたわけではないけれど、この力を解き放ち、あいつと全力でぶつかり合つことを望んでいる。

この胸の高鳴る想いと共に。

きっと彼は私を受け止めてくれるから。過ぎ去ってしまったあの三年間みたいに、また彼が私を受け止めてくれると、私は信じている。

だから、私は出陣する。神の力も恐れず、己の武器としよ。

忌み続けてきた戦火を、今こそ望もう。

4・4 「私の戦火」（後書き）

こんな感じ……ですか？

いまいちまとまりを付けられませんでした。やはり説明などは少なく、端的にするのが一番ですね。問題はそればかりではないでしょうが。

ヨハンナについては別に出す必要はなかつたのですが、何となく拘つてしましました。

糸鶴と鷺累に割と出番があつたのは良かつたです。一人を好きになつてくれた人はいらっしゃるでしょうか？

5・1 「月に宛てられた手紙」

拝啓、月の神様

残暑厳しい候となりました。私の住んでる町は毎日暑く、すっかり参つてしまします。月の神様の国はいつも夜に包まれているやうですね。きっと涼しいのだろうなあと、羨ましく思つ今日この頃です。

今日は私の話を、身の上話？ みたいのを聞いて欲しくてお手紙しました。くだらないことです。きっとお忙しいでしょうから、読みたくなかったらここで手紙は捨てて下さい。
さよなら。

その手紙は、一枚目の便せんにそこまで書かれ途切れていった。

差出人の名前は、相川・千風あいかわ・ちかぜ。かつて、キズオトと名乗っていた女の子だ。

今、ボクらは目的地であるキズオトの学校から、峠一つ隔てた村の小さな民宿にいる。時間は朝の九時くらい。昇った太陽が南東の空から、朝だけにあるキラキラした輝きを放つていて。

「チヨ、お茶をいただいて来ましたわ。お飲みなさい」

部屋の襖障子を開けて、サキがお盆に湯飲みと急須を乗せて入ってきた。ボクはもう普段着に着替えたのに、彼はまだ寝間着である浴衣をだぼつと着ていて。でも、そのだらしない感じは彼にあって

いた。

どうぞ、と正座したサキがお茶を入れて勧めてくれた。ボクは手紙をちゃぶ台に置き、湯飲みに口を付けた。

「あ、おいしい。おいしいね、サキ」

「ええ、新茶だとおっしゃってましたわ」

サキもお茶を啜る。そして、ボクが置いたキズオトの手紙を取り上げた。

「あら……可愛らしい字。あの子、毛筆ではそれは酷い字を書いていたものですが、上達したのですね」

半ば感嘆しつつ、サキはキズオトの文面を見る。

手紙は端に薦の模様が描かれた、萌黄の和紙のかわいい便せんに書かれていた。そしてサキの言つとおり、その上に書かれたキズオトの字はもつとかわいかつた。

ボクらはこの手紙を、ここに来るまでの山道で拾った。まるで隠されるように、道から外れた藪の中に、瓶に詰めて埋められていた手紙。ボクが大地と繋がりのある者ではなかつたら、きっと見つけられなかつただろう。

「 ? 何でサキは昔のキズオトの字を知ってるの」

サキはつい最近になるまで目が見えなかつたはずなのに。

「それはですね、私がネガイの m e m o r y の一部を引き継いでいるからですわ」

三つの瞳を同時に瞬かせ、サキはこともなげに答えた。
そこでサキが手紙を差し出してきたので、ボクは湯飲みを置いて手紙の続きを読むことにした。

一枚目の便せん。そこから何枚にもわたつてびっしりと書き込まれた文面を、ボクは声に出して読み始めた。

* * *

ありがとう。

ここを読んでいるということは、一枚目にも田を通してくれているということですね。

まず、私の学校の話をします。

私の通っている学校、県立諏訪高校は、全校生徒三百人くらいのあまり大きくない学校です。学校自体は広くてピカピカしていて、後ろには大山山系の立派な山並みがたたずんでいます。学校の生徒はいつも山に入つて、木々や草花、動物や昆虫たち、そして澄み切つた風や水と好きなだけ触れあうことができるのです。

学校の雰囲気はのんびりしていて、けれど活気もあります。まるでじつと風を待つ川辺の葦のように、みんな生き生きとしています。私は学校にいるすべての人のが好きです。でも、その中でも特に好きな友達を四人紹介します。

一人目は詩之崎・三都。^{じのさき}三都と私は呼んでいます。とっても勉強ができて、スポーツも上手で、その上ピアノやチョロ口までできちゃうすごい男の子です。お金持ちの家のせいかちょっと偉そうですが、勉強の解らないところとか聞くと親切に教えてくれます。

三都には、七音ななおとっていうかわいい妹もいるんです。

二人目は勘解由小路・津辻。^{かげゆこうじ}三都につづき、津辻の家も立派です。剣道の道場で、彼女も剣道の師範代をやつているそうです。加えて、彼女は茶道もやっています。勉強もスポーツももちろん完璧です。なんというか、女として憧れちゃうような、そんな友達です。

三人目は天使・水月。^{あまつかみづき}ちょっと変わった名前の女の子、でもとっても良い子なんです。料理とか、お裁縫とか、ほかにも何でもできちゃって、学校の成績も抜群。もはや神の傑作と言うべきこのスー

パーガールは、三都の勧めで、後に紹介する友達の家でメイドさんをやっています。水月のメイドさん姿はすつごくかわいいですよ。

そう……私の友達の内、四人中三人は何だか学校中でも尊敬されてしまう非凡な人です。そんな有名人がどうして私の友達かというと、それは私の一番の友達のおかげなんです。

ひらしま
とうあ
平島・透は私の幼なじみみたいな男の子です。透とは、小学校ではじめて同じクラスになったときから、ずっと同じ学校、同じクラスです。透は前の三人に比べてしまえば学校の成績も良いわけではないけど、とても友達想いで、また友達からも好かれる男の子なんです。どれだけ友達想いかって言うと、お父さんとお母さんが遠くへ行ってしまっても、友達の為に一家に残ることを決めちゃったくらいです。

透は本当にみんなから好かれる不思議な魅力を持っています。別にムードメーカーとかいうわけでも、何か特別なことをしているわけではない。透は平凡な男の子、でも誰からも好かれます。三都も、津辺も、水月も、私も、そんな透に惹かれて一緒にいます。

次に、私自身の話をしようと思います。

私の名前、相川・千風あいかわ
ちかぜと言います。でも何故自分がこんな名前なのか、私にはわかりません。

何故なら、私には両親の記憶がないから。私には十歳より前の記憶がないのです。

ふと気が付くと、私は孤児院にいました。そこから、今の私の記憶ははじまっています。記憶のはじまりはぼんやりとしたもの、まるで水の中についたものが少しづつ顔を出すような感じで、私を驚

かせません。でも記憶がない事への不安がないわけではありません。身の回りの人は、私の九歳より前のことも知っています。だから、私が記憶を持つていないのはみんなにとつてはありえないことなのです。だから、私は記憶を失くしていることを隠しています。

私は誰なんでしょう？

こうして私は、自分のことも、周りの人のことわからなくなつて、どうしようもなくなつてしまつときがあります。けれど、そんな時でも私はある存在だけは心の底から感じることができるのです。

それは風。

私は昔から、風というものをすぐ身近に感じています。風は私の心を不思議と慰めてくれ、私が想うと流れを変えて一緒に遊んでくれたりもします。風は私の家族のような気がします。 風は世界中にあるものですから、世界中に私の家族がいる、そんなふうに風は私を力づけてくれます。

しかし、時々夢に見ます。血はつながつていらないのに、互いを、家族、と近く認め合う五人の人たちと、私が暮らしている夢を。夢の中で私は十歳に満たない小さな女の子で、和風な家に住んで和風な装いをしているのです。

夢の家族の話をします。

その家族には、まずお母さんのような姉のような、そんな年上の女人のが二人います。名前はわかりません。夢の中の事なので細かくは表現できませんが、一人は色で言えば黒く、とても物静かです。もう一人は青く、とても優しい人。けど、その人は心の奥に氷のように冷たいものを押し隠している、そんな水のような一面性を持つ人です。

さらに、確実に姉と呼べる女の子が一人います。とはいっても、

私はその一人の事は姉と呼んでいるわけではありませんが。

一人は色で言えば白い人。白い人はとても私を可愛がってくれます。けど、その人の優しさは上辺だけのもので、その人の心は雪のように無感動な気が私にはするのです。

もう一人の赫い人は、白い人と対照的に本当に直情的な人で、すぐ怒つたり泣いたりします。私に限らずみんなのことを、時に好いたり、時に嫌つたり、でも心の中では好いている、そんな炎みたに揺らめくアンバランスな心を持つている人です。

そして、最後の人は家族の中で唯一の男の子、私はその人のことを兄と慕っています。彼はいつでも誰に対しても誠実で、優しく穏やかな心を持った人。そして……その……すごくセクシーなんですね。夢の中で私は小さな女の子なのに、彼に対しすごくドキドキしてしまうのです。私は、その人に恋をしているのです。でも、彼の思いはたつた一人だけに向けられているのです。

私は思います。夢の中にいる私の兄、それは月の神様、あなたではないのかと。あなたに会つたことも、顔を見たこともないのにそう思うのです。

手紙はここで一区切りされていた。残る便せんは一枚。

「ネガイはキズオトちゃんを現に送るとき、彼女が願つてはいないことでしたが、彼女の記憶を封印しました。つまり、私達と暮らした長い間の思い出を。彼女はすべての記憶を背負つた上で、只人として生きていく覚悟をしていましたが、ネガイの温情がそれを止めさせたのです。」

音読を中断すると、急に喉の渴きを覚えた。お茶を飲もうと思つたけど、もう急須に入れるお湯さえなかつた。最後の一杯はサキが悠々と飲んでいた。

「ボクは固い唾を飲み下し、渴きを我慢して尋ねた。

「キズオトは……それで少しは幸せになつたのかな？」

さあ、とサキ。また一口お茶を飲み、言つう。

「今の生活を彼女がどう思つてゐるか、それは手紙の残された箇所に記されてるはずですわ。だから、続きを読むでくださいまし」

ひとん、と音を立てて、サキはボクの目の前に湯飲みを置いた。まだ半分くらいお茶が残されている。

彼が笑う。飲んで良い、ということだらう。ボクはありがたく一気飲みした。

「間接キスですか」

すっかり、お伝えしたかつたことと話がずれてしまひました。

ですが、月の神様にはおわかりいただけたでしょうか？ 私がどれだけ友達を、平和な今の毎日を大切に思つてゐるかが。

夢の家族のことも気にはなります。でも、あれが本当に私の過去だとしても、私はあの生活を欲することはしません。なぜなら、あの生活がなくなつてしまつたのは、何か重大な出来事があつたせいです、しかし私は誰かの思いやりでその出来事を忘れさせられている……そんな気がするからです。

私はあの生活に戻ることを望まれていません。また同時に、私も戻ることを望んでいません。付け加えて言うなら、私は月の神様に会いたいということも全くありません。たとえ月の神様が、私の恋した、お兄ちゃん、であつたとしても。

なので、お願ひします。私達のところには来ないでください。世

界がどうなつてしまつたとしても、私は今の日常を失くしたくないんです。

私は他のみんなには無い力を持っています。そして、みんなはそのことを知りません。ですが、隠し事をしている私は、力を持つ私は、「この平和の中においてはいけないのでしょうか？」

私はそうは思いません。独りよがりかもしれないけど、私は次に言うことを守つていればみんなといて良い氣がするんです。

それは、力を使わないこと。一切の目的の為にも力を使わなければ、私はみんなと変わらないと思うんです。間違つていますか？

私はここにいることを望みました。「千風」という私は、他の誰でもない、私の親しい人達と共に在る風であろうと決めました。来ないでください。月の神様が来れば、私は全力を持ってみんなを守ります。でなければ、あなたはみんなを傷つけてしまうから。

でも、守る為にはこの風の力を使わなければいけない。そして、力を使えば、私はみんなともう一緒にいられない。

だから、どうかお願ひします。来ないでください。私を、友達と一緒にいさせてください。

さようなら。

相川・千風・

* * *

それで全てだつた。キズオトは手紙の末尾を、「敬具」の言葉を抜かして、震えるくらいの思いを込めて締めくくつていた。
「風とは万物を結ぶ絆。あの子は、とても情の篤い子になつたのですね」

「きつと、サキ達と一緒に住んでいたときからそうだったんだよ。でも、キズオトはそれを口には出さなかつた。出す必要もなかつた。……あの頃は、そんな毎日が無くなるだなんて、きつと思ひもしなくて良いくらい幸せだつたんだよ」

戦争と隣り合わせの毎日。でも、彼女にとつては最高の日々だつたんだろう。

だけど、彼女にとつての終わりは唐突に來てしまつた。もしかしたらその時、彼女はその終わりを理解できなかつたのかもしれない。終わりを受け入れはしたけれど、理解はしていなかつたんじゃないだろうか。そして……

「怖いんだろうね、この上なく、終わつてしまつことが」

「記憶は無くとも、想いはあるのかもしません。そしてあの時の無理解は、根拠の無い恐れとして彼女の中に刻み込まれているかもしれません。……だとしたら、今の彼女は傷を負つた獣と大差ありませんわよ」

傷^{キズ}を負つた、風音^{かざオト}の中^{キズ}にいる獣 キズオト。それが、彼女の名の意味なのだろうか？

だとしたら悲しそう。彼女は必死に、牙も爪も、そして傷さえも隠そうとしているのに、戦いが彼女を暴こうとしている。キズオトは手紙を書いても、それを風に託すことをしなかつた。もうすでに抉られ始めた彼女の傷が、彼女の心を失望で覆つてしまつたのだろうか。

外に出て地面上に立つと、大地が世界中の情報をボクに伝えてくれる。

……もう、戦いは始まつていた。彼女が恐れ、拒んだ戦いが。

「早かつたですわね 私の先視のとおりでしたが。……ひどい通

信内容。現の守り手達は混乱しきっていますわね」

電磁波も扱えるサキは、無線を傍受しながら独り言するみたいに言つた。

遠望した遠くの景色。夜が侵す戦場は、遠くからは黒いカーテンに覆われているように見える。

「間に合つよね……？ キズオトの大切にしている日々、ボクらが守れるよね？」

ボクの問いに、サキは薄く笑つた。

「それはあなた次第ですわ、チヨ。彼女はもう自分の後先を決めてしまつていて。だとすれば、あなたが彼女を説得して彼女の決意を変えるだけですわ」

自分は関わらない、彼の態度は言下にそう物語つていた。
試されているんだ。

サキはボクの価値を推し量つていてるのだろう。この先、ボクと彼、どちらがツミと戦う上で前に立つべきだらうかと。

ボクは、声に迷いを込めず言つた。

「ボクは、キズオトは友達と一緒にいるべきだと思う。キズオトはもう生臭い戦いなんかに関わっちゃいけないんだ。だから、ボクは彼女のところへ行つて、代わりに戦いたい。 そのため、力を貸して、サキ」

「 上等」

言葉は少なく、サキは満足げに笑みだけを浮かべた。そして黒い銃を手に取り、山の向こうを指し示した。

戦場はすぐそこだつた。

5・1 「月に宛てられた手紙」（後書き）

拝啓～と書くと『京四郎と永遠の空』を思い出します。

「諏訪」の名は、諏訪神社、からもらいました。諏訪神社は建御名方神（タケミナカタノカミ）を奉る神社で、その建御名方神は風の神であるらしいのでこの名前です。

今回の手紙。キズオトが漠然とながら夢の家族を描写するところは要チェックです。いずれ何かに使えないかな、と思っています。

次はやつと戦闘が入ります。

5・2 「護りたい場所」

戦場となってしまったキズオトの学校まで、ボクはサキをおんぶして走った。

走るときは重力を調整しながら、なるべく速度を上げていく。途中に森があつたり川があつたり、山を越えるので地形の変化もさまざまだつたけど、大地が道案内してくれるのでそれはたいした問題ではなかつた。それよりも、背中に負つたサキがボクの胸をつかんだり、猫耳に息を吹きかけたり毛を抜いたりするのには困つた。振り落としているかなど、何度本気で考えたことだらう。

とはいゝ、出発してから三十分くらいで、ボクらは目的地の見える山の斜面まで來た。

なぜか、月は昇つていない。空は夜の黒ではなく、厚い雲の向こうから日の光が透けて、全体に白くなつていた。

学校はすつぽりと竜巻に覆われ、空と同じ白い風の壁で見えなくなつてゐる。ここから先には簡単に進めなさそうだった。

「あれ……キズオトのかな、やつぱり」

ボクが言つと、背中から降りたサキが服を直しながら答える。

「まあ、そうですわね。しかし、記憶の不完全なあの子があんなに大きな力を使って大丈夫でしょうか？　ええ　よくないことが起きるはずですわ」

それを聞いて、行かなくちゃと心が急いた。けれど行く手をさえぎるのは竜巻だけじゃない。風の壁の前には、学校に入れないので手をこまねいている異形の集団がいる。日の光の下で見る異形の集団は、また氣味が悪い。

「なかなか沢山いますわね。ここから見ている限り、壯觀、と言つべき感じですか？」

サキは氣楽に言つ。でも、ボクの心はずしんと重かつた。

「ねえ、サキ。……あの中には、妖化している人もいるんだよね？
ボク、人間を殺すのは嫌だよ」

異形とはどこからともなく生まれる怪物のことで、それらに命や心は無い。けれど、夢から現に来た人の中で異形みたいに人間の姿を失つてしまう人がいて、それを‘妖化’とボクらは言う。妖化している人は自我と人間の姿を失っているけど、命はあるし、心だって人の姿だって、方法さえあれば元に戻る。だから、ボクは妖化している人とはできれば戦いたくなかった。

「相変わらずのお人好しですわ」

サキが言った。でも、そこには蔑むような皮肉な感じはなかつた。
「いいでしょ。今回はチヨに合わせてあげることにしますわ。
もつとも、あなたは異形と妖化した人の区別がつかないでしょ
から、私に任せてもらうことになりますけど」

「うん……信じてるよ、サキ」

ボクらは山肌を蹴り、敵の中に突撃を開始した。

*

「k i l l i n g s t a r !」

やや上方に銃口を向け、サキがトリガーを引く。

一回、二回、三回、四回。毒々しい緑の光の塊が次々と銃口から吐き出され、それらは各々小さな弾丸に分かれて敵へ飛ぶ。銃弾の描く軌道は曲線。その無数の曲線一つ一つが、異形の頭を貫通して消滅させる。

ひとしきりサキの攻撃が行われると、目の前の軍勢は少しまばらになっていた。残つたのは妖化している人、のはず。彼らは攻撃が

止んだのを知るや、氣味の悪い声をあげてこちらに向かってきた。

「サキ！ 乗つて！」

ボクはサキを急いで背中に乗せる。

立ち上ると、地面を靴の裏で擦り大地に呼びかけた。

「ボクの足踏みに合わせて、踊つて、大地。そして、前に振り上げる足に力を込めて、ボクの前に立ちふさがる全てのものを吹き飛ばして！」

言い終えたとき、敵との距離は十メートルを切っていた。だけど、ボクはあわてず、息を深く吸い込みながら右足を持ち上げ、その場に落とした。

「えい！」

ドン、と地を踏む音が跳ね、そして大地が跳ねた。
敵の足取りが乱れる。あるものは躊躇、あるものはその場でひっくり返った。そして、バラバラと敵の隊伍が乱れた。

次に、ボクは地面を蹴り上げる。表面の土を抉り、蹴り飛ばすようだ。

それで飛んでいくのは少しの砂と、重力の塊。目の前にいる敵が、見えない力にぶつかって木つ端のように吹っ飛んだ。

道が開く。

「いっくよ ！」

ダン、と右足による初歩の踏み込み。地が跳ねる。

二歩目のために左足を振り上げ、土を踏む。眼前の敵が飛び、また地が跳ねる。

繰り返す。足を交互に前に出し、身体を支えながら進むのは歩み

という動作。速めれば走りとなる。ボクは大地を踏み、震わせ、敵を蹴散らしながら走る。

風の壁までだいたい四百メートル。こっちの速さが秒速十メートルくらいだから、四十秒走り続けられたらボクの勝ちだ。

だけど敵は幾千といふ。その形態は色々だ。

八十メートルくらい走ったところで、地震に対処できる身体を持つた人が追いすがつってきた。

まずは翼のある人。竜巻の影響で飛びにくそうだけど、とりわけ頑丈そなのが十五人くらい、ボクの後ろについた。

「サキ、お願ひ！」

「……人使いが荒いですわね」

ボクにしがみついたまま、サキは後ろを向く。両手は放せないので銃は使えない。額の紫苑の瞳で敵を捕らえ、彼は言ひ。

「ネガイ、力を貸してください。 blade shade」

飛ぶ人の影から黒い刃が飛び出した。影の刃は、あるじの翼を下から切り裂く。

甲高い叫び、絹を裂くような絶叫が次々と聞こえはじめる。

が、敵はそれだけじゃない。今度は地面を走つて追跡してくる人がいる。手足四本に加え、一本の足を脇腹から生やして地面を走る人。おぞましい姿、狂つたように笑う顔に、人間らしさは微塵もない。

そして六本足は速かつた。ボクの前に回れば蹴散らされるけど、左右と後ろには何の攻撃もないのに、特に斜め後の辺りからしつこく突進攻撃を仕掛けてくる。

ボクはそれをジグザクに走つて必死に避ける。そして、

「えい！」

跳んだ。

一際大きく大地を蹴つたことに合わせ、地面が大きく揺れた。さしもの六本足もひっくり返り、さらにボクの着地の衝撃で何人かが跳ね散らされた。

「そうですわ、と背中のサキが何やら弾んだ声で言った。

おさまらない敵の進撃をかわしつつ、ボクは何事かと彼に尋ねる。「良いことを思いつきましたわ。……チヨ、三つ声に出して数えて、それから思いっきり跳んでください。なるべく身体はまっすぐにして、前のめりに」

何か嫌な予感がした。けどボクが何か言う前に、サキは「三」と言つたのでボクもカウントダウンをはじめてしまった。

「、一、一、ジャンプ！」

「brilliant jet！」

地を離れた直後、未知の推進力が足の下に生まれたのを感じた。視線を軽く下にやると、そこに目も眩む光があった。光はボクの身体を上に押し上げている。これは跳躍ではなく、飛翔。

「な、なになに！？」

「チヨ！ 落ち着きなさい。ちゃんと姿勢が保てれば、ここまま百メートルくらい稼げますわよ」

そんなこと言われても……

「ボク、飛ぶのは苦手……って、何か背の高いのがいる……」

手を伸ばしてくる。

反射的に身を捻つてしまい、バランスを崩した。ボクらは右前に、敵の固まっている真っ直中に墜落した。

不時着の瞬間、ボクは何も言わなかつたけど、地面がまた大きく跳ねて敵を遠ざけてくれた。けれど、敵はすぐさま寄つてくる。

「来るな！！」

大地のエネルギーを爆発させ、敵を吹つ飛ばす。でも命を奪わないように力を抑えているから、向こうの復活も早い。その上、次から次へとこの場に敵が殺到しているからきりがない。

「 サキ、手伝つて……………サキ？」

彼は不時着の衝撃から立ち直れず、座り込んだままぼうつとしていた。

絶体絶命だつた。ボク一人なら力尽くで逃げられそうなものだけど、サキがいてはどうしようもない。

とにかく地震を起こして敵を近づけなくする。だけど、手前の敵を飛ばしても、すぐ後ろの敵がやつてくる。ボクはただ、敵の群れをかき混ぜているだけだった。

知らず識らず、ボクは叫びだしていた。何も考えれず、危機的な状況に心だけでも抗うように、空しく叫び続けていた。

*

「 炎よ！」

*

赫い風が吹き抜けた。

視界が一度遮られ、晴れたときには眼前に迫つていた敵がすべて消えていた。……遠くで、何かが叩き付けられる衝撃が、僅かに伝

わってきた。

「これ……、何が……？」

世界は一変していた。

まず、厚い雲に覆い隠されていた太陽が顔を出していた。そして、周囲の地面が一定方向に ちょうど太陽のある方向から 挟り飛ばされていた。それはよほど大きな力だったに違いない。けど、ボクはそんな力を一切感じなかつた。

何故だろうと思い呆然と後ろを顧みると、サキが座つたまま自分の影に手をついていた。ボクが見ている間に、彼は悠然と立ち上がり太陽を仰ぎ見た。

「 やつと来ましたわね。遅いですわよ、アカ」

サキはいない人の名を呼んで話しかける。いや、そこには確かにアカがいた。太陽を背にして、金色の炎をまとい彼女は飛んでいた。

珊瑚色の目でボクらを見下ろすアカ。その雰囲気は不思議と落ち着いている。この前会つたときは、全然違う。

「ふん……。先視して私がいつ来るか知つていたあんたが、‘やつと’なんて言うんじゃないわよ、サキ。おまけに、結界張つて私の攻撃を無効化したでしょ」

口調もまた平静だつた。

たん、と軽く音を立て、少し離れた場所にアカが舞い降りる。ややおくれて、彼女の背後に二つの影も現れた。糸鶴と鷺累だ。

「そつか……。ここいら辺が夜になつてなかつたのは、アカが来てたからなんだね。ありがとう、アカ、助けてくれて。でも、ここにいた人達、みんな殺しちやつたんだね……」

ボクの言葉にアカは答えない。彼女は足音も静かにこちらに歩み

寄り、

「 馬鹿じゃないの？」

ボクの左頬を叩いた。

「別にあんたを助けに来たわけじゃない。私は 漆黒の守護者 として、ここにいる連中を焼いてまわってるだけ。 それを何？ あんたは異形どもに囮まれてただ喚いていて。一体何しに来たのよ？ 私が来なかつたら、あんた、今頃土に還つてたんじゃないの？」 怒声ではない、けどボクの心に重く響く声と言葉。

「中途半端な優しさじゃ、ツミには勝てない。 失せなさこ、この戦場から」

それだけ言つて、アカはボクに背を向ける。
彼女の言つこと、はじめからわかつていた。ボクの戦う相手は、みんな手加減なしで力を振るう。ボクが手加減して敵うはずもない。でも

「 ボクはここで戦いたいんだ。力が足りなくても、覚悟が足りなぐても、ボクは戦いたいんだ……戦わなくちゃいけないんだ！」

振り向きながら、アカはまた右手を振るう。
けど、今度はその手を受け止めた。
腕を掴んだまま、ボクはアカと向き合つ。睨み合つ。互いの想いを見せつけ合つみたいに。

「 せうやつて、あんたはサキの身まで危うくしたのよ？ その言い訳はしてくれのかしら？」

「 言い訳はしないよ。でも、次からもつとひやんとしてみせるー。」

「 甘ったれるんじゃないわよー。」

アカの膝がお腹にめり込んだ。

痛みと衝撃で身体を屈しそうになる。でも「いらっしゃい、一層強い力を込めてぐつとアカを睨み付けた。

「 今の手加減されてましたわよね、糸鶴さん？」

サキが言った。

「 そのとおりじゃな、サキ。実を言つて、ここまでも『妖化性の異形は殺さない』で。一人殺したら、あなたの指を一本焼く』とあやつが言つもんじやから、ここに来るまで異形以外は殺さないようにしてきたんじや。だから時間が掛かつたんじや。 のう、鷺累？」

糸鶴が言った。

「 まったくだ。今日のあいつは変だ。しかし、最近のあいつはますますおかなくなつたからな。逆らつてマジで火葬にされる」

鷺累も言った。

ボクの目も前で、アカの顔がみるみる朱に染まつていった。鮮やかなものだった。

「う、うるさいわよつ！ 外野は黙つてなさい！」

そう大声で言いながら、アカはパンとボクにつかまれていた腕を振りほどいた。朱くなつた顔を隠すようにそっぽを向き、腕組みして言つた。

「 ここに来てやつたのはね、あの竜巻を突破するのにあなたの力を使つのが一番らくだと思ったからなのよ！ 別に、あなたのためとかじやないわけ。それに、あんたがその調子だつたら、頼まれたつて願い下げだつていうこと！」

炎の属性のアカは、風とは相性が悪い。ボクの、「搖ぎない」という大地の属性なら、あの竜巻もある程度楽に越えられる。

けど、アカの本当の属性は、太陽、だ。本当なら竜巻だつてなんでもないはずだ。それでも来てくれたのは、アカの 優しさ、なのかなあとと思う。

「うん アカ、ボクに力を貸させて。一緒に、キズオトに会いに行こ!」

「……足引つ張るんじゃないわよ」

周りを見ると、削られていた軍勢が数を取り戻し、ひたすらに波となつて迫っていた。もうおしゃべりしている時間は無い。

アカが言つ。

「じゃあ、そういう事で私は行くから。あとは逃げるなり戦うなり好きにしなさい。妖化性異形は……できれば殺さないで」

「わかつた、と言いたいところじやが……わかつていると思つが妾と鷺累には、お主のような魔物を見分ける‘火眼金睛’の瞳は無いのじやぞ。お主の頼みは聞けそうに無い」

糸鶴が苦々しく言つた。どうやら糸鶴はアカに好意的なんだなあ、とボクは思う。もちろん、その方がボクもうれしいけど。

そこで、サキが答えた。彼は銃を構え意気揚々としている。

「なら、およばずながら私が。^{わたくし}アカの眼ほどではありますんが、ある程度は見分けられるので。ここは共闘とことことで、よろしいですわねお一方?」

「いいだらう」

糸鶴と鷺累とならんだサキに、ボクは声かける。すると、彼はうれしそうに笑つて言つ。

「あなたの願いをかなえるために、私はここに残ります。ですから、あなたもがんばりなさいまし」

「……うん。行つて来るよ、サキ」

サキと離れることに鋭く胸が痛んだ。どうして？

しかし今はその疑問を黙殺する。ボクはすでに戦場を選んでいるから。キズオトが守りたいものを守るという戦場を、ボクは選んでいるから。

「 行くよー。」

5・2 「護りたい場所」（後書き）

ずっとと言い忘れていたことを。

アカの「コードネーム」、「紅鳥」の由来。彼女のシンボルカラーのあか（紅）に、太陽の鳥であるカラスを組み合わせた名です。あんまり、「コオウ」という音は良くないですね。

‘火眼金睛’は中国の伝奇によく出てくる、妖怪を見抜く特殊能力です。『西遊記』とかにあつたはずです。アカの瞳は普段は珊瑚色ですが、この術が発動すると金色になる設定です。

ところで、皆さん『天使な小生意氣』という漫画・アニメを御存知ですか？私は子供の頃にちょっとだけ見たぐらいです。全然記憶になかったはずのですが……

やられました。‘天使’の姓を持つ者がすでにいよつとは無意識だつたんですね。本当に、パロディとかということはないんですけど。

風の壁を抜けると、そこは夜だった。

学校の白い外壁が蒼い月光に照らされ、妖しく光っている。敵の気配は希薄だけど、周囲の空気にはどことなくなじめない感じがある。純粋な悪意。押し隠した悲しみ。そんなものが、どんどんと漂っていた。

「胸糞悪くなる空氣……。こんなところはなきりとおでりぱしたいものね」

アカが口汚く言った。

「……キズオトはたぶん校舎の中にいるよ。気配を隠しているみたいだけど、もう少し近くに寄せたらわかるはずだよ」

「なら、もともとしてないで行くわよ」

ボクとアカは一緒に玄関に急いだ。

校舎内の空氣もどんよりしていた。

電灯類は点けられていない。生徒も先生も大勢いるみたいだけど、みんなこの異変を怖れて息を潜めている。明かりも自分たちで消したのだろう。校舎に入った異形は一・一一体。今のところは誰も傷ついていないみたいだけど、

「夢が降りてきたら、みんな……大変なことになっちゃうんだね」
ボクが言うと、アカが答える。

「ま、皆殺しね。運が良いと生き残るかも知れないけど、惨劇を前にした、重苦しい静寂。ただ蒼い月光だけが冷淡に漏れ入っていた。

それはそうと、ボクはアカを伴つてキズオトを探す。探す、といつても校舎を造つてる建築材に聞けば彼女の場所を教えてくれるの

で、ボクは導かれるままに歩くだけだった。

どうやら、体育館の前まで来たよう。

体育館の大きな鉄の扉の前に、非常灯の緑のランプ照らされて一人の人影が見えた。

一人とも学生服らしい服を着ている。服の形から男の子と女の子だ。まるで門番のよつこじちらを待ち受けている。

背後に殺氣。

「アカ！ つ！」

とつさに横ステップすると、そこに鋭い風が落ちた。鉄の刃、日本刀だった。

「曲者め、覚悟！」

それははちょっと低めの女の子の声だった。

月光の無い闇の中、銀の線が一直線に虚空を走る。
ボクは慌てて後ろに避ける。けど しまった！ 背中が壁に付いてしまい、そこに矢のような突きが来た。

もうだめだ！

死を覚悟したとき、刀を持つ女の子が横に飛んだ。……アカが彼女の脇腹にミドルキックを入れたんだ。

飛ばされた女の子は、しかし受け身を取つてすぐさまこじらに飛びかかるうとする。けど

「動くな！」

炎が女の子を包囲した。女の子はやむなく動きを止める。

「ふん……まるでガーディアン気取りね。だけど、密に殺意を向いたときの覚悟はできているのかしら？」

炎が勢いを増す。アカは女の子を焼くつもりだ。

「やめて!」 「 やめてください!」

ボクの声に男の子の声が重なった。
声の主は扉の前に立っていた男の子。振り返つて見ると、炎に彼の姿が照らし出されている。

「もしかして……透^{とおる}?」

前に夢^{ゆめ}で見た男の子。あの時も、彼はキズオトといった。

「どうして、俺の名前を知っているんです……?」

特徴的な琥珀の目を丸くして、平島・透はボクに言った。
そのように親しみを感じる。ボクは透に、ちょっとね、とだけ答え、アカに言つ。

「アカ、その子を許してあげて。ここにいる子達は、みんなキズオトの友達だよ」

友達、と微かに呟き、アカは火を消す。解放された刀を持つ女子に、透がすかさず走り寄り、両肩を掴んで動きを封じた。
「はなせ平島……！ あいつらを信用するのか」

唸るように女の子は言つ。

「落ち着いて、勘解由小路。の人達はきっと悪い人じゃない。俺が請けあうから」

透の諭しに、勘解由小路・津辺はしぶしぶ刀を納め立ち上がる。
けど、疑いのまなざしはまだ納められていない。

ともあれ、場が静まったところでボクは自己紹介をする。

「えっと……はじめてまして、だね。ボクの名前はチヨ。こつちはアカ。ボクらは……特にアカはキズオトと、その……相川・千風と、

縁があつて、それでここに来たんだ。あやしいのは認めるけど、君たちには敵意はないよ……」

尻っぽみになってしまった。

津辺はそんなボクの、自信なく揺れる尻尾を容赦なく見ている。横でも、もう一人の女の子（たぶん水月）が半信半疑にボクを観察している。

透だけが、ボクらを信じてくれているみたい。

「相川のこと、何か知ってるんですか……？」あの、学校がこんなになつてから、相川はずつと体育館に閉じこもつていてるんです。俺達が体育館に入ろうとしても、なんか開かなくて。中からはボウボウって風の音ばかりするし

透の言つとおり、少し離れていても扉の向こうから風の音が聞こえる。きっと、あの風が扉を中から圧迫して開かなくしているのだろ？。

ボクは、ボクを囲む三人の子達に意識を戻す。

三人とも想いはちょっとずつ違うけれど、みんなキズオトのことを心から思つているんだと、何か胸に迫るものを感じた。

「ありがとう、みんな。キズオトと 千風と仲良くしてくれて。……で、ボクが言つてもしようがないだろうけど、千風も、そう想つてるから。

説明するのは難しいけど、今、千風はみんなを守るために戦つてるんだ。でも、本当は千風だって戦うべき人ではないんだ……少なくとも、ボクはそう思う。だからボクはここに来た。彼女の戦いを代わるために。

ボクらはあのドアの向こうに行こうと思つ。千風をみんなの元に帰るために。それまでここで待つて欲しいんだ。 いいかな？」

「　はい、どうかよろしくおねがいします」

答えたのは水月だった。手紙にあつたとおり、本当に可愛らしい女の子だと、彼女を見た瞬間に思つた。
次いで透も頷く。津辺も、しかめつ面だったけど納得してくれたようだつた。

ボクは扉の前に立つた。

扉は壊すしかない　壊したときの衝撃を考えて、ボクはまず後ろの子達を守るための壁をつくつた。

「　アカ、お願ひ

「蓮華紅塵！」
レンカ「ルヂン

ドン、という爆碎の後、なだれ出る風がボクらの顔面を叩いた。

一切の光、蒼い月光さえない、無明の闇。漆を流したような闇の中、風だけが縦横無尽に吹き荒れていた。まるで黒い風がここを満たしているような、そんな錯覚さえする。

「キズオトおー！」

ボクは彼女の名を呼ぶ。けれど答えはない。そもそも風の音が激しそぎて何も聞こえない。自分の声さえ聞こえないのだから。

床にしつかり足をつけ大地の引力を頼りながら、ボクはアカの手を引いて風の中心へ向かう。そこにキズオトはいるはず。

はたして、そこにキズオトはいた。自らに閉じこもるように身体を丸めて耳を塞いで、渦巻く風の中心に浮いていた。その姿は周囲

*

の猛威に比べてあまりにひつそりしていて、暗闇でも見える猫の瞳にも、彼女の姿は朧に見えた。

怖いんだね。

サキの言つたとおり、彼女は力の制御を失っているみたいだつた。暴走する力が怖いのか、それとも力を使う自分が怖いのかかもしれない。みんなに嫌われてしまうことが怖くて、ここに閉じこもつているのかもしれない。

「キズオト、もう大丈夫だよ。ボクらがここに来たから。ボクらがここを守るから」

返事はない。もう十分な距離に近づいたから、声は届くはずなのに。

と、そこではつと思い当たつた。目の前にいる女の子は、もうキズオトではないのかもしれない。

「 千風。相川・千風、ボクの声が聞こえる?」

彼女は反応した。

やはり彼女はもう、キズオト、ではないのだ。身にまとるのは和服ではなく、ブレザーとスカートの黒い学生服。セミロングの髪は黒。瞳の色は昔の名残かスカイ・ブルーだけど、それを除けば彼女は普通の現の少女と変わりない。

「 千風、落ち着いて聞いて。

この学校は今、悪意をもつた存在に脅かされている。けど、安心して。ボクらがここを守るから。千風はもう戦っちゃいけない。向こうで友達が待っている。みんな千風のことを心配している。だから、さあ、戻つてあげて」

ボクは風に浮かぶ千風の両肩に左右の手を置き、静かに、力、を込めて地に下ろした。

千風の身体が重力化に置かれたとき、体育館の闇を騒がせていた風も治まった。

「やれやれ、やつと治まつたわね。……灯りをつけてもいいかしら？」

今まで風で身動きできなかつたアカが、ほつとしたように言つた。黒いースーツの彼女は、暗闇の中で金の瞳だけを爛と輝かせている。まるで猫のようだ。人のことは言えないけど。

「ちょっと待つて。 千風？ 灯りをつけてもいいかな？」

目の前の少女は弱々しく頷く。

座りこんでいるボクと千風の上に、アカが火の玉を浮かべた。月の明かりとはまったく違つ、赤みを帯びたそれがあたたかくボクらを照らし始めた。

と、千風が眼を丸くして頭上に浮かぶ火を見あげていた。どうやら驚かせてしまつたようだ。

「あ、あのね？ 恐いことは無いから大丈夫だよ。 もしかして、見覚えあつたりする？」

ボクの問いかけに、あつさり千風は首を振つた。

「あの……あなた方はどなたなんですか？ あたしのこと知つてゐみたいだし……それに、風も鎮めてくれたみたいですし……、手品師つてわけではなさそうですが……」

おずおずと千風が尋ねてくる。いじらしいその表情にほほえまさを感じつつ、ボクは答える。

「ボクは、名前をチヨつていうよ。で、ちば」

「 あんた、私のこと憶えてないの？」

急にアカが口を開いた。

そういうえば、アカはキズオトが記憶を無くしたことを探らな

いんだつけ。

サキが言つていた。ネガイはキズオトの記憶を消したことをアカに言つていないと。その理由は色々だらうけど、とにかくアカ知らないんだ。

背後に立つアカを振り返ると、その顔が不快そうに顰められていた。

「さつきから　あの子供達が話していたときから変だとは思つていたのよね。あの子供達があんたの力を知らないのはわかる。チヨがあんたを戦わせたくないのは、いつもお人好しだと思ってた。けど、今のあんたは確実に変。　私のこと、忘れたとは言わせないわよ、キズオト……！」

忘れた名を呼ばれた少女が、びくりと身を震わせる。

それを見たアカは、いよいよ言葉に力を込めはじめる。

「そう、傷をつくる風の音、それがあんたの名前。攻撃することに誰よりも長けた女。今は私も太陽の靈力を使えるようになつたけど、あんたも現に来て、広いこの世界に吹くすべての風を支配下に置いて力を増しているはず。あんたはね、比類なき殺戮者なのよ、キズオト！」

「　いや！」

千風が耳を覆つた。

彼女はやはり、自分の力が攻撃することに傾いていることに気付いていたんだ。自分の持つている力が、守るためにものではなく、傷つけるための力であることに。だから……彼女は力を恐れたんだ。「聞きなさい！　ここはね、今、二つの勢力が互いに等量の命を賭けて対峙している。どちらかが勝てば、守られた数と同じだけの命が滅びるようになっている。あんたはもうその戦いに関わった。い

まさらあとには

」

「アカ！……もういいでしょ？やめてあげなよ」

ボクはアカの言葉を遮った。

だけど、そこで黙る彼女でもなかつた。

「はん！お人好しの猫が！キズオトはこれまでに何万もの敵を屠つたのよ。いまさら、普通の人間として生きていけると思うわけ？」

「アカ、何むきになつてゐんだよ。……キズオトはね、ネガイが記憶を消しちゃつたから何もわからないんだよ。だから、もつと優しくしてあげてもいいんじゃないの？」

アカは耳を貸さない。ほとんど怒鳴るようにしてアカは言葉を重ねる。

「ふざけるんじゃないわよ！元はといえば、キズオトとツミがやつたことのおかげでこんな状況になつたんじゃない！それを忘れたで済ますわけ？責任を取りなさいよ。私の日々を壊した 罪を償いなさい、キズオト！」

「い、いや…………あああああああ！」

突きつけられた言葉に、激しい拒絶を示したキズオト。彼女の想いに呼応して、静まっていた風の気配が一気に爆発した。

「ち、ちか……！」

豪烈の風に名を呼ぶこともできない。

泣き叫ぶ風に、体育館も歎きしりした。

そして体育館が破裂したとき、ボクの意識は途絶えた。

*

気がつくと、体育館から百メートルほど離れた、グラウンドの真ん中にボクは倒れていた。

世界が軋んでいる。

統制を失いはじめた竜巻が、大気圧を不規則に変化させている。校舎には大きな負担が掛かっている。このままでは、千風が守りたいと望んだ学校自体が壊れかねない。

「千風……」

吹き飛ばされたことによるダメージ自体は小さかった。これも大地のおかげかなと、立ち上がりながら思った。
ど、横にアカが倒れていることに気がついた。怪我はない。気絶しているだけ。

『私の日々を壊した、罪を償いなさい!』

ふいに、アカの言葉が甦る。

口調は強かつた。けど、込められた想い自体はあやふやだつたような気が、ボクにはした。だってアカが本当にキズオトを恨んでいたとしたら、この言葉は真っ先に出されるはずだから。彼女の本心は、まったく掴みづらい。

う、と声を出してアカが目覚めた。

全身を確かめながらアカは立ち上がる。

そこでボクの顔を、瞳を覗き込む。まるで、ボクの瞳を鏡にして自分の瞳を見るように。

「私……言いすぎたかしら……」

ぞんざいな言葉。けど、声には悔やみの気持ちがはつきりと表れていた。

「大丈夫だよ、アカ。今度会ったときはちゃんと話せばいいから。キズオトだってわかつてくれる。だって、一人は家族なんだから」

ボクがこう答えると、アカははにかんだように笑った。そこには言葉はないけど、ボクは確かに‘ありがとう’の想いを受け取った。これだけでいいと思う。誰もが素直である必要はない。それにアカにだつて自覚はあるのだから、ボクが必要以上に口出しすることもない。

「私、疲れたわ。あとはあんたに任せさせてもらひ。……それでいい？」

「うん。じゃあ、またあとでね」

アカを残して、ボクは駆けだした。

強い風の中、目指すのは一人で泣いている女の子。

5・3 「供たひ」（後書き）

「おやぢ」とではありませんが、私は一話一話の長さを一定限度以上にしないようにしています。

データサイズで言えば12KBくらい、文字数では六千をおおよそその上限としています。

その理由は、長いと書きづらいし、読みづらいかなと思うからです。しかし話が進む事にそれも難しくなってきました。リアルにもっと時間があればじっくり書いてもいいんですけどね。

とこわけで、生煮えの文章ですが読んで下さると幸いです。

5・4 「大地と風」

＊＊

「じゃあ、またあとで」

『氣安い言葉を残し、チヨは走つていく。その足取りに迷いは無く、小さく揺れるチヨの黒い短髪を見てアカは密かに思つた。

うらやましいものね。

今は、自分も彼女と同じ短髪だ。風に揺られる後ろ髪はもう無い。にも拘らず、どうして心はいまだに揺れ続けるのだろうか。いつかは彼女のようになれるかしら、と彼女は微かな憧憬を覚えつつ自問する。もちろん答えは無い。だが、良い。私は私なのだから。そこまで考えて、彼女は物思いを止めた。

「ササヤキ 戰うわよ」

姿無きものへの呼びかけ。

否、应えはあつた。漆黒の空の下、蒼い月光を受けてきらめく一本の水槍が、アカの背後に音も無く投じられた。

水槍は目標に届く前に音を立て水蒸気となつて霧散した。 アカを守る高熱の結界だった。

「蓮華紅塵！」
レンカハジン

振り向きざまにアカは力を放つ。

力の顯現は、彼女の正面全てを範囲とした大規模な爆発。闇を退ける炎。

だが赫い海の中、湯気を立てながら一直線にアカに接近する影が

あつた。

『』

空気のよう澄みきつた、不可視の刃がアカに振り下ろされる。そのわずかな気配と直感でアカは攻撃をかわし、すかさず眼前を爆破しつつ後ろに跳躍した。

「姿も見せないで攻撃してくるなんて、ずいぶん良い性格になつたじゃない、ササヤキ。それとも……余裕が無いの？」

数秒前にアカが立っていた位置に、ササヤキが忽然と姿を現した。「あなたを退屈させないように、趣向をこらしてみたのよ、アカ。あなたには、ここで私と踊つてもらわなくちゃ行けないから」

ササヤキは顔に微笑を浮かべてアカを見る。その微笑は、何の感情も込められていないただの笑みだった。

「ふん、心配しなくても私はチヨの後なんて追わないわよ。キズオトのことはチヨに任せた。チヨがキズオトをどうしようと、私は関わらないと決めたの。だから、あんたが望むなら世間話だってしてやるわよ。退屈しのぎにね」

アカの言葉には一片の嘘もなかつた。

そもそも、アカがここに来たのは夢の降着を防ぎ、ツミの邪魔をするのが目的だった。アカにとつて、キズオトに会うことはついでに過ぎなかつた。

だが、今のアカはその一番の目的すらチヨにゆだねていた。そのわけは

「……チヨを認めたのね、アカ？」

深い洞察を持つて、ササヤキは言った。

さすがの長姉役ね、とアカは思つた。

そしてアカは答える。普段の天邪鬼さは一切見せず、いっそ清々

じこまでに微笑を浮かべて。

「そうよ。チヨは確かにツミと対等に渡り合える唯一の存在だもの。力を持つていることでは私達はみな同じ。でも、彼女は想いを制している。想いを背負い、その上を歩いていく。想いにただ流されていた、私達は違うから」

憎しみの想いで炎を絶やさなかつた女、アカが言う。

一方、ササヤキもまたチヨについて述べる。

「チヨができるのは、彼女が大地と契りを結び、大地に立つ者故かしらね。彼女は想いを知り、想いを背負う。

キズオト……キズオトはどうなのかしらね。あの子は想いを知ることはできるけど、それを背負うことはできない。そこがチヨと違う。おまけに、彼女は脆いわ。昔は、私達が彼女の心を守ってきたけど、今はもう私達は離れてしまった。これから、あの子はどうなるのかしら？」

愛しき者の下僕となることで想いを封じた女、ササヤキが言った。炎に照らし出される一つの女の顔。だが、その表情はまるで違う。アカの顔にはやや悟つたような諦観の色があるが、ササヤキの顔にはまだ迷いがあつた。

「ま、キズオトのことはチヨがどうにかするでしょ。キズオトが挫けても、チヨは彼女の想いも背負つていくだろうから。……それより、今は私達がさしあたつてすることを決めない？」

ふつ、と炎が消される。

辺りには再び闇が訪れ、一人の姿は蒼の月光が音もなく照らし出す。だがアカの顔は、彼女の手に揺れる火が赤く照らしていた。

二人は睨み合う。そこに張りつめた息づかいと並々ならぬ闘志はあるが、殺意はない。

ササヤキが背中を見せた。

「あら、帰るの？」

一切の含みのない戦闘放棄の動作に、半ば呆れたように、気抜けしたようにアカは言った。

一方、ササヤキの返答はこれまでにない微笑混じりのものだった。「何かな……あなたがいつもの 私の知っているあなたしくないから、調子が狂っちゃったの。興ざめっていうのかしら？……私は帰るから、あなたはそこにいてね。いい？ お願ひよ？」

「……本当に良い性格になつたみたいね」

まあね、とササヤキは振り返り笑つて、そのまま姿を消した。

アカはチヨの消えた方向を見やつた。その彼方では、神秘^{エナジー}靈力の騒ぐ氣配がある。

空を仰ぐ。

天の中心には月、それを囲んで星。澄み切つた星月夜は、その背景にあるものを識らずに見れば美しさ限りないものである。なかなか良いじゃない。

月光は深く、星の散らばりは果てしない。人間の、私の心とは大違いだと、アカは思う。

そしてこの美しいものは、彼女が愛する者が支配するものだ。だけど、あんたは私の物。そう、アカは想つた。

* *

体育館は校舎に後付けされた形だったから、壊れても校舎にダメージは少なかつた。

その扉の前に千風の友達を待たせていたけど、彼らはボクの残し

た防御の術で守られたみたいだつた。

よかつた、とボクは思う。けれど、キズオト自体の問題はまだ解決してない。

今、千風は校舎の屋上にいる。空に一番近い場所で、彼女はひとりぼっちで泣いている。

止めなくちゃ！

風で校舎が壊れそうなのも、夢の降りる気配が強まつていても、戦いが長引いてみんなが不安がついていることも、千風が泣いていることも、みんな止めないと。

再び入った校舎はさつきよりも増して、不安の空氣でどよんとしていた。でもこの不安の原因が、同じ学校に通う女の子が引き起していることをみんな知らない。知っちゃいけない。

ボクは全力で階段を駆けのぼり屋上を手指す。蹴った床が、階段がくずれてしまつてもボクは構わなかつた。

階段の終わりにあつたドアを鍵ごと壊し、屋上に転がり出た。その瞬間、女の人の絶叫がボクに向かって飛んできた。

同時に目の前を跳ねて飛んでいく拳大の氷の塊。ナゲキだ。

ひどいダメージを負つて人の形を取れなくなつたんだ。

とにかく風が強い。風に向かつては目を開けてられないくらいだ。ボクはとりあえず、風下に転がつて、氷の塊になつてしまつたナゲキを拾つた。

「ナゲキ？ 何があつたの？」

答えは頭の中に流れ込んできた。

『ふふ……ちよつとね。あの子の中の思い出を呼び覚ましてあげたの。あの子つたら、自分が私を殺したことを思い出したら。またぞろ私を殺そうとしたわ。まったく……可愛いわね。色々からかつてあげたから、今あの子の心は破れた風車よりもひどい回転をしてい

るわよ。 や、 いれでいいでしょ？ 私は帰りたいから放して
頂戴』

悪びれもせず、 心から愉快そうにナゲキは言った。

「ナゲキ……！」

悔しさを込めて彼女を放ると、 高笑いを残して彼女は消えた。

後ろを見る。 嘴きつけるような暴風がボクの顔に衝突する。 さすがのボクも立つてられない。

「う……千風…………！」

両手を床に付いて絞り出した声に、 意外にも反応があった。風が変わった。地を這つような冷たい風が流れてきて、 ボクの両手を舐めた。

屋上の縁に、 夜空を、 月を背にして千風が立っている。 空色の瞳は、 微笑に細められながらボクを見下ろしている。

「千風、 力を　」

「あたしはキズオトだよ、 チヨ。 相川・千風といつあたしは、 もつこないよ」

そう言つて、 彼女はあどけなく破顔する。 小首をかしげるじぐさんで、 とても子供っぽい。

「あたしね、 記憶が戻つたらどんな感じになるんだろうって考えた。 すゞく、 不安だった。 けど、 戻つてみるとなんてことはなかつた。 無くなるかもしないと思った居場所も、 ちゃんと今とは違う場所だけど、 あたしにはあった。 あたしは、 シミと、 お兄ちゃんと一緒にいればいいんだね

「 それが何を意味するのか、 わかつてるの？ 千風！？」

彼女がここを守らなければ、 ここは夢に潰される。

それは、彼女が大切にした友達が　彼女を大切にしている友達が、死んでしまうということ。例えボクらがここを守つても、千風ににとってはもうここには終わった場所になるんだ。

「わかつてゐよ」

「こともなげに彼女は言い捨てた。

「でも、この学校なんてあたしの仮の居場所みたいなものでしょ？　あたしは記憶が無くて、どこいればいいか判らなかつたからここにいた。だから、いまさらここがどうなるうど、あたしには関係ない」

「嘘だ！　ここには千風が好きなみんながいるんだよ。手紙にもそう書いてた。千風の友達、透やみんながいるからここを守りたいって、キミは叫んでいた！」

「つるさい！　あたしが捨てた手紙なんか関係ないでしょ！」

否定の叫び。

そして続くのは、絞り出すような郷愁の言葉。

「あたしは力を使つたからもうここにはいられない。もうどうせここには戻れないのなら、無くなつてしまえばいいんだ！　みんなみんな、あたしの世界から消えちゃえばいいんだ！」

その顔に、さつきまでの薄っぺらな微笑は無い。今彼女の顔にあるのは、涙をにじませたありきたりな女の子の表情だ。

いつしか、静かに吹いていた風は再び荒れ始めていた。それも、まるで吼えたけるような声を轟かせて。

そこまで彼女が友達を無くしたくなかったのかと、ボクは深く同情した。そして、何もかも壊してしまいたくなるほどに友達を大切に思つた彼女に、ボクは大きく同感した。

「千風はもどれるよ！　みんな千風を受け入れてくれる。信じてあげてよ、友達を！」

だけど不安のあまり自分の殻の中に眼を瞑つて閉じこもつてしまつた者に、声は届かない。

「戻れない 戻れるわけがない！ だつて風が、世界があたしに戦いを望むんだもん！」

「違う！ キミは本当に風の想いがわかつてるの？ 風は、千風の力となることを、千風と共にある事だけを望んでいるんだよー。」 風もまた、彼女のためにどうしたらいいかわからない。だから、こんなにも荒れ狂っている。

彼女は確かに力と記憶を取り戻した。でも彼女の本当の力、風の声を聞き世界を知る素質を取り戻してはいないんだ。

「わからない、わからないよ……。あたしには聞こえない。あたしは力を使って戦うことしかできないよ…………」

「……なら なら、戦おう、千風。そして教えてあげる。千風の本当の力と、風の想いを！」

彼女が絶叫する。

風が爆発する。

戸惑いが洪水となり、濁つていた想いが溢れ出した。

そして彼女から放たれる必殺の気配。それは強く、恐ろしい。だけど、この向こうには彼女自身が失ってしまった本当の想いがある。その想いを教えるために、その想いを知るために、

戦闘を開始する！

*

彼女の呼ぶ風は、大気の運ぶ純粋なエネルギーとしてボクにぶつかる。

ボクに風を切り裂き避ける術はない。目の前に壁状の防御結界を張りながら、しゃにむにこの身体を前に押し出していくしかない。

「うつ……ぬぬ……！」

足を踏み込むたびに、コンクリートの床は砕ける。

靴はとうに破けてしまった。足を猫のものに変え、爪を立てて前に進む。

前進は加速させる。重力の制御、身体中の筋肉、持てる限りの力を発揮し、ボクは走る。

「ち、かぜえー！」

拳を構える。彼女の力を碎くために、彼女を打ち倒すための攻撃を行う。

拳の速度は野球選手の投球くらい。当たればひとたまりもないだろうけど、ボクは迷いを込めずに撃ち出す。

彼女は避けなかつた。

けど、まともに食らつたわけでもなかつた。

「……軽いね」

彼女は、風に木の葉のように身体を微妙に動かし、攻撃を殺した。

戦いに溺れた、うつろな表情で嗤う彼女。

彼女の指鉄砲が、ボクの額に当てられる。

「バン」

彼の人差し指から、すさまじい衝撃が放たれた。

とつさに防御の力を額に集中させたので、頭に風穴が開くことはなかつた。けど防ぎきれなかつた衝撃と吹き続ける風の力で、ボクは仰向けに押し飛ばされた。

「パンツアーファウスト！」

彼女がパントマイムで肩に何かを担ぐ動作をした瞬間、ボクは慌てて逃げ出した。

「！」

爆風。圧縮された風の球だったみたいだけど、とても受けきれるものじゃない。

圧縮空気弾による爆発に火氣は一切無い。だけど、破碎する、という目的においてこれほど効果のある攻撃法を、ボクは他に知らない。

彼女は次々と空気弾を撃つているようだった。爆発と同じくらいの間隔で、見えない何かを支える手が上下している。

そうか、ロケットランチャーだ。

彼女は自分の力を、実在の兵器に例えて具象化させているんだ。瞬く間に屋上にあつたものが破碎されていく。屋上の入り口とか、ベンチとか。

やっぱり力では勝てない。そう悟り、ボクは術を使うことにした。

「大地、ボクに力を貸して。

『六（陸）式封印術、起動！』

「

少しでも彼女の力を弱める術。

だけど、術が発動し一帯の重力が少し増えた瞬間、校舎が負荷に耐えきれず悲鳴を上げはじめてしまった。

「まず

「ねえ、これはどうかな？ ラティ・サロランタ！」

風の機関銃。

ボクは身を小さくし、無数にばらまかれる風の弾丸を防御する。身動きができない。むやみに戦えば、蜂巣にされてしまう。

やっぱりあれを使つしかない。

問題は場所とタイミング。

「千風えー！」

時間限定で防御結界を限界まで強化し、ボクは雄叫びを上げ風の
弾幕を突つ切る。

拳を前に出す。

彼女はまたカウンターを狙つて避けようとはしない。けど、ボク
の動きはフェイントだ。

彼女の目の前でボクは両腕を広げる。

タックル。

屋上の縁に立っていた彼女を巻き込んで、ボクは屋上を飛び出し
た。

5・4 「大地と風」（後書き）

千風はミツタリーマニア、ところが影の設定です。彼女にとつて近代兵器というのは力の象徴です。

言っている名前の武器自体はできとうです。

……後書きって難しいです。というか、最近になつて苦手になりました。

文章を書いていると、あれこれ書こうと思うのですが、いざ後書きを書く段になると何を書きたかったのか思い出せなくなります。メモしていると良いんですけど……さすがに後書きのネタをメモする気もありません。

5・5 「新しい名前」

タックル。
ダイブ。

ボクらが落下していると、彼女を守る風は落下速度を緩めようと下から吹き上げてくる。

けど統制の乱れた風が、力強い大地の引力に敵うはずがない。三階の上、高さにして十メートルくらいの屋上から飛び降りたボクは、彼女を下に相当な勢いで地面とぶつかった。

「 かは！」

彼女の肺から空気が叩き出される。

もしかしたら彼女の肋骨が折れてしまつたかもしれない。けど、あとで治すからと、今は無視した。

「『大地の腕^{かいな}、その広きを知れ！ “地縛”！』」

通常の三倍くらいの重力が彼女の身体に掛かり、身動きを禁じる。同時に風の力も大地によつて縛られ、ボクは彼女の戦闘能力を著しく弱めることに成功した。

しかし彼女は抗う。動かない身体に力を込め、目を見開いて風を叫ぶ。

「助けて！ ファルクラム！」

今度は戦闘機！？

大地の記録からボクはその名を、その力を知る。

「バカ！ 千風まで危ないじゃないか！」

ボクの全身で彼女を覆う。

甲高いジェット音を立て、頭上を駆け抜ける音速の風。

その風は、もはや風と呼ぶにふさわしくない。軌道に沿う上下左右すべてのものを破壊していくそれは、純粹な破壊の波だ。地面を引きはがすような衝撃波から、ボクは千風を守る。天にさらされた背中の服が千切れ飛んだ。

彼女は我を失っている。一層強くかけた封印の術に考える能力も奪われ、それでも彼女は、狂ったように言葉にならない何かを喚き続けていた。

「 まだ、力が足りない！」

技術が足りない。このまま封印術をかけ続けたら、最悪彼女は精神自体を封印されて昏睡、そのまま植物人間になってしまふかもしない。もつと強いだけではなく、包み込むような高度な術を組み立てられた良いけど、ボクにはその技がない。

と、組み伏せている彼女の胸のあたりから、不思議な気配を感じた。

服の下だと気付いたとき、反射的に彼女の懷に（あとから考えると恥ずかしくて仕方ないけど）手を突っ込んでいた。すると、そこから鎖に繋がれた何かを掴むことができた。

「 それはダメ！」

彼女が不意に叫んだ。

手にしたのは籠甲のかんざし。　　そうだ、前にサキから聞いた、ササヤキがキズオトに遺した封印の力を持つかんざしだ。

鬱金色のかんざしにはひびが走って濁っていた。おそらく彼女の力を吸収しきれずに壊れたんだ。

力を失ったササヤキの術具。でも、まだ込められた術自体は消え去っていない。これを治して力を注ぎ治せば、また使えるかもしれない。

「『よみがえれ碎かれし想いよ。

我は其の物語を知る者。我は其の想いを知る者なり。

其、我が力を受ければ、其、応えて再び想いを力とせよ。』」

かんざしがまた力を放ちはじめる。

けど、まだ彼女の力は鎮まりきっていない。

その時だつた。ボクの身体の奥と大地が共鳴し、大きな何かがボクにその存在を識らせた。

「‘神器召喚’！？」

全く知らない術式がボクの頭に流れ込んできた。

ぐつと意識が大地の深みに引っ張られていく。けど、彼女を前にしているボクもいる。ボクの意識がこれまでにないくらい広がつていく。

「『安らかなるみどりごの祈り。命守る母の脈打ち。

今、土のちから集いて、ここに極みのかたちを為す。

我、魂鎮めのちからを望む者。

古よりうたわれし神のまもり。大いなるかたちなす美しきその名は……。』」

半身を起こすと、世界の流れを感じた。

今、その流れはボクらを取り巻いて渦巻いている。

彼女のあやつる風さえ、この時は渦に巻き込まれていた。渦巻く

神秘靈力は、ボクと彼女の間で集結し、そして結晶する。

「ボクに力を貸して……『八尺瓊勾玉！』」

やさかにのまがたま

『 』の形に似た伽羅色の勾玉がここに顯される。

その力は絶対的な鎮静の力。八尺瓈勾玉は周囲の力を吸収し、大
地に還しあしていく。ご主人様が、月の王国 が発動させていた降ダウジ着の術さえ、無力化され解除される。

最後に竜巻が消え、世界は鎮圧される。優しい黄昏が訪れたのは
間もなくのことだった。

*

「立てる……千風？」

斜陽に照らされて金色に頬を染めている女の子に、ボクは問いか
けた。

「あたし、千風なのかな……？」

迷うような声は、黃金色の土に落ちて消える。

土の上に横たわったままの彼女に、ボクははつきり言つ。
「キミは千風だよ。千風が拒まない限り、千風は千風だ。 とて

も、良い名前だよね」

「うん……そうだね」

ボクは手を差し出す。

彼女も手を伸ばす。 まっすぐ、空に向けて、風を求めるよう
に。

その手を引いて彼女を立ち上がりせると、祝福するよひにやわら
かい西風がさあっと駆け抜けた。

「今、風の声が聞こえた。……なんか、すごく久しぶり」

そよ風にもぎられる声で千風が言つた。その頬に、輝きがひとつ
すぐ。宝石のように。

「なんて言つてた？」

「それは

」

体育館があつた場所まで来ると、そこに石のドームが瓦礫に埋も
れていた。

ボクが合図するとドームは開く。中から現れるのは、千風の三人
の友達だ。

一番に駆け寄ってきたのは平島・透だつた。

「相川！」

千風は名を呼び返すことはしなかつた。

二人は間近で向かい合つ。標準的な背丈の透より、千風の背はち
よつと低い。

「相川……俺、その…………」

口ごもりながら、透は言葉を紡ぎはじめる。絆を紡ぐための
言葉を。

「俺、相川が何者だつたとしても気にしないから。例え相川が宇宙
人だつたとしても、相川は俺の友達だ。だから、もう一度とこ
んなことは……ひとりで閉じこもつたり、いなくなつたりしないで
くれよ、相川……」

千風はうんとは言わない。そこはかとなない声で彼の名前を呼んだ
だけだつた。

氣詰まりな沈黙。

打ち破つたのは、千風の四人目の友達だつた。

「よく帰ってきたな、相川・千風」

「 つ、詩之崎、こままでビニにいたんだ?」

夕日を背に、長身の男の子、詩之崎・三都が現れた。

少し長めの髪を夕涼みの風になびかせてこちらに歩み寄る三都。その姿は、大人顔負けの雅さがあるとボクは思った。

三都は千風の前で立ち止まる。切れ長の目ですっと千風を見下し、問いかけた。

「相川　お前は今ビニにいる?」

はつと千風が、そしてボクも息を呑んだ。

それはいましがた風が彼女に送った問いと同じだった。その問いの本質は、決して彼女の物質的な所在を問うものではない。彼女の想いの所在を、彼女のこころざしがどこに向かっているかを、三都が、風が彼女に質問したんだ。

「あたしは……」

ためらい。

けど、彼女の願いは一つ。それを口に出せないのは、彼女なりの罪悪感か、後ろめたさか。

しかし彼女はちゃんと願いを口にできる。　彼女の想いは必ず吹く。

彼女の風は

「あたしは……」

吹いた。

鐘の音のような、おおらかな風が駆け抜けた。
‘どう’とか‘こう’とか、もうそんな言葉では表現できない風
が、いまこの場に吹き渡つていた。

知らない風。

未知なる風は、そのまま未知なる彼女の象徴だった。
真新しい相川・千風は頬を上気させ、ゆっくりとやつてくる宵闇
の中、三人の友達と手を取り合つていた。
よかつた、とボクは思う。土も風もそう思つていて。
暮れなずむ空の下、ボクは自分の勝利を噛みしめていた。

*

県立諭訪高校を巻き込んだ現と夢の戦争は、一日後には突発的で
局所的な竜巻と言つことで事後処理がなされた。

もちろん、そんなことは建前に決まつている。学校にいたすべて
の人々が、現世にあるべきでないものを目にした。けど黒服に身を包
む 漆黒委員会 の人達は、猫の手（ボクは関係ない）も借りたい
くらいに忙しいので、みんなの記憶を操作する」とまもなく引き上
げていくこととなつた。

そうなるまでの四十時間前 つまり戦いが一段落してから六時
間ほど経つた頃 ボクとサキは学校からまだそう離れていない山
の中の、無人小屋の屋根の上に昇つて半分の月を見ていた。
ちょうど南の空の真ん中に来た月は、やさしい銀色。紗のような

雲が穏やかに天空を流れ、時々月を覆う。

星はチカチカと瞬いている。乳色の天の川は、星明かりを夜空から地上へと流し込んでいた。

「それで……結局、彼女は、キズオト、であることをやめられて、普通の人として生きることにしたんですね?」

夜の静寂をできるだけ乱さないように、サキがそつと尋ねてきた。

「うん、キズオトはその名前を捨てて、相川・千風、としていることを決めたよ。やさかにのまがたまハ尺瓈勾玉で力も封印してきたから、今の千風には風揚げするくらいにしか力はない。あとは風の声を聞くことはできる。でも

「でも?」

千風と別れたときの光景が甦る。

宵闇を渡る涼しい風を受けながら、千風はさわやかにこう言った。「近いうちにまた会おうねって千風は言ってた。千風は、ツミに関わった人間としてではなく、この世界を守る人間として、ボクに力を貸してくれるって……」

「うれしくないんですね?」

言葉を尻っぽみにしたボクの気持ちを、サキが代弁した。

彼の言うとおり、ボクは千風が参戦することを喜ぶことはできなかつた。何故なら、千風には素晴らしい友達がいる。もう一度と友達から離れるべきじゃない。それに……戦いに加わって命を落としてしまうかもしれない。

「そういう考えは お節介といつものですわ

サキがきつぱり言った。

「あの子は自らの意志でそうきめたのでしょうか? ならば、私達が憂うことはなにもありませんわ。あの子は強い子です。きっと決断の先に最善の結果を掴むはずです。だからチヨ、あなたは祝福

してあげなさいまし。あの子、千風に、良き風があるよつと
憂うべきことは何もない、か。

そうかもしない。ボクは、怖れ続けていた自らの力とついに向
かい合うことができた千風が下した決断を、ほめてさえあげるべき
なのかもしれない。

「 千風が、良き風とあらん」とを

風が一陣、軽やかに走り去つた。まかせてねと、手を振り行く
うに。

「 そういえば、サキの方はどうだつたの？ 鶩累と糸鶴、 漆黒の
守護者 の人達と仲良くできた？」

ボクが聞くと、サキはくしゃりと破顔した。

「ええ、とつても。別れ際に、果たしあいの招待まで受けてしまい
ましたわ」

「 え？ なんの招待？」

「 ですから、果たし合い、ですわ」

一瞬、思考が停止した。

サキはにこにこと笑い続けている。

「 特段驚くことはありませんわ、チヨ。私達にとつてはともかく、
彼ら 漆黒の守護者 にとつては私達も敵。‘月の王国’、という巨
大な敵を前に、敵味方の整理をしておきたいと思つのは当然ですわ
それはまあそうだけど……。

「 三日後に、東京にあるアカ達の事務所まで来るようになること。
まあ、シミさんとの戦いの予行演習もかねて、アカの牙城に乗り込
むことにしましょう。 それにチヨ、あなただってアカとの決着
を付けるべきではありますんの？」

前のアカとの戦い、暴走したアカをボクとサキが力を合わせて倒したからボクらの勝ちのような気もするけど、完全な勝敗ではない。

アカは変わった。次に戦えば、彼女は自我を失うことなく本当の彼女のままぶつかつてくるはずだ。

「わかつたよ。一緒にに行こう、サキ」

「ええ、よろしくてよ。チヨ」

そこで、サキはボクの手に触れた。

やわらかい、白い手。

でも初めてあつたときには強張ってたくましくなつてきている。それは幾度と繰り返した戦いのせいか、彼の男性化が進んでいるせいか。

ボクはその手を取つて、彼の暖かさを味わいつゝ両手で包み込んだ。

「今日ね、サキと別行動しているとき、ちよつと寂しかつたよ。これまでボクらはいつも声の届き合いつついたから、離れていると……なんか、変な感じだつた」

想いを込めるつてこんな感じかな。

ちよつと恥ずかしかつたけど、ボクは自分の気持ちをそのまま声に出した。すると……なんだろう、胸の中がほつと温かかった。

サキは答えない。彼は瞳を閉じ、口元に変な笑いを浮かべている。

「……サキ？」

呼びかけると、よつやく彼は反応した。

「あら、ごめんなさい。今夜はどうやってあなたを可愛がろうかと考えていましたら、つい妄想だけに夢中になってしましましたわ」

「サキのバカ！」

おほほとサキは愉快そうに笑つた。

「ねえ、サキ」

「なんですか？」

「…………やっぱり、なんでもない」

誓このよいなこの言葉は、むつとあたためてから言ね。

いつまでも、サキと一緒にいたい。

5・5 「新しい名前」（後書き）

解説

八尺瓊勾玉……三種の神器です。あと他の神器召喚もしますよ。
元は天照大神の装飾具らしいです。大地に属するチヨが持っている
ことは、神話的な考証とは無関係です。

ファルクラム……ロシア（ソ連）のMiG戦闘機です。私の戦闘機
の知識は、ゲーム『ACE COMBAT』によります。

「よき風と共に……」といつと『LAST EXILE』を思い出
します。

次回からは第六幕。戦闘全開でいきたいと思つてます。

6・1 「腹が減つては……」

ビルの谷間は昼よりも夜の方が明るい、とボクは思う。あるいは、夜の方が命を吹き込まれたように華がある、とも言える。 とても太陽の下に生きるはずの人間が作った物とは思えない。

ここは東京。かつて江戸と呼ばれた、京都に次ぐもう一つの四神相応の街。

色とりどりの光が舞う往来を、ボクらは歩く。

ボクは猫耳と尻尾がついていて、サキはおでこに三つ田の瞳がある。さらにボクは普通のジーパンにシャツといった軽装だけど、サキは真っ黒なマントを羽織りその下から黒いスラックスを覗かせた、少々ものものしい格好。

目立つてゐるかな……と思いきや、周りを歩く人達も風変わりな格好をしている人は多い。穴の開いたジーパンとか、左右の色が違う靴とか（あれ？ 普通かな？） 猫耳のカチューシャを付けた人も三人くらい見た。ボクらも意外と人波に溶け込んでいるようだった。

そして、時に銀のマントを羽織つてゐる人もいた。ご主人様の家來、^{フレネスファ}月の子^{ムーンズ}の真似なんだろうその人達は、街頭で『新しい世界はすぐそこ』とか『偽りの灯火を消して月光を仰げ』とか叫んでいた。

勝手だなあ、とか思うけど、それ以前に、あの人は今世界を好きじやないんだなあと悲しく思った。 巷には、小石のように絶望が「口」「口」している。それに躓いた人は、もう世界の明るい部分を見ることはできないのかもしない。

そんな街を歩み渡り、ボクらは指定されたビルまで来た。

四十階まである超がつく高層ビル。エントランスにある案内板を見ると、なんとかつていう電化製品の会社が多く階を持つていることになっている。

「あれ……？　漆黒　の事務所なんて無いよ？」

「チヨ、　漆黒　の人達の存在が一般に公開されていると思つているんですの？」

……そうだね。

サキが案内板をしげしげ見る。もちろん、額の眼で。周りを歩く人は、そんなことは露とも知らずに過ぎ去つていく。

「どうやら、上の階の方は高級レストランやスイート・ホテルになつているようですね。　アカ達に会う前に、食事を取つていきません」と？」

「うん、お腹空いたね」

そこでボクらはエレベーターに乗つて、まずレストランのあるフロアに向かつた。

*

「う、……牛テールの赤ワイン煮、……牛テールつて何？」

気がつくと、ボクはフレンチレストランにいた。

「わからないのなら私がオーダーしますから、チヨは黙つていていいんですよ？」

サキはレシピに素早く目を通しながら言つ。

その様子はとても楽しそうで、それはそれでいいんだけど……

「ねえ、なんでフランス料理なの？　ボクは普通に定食屋さんとか

▪ ▪ ▪ ▪ ▪

「定食屋は今日の朝行きました」

「ほら、むじうに美味しそうなお寿司屋さんがあつたけど……」

「……………」

氣のない返事。サキはメニューを見るのに没頭している。

ボクはお寿司屋さんへ思いを馳せる。高そうな店だった。けど、

きっと頬も落ちるようなお寿司があるんだろうな……、と。

ボクらの旅費はサギの持つケレジットカードから扱われている。そのカードはアカの名義であり、『税金ですわ』とのことだった。

田本の顔をへ、『おんなじ』。

「良いじゃありませんの。せつかくビルの高さまで昇ったのですから、食事も豪華な物を取りたいものですね」

豪華な食事＝フランス料理、らしい。

「お寿司は……？」

聞いたことのない理由で、ボクの要望は一蹴された。

じょうがないので、ボクはフランス語のメニューを見て暇を潰すことにして。 良くわからないアルファベットの羅列を見ていると、アルファベットが踊っているように見え始めて面白い。しばらくして、サキが蝶ネクタイにチョッキのウエイターさんにオーダーをしていた。

そこそこ格好いい人でサキはその容姿を褒めていたけど、サキが男か女か判じかねたウェイターさんはまだ困ったように笑いながらいなくなつた。

数分後、前菜を持った別の人 came。小柄で、背筋のしゃんとし

た人だつた。

「レタスとゼラチンのテリーヌです。 といひで、あなた方はサキ様とチヨ様に相違ありませんね？」

「え……と……」

「ひついつとき、なんて答えれば良いんだろ？？」

「そのとおりですわ。 漆黒 の方ですか？」

サキが落ち着いた受け答えをした。

ボクの出る幕はなさうなので、葡萄のジュースを一口呑んでから前菜に手を付けることにした。

「私は 漆黒 の諜報員、四村・姫鶴と申します。以後お見知りおきを。

一階の監視カメラであなた方の来訪を確認しました。今、鷺累、糸鶴、紅鳥の三名は戦闘の準備をしています。好きなときにはしゃつて下さいとの事ですが、あとどのくらいでおいでになりますか？」

「そうですね……これから一時間、いえ二時間ここで食事をして、そのあと最高級のスイート・ルームにチェックインして、お風呂に入つてチヨと愛の抱擁をして」

むせた。

「 仮眠を取つて、また抱き合つて、それから身支度して……
九時間ほどですわ」

サキが突拍子もないことを話している間、姫鶴は眉一つ動かさずに立ち続けていた。

淡々とした口調で姫鶴は答える。

「そうですか。では、そのように伝えます。 ああ、紅鳥が申していたこととは、三十分以上待たせたら一千一年九月十一日の再現

をしてやる、でした」「

「な、ちょっと……むぐつ」

の、のどに食べ物が。

横でサキはあらあらと呑氣に言しながら、自分の分の前菜に手を伸ばしている。

「ちよつと待つて 行く 行くからー 一十分で行くつてアカに伝えてー！」

「あら、チヨ。私達の愛のまぐわいは?」「

「また今度!」

「それにチヨ、フレンチの食事というものはゆっくりと時間を掛けるものですね。ラーメンや蕎麦のように、するすると吸い込んで早く終わるといつものではありますんのよ?」

「や、そんなあーー！」

状況は絶望的。

姫鶴は何事もなかつたかのように遠ざかっていく。

この場を放棄するわけにもいかず、ボクはアカの気が長くなつてくれますように祈りながら食事をすることにした。

三十分 + 二十一分後。

最後のデザートを一瞬で呑み込み、渋るサキを引っ張りボクは店を出た。ちゃんと会計は済ませた。けど、デザートがなんだつたのかは全く思い出せない。

漆黒の事務所のある最上階まで行くには、エレベーターに隠された術式を発動させる必要がある。

ボクはそれを半ば脊髄反射で起動させ、目的地に移動する。転送された先、白大理石に囲まれた四角い部屋で、姫鶴が直立不

ひとき

動でボクらを待っていた。

「ア、アカは……？」

まず口から出たのはそれだつた。
「待つています。準備は万全です」

なんの準備か、考えたくないな。

姫鶴がボクらを案内する。

漆黒 の事務所は思つていたよりずっと地味だつた。床は飾り
気の無いリノリウムで、壁もコンクリートに白い壁紙を貼つただけ。
灰色のペンキを塗つた扉の向こうに、三人の待つ部屋があつた。

淡い色のパンチカーペットに、三人は黒い椅子を置いてそこに身
を沈めている。

鷺累は胸や関節に薄板が入つた黒い装甲服を着ている。糸鶴は重
そうな革のドレスを身にまとつてゐる。

二人は 漆黒 の衣装だつた。でも二人目は違う。

アカが着てゐるのは、熱ささえ感じられそうな唐紅の狩衣。折れ
曲がつてて良くわからないけど、縄の生地の上には金銀の糸で密に
刺繡もされている。豪奢、との一言に尽きるその服はまるで
「すっかり昔のようになりましたわね、アカ」

ボクの思つていたことを、サキが言つた。

アカはそれに答えて笑みを浮かべた。とても自信に満ちた笑み。
彼女は腰を上げる。

「まあね。喪服みたいな 漆黒 の格好にも飽きたから、久しづり
に着てみたのよ。 どう、この狩衣？ 仕立て直すのに一千万以
上かかったのよ？」

アカはくるりと身を回し、ボクらに自らの衣装を見せつける。
生地の赤は上から下にかけて少しづつ鮮やかさを増してい
る。模様は胸と前垂れにかけてが花と菱の幾何学、袖には鳥、そして

背には五爪の龍と蝶とが舞い踊るもの。

腰や袖に通された飾り紐は黒縄子で、その先端に白く煌めく蛋白

石の玉がさがつている。

さりに服に香が焚きつけられていて、彼女が身動きするたびに茴香の挑発的な香りがした。

そして、足に履くのは真っ白なスニーカー。そんなとじりまで、サキが語った昔と同じだった。

「まつたく…… 漆黒 を利用するだけになつた奴に、税金とはい一千円も。だつたら俺にうまい酒でも飲ませるつうに鷲累が碎けた口調で独りしゃべっていた。

「そついえば…… アカつて公務員なんだ」

「ああ？まあ、そうかのう。妾達は日本政府と関わりはないが、一応この国にいる間の経費は日本政府持ちになつていいからのう」「会計はどうやってつけてしているのでしょうか？ 存在すらも知らない物事に税金を使われる、日本のみなさんがあきの毒ですわ」

場がちょっとずつ和みはじめていた。

と、そこへ姫鶴が発言した。

「さて…… ここで茶菓でもお出しすれば話も弾むでしょうが、そろそろ本題と参ることにしませんか、皆様？」

それに対し、真っ先に鷲累が咳払い反応した。

「わ、私は馴れ合つてなどいないぞ」

「鷲累、お主のことなど何も言つておらんぞ」
鷲累の相好が仮面のまま石になつた。

それを尻目にアカが言つ。

「じゃあ、説明をしなさい、姫鶴」

「はい、紅鳥さん。

本日の決闘とは、一対一での戦闘です。勝利条件とは、特に定められたものでなく、見極め役無し、対戦者同士で決着を付けること。戦闘場所とは、ここより上から、第一フロアー、第一フロアー、そして屋上。

対戦者組み合わせとは、こちらの希望から、第一フロアーで鷺累さん・サキ様、第一フロアーで糸鶴様、チヨ様。人数の関係上、チヨ様にはそのまま続闘をお願いして、屋上で紅鳥さん・チヨ様とさせて頂きます。

そちらの希望があれば変更は可能ですが、何か御座いますでしょうか？」

サキが横目でボクを見て、回答を促す。

ボクは宣言するように、はつきり答えた。

「いいよ。それで戦おう、みんな」

漆黒 の二者がそれぞれ肯く。

「では、フロアーの準備は整っていますので早速始めましょう」

*

糸鶴の用意する戦場は、何の置物もないだだつ広い空間だった。天にも床も壁も、四方がむき出しのコンクリート。まばらに柱があるだけ。黙つて立つていれば、僅かな音さえよく反響して聞こえる。

けど、それは見かけの話。

本当は、あるものがこの空間に油断無く配置されている。

それは糸。

テグスかグラスファイバーか、とにかく透明度の高い見えづらい糸があちこちに張り巡らされている。考るまでもなく、それはト

ラップ。糸鶴の指先一つで、あれらはボクを四方から襲う。
そしてもう一つ、このボクにとって困ったことがこの場所にある。
大地の力を使うボクにとって、この地上高くなる戦場は力を弱め
させられる場所だ。おまけに、エナジー神秘靈力の活性を抑える十（凍）式
封印術が緩く施されている。

冷たい汗が、背筋を流れた。

「どうやら、ここがどういう場所かは気付いてくれたようじゃな。
じゃが、よもやお主、この程度の覚悟もなく来たわけではある
まいな」

糸鶴の声が重々しく響く。

「もちろん……。どんな状況でも、ボクは負けないよ」

「よくぞ言った。ならばその覚悟、身体でも示してみよ！」

両者、構える。

このコンクリートに塞がれた空間は、物理的に冷えていた。それは確実に、ボクの心を威圧する。
だけど

「ボクは、絶対負けない！」

これを開始の合図とした。

6・1 「腹が減つては……」（後書き）

フレンチ料理は美味しかったのでしょうか？

私はフレンチを食べたことはありません。ついでに言いつと、二十階以上の建物に入ったことがありません（多分）。

……田舎者ですよ。いや、田舎万歳ですよ。私の世界は狭いですが。ちゃんと一人前になつて、世界を広げていきたいですね。英語、頑張つて旅行とかしたいなあ……。

6・2 「双つの戦い」

初撃はいつもながらの真っ向からの突撃。
糸鶴は動かない。

彼女がどんな手を隠しているのかは、全くボクには予想できなかつた。

対して、術の使用を限定されたボクにとって、攻撃の術は肉体を使つた物理攻撃しかない。だから、ボクは真っ正面から仕掛ける。走る速さは三歩で時速七十キロメートルを超える。拳を前に出せば、鋭く空を切る間隔が腕を伝う。

「 いけえ！」

「 Spider Net ! 」

一瞬で田の前に網が張られる。その名のとおり、粘着質の糸で出来た網だ。

さすがに反応が早いな、糸鶴は。

ボクも一瞬で左手を猫のものに変化させ、網を切り裂く。左手の動きに合わせ、身体を回転させて左足から蹴りを放つ。回し蹴りは甲高いジエット音で空を裂く。

「 - 」

糸鶴が僅かに眉を顰める。

頑丈なワイヤーが、何十本と縫り集まつてボクの左足を捉えた。

「 うつ……くそ！」

ボクは一秒もかけず強引に左足を取り戻す。けど、この隙を糸鶴は見逃さない。

「 Destiny Thread ! 」

全方向からの糸による攻撃。

ボクは咄嗟に防御結界を張るが

「う、うああああああああ！」

一本、一本、三本。皮膚のごく表面と髪の毛を切つっていく。
一本、一本、一本、十三本。糸が服を切り裂き、肌に食い込みはじめる。

五十四本、五十五本、五十六本。糸は肉に入り、抉る。
九十八、九十九、一百。深い傷は骨まで達し、傷つけられた太い血管からは止めどなく血が流れ出していく。

「あ……あ……！」

意識が遠ざかる。

攻撃は止んだ。けど痛みは消えはしない。稻妻のような痛みがボクを包み、意識が埋没していく。

負けられない。

痛みの中でも雜念が消え、それだけが頭にこだました。

「……このおお！」

身体が本能的に動き、ボクは前に歩み出た。

踏み込みはコンクリートの床を砕き、身体は低空を滑走する。
「なに……！」

渾身の一撃は糸鶴の右頬を打った。

確かな手応え。ボクの一撃は彼女の歯を折り、脳に大砲のような衝撃を与えた。

「……！」

大きな打撃を受けたはずだが、彼女は倒れなかつた。

糸鶴が腕を振るう。

咄嗟に回避すると、身体の横を銀の風が駆け抜けていった。

「……強いね、糸鶴は」

「当たり前じや。」それでも 漆黒の守護者 第四位の姫じや。

姫を倒さねば、紅鳥と戦うこと叶わぬぞ」

「どうして、糸鶴は戦うの？」

「…………あなた。まだ、教えぬよ」

糸鶴が腕を振るつと、赤い血と一緒に銀の糸は舞う。

「お願い、力を貸して……」

微かな神秘^{エナジ}靈力を呼び起^スこし、ボクはコンクリートに呼びかける。天井と床のコンクリートが小さな音を立てて、爆ぜる。破片となつたコンクリートの小片^スが宙に舞い上がり、糸にぶつかって運動エネルギーを奪う。

それをおどりに、ボクは重い身体を引きずつて糸鶴の視界から逃げよう試みた。

「逃げられると思つてか！」

「思わないよー！」

けど走る。

ボクが走つていれば攻撃は当たらない。けど糸鶴が攻撃を止めれば、そこがボクのチャンスになる。傷ついていても体力はボクの方が上のはずだから、いずれはボクが攻撃する機会が出来るはず……！

だけどボクにも余裕はない。はつきり言つて糸鶴の攻撃力がここまで高いとは予想外だつたし、もしかしたら体力面でもボクの予想を超えているかもしね。そつだとしたらやつぱりボクに勝ち目はない。 走り続けるのも賭だつた。

「どうやら、妻の力、糸という武器について学んでくれたようじゃな？」

不意に糸鶴が喋りはじめた。

「元来、糸はブービートラップなどには使えるが、近接戦闘において武器になるものではない。じゃがな、こうやって敵を招くのなら話は別。　　今この時こそ、‘糸鶴’の本領が発揮されるときなのじゃ。わかつたら、覚悟を決めよ、チヨ！」

覚悟？

何の覚悟だろ？

その時、ピーン……と頭上で軽い金属音がした。

手榴弾？　そう思い飛び込み前転をして姿勢をギリギリまで低くする。

しかし、ボクの予想は外れた。

頭上から来たのは爆炎ではなく、叩き付けるような光と轟音。

スタングレード！

「わかつてあるのかや？　妻とそなたは今、殺し合ひをしているのじゃぞ」

格子状に糸が迫る。当たれば、ボクはゆで卵よろしくスライスされる。

身体の損傷に加え、五感の故障。力の抜けきった身体をどうにか立て直し、気持ちばかりの反重力に縋つてボクはほうほうの体で攻撃をかわした。

感覚が戻らない。

頭痛がする。耳鳴りがする。耳はチカチカする。

平衡感覚だつて壊されてしまった。それでも……触覚だけ、今は使えそうだ。

追撃の気配。

「 そこだ！」

百分の一秒刻みで、肌に糸が食い込むことを感じることができたボクは、闇雲ではない動作で猫の爪を使って糸を切り裂いた。切る。

断つ。

斬る

絶つ。

攻撃を、剪り、絶つ。

「 な、ばかな…………」

糸鶴の気が乱れた。

そこでボクは彼女の頭上のコンクリートを少し破裂させる。なるべく大きな音を立てるように。

彼女は自らの頭上を仰ぐ。

この空間の破壊を危惧して。そう、糸鶴はこの空間を壊すことを避けようとしている。でなければ、これまでに一つくらい爆薬の炸裂があつても良かつた。

その理由はわからない。でも、これがボクの攻撃のチャンス。姿勢が正せないまま、ボクは無理な体勢から攻撃を仕掛ける。ドロップキック。

かわされたら後がない、一か八かの大技。

「 ！」

爪先が彼女に突き刺さるのを感じた。

カウンターで、太い、綱、がボクの全身を鞭打つた。

糸鶴はそのまま弾け飛び、向こう側の壁にめり込んだ。

「 ボクらは殺し合いをしている。……そんなこと、わかってるよ。

でも、そんなことは今に始まつた事じやない。だから、ボクは糸鶴を「倒す」。殺しはしない。だつて、それじやご主人様と同じになつてしまつから

「され、『こと、を……』」

糸鶴が壁の中から立ち上がり、血を吐きながら言ひへ。

「殺意を持つて戦う者に、殺意を持たずして勝てると思つてか？

なるほどお主の想いは立派じや。しかし、その想いに足るだけの力を、お主は持つてゐるのかや、チヨ？」「
ボクは答えない。

「よいか、チヨ。流血を避ける者。お主がそうであつても、サキはどうするかや？ サキはきっと鷺累を殺すぞ。さもなければ、鷺累がサキを殺す。 そして仲間が殺し合いをしてゐるのに、お主だけ無垢でおられると思つてか？」

「サキは」

「これ以上傷を負えば、お主は紅鳥に勝てる方が一の可能性だつて失うぞ。 妾を殺せ、チヨ。今なら、抵抗せずに殺されてやうが。」

糸鶴が口を閉じた。

糸鶴はボクを罪で穢したいのかな。

だぶんこの戦いはそのためにあつた。

糸鶴は、殺し合いをしないボクが嫌なんだろう。だから、ボクを追いつめて罪を背負わせようとしている。ボクが罪を背負えば、殺し合いでできるようになると思つていてる。

そしてボクが決意をすることを期待している。 ボクがツミを殺す決意を。

糸鶴はボクが嫌いで、ツミも嫌い。でも自分がツミにも、ボクにも敵わないから、せめて自分を殺すことで罪を負つたボクがツミを

殺すことを期待している。

あるいは、罪を負つたボクが混乱して自滅することを願つているのかもしれない。だけど、なんにしても……

バカに、されてるよね。

確かにボクは半端な覚悟しか持つてないのかもしれない。力も弱いのに、大それた願いを持つているんだろう。でも……

「ボクは糸鶴を認めない。サキはボクの勝利を信じて誰も殺さないことを約束してくれたし、ボクもボクのやり方で戦つていくことを決めた。だから、ボクは糸鶴を、糸鶴の死を否定するよ」「そうかや……。ならば、もう言ひべき言葉はないな。チヨ 妻が引導を渡してくれる！」

今までにない大袈裟な動作で、糸鶴が腕を振り上げる。それに応じた大きさで、このフロアー全体の糸がざわめいた。必殺の空間。

“Sister Trio of Moirai”。妻の渾身の一撃、受けて散るがいい……！

糸鶴が震えている。それだけ、これから攻撃には力と集中力が注ぎ込まれるのだろう。

「散りはしないよ。自分で戦うこと止めた糸鶴に、ボクが負けるはずがない！」

この想いは、試されている。

なら戦おう。この想いで世界を変えられることを証明するために。

* *

一方、糸鶴とチヨが戦う階下では、鷺累とサキの戦いが繰り広げ

られていた。

せつかくなので、少し時を遡つてみてみよう。

鷲累が用意した戦場は黒かつた。

四方を囲む壁と天井、床が黒い。特に床はゴムのような素材に覆われていて、足を動かしても音がしない。光源は、天井に取り付けられた小さなライトのみだつた。

鬱々とした音無の仄闇が、サキと鷲累、二人の男を包んでいた。

「何のために私達が戦うのか、確認させてもらつて宜しいですか？」
その声は余韻を残さず闇に吸い込まれていく。

「戦うため、だろう？ 私もお前も、どうやら理由もなく戦える者になつてしまつたみたいだからな」

慇懃さを装つた声で、鷲累が答えた。

「そうですわね……。私ったら、かつて女の身であったときは本当に身体が弱くて戦いとは無縁でしたのに、男の身になつたとたん戦いを楽しむようになつてしまつたんですね。そして今日は鷲累さんという現でも屈指の戦士がいらっしゃる。これを樂しまずして何とすればいいのか。 ところで、その氣取つた口調はどうかと思ひますけど」

「お互い様だらう。 ま、さつたと始めるぞ。簡単にいつまつなよ」

両者は得物を構える。

サキの武器は、つつもの黒い散弾銃だ。闇の中でも、その銃は濡れたような光を放つ。

対する鷲累は漆黒の大弓を手にしている。背に負つた簾には、弓の全長と同じ一メートル半の合金製の矢が十本足らず入っている。

音のない銃撃の、その閃光が戦いの開始を告げた。

光の散弾は闇を鮮やかに裂いて飛ぶ。

散弾を紙一重で避けることはできない。鷺累はやはり大きく回避行動を取り、そこから矢をつがえ弓弦を引いた。

射る。

固い鋼の強弓から放たれる矢は容易に音速を超えて、甲高い風切り音を立ててサキを狙う。

サキがかわす。

しかし矢のまとう空気の刃が、彼の白い頬に赤い線を引いた。そして鷺累は一秒とおらず次の矢をつがえる。

「！」

第一射。

サキは先視の能力で矢の飛来を予測するも、迎撃するいとももかえられず紙一重でかわす。

矢は途絶えない。

当たれば頭蓋骨を貫いて反対側から鎌が顔を出しそうなくらいの威力を持つ矢が、絶え間なく射撃される。

速射の最後は三本同時の射撃だった。

「！」

サキは三本の射線の間に立つて矢を回避する。だが一本の矢が、彼の身肉を浅く削つていった。

「どうやら、先手は鷺累さんの物のようですわね」

矢を失い無用となつた弓を捨て、鷺累はサキに背を向ける。

それは敗走か。その意味は問わず、サキはただ彼の背に向かつて引き金を絞る。

横回転で弾を避け、彼は壁に手をつく。

黒い壁には、一面に多種多様な武器が掛けられていた。

「……ブーメラン」

次の瞬間を予測したサキが呟く。

その名の武器が、軽快な風切り音を立て飛来する。サキは横側からブームランを叩くことで撃墜する。

「今度はトマホーク」

ブームランより質量の大きい投擲武器を回避する。そこに斧を持つ鷺累が、飛来した。

「！」

防御のために掲げた散弾銃が切断される。

同時に、サキの胸板にも斬撃が浅く走った。

「blaze short！」

一気に後退しながら、バレルの切られた銃でサキは銃撃する。

鷺累は横方向に身をすらして回避を試みる。

だが、バレルの切りつめられた散弾銃の拡散は大きく、

「！」

小さな光弾が二つ、鷺累の左手と左足を貫通した。

鷺累がわずかにひるむ。その瞬間にサキはさらに後退した。

「なかなか多才な技をお持ちのようですね」

「お褒めにあずかり光榮至極。これが私の売りでね」

二人は闇を隔てて油断無く対峙する。

「でも、そろそろ本当の力をお見せ頂けませんの？ 私、わたくし焦られるのは好きじゃありませんの」

何かを見透かしたようなサキの口調。

「いいだろう。お前の好きそうな、でかくて太い奴を突っ込んでやる」

鷺累はまた壁に武器を取りに行く。

今度はサキは銃を向けず、静かに待っていた。

少しして鷺累が戻ってきて、サキの眼前で手にした得物を床に叩

きつけた。

そこに腕力は込められていなかつた。しかし武器は自重だけで防音の床を切り裂き、下のコンクリートに噛んで音を立てた。

「ああ……なんだか、見ているだけで濡れてしまいますわ……」

戦いに飢えた二人の男。

恍惚とした笑みを互いの顔に浮かべ、激突の瞬間を闇の中で焦がれていた。

6・2 「双つの戦い」（後書き）

最近、この小説がいつのまにか少年漫画的な調子になっていたことを思い知られました。

何故でしょう……戦闘をメインにしたせいですかね。私もどうしてかバトルが好きなんですよね。ゲームをしていても、戦闘がないと物足りなかつたりします。

『バトルフィールドに駆ける俺達の情熱』はJAMの歌ですね。

6・3 「勝敗のつけ方」

全長一メートル超の直線のフォルム。両刃の長さは一・七メートル。その先端は鋭角。

大剣。

近接戦闘において最高級の破壊力を持つ武器。刃の鋭利さにかかわらず重量だけで切断と破壊を可能とするその武器は、その巨大さのみで対峙するものに威圧をかける。

「パワー・ブレード 動力付機構剣 ノートウング。魔劍つてほどじやねえが、その名の通りちょっとした仕掛けが色々ある剣だ。用意はいいか？」

「ええ、こつでも」

重い物は長いほどより支えるための力が要る。それは、物理で言うところのモーメントや、一般的なてこの原理で明らかのこと。それを鷲累は正眼に構える。その動作は決して軽やかなものではなく、しかしそれが彼の雰囲気に淒味を持たせる。

「漆黒の守護者なつか が長、名塚しうら・鷲累。この名に隠した‘修羅’の意味、その身で味わうがいい！」

前に出した右足を軽く浮かせ、左足のバネで滑るように彼が前に出る。

「この私に勝てると思つているのですから、盲田ですわね。その盲田が、己が身をもつて悔いなし」

左手で銃を水平に構え、サキは迫り来る鷲累を見る。

サキは斬り下ろしを予測して右に避ける。そこに光で作った幻影を残し。

さらに幻影を作りながら、彼自身は後ろにさがる。

そこから誘われるべし鷺累の行動とは、斬り下ろしを途中で曲げた右への斬り払い。だが

「あら」

まず幻影が消えた。サキの意思と無関係に。その向こうで、鷺累は振り上げた剣を脇で構えなおし、わずかな溜めから抉るような突きを放つた。

一瞬前で攻撃を先視したサキは、それを余裕を持ってかわす。身体の脇をかすめる突きが払いに転じないうちに、銃の先端で剣身を押さえる。

銃と剣が触れあい火花を散らす。

押した力を活かして、サキは後ろに大きく跳躍し鷺累から距離を取り取つた。

「どうやら、小細工は通用しないようですね

ふわりとマントを翻しながら着地し、さらに走り、銃撃しながら

サキは言った。

「『我が前に偽りは在らず』ってな。そら、まだまだ……！」

散弾を剣で叩き落とし、サキに追い縋りながら鷺累は剣を振る。黒い空間の中の、描かれる黒い弧。

剣風だけが肌に鋭利。

時折床に剣が触れると、刹那の火花が戦場を明るくした。

リーチが長く、それ以上に隙のない剣技。それは確実にサキを追いつめるもので、彼自身それを自覚していたが、彼には余裕があつた。

その余裕は彼の持つ先視の能力がもたらす物ではない。事実、鷺累の剣技は自在で目まぐるしく、先視は辛うじて対応している状態

だつた。

命がけの状況。だが、これこそサキの望んだものだつた。理屈も
しがらみもなく、ただ純粹に命を賭けて力と技を競い合つことのできる戦い。

余裕とは、そんな戦いにおける享楽に他ならなかつた。

次に斬り下げる……！？

彼の先視が異常を感じした。

自らの能力を信じ、次の動作を考えない緊急回避を行う。
次の刹那、サキのいた場所に神速の斬撃が落ちた。先程までの剣の振りとは比較にならない速さの斬撃。

「剣撃が加速した……？」

「御名答。よく避けたな」

両者は互いに間を取り

「ま、これが今俺が用意した、お前に有効な手のすべてだ。
どうだ？ 次はお前の番じゃないのか？」

サキは少し前の危機を思い返す。

冷や汗と戦慄。これが自分の求めていたエクスタシーだと、彼は思つた。

「そのとおりですわね。 では！」

サキは走り出す。

疾走は全力。

接近と同時に、驚きを因んで幻影を仕掛ける。
しかし幻影は目標の一メートル手前で消滅する。

「無駄なことを」

「そうでもありませんわ」

サキは鷺累に肉薄する。

左手は散弾銃の本来の持ち方から外れ、銃床を鷺掴みにし剣のように銃を持っている。

「white edge！」

一秒に十一回の乱れ斬り。

銃口から出る光の刃はダイヤモンドさえ切断する力を持つ。しかし、鷺累の持つ大剣はその刃をやすやすと防ぐ。

「！」

加速の斬撃が反撃する。

紙一重でサキは後方へ跳躍する。

両者の距離、三メートル。

鷺累の剣が放つ破幻の力が及ばぬ範囲で、サキは光の幻影で分身する。

「しゃらくせえ！」

十数体の分身に囮まれながら、鷺累は一直線に一人のサキを狙う。鷺累が接近してもなお消えないサキ。

「心眼の剣技、ですか」

「そつさ。俺の剣術もなかなかだらう~」

鷺累の連撃。

サキはかわしながら、銃を右手で構える。

「！」

銃が斬り飛ばされる。

「これで、終わりだ！」

斬撃の加速が始まる。

その命令が鷺累の脳から腕を伝い剣に伝わる、刹那にも満たない

時間

黒の弾丸が、黒の剣身を叩き飛ばした。

「 な、馬鹿な、お前の銃は……！」

「！」の銃は闇の結晶。偽りでも何でもなく、複製が可能ですの」

鷺累の腹部を衝撃が突き上げる。

内容物を逆流させるほどの衝撃に、鷺累は体裁もなく膝をつく。その額に、サキは銃口を突きつけた。

「 イキますか？」

「ああ……最高だな」

サキが指を引くその直後。

鷺累の精神に打撃が加えられ、彼の意識が消えた。

* *

だが、彼の呼吸は途絶えない。

「^{わたくし}私、約束は守る女ですよ」

聞く者はなく、言葉はやはり闇が無為に飲み込む。氣絶した鷺累を引きずり、サキはその場を後にした。

* *

「 一の糸、 “ ラケシス ” ！」

「」の空間にあるすべての糸が唸る。

迎え撃つよー

猫の爪を研ぎ澄まし、迫り来る糸にボクは五感を研ぎ澄ませる。

振るう。

糸は簡単に切れる。だけど、その数は一本や一本、二十本や三十本でもすまない。

それでも切り続ける。

「やるのう……じゃが、それがいつまで続くかの？」
片足に糸が絡まりついた。

かまつちゃだめだ。

ここで解こうとした瞬間に、もつと多くの糸が絡まるだらう。
ボクは来る糸を切ることだけに集中する。

“ラケシス”の糸に攻撃力はなく、ただボクの身動きを封じるだけみたいだつた。たぶん、これから続く攻撃が絶対外れないようにするためなんだろう。

「いの、いの、いの……！」

ひとしきり糸が舞つたあと、結局ボクは左手以外動かせるところが無くなっていた。

特に、首に巻き付いた糸には苦しいものがある。

「なかなか良い格好じゃな、チヨ。死ぬ覚悟はできたかや？」

「ボクは……うつ」

言い返そうとすると首が絞められる。

そんなボクを、糸鶴は心底愉快そうに見ている。

だけど、それまでだよ。

ボクは唯一自由な左手を、まっすぐ糸鶴に向ける。

心に描くイメージは銃。それも、サキが構えている姿。

ボクの利き手は右手だけど、サキは左利きだ。左手しか動かせない今のボクにはぴつたりだ。

「泣き叫ぶが良い。

“クルートー”！」

「おん、と耳元で空気がうねる音がした。

全身を糸がひっぱたき始める。鞭、鞭の雨だ。

隅々をくまなく打たれ、服を破り肌に食い込むよつた痛みの雨に集中が乱れる。

だけど、左腕だけは上げ続ける。銃を構え続けるよう。銃にこめる弾丸はボクの身体の中で練り続けていた力。ボクの力を弱ぐするこの場所だけど、身体の中の力まで弱められることなかつた。

「！」

頬に糸が当たった。やわらかい肉が弾けるのを感じる。

痛い。だけど

「痛いから、やり返したくてボクは戦うんじゃない。それと同じで、例えこの先の戦いで手が汚れてしまっても、その罪を言い訳に僕は悪を為すことはないよ。どんな事があつても、ボクは自分の戦いを貫く。だから ボクと大地との力、一つの弾となつて立ちふさがる物を貫き道をつくれ！」

左手の形は指鉄砲。

人差し指の先から力を撃ち出す。

力はボクの外で物質化し、赤く、火山弾のように輝いて飛んでいく。

「な……なんじゃ……！？」

糸鶴が糸を迎撃に舞わせる。

だけど、一本一本が弱い糸がちょっと出てきたくらいでボクの弾丸は止まらない。

「 か、は！」

重い衝突音を響かせて弾が糸鶴の身体にめり込む。

弾はそこで爆散し、衝撃で彼女を打ち倒し、破片で彼女に繋がるすべての糸を焼き切った。

ボクの戒めも解ける。

「ボクの勝ちだね、糸鶴」

床に倒れる彼女を見下して、ボクは自分の勝利を宣告した。

「妾はまだ……、？」

憎々しい声を吐き出して起き上がる糸鶴。

そこで彼女は気付く。自分の身体が重いことに。

「指を中心に身体の動きが鈍くなるように呪いをかけたよ。これでもう糸は使えないし、格闘でもボクに勝てない。もう戦いは終わりだよ」

「まだ……これならビデオじゃ！」

緩慢な動作で、糸鶴は懐から銃を取り出す。すかさず撃つ。

銃声はボクの耳を打つ。だけど弾はボクの間近で止まり、下に落ちる。

「拳銃くらいじゃボクは倒せない。諦めが悪いね。ていうか、諦めたんじゃないの？自分で戦うこと」

「いつからそんなことになった？妾はこの勝敗をどちらかの死をもって締め括りたかっただけ。お主が妾を殺さぬのなら、妾がお主を殺す。それだけじゃ！」

糸鶴は立ち上がり、今度はナイフを抜く。

突き出される腕を掴み、ひねり、糸鶴を組み伏せる。

「……醜いね。なにが糸鶴にそうさせたの？」

そう言つ自分の声はびっくりするほど冷たかった。言葉の冷たさに、自分の口が焼けるくらい。

「復讐じや！ 夢や月神に限らず、この世界を侵す現世ならざる物すべてへの復讐 妾の家族を奪つた者達への復讐こそが妾の戦機！」

興奮して喚き、もがく糸鶴。

家族の復讐、と糸鶴は言った。家族を奪われることは確かに悲しいこと。ねじれた光を宿す目を見開き、背筋を凍らせるほど醜い顔をするに足る理由。

「……ボクは糸鶴の戦つべき相手じゃないと、自分で思つ。糸鶴の気持ちは良くわかるよ。きっと糸鶴も後に退けない戦いをしているんだね」

ボクは糸鶴を解放する。

「でも、ボクも退かない。ボクも負けられないよ。今はもう戦いはお終い。もし糸鶴が納得いかないなら、また、今度戦おう」「……そうじやな。今は妾も退く。じゃが覚えておれ。漆黒の守護者が一人、紫部・糸鶴は、現世ならざる物すべてを屠ると

彼女は去る。

後ろ姿の長に三つ編みが、もの悲しく揺れていた。

6・3 「勝敗のつけ方」（後書き）

サキと鶯累は気楽に戦つてますねえ。

なんかもつちよつと糸鶴について煮詰めておけば良かつたかな、て
いう感じです。一応頑張りましたが、ガタガタな内容ですね。
これにめげずに次のアカ対チヨの戦いも楽しみにして下さい。一話
分にして、やつとこさのあの子も登場です。

屋上へ続く階段を上る。堅いコンクリートの階段に音はなく、荒いボク自身の息の音だけが響く。

大丈夫かな。

糸鶴の前では半分強がつたみたいな感じになっちゃつたけど、ボクはかなりボロボロだ。

血が足りないし、傷もシクシクどころではなくズキズキと痛む。少ない大地の加護を集めて、今歩いている最中にも治療しているけど、どうてい治しきれない。……とりあえず血だけは止めていけるかな、という状態。

こんな状態じゃアカには勝てない。

でも何であるつと、ボクはボクのありつたけでアカとぶつかればいい。

どうしてボクはアカと戦うのだろう？

勝負とは優劣をつけること。優劣はものごとに優先順位をつけるための物で、その「ものごと」というのがボクらの場合は、ツミと戦う順番みたいなものと直結している。

サキは（詳しい理由はわからないけど）ボクの後についてくることにしてくれた。千風はこの世界が守れればそれでいいから、ツミと戦うこと拘つていない。

そうなれば、ボクとアカ、どっちがツミと戦うかだ。

ボク自身はアカと一緒にご主人様と戦つても良いと思う。そもそもボクの力は防御や援護に傾いているから、本来は一対一で真っ向勝負するには向いていない。反対に、アカの力は攻撃一辺倒な感じだから、ボクと協力してくれればすごく戦いやすいはず。

だけど、アカはボクと一緒に戦うことを快く思わない。それどころか拒絶さえする。その理由は明白で、独占欲の強いアカが一番大切に想う人、恋人であるツミを、戦いの相手だとしても独占したい気持ちがあるからだ。

でもボクもご主人様と戦つて想いを交わしたい。だからボクがご主人様と戦うためには、アカに勝つて彼女よりボクの立場が上であることを示さなくちゃいけないんだ。

ああ、勝たなくちゃ。

アカは感情面ではボクを認めてくれている。だけど、それだけで自分が一番焦がれた瞬間を譲ってくれるほどアカは甘くない。

そう、勝たなくては意味がない。全力でぶつかればいいとか、そんな甘い事じやアカは今以上にボクを認めてくれない。

となれば、ここは一つ反則してみるか。

首にかけてある八尺瓊勾玉を握り、そこに組み込んである千風の封印を解除する。同時に、一つの想いも送信する。

そうこうする内に、階段の終わりに来た。

屋上へ続くドアを開く手に、不安と怖れが一片もなかつたのは良かつた。

*

ドアを開けると、一陣の風がボクを迎えた。

黒い空、蒼い満月。殺伐と吹く夜風の中、アカは真朱の狩衣をはためかせてボクを待っていた。

「待ちわびたわ、チヨ。感謝なさい」

開口一番、アカはそう言った。

なんだか、女王様態度に磨きがかかったような……。

アカと十メートルの距離をおいて、ボクは彼女と向かい合つ。

「うん……ありがとう。待ってくれたこと、それとボクと戦ってくれることに」

「はあ？ あんた、なんか勘違いしてない？」

舌打ちが聞こえきそうな、苛立った言い方だつた。

「私はあんたがどれだけの力を持つているか知りたくて戦うことにして。あんたのお人好しの筋金がどれほどの物か、私は見てみたいだけ。 力とは正義。あんたの力がその甘つちよろい正義を貫くのに不相応な力だったら、私はあんたを殺す」

「 うん、わかってる。ボクはアカを倒して、自分の力を証明するよ」

それがボクの信念を貫くために必要だから。

対してアカは、何だか呆れたように頭を搔いた。

「 ……やっぱりあんたとは波長が合いそうにないわ。ま、とりあえず始めましょう」

アカが炎を呼ぶ。

赫い炎。右手の人差し指と中指を揃え剣印を結ぶと、炎はその先端に点りバーナーのようにまっすぐ燃え始めた。

「赫き炎の中に、来なさい私の剣」

召喚の詞。

まっすぐな赫い炎の中に、剣が姿を顯す。

抜き身の剣は静かにアカの手におさまる。サーベルのような、細身で両刃の金色の剣だ。

「神劍 高御産巣日。ツミの持つ神剣 天乃常立 に対をなす現の剣で、S E M E が保管していたのをついこの間もらつたの。実戦で使うのは初めてだから手加減はできない。する気もないけどね」

猛る炎が 高御産巣日^{たかみむすび} を包む。

アカが切つ先をゆっくりと天に向けると、赫い炎が天をついた。

「じゃあ……死になさい。その甘さ^{うまい}と焼き尽くしてあげる」

剣が振り下ろされる。

その瞬間、ボクは自分のお人好しを後悔した。

世界が碎かれ始めた。

*

落ちる。

灼熱の中、落ちる。

高さにして百メートル、四十階分の高さをボクは落ちる。

着地はいつも通り大地が手助けしてくれるから問題はない。それよりも……

地面に降り立つたボクは、田の前に広がる景色に愕然とした。

「ビルが……、サキ！」

ビルは完膚無きまでに破壊されていた。高温の爆発のせいか、瓦礫は赤く半融けの状態で燻っていた。

周囲のビルも身を削られている。電気は消え、すくむような静けさだけがある。

「ふん、こんなものかしら。もうちょっと威力があると思つたんだ

けど」

けぶる破壊の向こうから、アカがすまし顔で現れた。

「アカ、なんて……なんて酷いことをするんだ！ サキが……サキや鶯累や糸鶴、他のみんなが……！」

「ああ、どうなったのかしらね？ 簡単には死ないでしうけど、瓦礫に生き埋めかもね。 探してみたら？」

そのとおり、ボクは赤熱する瓦礫の中に飛び込む。

「 馬鹿馬鹿しい」

大地が警告を発し、ボクが防御結界を張ったのと同時に、アカが 高御産巣日 を一振り、水平に薙いだ。

炎が駆け抜ける。

次の瞬間には、赤々と煮えたぎるコンクリートとアスファルトしかなかつた。

「これで……生きてる人間はいなくなつたかしら？」

忍び笑いを伴つた言葉。

「アカあー！」

自分の中で何かが切れるのを感じた。

殺してやる。

「この女は生かしておいてはだめだ。ボクの中で怒りが これまで感じたことのない激しい感情が そう囁いた。

「はは……あんたもちゃんと怒れるのね。 上等じゃない。来なさいよ。その煮えたぎる想いを、私にぶつけてみなさいよ…」

ボクは雄叫びを上げ、拳を振り上げる。

拳には、足下からはぎ取つた解けたアスファルトとか土砂とか、含わせて一百キログラムを超える塊がついてくる。

力が疼く。地上に立てたおかげで、大地の力がボクの中にどんどん満たされるのを感じる。傷ついた身体も、急速に癒され始める。

「 いけえ！」

「 消えなさい！」

塊を投げつけると、アカが高御産巣日を振るつて迎撃する。

かなりの量が土砂が、火が激突し飲み込んでいく。

「 ！」

なんと、火炎は大量の土砂を飲み込んでなお燃え続け、ボクに飛んできた。

重力球を放つて炎を足止めする。その間に、ボクはアカの側面に回り込む。

「 そこ！」

アカが乱暴な動作で剣を横に振る。

灼熱の衝撃波が、ボクと、その後ろにあつたビルを同時に打った。

踏みどどまれずボクは転ぶ。

そこに、さらなる追撃があった。

「 紅帝雷裁掌！」
〔コウテイライサイショウ〕

「 ！ 大地よ、ボクを高く厚い壁で守つて！」

ボクの言つとおり、二十メートルくらいの壁が立ち上がり炎を受け止める。

だけどその壁も長くは持たない。刻々と炎になめられて薄くなつていく。

突破される前に、ボクは壁を登りはじめた。

重力を制御し、垂直な壁を床に見立てて走る。

崩れ始めた壁を蹴り到達した高さは地上十八メートル。アカの真上から、ボクは自由落下を始める。

「 『六（陸）式封印術！ 美しき四角錐よ、大地の威力示して騒ぐ

力を鎮めよー』

アカを中心とした正方形の頂点から、ボクに向けて石の柱が伸びる。

石の柱が交差し、形作る辺だけの四角錐。これはボクのピラミッドだ。

「押しつぶせ！」

ピラミッドの頂点に立ち、アカを見下ろしてボクは叫ぶ。
通常の二十倍の重力がピラミッドの内部に発生し、アカを圧迫する。

「くー！」

自分の体重を支えきれなくなつたアカが膝をつく。

炎を推力にして、もしくは 太陽 に含まれる天の属性を使って、空を飛ぶこともできる彼女だけどボクのかけた封印術の中ではそれもできない。 ボクがそうさせない。

これほどの封印術を使ったのは初めてだった。この術にかかつたら普通の人間は言わずもがな、力の弱い術者でも精神に過負荷が掛かつて死んでしまうだろう。

ボクはアカを殺そうとしていた。

「薙ぎ倒せ、大地の豪腕！」

ピラミッドの床が隆起し、アカを打つ。それも何度も。立つことも叶わず、弄ばれるアカ。

良い気味だと、ボクは思った。

しばらくアカを打つていると、砂埃でピラミッドの中が見えなくなってきた。なので少し止めて中を観察すると、彼女は全身を赤くして倒れ伏していた。 高い回復力を持つアカだけど、力が封じられる結界内だとやっぱり回復が遅い。あとは心臓に杭でも突き立

てれば殺せるだろ？

「やつてくれるじゃない」

むくりとアカが立ち上がる。強い重力下で、加えて全身骨折しているだろにそれと感じさせずに。

「！」

ピラミッドが一撃で碎かれた。ピラミッドに代わり、直径20メートルくらいの炎の柱がアカを包む。

ボクは退いてそれを見るしかない。

「コウティホウオウザン
紅帝鳳凰斬！」

巨大な炎の波が、地面を裂きながら猛進してくる。速すぎて避けられない。ボクは地に足をこすりつけ、向かい受ける。

「『固き金剛の盾。碎かれぬ力、我が前に示せ！』」

硬いダイヤモンド、燃えない石綿、そんなものを融合させ鎮めの力を附加した盾を作る。

盾は第一撃を難なく受け止める。

「なかなか良い防壁ね。いつまで保つかしら？」

ボクの視界を覆う盾の向こうで、アカが興奮して剣を振る。

第一撃。これも問題ない。

第二撃、第四撃。盾を残して攻撃に出ようとしたら、周囲が炎の海で身動きできることに気付く。

第五撃。盾がひび割れ始める。逃げたいけど、逃げられない。ボクの動搖は盾を脆くする。

第六撃。ひびから火が噴き出した。

第七撃 来ない？

アカはしひれを切らしたのか、いつのまにか盾の間近に来ていた。

「散りなさい！」

神の名と力を持つ剣が、直接盾に打ち込まれた。

その効果は爆発を凌駕した力の奔流。

一瞬にして目の前が白くなり、ボクは無抵抗に天高く打ち上げられた。

着地は激突。何だかもう、右も左もわからなくなつた。

「魔女は火炙り、猫も火炙り、あんたも火炙りにしてあげる」

全身が灼熱に包まれたのを感じた。

そこに苦しさはなかつた。前にアカの炎に呑まれた時と同じ、ただ崩れゆく滅びに身を委ねたくなるような甘みのある誘惑だけを、ボクは感じた。

「まだ死ねない！」

アカを殺したい。心に燃える憎悪が、ボクの身を包みアカの炎から守る。

「へえ……楽しませてくれるじゃない」

この状態はそんなには保たない。

でも、それでいい。もうすぐ、ボクの呼んだ強い力が来る。

「凍る風、あたしの翼となれ！ グリペン！」

速く、冷たい風が炎をかき消しながら空を駆け抜ける。

白い氷雪で蒼い月下に綺麗な軌跡を描き飛行する何か、それは

「まさか……キズオト！？」

着陸する。

雪花が、可憐に撒き散らされる。

ボクに顔を向けて立つのは、確かに千風だった。空色の瞳には毅然とした光があり、口元には落ち着いた微笑がある。身にしているのは彼女の学校の制服だった。黒いブレザーで、襟元の縁のラインが夜闇に鮮やかだ。

「来たよ、チヨ。この世界を守る、チヨの力となるために」

ちらとアカを見て、千風はボクの方に歩み寄ってくる。

「ありがとう、来てくれて。でも……サキが……！」

千風は手の届く近さでぴたりと立ち止まる。アカと同じくらいの背丈の彼女は、普通の人より背の高いボクをじっと見上げる。

「チヨは、アカをどうしたいの？」

「ボクはアカを殺したい。サキの仇を……！」

ぴしゃりという音が響く。

頬に軽い痛みを覚えた。

自分が平手打ちされたところ、「ボクはしばらくしてから気付いた。

「まさか、チヨまでが月の魔力に呑まれるなんてね」

冷静な声で千風は言った。

ボクが、ご主人様の魔力に惑わされている？
見上げた漆黒に、月が冷たく淡く輝いていた。

6・4 「紅帝」（後書き）

- - 解説 - -

高御産巣日神たかみむすびのかみは天照大神よりも高位の神。天之常立神と同じ別天津神です。古事記には天照大神と一緒に号令を下す部分があるので今回起用となりました。

この物語において、武器は力を纏め増幅させる効果があります。ア力にも何かないかなあ、と割と急いで考えました。

グリペンはスウェーデンの戦闘機。スウェーデン 北の国 凍る風、の連想です。

今回チヨが意外と頑張りました。当初の予定ではもつとこんぱんにやられるはずでした。憎悪という感情がなせる技でしょうか。

6・5 「彼女達の最先端」

「主人様の呼ぶ月は、心ある者を狂わせる。蒼い月光で。綺麗なのに、こんなにも透き通っているのに、心の奥にある暗い物を騒がせる。

「大地に聞いてみなよ、チヨ。　今ここで、失われた命があるかどうか」

千風のくもりのないスカイ・ブルーの瞳は、昂ぶつていたボクの心を落ち着かせる。

ボクは千風の言つとおり、半径三百メートル以内の状況を大地に尋ねた。

誰も死んでいなかつた。半径五百メートルで非常線が張られ、人々は避難させられていた。

サキ達は、少し離れた場所でボクらを見ている。

「アカも手の込んだことするよね。人を怒らせてそんなに楽しいの？」

「この若作り」

「だ、誰が若作りよ！　キズオト、あんただつて老けたじゃない」「老けたのはアカ。あたしは成長したの。　それにね、あたしはもう“キズオト”じゃない。あたしの名前は相川・千風。ちゃんと覚えてよね、おばさん」

「お、おば　！？」

アカの顔がこれ以上ないくらい朱くなる。
かなわないなあ。

アカと千風、それにツミ、サキにナゲキとササヤキ。消えてしまつたネガイを合わせ、七人から見れば、ボクは外野みたいなものだ。

だから、簡単にやりこめられてしまつたり。アカに負けそうになつたり、蒼い月光に惑わされてしまつたり。

でも、ボクはここにいる。ツミが好きなボクは、アカや千風達も好きだから。

「あ、笑つてる。なんだか、ちゃんと元に戻れたみたいね」

ボクを振り返つた千風が言う。

「うん、ありがとう、千風。ボクはいつもどおりだよ」

ボクは晴れ晴れとした気持ちで答える。

笑顔にあどけなさの残る千風。でも、その瞳の奥には怜悧なものを感じさせる。

「自分の痛みには耐えられても、他人の痛みには耐えられないんだよ、チヨは。あたしはそうじゃないし、だからチヨのことが凄いと思つて、力になりたいと思つた。

でも、忘れないで。他人の痛みを理由に報復をするのは、罪を理由に悪を為す事と同じだつて。他人の痛みも罪も、その人が勝手に推し量つて決めるもの。そうじやなくて、人は自分の中にあるもつと純粹な気持ちで行動しなければいけない。それを分かつてくれるのなら、あたしはチヨの剣となるよ」

風によく響く、高く澄んだ声で彼女は言った。

ボクは肯く。力をこめて。

「わかったよ。約束する、ボクはもう報復のためではなく、ボク自身の護りたい気持ちでツミと戦つことを。だから力を貸して、

相川・千風」

黒いスカートを風にはためかせ、千風はボクの右側に立つ。

正面、十一メートルくらい向こうで、炎を身の回りで揺らめかせるアカがこちらを見ていた。

「私は 天照大神 アカ。 今一度、私は戦う者の名を知りたいわ」

アカの要求。

まずボクから、はつきりと名乗りをあげる。

「ボクは 大地の代理人 チヨ。すべての想いを知るために、土の上を歩く者だよ」

千風も名乗る。

「あたしは 風神楽の巫女 相川・千風。あたしの古い名前が示すとおり、あたしの風は刃にしかならないけど、この刃をあたしはみんなの平和を守るために使う！」

ボクらに先んじて、アカが たかみむすび高御産巣日 を振り上げた。

「喰らいなさい！」

全力の一撃。

赫い炎の波が、猛烈な勢いでこっちに迫る。

「チヨ、あたしを守つて！ 時間稼いで！」

「わかった。ボクは千風の盾になるよ。 燒結の盾！ 固い六角を成してボクらを炎から守つて！」

ボクは千風の前に立ち、大地に呼びかける。

今度の盾は、亀の甲羅を思わせる白く小さな六角の集まりだ。この一つ一つは、一般的なセラミックスに似たもので出来ている。珪素、タンクステン、神秘靈力を貯めやすいルビーなどの宝石を寄せ集め、術力と少しの熱を加えて固めてある。この盾はアカの炎の熱

を吸収してさらに固くなる。

「面白いじゃない。なら、これはどういー？」

アカが接近してくる。直接、神剣を叩き込むつもりだ。
ボクは白い盾を前に出す。

打ち込みが入る。盾にひびは入るけど、今は防御だけを考え、力を出し惜しみせず注ぎ込むと、盾は壊れず耐久した。

「風よ！ 抗うための力を求めるあたしに剣をちょうだい！」
背後で、千風の術が始まった。

「幾つもの名を持つ剣。天と地、森羅万象を駆ける風。

今、形無き風はこの手に集いて形を為せ。

あたしは大切なものを守るために刃を求める者。

古い物語に謳われた、道を開くための刃よ、今ここに……！」

それはちょっと前にボクがやったものと同じ、 神器召喚 の術。

「風よ、あたしの刃となれ！」『草薙乃剣』！

風が集う。

千風の願うとおり、世界中から風がこの場に集う。渦巻く風は炎を飲み込みながら、千風の手の上一点に集中する。

「風に大地の祝福を」

ボクも風の中に大地の力を与える。

風が凝縮し、物質化する。

灰色で、大きな剣。両刃は三度波打ち切つ先で一つになっていた。“鉾”とも呼べる古風な形の剣だった。

「！」

アカが 高御産巢日 を振るい、炎を放つ。

千風の 草薙乃剣 が完成したのを見届けて、ボクは後退する。前に出た千風は、剣を腰だめに構えた。

「草薙の名において、炎よ、退け！」

草薙乃剣の一閃。

火炎は風に押され、アカへ逆流する。

「てええやあっ！」

飛び出した千風がアカと剣を打ち合わせる。

炎と風、力と力の激突。

灼熱と豪風が周囲の地面を抉り、土砂を巻き上げる。

轟音が鳴り響き、衝撃波が離れた場所のビルまで破壊した。

まるで隕石が落ちたような、すさまじい衝撃。これが神の名を持つ神剣と、神から与えられた神器との衝突なのかとボクは思った。

アカが炎の翼を作り、爆炎を撒き散らしながら飛び立つた。

千風も風に乗って後を追う。

それを待ち受け、アカは攻撃する。

「コウティバケゲキダン
紅帝爆撃弾！」

直径三百メートルの火の玉。

高速で飛ぶ千風は避けずに、草薙乃剣を振り上げて切り裂こうとする。

だけど、それは悪い判断だとボクは気付いた。今のアカの攻撃は剣によるものじゃないから、千風が剣を振るった瞬間にアカは剣を使うことができる。

「 対空援護砲撃！」

千風が右から左への払いで火の玉を相殺したと同時に、ボクはアカに向かって岩の弾頭を砲撃した。

弾頭を落とすアカ。

そのすきを千風は逃さなかつた。火の玉を斬つた動作の続き、左から右への一閃。

「虎牙一刀流奥義、散葉！」
チリハ

とつさのアカの防御を打ち破る一撃。
風が、炎を吹き飛ばした。

*

声が聞こえた。

それはボクが人の姿を取るようになつてから、初めて聞いた本当のあの人声。ボクにとつて、ううん、ボクらみんなにとつて一番大切なあの人声。

おいで、と言つていた。遠く遠く、月の裏側から響くよつな遙かな声で。

あの人 ボクにとつてのご主人様が、ボクらを誘つていた。

*

戦いが終わると、後には得も言われぬぼっかりとした静寂だけが残される。まるで祭りの後のように。

周囲には瓦礫も残されていなくて、ただ焼けた土だけが一面に広がっている。その中にいるのは、ボクと千風と、大の字に倒れているアカだけだ。

千風は 草薙乃剣 で身を支えながら肩で息をしている。ボクが横に立つと、彼女は下に向けていた顔を上げ、破顔一笑して見せた。試合とのスポーツ選手の笑みに似ていると、ボクは思った。

「全力を出すつて、なんか良いよね。　この剣を持つて空に飛び出した時、本当に風になつた氣分がしたよ」

その剣を持つ彼女の手に、ボクは自分の手を重ねる。
と、不意に 草薙乃剣 は姿を消した。　細かく表現すると、
ボクが触れた瞬間に 草薙乃剣 は光の粒子に分解して、ボクの胸
元の ハ尺瓈勾玉 に吸い込まれたんだ。
支えを失つた千風は、どおと力なく地面に倒れてしまった。

「あた……、一体なにが……」

「多分、これから千風が草薙乃剣を使う時は、そのたびにボクが手
渡しする必要があるつてことだね。草薙乃剣を使うのは千風だけど、
管理するのはハ尺瓈勾玉を持つボクってことか……。ところで、大
丈夫？ 立てる？」

なんとか、と千風はもじもじ言いにつつ立ち上がろうとする。

ボクは手を貸そうとする。

その時、突然現れたアカが千風の襟を掴み 「ぎょえ」 強引に
立ち上がらせた。　「ぎょえ」はちょっとかわいそうな千風の声
だ。

「ひどいよ、アカ。 あたしは猫の子じゃないんだから。 …… そういうことはチヨに」
「ボ、ボクも嫌だよ」

ふん、と荒い鼻息で応じるアカ。

「私を打ち負かした奴が、いつまでも寝てるんじゃないわよ。
といつより、この勝負誰の勝ちなの？」

そう問うアカは、全身ぼろぼろの酷い有様だ。一千万以上かかるらしい狩衣も、もはや雑巾にしか使えなさそうな状態。

「あたしが勝つから、チヨの勝ちってことで」

「そ、そういうことにして。……やっぱり、ボクだけなら万全な時でもアカに勝てそうにないし」

「……負けを認めるのか、勝ちを主張するのか、どっちかにしなさいよ……」

呆れの色の濃いアカの返事。

だけど、そこにさつきみたいな苛立つた感じはない。彼女の口元には、親しみを感じることのできる微笑が浮かんでいた。

「それで、チヨ？ あんたは私に何を望むの？」

「ボクは、アカと一緒に戦いたい。シミと戦う時も、アカとボクどちらかだけじゃなくて、一人一緒に戦いたいんだ」

アカは肩をすくめ、眼を閉じてリアクションした。

「それだけ？ ……ま、言葉にするところなもののかしら。いいわ、考えとく。そう……あと一週間後までに」

最後の言葉は、天上の月を見ながら言われる。

月は、欠けていた。下弦の手前、臥し待ち月と呼ばれる形。

『朔の夜に現れる僕の城までおいで』

それがさつき聞いたシミの声だつた。たつた一言、だけどその一言がボクらの心をどれだけ揺さぶつたか、とても言い表すことはできない。

「よいよかあ、と思う。ここまで長くもあり、短くもあった。今すぐ主人様に会いたいと思つし、まだ早いとも思う。

いずれにしても、月はカウントダウンを始めた。この月が欠けきつた時、ボクらにとつて、そして世界にとつての答えが出る。

撒き散らし、そして積み重ね続けた想いの、その先にあるものが見えるはず。

新しい月は、新しい世界の空にかかる。

*

「この世界の行く末は、あの者達が決めるんじゃな」
黒いドレスに身を包む女が言った。

「そうですね。彼女たちの思いこそが、この世界にとっての最先端となるのです。」

黒いマントを羽織る少年が答えた。

「そりゃ楽しみだな。 で、良いのか？ 後に続く者が言つ言葉は

黒いスースを着る男がぼやいた。

蒼の月下、降り注ぐ夜の光を拒むように黒い服を着た三人。彼らは倒壊していないビルの屋上に月を背にして立ち、少し離れたところの三人の娘を見ながら、思い思いのことを口にしていた。

「何故、あの者達が世界を変える？ 答えておくじや、サキ

糸鶴の問い。

サキは薄笑いを口元に浮かべて答える。

「それは、彼女たちが力を持つてゐるからに他なりませんわ。乱暴なまでに強大な力、すなわち“暴力”を」

「暴力？」 鶯累が復唱する。 「世界は暴力で変えられるのか？」

「さあ、それはどうでしょ？」 暴力は人と世界を支配します

が、世界を革新たらしめることはありません。暴力は世界を変えるための原動力であり、世界の形を決めるのは、想いです」

サキはそこまで言いつと、踊るようにステップを踏んで鷺累と糸鶴から距離を取つた。

彼が振り返つた時、三つ目には刃のような底光りが宿つていた。
「さて……この世界の命運は、月と私達の間にのみ有ることが理解していただけましたか？そこで私のお願ひなのですが、来る決戦の時の露払いをあなた方 漆黒の守護者 が行つていただけないでしょうか？ 我が儘を申しますと、これ以上雑多な人達に邪魔をされたくないのです」

そう、悪びれもせず、むしろ傲慢にサキは言い放つた。

「断ると言つたら？」

「どうしようもありませんわ。腹いせに鷺累さんと糸鶴さんを殺してみますか」

くすくすとサキは笑う。

不意に、月光が途絶え闇が周囲を支配した。闇はサキの影から、渾々と湧き出していた。
「それは、交渉にも脅しにもなつておらぬぞ」「ええ、だから『お願い』だと言いましたわ」

声の主、サキの姿は闇に溶け込んで見ることができない。しばしの間を置いて、鷺累が溜息を伴つた返答を出した。

「ま、他にすることもないしな。 承知した、と言つておく。何人集まるかは知らんが」

その時、ふつと闇が消えた。

鷺累と糸鶴の前方、月の光が落ちるコンクリートの床にサキの影は落ちていよい。

サキは一人の後ろにいた。

「では、未来さきをつくりに行きましょうか。彼女たちの願い『ねがい

『が導く、新しい世界へ』

サキの声はこれまで以上に少年らしく、男性的だった。

いま発した自身の声に いつの間にかまた変化していた自分に

サキは密かに戸惑つた。だが時は、戻ることなく前に進んでい

る。

6・5 「彼女達の最先端」（後書き）

- 解説 -

草薙乃剣 普通は 草薙の剣 ですが、まあ有名な剣ですね。四、五の名を持つらしいです。ヤマトタケルの物語を御存知の方なら、草薙が炎に強い理由も解るかと思います。

こんな感じで千風を華々しく活躍させよう……といったのも難しいですね。もう残された場面が少ないです。

さて……申し上げづらいのですが、これから一ヶ月余り更新を止めることになります。お仕事で京都に行ったり、帰ってきて試験があり、忙しくなりそうなのです。

いずれ帰りますので、どうかこの白壁と『your earth』を見捨てないで下さい。後は最終幕なので、どうかお付き合いください。

お休みの間、もしかしたら短編でも書くかもしません。『はてしない物語』のアナザーストーリーとか良いなあ、と企んでいます。

アカとボクが戦つてから三日がたつた。月の欠け具合からして、ご主人様の言つた日まで後四日といった感じだつた。

サキとボクは京都の外れにある旅館に泊まつていた。のどかな景色、美しい日本家屋を見ながら日々をすごす。三食は毎回おいしい懐石料理。温泉まで沸いていて、とても贅沢な毎日だつた。

このお金のかかる日々を継続させているのは、アカを通してボクらに届く税金。申し訳ないなあ、と思いつつもボクにはここを動けない理由があつた。

ローン、と呼び出しのベルが鳴つた。

「あら？　まだお昼には早いですわ。どなたかお出でになられたのでしょうか？」

それまで写真集に眼を通しながら暇をつぶしていたサキが、いそいそと立ち上がり玄関に向かう。揚羽蝶の柄が入った墨色の着物を身にした彼の後ろ姿は、ちょっと優雅でかつこいい。

戸の開く音がした。ボクは布団の中にいて、ここを出ない限り玄関を見るることはできない。

「まあ、アカじゃありませんの。どうしてここへ？」

「ご挨拶ね。私はあのあと忽然と姿を消したあんた達を、ずっと探しっていたのよ。それがこんな一日一十万もする高級旅館で悠々自適に休暇中？　少しは金の分だけ働こうって気は無いの？」

アカはのつけから怒つてゐるようだつた。

ずしそしと床を踏みならし、黒いスーツ姿のアカが部屋に入つて

くる。間もなくして彼女は、寝室で横になっているボクを見つけた。

「あんた何しているの？ 風邪？」

「ボクは……せ、生理痛だよ」

アカは苛立ちと呆れがほどよく混じりあつた表情を見せた。

「生理痛って、それだけで寝込んでるわけ？ あんたどれだけ甘つたれてるのよ？」

厳しい口調で一言。彼女の剣幕に、ボクは布団の中で首をすくめることしかできない。

けど、ボクには心強い味方もいた。

「そう怒らないでくださいまし、アカ。チヨは初めてなのですわ」

サキがアカの背後に音もなく現れた。

アカは彼の登場にぎょっとした顔を見せる。しかしすぐに仏頂面を作り直し、彼の言葉にとりあえずの肯きで応えた。

「そう、ならわかったわ。あんたは好きなだけ寝てなさい。 それよりもサキ。あんたは生理でも何でもなく、ただ暇しているんでしょう？ 少しは先視を使って 漆黒 の作戦の組み立てに協力しなさい」

それがアカの目的だったようだ。

一方サキは、「いやですわ」といつも調子で一言。

「チヨが寝込んでいる以上、私はチヨのそばを離れたくありません。なぜなら、私はチヨの所有者なのですもの。いかなる時もこの子のそばにいて、その変化を観察していくのですわ」

「ボクのご主人様はツミだつてば……」

相変わらず、サキは変なことをいつ。と、またそこでチャイムが鳴った。サキが応対に出る。

「あら、今度はキズオト　　いえ、千風ちゃんですの」

「うん、久しぶりだね、サキ。お邪魔しちゃうよ」

パタパタと軽い足音を伴い、玄関からセリロングの黒髪の女子高校生が姿を見せた。

「うん、チヨとアカもいるね。ここにちは、一人とも。全員集合だね」

澆漑と挨拶する千風。

アカが答える。

「　あんた、もしかしてこの場所のこと…………」「最初からわかつてたよ。でもこっちの準備もあつたし、アカに会わせてここに来ることにしていたんだ」

にこにこと満足顔の千風。

アカはただ深いため息だけついた。苦労してボクらを探したのに、千風はあっさり同じことをしたからだろうか。千風がぐるりとこちらを向く。

「チヨ、具合はどう？　初めてだとちょっと大変だと思ひつけど」「うん、まあ大丈夫だよ。もう少しで終わると思ひし」

かちやん、と音を立てサキがコップにお茶を入れて運んできた。アカと千風に座布団を示し、三人はボクの布団を囲んで座る。

「ふふ……よしやく役者が揃つたということですわね。こつして落ち着いて見ますと、皆さんずいぶんと様変わりされましたわね」皆さん、というのはボクも入っているのだろうか？

「あなたもね。この中で、唯一男じゃない」

アカが冷静に言つ。

サキはにこりと笑みを濃くした。

「ええ、そのとおりですわ。私、チヨの生理が始まったとき、といつたくし

さに何をしたらいいか分からなくなつていましたもの」

でも実際は、サキはちゃんとボクを助けてくれた。サキはいまだによくわからない部分があるけど、それでもボクにとっては心強い存在だ。

「そういえばアカ、あなた生理はありますの？」

「え？」

突拍子もないサキの質問に、ボクは思わず変な声を出してしまった。

もちろん、あるに決まってるよね。

そう思つてアカの横顔を見ると、ちょうど彼女もこちらを向いて田と田が合つてしまつた。

アカがボクの名を呼んだ。

「あんたはどう思う？」　もしかして、知つているのかしら？」

まるでなぞなぞを始めたみたいだ。

「つうん、知らないよ。でも……アカも女の子だよね、ないわけ……」

…

「ブブー！」

突然の「ほべしつ」千風の声。　間髪入れずアカが千風に突っ込みを入れた。

「びっくりするじゃない。　ま、そのとおりだけどね。私は太陽の靈力を使つているせいか、『月』に縛られる月経はないの」

サキが言葉を継ぐ。

「日神 天照大神 は治める神であつても、産み出す神としての能
力は薄いのです。古事記では、一応“宇氣比（神を産むこと）”を
していますけどね。しかしそれも建速須佐之男命（スサノオ）に
負けています。　チヨ、私が言いたいことがわかりますか？」

ボクは分からなかつた。

するとサキは相好を崩し、にたりと笑つた。なんか嫌な感じ。

「察していただけなくて残念ですわ。つまり、私達でたくさん子供を作つていきましょうということです。できれば今すぐぐつ？」

アカがエアチョークでサキの言葉を元から止めた。

「ちょうどいいから、このまま連れて行くわ。じゃ、また近いうちに会いましょう」

腕をサキの首にかけたまま、彼を引きずつてアカは去つていった。あとに、ボクと千風だけが残された。

「ね、外で話しあない？ 今日はいい天気だし。 動けるんでしょ？」

ボクは肯いた。

「うん、寝てるのが好きだから寝てるだけだよ。猫だから」「猫だから、か。本当にそのとおりみたいだね。 じゃ、行こうか」

*

宿から少し離れ、見晴らしのいい川沿いの茶屋に来た。そんな場所にきてふと気がつくのは、季節がいつのまにか夏から秋へと移ろうとしていたこと。木々はちらほらと紅くなり、景色は少しづつ秋の色になつていた。

涼しい風を浴びながら、千風とボクの二人は白玉あんみつを食べる。煙水晶のような白玉は、少し尖っているボクの歯にまとわりつくので食べづらいけど、あんみつ自体は甘つたるくておいしい。

「ねえ、チヨ。変なこと聞いてもいいかな」

わざわざの前置き。遠慮の少なそうな千風には珍しいと思つた。

「チヨはサキのことどう思つてるの？」

この問にはまだ真打じやない。

けど、難しい質問だ。ボクは少し考えてから言ひ。

「サキは、ボクにとつて大切な人だよ。好きなところはいっぱいあつて、嫌いなところもちょっとあるけど、ボクにとつてかけがえのない人。サキがいなければ、ボクは不安でいっぱいになる。サキがそばにいてくれれば、ボクにとつてそれ以上心強いことはない。ボクは、サキのことを」

愛してゐる。

とは言えなくて、まだ。

「大好きだよ」

「じゃあせ……サキと子供、つくりたい？」

普通の少女らしい恥じらいの見せ方だつた。千風にもこんな面があつたのかと、ボクはちょっと驚く。演技かもしれないけど。上目遣いの千風に、ボクは少しためらつてから

「…………うん、そうだね」

言つてから恥ずかしくなつた。

やつぱり、と千風は顔に書いていた。呆れたような、でも悪い感じのない笑顔に。

千風は答えを予測していたからこそ、こんな質問をしたのかと、ボクは思った。

ボクは子供をつくりたい。

それはボクが大地と絆をもつものだから。種を受け取り産み出す、

大地と同じ本能をボクは持つている。本能だけに従えば子供の父親は誰でもいいのだろうけど、ボクは本能以外に感情も持つている。そのボクの感情とはもちろん

「サキ以外にはいないと思う。ボクと子供をつくる相手は。……今このところは、他のだれも考えられないよ」

向かい合ひ千風は、とても優しい、慈愛に満ちた微笑みでボクを見ていた。

「なんか幸せそう。でも、男の人はほかにも沢山いるよ。よく考えたほうがいいと思つよ」

「…………え、と……」

答えに詰まってしまった。

「あはは、そんなまともに反応しちゃダメだよ。好きなんでしょう、サキのことが？」だつたら、それだけでいいじゃない

ボクは恥ずかしくて頭をかいてみた。

ちょっと、千風は表情を引き締める。

「だけど、まずは終わらせないとね。私達と、月との間の物語を」

「そうだね。ボクの子供が生きる世界は、現や夢とかの柵つちを越えた新しい世界だといいな」

と、千風が笑いをなくした表情でボクを見ていた。

「何があつても、サキとチヨだけは守つてみせるよ。命に代えても」

「な、何言つてるんだよ。……まるで千風が死んじゃうみたいじゃないか」

突然の千風の言葉に、ボクは動搖して早口になってしまった。

「死んじゃうかもよ？ だつて、これは戦争なんだもの。チヨだつてもうそれくらいわかってるよね？」

わかつてゐる？

ボクはそんな“殺し合い”とかを否定し続けてきた。いろいろ言われたけどボクはここまで來たし、千風だってボクのことを認めてくれていたはずじゃ……

頭がぐるぐるしてきて、困つたままそらしていた視線を千風に戻す。

すると千風がうつむいたまま小刻みに肩を震わせていた。彼女は笑つてゐる！

「千風……っ」

「気づいた？『冗談だよ。ほんの少し、シリアスにしてみようかなあつて思つただけ』

「冗談……」

「ボク、『冗談は苦手だよ。千風も人が悪いよ』

「チヨがお人好しなだけだよ。ま、それが良いと思うけどね」

そう言つて千風は腰を上げる。去ろうとする彼女を、軽やかな風がふわりと取り巻いた。

「じゃ、今度は新月の夜だね。そして、それからもまたこうして会えるように頑張ろうね」

「うん、誰も死なないよ。死なせない。新しい世界にみんなでいたいから。　そのために、ボクは全ての力を使ひよ」

千風の背を見送りながら、ボクは思う。

すべての想いを知るために、ボクは旅に出た。そして今、ボクは想いを賭けて戦おうとしている。

世界はいま何を想つていいのだろうか？　いまだに、というかこれからもないだろうけど、ボクは世界の想いを知り尽くすことはできない。ボクが大地を介して感じている想いも、ほんのわずかなも

のだ。

でも、ボクは願う。世界が安らかなものになりますよ!こと。眞が、そうなつてほしいと想つてくれますよ!こと。

*

その夜、サキと手をつないで寝る。畳の上に一つ布団を敷き、間をちょっとだけ作つて。

寝室の闇の中、つないだ手は見えないけど確かにつながっている感触はある。そう、ボクは安心と一緒に思つ。

「あなたは恐れないのですね。変わりゆく自分を」

ふいにサキが言つた。

「そうだね。まつたく恐くないわけはないけど、ボクはボクのままだと思つてるから。いま変つてるのは身体で、心の器だけ。だから、心が、想いが変わらなければ、ボクはボクであり続けられると思うんだ」

サキの答えはない。

ボクからサキへ問い合わせる。

「サキは、ボクのこと好き?」

一分間の沈黙。

「はい 私はあなたのことを愛しく思ひます」

わからない言葉だと思った。でも……こんなサキ、今の彼の気配はいつもと違つていた。

けど今は言葉をつなげる。

「なら、良いよね。ボクらは互いに想い合つてる。想い合つてるから、支え合える。ボクがサキのことを頼りに思つてゐるよつて、サキもボクを頼つてくれればうれしいよ」

吐息が一つ零れた。闇の静けさに、ふつりと消えた。

「あなたはお強いのですわね」

「ボクは強くないよ。でも、『みんな』がいてくれるから。大地、サキ、アカや千風たちが。それはサキも同じはずだよ」

ぎゅっと手が握られた。

「私はかつてツミさんの悲しみを慰めようとしました。でも弱かつた私は彼の悲しみを少しも背負つてあげることができず彼の胸の中に冷たい怒りを作らせてしまったのです」

小さな声で、区切れなくサキは言つた。まるで懺悔するよつて。サキが悔いを口にするなんて、今まであり得ないことだったと思う。でも口にはしなかつたけど、これまでずっとサキはこんな悔いとか戸惑いとかを押し隠してきたんだ。小悪魔のようにお気楽に振舞う、その影で。

「大丈夫だよ。悲しみと過ちの連鎖は止められる。一緒に行

こう、サキ。一人なら、何も怖がることはないから」

手が引かれる。まるで、ボクの手にすがるように。

「ええ。離れないでください」

会話はここまでだつた。

この夜、ボクらは身体を重ね合わせることはなかつたけど、はじめて心を重ねることができた気がした。はじめて、サキの素顔とこのものをボクは見ることができたと思つ。

サキもやつぱり弱い心を持つていて、それを隠していた。でも、
だからこそ、ボクは確信した。

この人なら、どんな大地の上でも、どこまでも歩いて行けると。
互いの弱さを曝け出すことができた今だからこそ。

7・0「fly me to the moon」(後書き)

帰つてきました、京都から。いろいろ疲れて、おまけに田の前にやることが山積していく調子が狂つてます。

今回は間幕でした。

解説、というか注釈を一つ。

建速須佐之男命はタケハヤスサノオノミコトと読みますが、“スサノオ”というほうが知られていると思います。“スサノオ”は日本書紀の言い方です。この物語のネタはとりあえず古事記だけに絞っているのです。

しばらく投稿は遅めにやると思こます。しかし最終幕なので、ぜひかお付き合いください。

7・1 「火蓋はきつておとす」

世界最後の日は、暗い朝から始まった。

曙光は赤黒く、まるで乾きかけの血のよう。わずかに太陽が昇り空が青白くなつたところで、日食は始まった。

光輪も見せない皆既日食。世界は日の光を奪われ、黒い空には無数の星々が、天球に張り付いた銀蠅のように瞬きもせずに光っていた。

さらに、各地で電灯の故障が相次いだ。他の電化製品は動くのに、光を出す物だけが壊れたのだ。

現は闇と、無数の空の眼のような星に包囲されながら、じつと光を待つた。一時間、一時間と経つても月は太陽を隠し続ける。火を焚いて明かりをとるところもあつたが、それはまるで戦火かの如しのようだった。

そして正午を迎えたとき、ついに最後の刻は始まる。

*

「状況は？」

「はい、先ほど東京湾中央に現れた巨大建造物には変化はありません。しかし、海面が固着化され、その上に無数の異形^{バリエント}が出現し、建造物から湾岸までの区間を隙間なく埋め尽くしています。向こうから侵攻はありません」

日本武道館の中に陣を敷いた 漆黒 の人たちが、あわただしく情報の交換と戦闘の準備をしている。武道館の中は術式によつてわずかに明かりが取られていて、みんなこの薄暗い中で動き回っている。

ボクとサキ、それに千風はワンボックスクスカーの中からその光景を見ている。ボクは助手席、千風は後ろの座席で、ハンドルを握っているのはサキだ。

「暇そうね」

闇にも映える唐紅の狩衣を着たアカが来た。手にコーヒーを持っているらしく、薄明かりにボオツと浮かび上がっている。

「あれ？ アカはすることないの？」

「ないわね。鷲巣が号令を下せば状況は始まる、それだけだもの。私の判断を挟むところはない。だから待つていいだけ」

余裕綽々つて感じだつた。

でも本当に暇だ。することがなくてあくびが出る。

「まあ、アカは今 漆黒 の衣装ではありますんものね」

黒い服を着ていな時のアカは、ただの厄介者扱いされることに決まっているらしい。

ちなみにみんなの服装を言つてみる。

サキはいつもの黒いマントに白いインナー。インナーのシャツにはフリルが付いていて、どこかの貴公子みたいな感じになつていて。千風は黒いセーラー、学校の制服だ。こうしてみるとアカより千風のほうが、漆黒の守護者 っぽい恰好をしている。

ボクはオリーブ色のジーンズに黒いノースリーブのシャツ。特にどうという服装ではないけど、シャツはサキが 漆黒 の人たちに注文した特別製で、特殊な黒い生地の上に白い線で防御の方陣がごちゃごちゃ描き込まれている。 一見すると柄が悪い。

こんな統一性のない服装をしているボクらは、これから力を合せて戦う。まあ、そもそも思つてることもみんな適当にバラバラだし、それでも一緒にいられるのだから人同士の絆というのも不思議で、面白い。

少し経つと、小柄な 漆黒 の人がこっちに来た。確か姫鶴つていう諜報員の人だ。

「紅鳥さん、伝令です。あと五十一分後、1300に鷺累さんを先頭にした突撃を開始します」

「いよいよ始まるのか、とボクは身を引き締めた。

「そ。じゃ、もう移動開始ね」

姫鶴がいくと、アカはボクらの車、千風の隣に乗り込んだ。

「では、始めましょうか」

サキが車のキーをひねってスターターをかけた。

*

「主人様 月神ツミは、東京湾の真ん中に城を建ててボクらを待っていた。

堀はなく、高い石垣と門が城を囲んでいる。蒼い月光の中で外壁は白くあやしげな光を放ち、青い瓦は海のように波打っていた。大きさは普通の城と変わらない。けど、その異様さで、各地にあるどの城にも比べようのない威圧感を眼下に放っていた。

その足元には、数えきれないくらいの異形がひしめき合っていた。そして異形の頭上に、浮遊している銀のマントの人人が何人かいる。異形の軍団を統率する 月の子 だと思う。

鎌の陣を隊伍を組むと、漆黒の守護者 の人々は突撃を開始した。 目的は一つ、月神を倒しうるボクらの道を作ること。サキが頼んだとおり、の人たちはボクらの露払いをしてくれるんだ。突撃は力強く、けど門まで五十メートルというところで止まった。あとは、ボクらが進む番だ。

「go to ready！」

サキが陽気に言い、アクセルをべた踏みした。

改造されたワンボックスカーの、レースカーにも積めるV10エンジンがフル稼働を始める。強烈な推進力で、ロケットのように車体は前に出た。

鷺累達のつけてくれた道は、早くも埋め尽くされようとしている。攻撃のはじめはボクの術。前方の重力を軽くする。

「吹き飛ばせ、ファルクラム！」

千風による、音速の風の召還。大地の支えを弱くされた異形達は、足搔くこともできず空に巻き上げられていく。

その間にアカが車を飛び降りる。

彼女は地面に降りたわけではなく、火炎の推力を使つて車と並走し、すぐに屋根に立つ。そこで、大規模な攻撃術の用意を始めた。

「この火焔は龍の吐息」

風の中から火が編み出され、螺旋を描いてアカを取り巻く。

「カウリュウカライゲキ
紅龍火雷撃！」

獣の咆哮のような音を立てて飛んで行く、アカの火球。

「！」

前方で炸裂。

車は進み続け爆発の範囲に入つていいくので、サキとボクとで車を護る。

灼熱を突き破り、ボクらは前進する。と、外から抗議の声が聞こえた。

「馬鹿野郎！ 何人か巻き込まれただろうが！」

鷺累だ。短く太い銛のような槍を持つて、一本の足で車と併走し

ている。

窓から鶯累を覗いていると、頭上から答える声が聞こえた。

「悪いわね。先を急ぐのよ」

「そんなことは知つておるー！」

反対側からも声。車の右側からは糸鶴も走つてくる。

気づけば城まで四十メートル。向こうの防衛ラインも最後の物になつている。

「減速しろー！俺達が先行してやるー！」

サキがブレーキを踏む。すると、まず糸鶴が車体の前に出た。弦をこするような微かな音が、周りの音の中から聞こえた。糸鶴が糸を加速を付けるように振り回している。

「Storm Runner！」

糸鶴の手の先から放たれた細い銀の線は、遠くまで伸びていく。そこで彼女の急制動。糸は一気に下に引かれ、群がる敵を頭上から切斷する。さらに腕を水平に振ることで、みじん切りにされた肉片が宙に舞つた。

「次は俺だな。　　“轟雷”ー！」

鶯累が高く跳ぶ。一直線に、城門の前に浮かぶ 月の子 目掛け
て。

隼の鋭さで月の子に槍が突き立てられる。

「烈！」という掛け声とともに、月の子を貫いて飛び出た穂先から稻妻が発し、残つていた異形のほとんどを打ち倒した。

散り逝く命に安らかな眠りを。

戦争になつた以上、誰かが死ぬことは不可避だ。残念なことに、ボクにその全てを止める力は無い。ボクにできることは、死んでしまつた命達の冥福を祈ることと、早くこの戦争を終わらせること。そしてこの先の未来に死といつ“罪”を背負つていくことだけだ。今は目の前に集中する。

扉には試すような弱い結界が張られている。ちょっと力を飛ばせば……簡単に砕けた。

結界を壊し、物理的な扉は車体で突き破つて、ボクらはついに求め続けていた場所にたどり着いた。

*

城の中は、言いようもない奇妙な雰囲気が漂つていた。

まずにおい。ふうわりと深く香る沈香が焚かれている。強いにおいではないのに、それが嗅覚を上回して他のにおいを全然感じじることができない。

音はなく、しん、とした静寂がここにある。重苦しい静寂、とうわけではないけど、それがかえつて不気味だ。外では激しい戦闘が繰り広げられていて、今も破つた扉から見えているのに、その音も全く届いてこない。

床と壁は、仄赤かつたり、仄青かつたり、そんな極彩色の羽目板で覆われている。金属的な光沢をもち、でも触ると木のような温もりを持つてる。運動靴で上を歩くと、リノリウムのような感じがした。

天井は銀の梁と漆塗りの板で作られている。明かりをとるものはついていないけど、無機質に白い光は上から降つてくる。それも真上からまんべんなく降つてくるので、ボクらはどこに立っていても足元にちょっとしか影を作れない。

しばらくすると、扉がふさがり始めた。一秒の間に、青銅みたいな扉は外とボクらを完全に隔てた。

かすかな衣擦れの音。

「「よひじや、月の富城へ」」

重ねられる一つの同じ声。ササヤキとナゲキだ。

今日の一人はまったく同じ柄の留袖ではなく、互いに鏡合せになるように柄が配置された着物を着ていた。左右片方は瑠璃紺がベースで、もう片方の鈍色までグラデーションしている生地に、秋という季節に合わせたのか酸漿（ほおづき）と銀杏のアクセントがちりばめられている。つやのない帯は銅色で、栗色の飾り紐を巻いている。

「出迎えありがとうございますわ。このままシバヤさんのところまで案内してくださりますの？」

サキの口調に挑発的な色が見えるのは気のせいだろうか？

うつむく、気のせいじゃない。なんだか氣を昂ぶらせているみたいだ。答えるのはナゲキ。彼女は見下すような笑みを浮かべ、

「残念だけど、それは違うわ。私達は一緒に踊ってくれる相手が欲しいでここにいるの。せっかくの宴ですものね」

「千風ちゃんに負けたあなたが、私に釣り合つと思つていますの？ 邪魔をしたいのなら、はつきりそうお言いなさい」

やはり噛み付くように話すサキ。

二人は目線で火花を散らす。

「今日はずいぶんと吠えるのね、サキ。どうしたの？ 声もまた低くなつたみたいだし、女じやない身体の具合になれないのかしら？」

それは、黙つていたササヤキの言葉。

虚を突かれた表情となり、サキは口をつぐむ。サキが黙り、ササヤキとナゲキが何も言わないと、あとに口を開く人はいない。

「サキ、気にすることは無いよ。ボクがサキと一緒にいるから。

ササヤキ、ナゲキ、戦いたいのならボクは相手になるよ」

「馬鹿じゃないの？」とアカ。「ここで力を使って、シミに勝てると思つてるの？」「こはサキとキズ……千風にやらせて、私達は先に行くわよ」

サキを見る。彼は顔をしかめて、視線を何処ともなく空中に定めていたけど、ボクの視線に気づいて振り向いてくれた。
作り物っぽい笑みを浮かべて。

「任せてくださいまし。
わたし私は大丈夫ですか？」

本当に？ と言葉にせずに思つと、答えるようにサキは言つ。
「なら……口づけを、してください。私がまだ戦場に立つていられるように」

いつもの強引な調子のない、弱々しい要求。

ボクは何も言わず、そのとおりにする。

爪先立ちする彼と、ゆっくり唇を重ねる。 口付けは何度もしたけど、こんなふうにサキから求められてボクからするのは初めてかもしけれない。

「私達は」サキが言つ、「いつも一緒に」ボクが繋げた。

繋げた言葉は、心を繋げる。ボクをまっすぐ見る、彼の青い瞳が

とても愛おしく感じられた。

「ならば、私はあなたの思うように戦いましょう。ですから、いつ

てらっしゃいまし

今度の微笑には、安心できる感じがした。いつもどおりの、不敵なサキだ。

千風のほうを向く。視線を合わせると、彼女はぱちりと笑った。

「あたしも頑張るから。何も心配しないで先に進みなよ」

「うん、信じてるよ。あ、これ渡しておくれ」

首にかけている八尺瓈勾玉やかさにのまがたまを左手でつかみ、右手を千風の右手と重ねる。そして彼女の中に、草薙乃剣くさなぎのつるぎを実体のない状態で送り込む。

「ん、いいね。あたし影薄いみたいだから、これで活躍させてもらいうよ」

ササヤキとナゲキに目をやる。同じ顔の一人は、微妙に違うけど同じように目を細め、ボクとアカに一つの方向を示した。

「あちらに進みなさい。ツミのところまで行かせてあげるわね」

「でも何もないとは思わないことね。もちろん、何があるかは教えないけど」

絶対何がある。でも、恐れる必要はない。今さら。

ボクが歩き出したと同時に、アカも隣に並んでいた。

ちらり、と互いに目くばせする。でも、もう「ちがい」も「ちがい」も言つともない。

ボクの後ろにサキ、ボクの前にご主人様がいる。

7・1 「火蓋はあつてもいい」（後書き）

城の場所をどうにしようかな、と少し悩みました。あと 漆黒 が集まる場所も。

だいたい六話くらいで書くのかと思っています。最後なので、限定解除でいきたいとおもっていますが。

PCが新しくなったのもだいぶ慣れました。誤字脱字があつたら教えてください。

7・2 「闇映す水面」

サキと千風、ササヤキとナゲキ、四者は一組に分かれ対峙する。
「何故あなた方は戦うのですか？」

静かに、サキが問う。

「それ以外にすることがないからよ。あなた達と一緒にシミと戦う
わけにもいかないし、黙つて事の終結を見ている気もない。 な
ら、かつての“家族”と死ぬまで戦つてみるのも一興じゃない」
そう、ナゲキは特に面白がるでもなく答える。

ササヤキは千風に視線を向ける。

「思い返せば、キズオト、あなたに私達は殺されてい
から命を奪われるのは、命を奪うのはどっちかしらね」
千風は真顔だ。

「誰も殺されないよ。チヨが悲しむから。 あたしの風の刃は、
ササヤキやナゲキが自分で心に作つた戒めを断ち切るために振るわ
れる」

「誰も彼も」とナゲキ。「チヨの名を口にするのね。彼女なんて、

ちょっと運が良かつただけじゃない」

「それを言つのなら、あなた方は運がなさすぎですわ。幸運は月の
恩寵。 結局、どこまでもあなた方はシミさんの慰み物以上には
なれなかつたのですわね」

しばしの間が空き、ふう……と誰かが溜め息。

「私達は疲れたわ。だから 最後くらい楽しませてね」

**

手を合わせても、人は一つになりはしない。
しかし元は一つの体に入っていた二人の女。互いに手を合わせる

「」と、その末端から形を崩しゆるやかに混和し始め。

「憎しみの囁き悲しみの嘆き。水底に沈み氷に秘められたものは今
「」にある。

私達は合わせ鏡。水面に映る双つの影。この世ならざるもの、実
体なきもの、此処にある

二人の形が崩れ、サキと千風の足元を水が浸す。その水はこれ以
上なく青く、同時に黒く渦巻く。ザラリとした流動物の上に、二人
分の着物が漂つていた。

「さて……青は悲しみで、黒は憎しみですか？ その逆でもよさを
うですわね。 千風ちゃんはどう思いますの？」

千風は浮遊し、空中で濡れた足をプルプルと振るつている。

「それどころじゃないよ！」 来るよ、サキ！」

床一面に広がった水。墨流しの水面が波打ち、無数の痛い水滴を
発射する。

「あらあら。これは余裕のない戦いですわね」

水面に揺れる自分の影を踏み、サキは水の上を走る。

左手の銃をバレルを長くして水底につける。そのまま駆け回り、
大きな方陣を床に描く。

「force field！」

烈光が走る。

凄まじい量のエネルギーが、光の形をとつて発動する。物質・非
物質を問わず破壊される、そんな光だ。

しかし、実際には先の術が顕した効果は薄かつた。水は相変わら
ずそこにあり、絶え間なく攻撃を仕掛けてくる。

「駄目でしたね……」

「じゃあ今度はあたしが。……草薙乃剣！」

千風の右腕を光と風が包む。それらは集結して一振りの剣となる。

「叢雲は月を隠し雷を呼ぶ。

あまのむらぐも
天叢雲剣 モード！」

バシッ、と剣身が放電し、草薙乃剣は形を変える。切つ先を二つに分け、剣の平にもスリットを開けた両刃の剣。陰鬱な空の色に、鈍く、光沢する。

「落ちろ！」

剣の力で天井と床の間に大きな電圧差が生じる。千風が剣を振り下ろすと屋内に何本もの雷柱が建つた。水を貫き、稻妻は轟音と水蒸気を発生させる。意思ある水は苦悶の叫びをあげ、宙に飛び散った。

「！」

宙に舞つた水は千風に付着し、彼女を鉛直下方に引いた。大技の後で隙を作つていた彼女は、容易く水の中に落ちてしまう。

殺してえ。

水の中で、千風は聞き覚えのない声を聞く。

あいつら汚ねえことしやがつて、絶対復讐してやる。

裏切られました。彼が裏切りました。裏切られています。裏切ろうかと思います。

人前で言えない憎悪を、闇に囁く幾多の声。

千風は恐怖した。水から抜け出そうとし、もがく。

浅い水だったはずなのに、どうして逃げられない？ そんな焦りと困惑が、千風の心を重くする。

死なないで！

返して！ 大切なものを奪わないで！

次いで聞こえたのは悲痛の嘆き。

千風は心を閉ざすように固く眼を閉じ、がむしゃらに逃げようとした。

する。

「ちゃんと聞いてあげないとダメよ。キズオト、あなたは風を通じてすべての者たちの声を聞く者でしょ？　なのに、どうして拒絕するの？」　　喜びも悲しみも等価よ。ほひ、もつとお聞きなセー」

脳髄に浸み「むよくなササヤキ（或いはナゲキ）の声。
嫌、と千風は水中で言つ。口を開くとただ気泡が出て、代わりに辛く臭みのある水が流れ込んできた。

「心地よいものばかり聞いていられると思ったの？」　　甘いわね、キズオト。そんなあなたが、刃を持つて何かを守れると本気で思つてるの？」

千風は抗う。鳴り響く囁きと嘆きの声に、心を碎かれぬよう。息が苦しい。水の中の声は身体に巻きつこつこいるかのようで、ひどく手足が重く感じられた。

田の前が暗く、心に絶望が忍び寄るのを感じる

「black eraser！」

水が消え、深い闇が、そして細いサキの腕が千風を包んだ。
そして光。再び視界を取り戻したとき、千風は水の上に立つサキに抱きかかえられ、サキと対向してナゲキ（もしくはササヤキ）が立っていた。

「喜びと悲しみは等価ではありませんわ。何故なら、光あるところに闇は必ずありますが、闇あるところには闇しかないのですもの。人は喜びを、光だけを求め続けてよいのです。闇は知つてさえいれば良いのです」

「あなたは悪夢を否定するの？」　　とササヤキ。その声の調子は单

なる問いかけ以上、逼迫した感情を感じさせる。

「誰がそのようなこと言いましたの？ 否定とは、求めもせず知りもしないこと。けれど闇を知るということは、少なくとも闇の存在を認めてこることです。悪夢は存在していてもよいのです。そして」

サキは千風を腕から下ろす。千風は水に足が着く前に、風を操つて浮遊を始める。

銃を構えるサキ。黒い銃は、かつて彼が半身とまで思っていた者が遺した“形”だ。

「私は闇を継ぐ者。わたくし その闇の名は“願い”。ですから私は宣言します。私は闇を孕む大地と共に生き、風には大地を照らす光を望む。 空翔ける風には、光こそふさわしい」

彼のマントが翻る。黒いマントは常よつさうに暗く、深淵の色に染まっていた。

その横に千風が並ぶ。少し前まで怖気に顔をひきつらせていた彼女だが、今はもうその影もない。彼女の面持ちは毅然としている。

「サキは強いね」

「いいえ、それは正しくありません。私はチヨに支えてもう立りますから、チヨがともにあると言つてくれましたから、こうして立つていられるのです。 彼女は言つてました。誰にだつていつもそばにいて支えてくれる存在がいると」

「 そうだね」

風が巻き起こる。

猛烈で、雄渾な風。荒れ狂っているわけではなく、完全に統率され、見えない鋼の手のように一つの仕事を為さんとする。 すな

わち、床一面に広がつた水を一点にかき集め始めた。

当然、命ある水は風に抗う。だが断固たる風の手は、そんな水の抵抗を物ともしない。

「The sea is burned by the suns
hine. The water is erased by t
he ray.（海は陽光に焼かれる。水は光によつて消される）

「コッキング。黒の銃身に緑の光が文字を刻む。

狙うは風の檻に押し固められた水の一塊。ドラム缶一つ半はあるかその量を、サキは跡形もなく消さんと力を溜める。

「BLAZE！」

比較的低速で射出された光の球は、物静かに水の中に入る。

直後、破裂。

太陽のような光の塊が解放され、閃光の洪水の中、水は分子から破壊されて嵩を減らしていく。

「！」

水が震える。攻撃により与えられた衝撃と、苦痛により身を捩じさせる痙攣だ。

痛めつけられた水が、二つの氷塊に形を変え飛び出した。高速で、唸りを上げながらサキと千風に飛来する。

「！」

今は乾いた床の上で、二人は各々ステップして回避する。

氷塊は床に落ち、一つになつて巨人の形をとる。

無骨で、威圧的な姿の巨人。のそり、と身を回すと拳を振り上げた。

「ぐだけろ！」

空気との摩擦で氷の表面が瞬時に解けるくらいの、高速の拳。狙いはサキ。しかし千風が剣をもつて間に割つて入る。

「……！」

荷重は百キログラムを超える。千風の、少女の細腕では到底支えうるものではないが、風の力と、意志の力が彼女を支える。身体が軋む。しかし想いは軋まず、不屈だった。

「I rule light and dark . Light
is Heaven , and dark is Hell .
私は光と闇を支配する。光は天、闇は地なり）
So , I am a master of Heaven an
d Hell . （私は天地を支配する者なり） And , my
assault is . . .」

サキの詠唱に応え、膨大な神秘^{エナジー}靈力が集まり始める。

呼び寄せられる光と闇。それは白と黒の螺旋となり、人の目には映る。

彼は銃を持つ左腕を垂直に構える。どうどうとした煙のような光と闇が、彼の左腕に沿つて床と天井の間を上下動していた。

「……千風ちゃん、好きな狙撃銃は？」

「え、えっと……」98A1とか……？」

力が収縮し、凝結を始める。

雷鳴のような音をたて、光と闇の中から一丁の長銃が作り出される。

淡く灰色に光沢する、一・二メートルほどのライフル。本来のデザインに加え黒と白のストライプが引かれたそれを、サキは重々しく左肩に乗せる。

「乾坤一擲 My assault break throu
gh everything ! （私の一撃はすべてを打ち破る

「…」

詠唱が完成した瞬間、千風は氷の巨人とサキの間から退避する。トリガーが引かれる。長いバレルの先から放たれるのは、黒と白、二条の稻妻。

稻妻は巨人の胸、人であるならちょうど心臓のある位置を過たず貫通、そのまま背後の壁に穴を開けて消え去った。

『…………』

声にならない絶叫。

氷が数えきれないほどの数で、目に見えないほどの小ささで破碎する。それは霧散。ダイヤモンド・ダストの如き微小な粒子になった氷が、煌めきながら宙に舞う。

粒子は下に落ちていく。だが、地に着くものはなかつた。解けて水になることもなく、むなしく空中で消滅していく。まるで雪のように。

かつての家族の散りざまは、あまりに美麗だつた。断末魔を耳にしながら、サキと千風は哀悼と憐憫だけを胸に、舞い散る細氷を見ていた。

*

声が聞こえて、ボクは駆け足していた進みを止める。

左前を走っていたアカが、ボクの停止に気づいて振り返る。

「何しているの？ 置いて行くわよ」

別に心配はされてない。下手な理由を言えば、確實に置いてかれ

る、そう悟りられる口調。

「えっと……声が聞こえたような気がして」

ふうん、と胡乱な返事。自分に聞こえなかつたものに興味はわかないみたいだつた、アカは。

ボクも深く氣にはせず、先に進もうとした。

だけど、アカが立ち止まつたままだ。何か考え込んでいる。ちょっととしてから、珊瑚色の瞳をボクにむけ、問いかけた。

「あなたの名前、『チヨ』はシミからもひつたの？」

「う、うん、そうだよ……」

アカはまた黙る。沈思默考。でも、こうしてアカがボクに興味を示し何かを尋ねるなんて珍しいことだ。

「あなたは夢まぼろに行つたとき、自分の名を忘れなかつた。でも、現でのシミ『あいつ』の名は忘れた。違う?」

鋭く、心を抉るようなアカの視線。

ボクはかくかくと肯ぐ。なんとなく、声が出なくて。

「それで、今は現に戻つてきたわけだけど……あなたはあいつの名前を思い出したの?」

ボクは否定する。

「ずっと頑張つてゐただけど……。でも、なんとなく思い出してきたかな」

ボクの答えに、さう、と短く言ひて歩き始めた。しばらへ経つて、

「私の昔の名前、稚菜わかなといったわ。須藤・稚菜」と出し抜けに言われた。

「へ、へえ。そうなんだ……」

「須藤・稚菜には恋人がいたわ。月神を名乗るあいつに似てたその男は、蒼崎・充秀という名前だったわ。彼は子孫も残さずに死んだけどね」

それ以上アカが話すことはなかつた。

名前、か。

名前はそれが持つ、力とか、運命とか、いろんなものを一言で表しているときがある。名前がないと、それは形があやふやになってしまつし、何より無いと呼びかけることもできない。

『千風の名において、森羅万象、時空を吹き抜ける遙かな風よ。水に愛された、この人の名前を教えて』

さつき聞こえた声。千風もそつやつて名前を失くした誰か そ
う、誰かの 名前を風に探していた。

『主人様の名前は、ボクの中にあると思つ。見つけ出して、呼んであげたいと思う。』

ボクにとって、自分の名前よりも大切なものもあるから。

7・2 「闇映す水面」（後書き）

ああ、ササヤキ・ナゲキが……。
風は水に弱いですね。全然干風を活躍させてあげられない。
つものことですが。

稚菜わかな、は天照大神に関係の深い稚日女神わかひるめのみことから由来してます。わかな、
という名の人はいるようですが、こういう字の人はいますかね？
アカの名前はすぐ思いつきましたが、ツミの名は苦労しました。まだ秘密ですよ？ まあヒントは出しましたので、予想してみてください。

7・3 「月には裏表」

誰もいない、音のない城の中をボクとアカは黙々と進んだ。罠はなく、邪魔する人も異形もない。奇妙に奇麗な城の中、ボクらが歩く通路は、「冗談抜きでボクらが初めて歩いているのだと、なんとなく悟らされる。

質感は妙だけど、この城も大地に属する土や岩、または木から作られているのは間違いかつた。けどそれらはまるで、首を絞められて塗り固められたような、そんな息苦しさでボクの気を沈ませた。アカは何も感じていらないみたいだつた。少し先を歩く彼女の、赫いショートヘアの後ろ頭を見ている限り、何を考え思つてるのかも読み取れなかつた。

単調な前進。

かれこれ三十分は歩き、十六回くらいの階段を上つたとき、突然城内の様子が変わつた。

階段を上ると、まず襖障子の戸があつた。少し開くと、闇が、いや夜がのぞいている。踏み込むと、後ろで勝手に襖障子は閉まり、夜の暗さがすっぽりとボクらを包む。

部屋の広さが感じられない。まるで広い体育館にいるみたいだ。すると、明かり。青白い炎が少し離れた、距離感の掴めないところで点る。

月光のような明かりで、畳くらいの大きさのアクリルのような黒いタイルが敷き詰められた床は見えるようになる。だけど、壁を見ることは、猫の瞳をもつてもできない。

炎からは、微かに人の神と肉が燃えるにおいがした。

そして近寄つてくる人の気配。

「やつとにかくまで来てくれたね。アカ、それにチヨ」

ツミ ボクの『ご主人様』だ。

小さつぱりとした着物姿。雲の浮かぶ夜空を思わせるように濃淡の付いた浅葱色の着物を身にまとい、その下には何も着てないみたいだった。朽葉色の帯の腰に、一振りの刀。まるで、江戸の町を歩く武士みたいだ。

足にはなにも履いていない。

ちょっと長めの髪は白く、瞳は琥珀色。童顔の彼は、前に見た幻影の時と少しも変わってないみたいだ。

ボクより少し背の低い『ご主人様』に、抱きつくことを想像する。けど、実際に身体は動かない。どう振舞つていいのか、わからない。となりのアカを見ると、彼女は厳しい表情で彼を凝視していた。瞳の色が金色になっていた。

そんなアカに、ツミはゆっくり歩み寄る。ツミの白い手が、アカの少し荒れた頬に触れる。

「 気安くするんじゃないわよ、偽物 」

頬に触れた手をアカが掴むと、一人の手がまとめて火に包まれた。

「 ! 」

火のついた腕を振り払い、一三歩後ずさるツミ。あつという間に片腕は焼き落とされてしまう。

一方、アカは呼び出した火の中から、細身の金の剣 高御産巣日たかみむすひを取り出す。

二人は緊張感をみなぎらせ無言で対峙する。ボクも、あえて口を開くことを避けた。

「僕は偽物ではないよ」

しばらくして、彼が言った。

「焼かれた服」と腕を再生させ、刀の鯉口を切りいつでも抜けるようになる。

「でもあんたは、私の求めているあいつじゃない」

「なら、僕はだれだ？ チヨ、君なら何かわかるかい？」

ボクが言つけることは何一つない。

あるいはただ漠然とした違和感と戸惑いだけ。でも、聞かれたからには言葉にしてみよつと思つた。

「そこにいる人は…………シミの、複製…………？ ううん、シミであつてシミじゃない、もつ一人のシミ…………」

「ねえ、本当のシミって何かな？ 答えてくれるかな、アカ？」

愉しむような彼。

アカの眉間に厳しくしわがよつた。

「なぞなぞは嫌いよ。言いたいことがあるなら、はつきり言になさい」

切つて捨てるような口調。

その返答に、やれやれと彼は首を振る。

「君は相変わらずだね。でも、そんなぶつきらぼうなどこにも好きだよ、アカ」

とびきりの甘い声で、彼は言つ。

アカの顔にちょっとだけ朱が差す。

「僕はシミだ。シミはこの世界に一人しかいない。 シミの名を

持つ者はね。

神となり、世界を作りかえるためには莫大な、天文学的ほどの神秘靈力が要る。さらに単なる力以外にも、無限の知能や知識、つまり全知全能を得ることになる。

だけど神の力と能力の前で、人という存在はちっぽけだ。封じられた神の長子 淡島 に接触しその力を得てから、ツミという意識は急速に希釈され始めた。まるで大海に落ちた水滴のようにね。そのままではツミの意識は消滅していた。そうなれば世界を思い通りに変えることはできなくなる。だから、ツミは 僕は、解決策を講じた。

僕は己を一分することにした。片方には、神の力と根源的な意志を与える一方には心の大部分と力のいく一部、それと“ツミ”の名を持たせた。つまり、後者が今ここにいる僕。だからこそ、僕がツミなんだよ

長々と、つかえもせず滑らかに彼は話しきつた。

ボクは話の大きさに、唖然として何も言うことができなかつた。一方アカは、いつにない程けわしい顔でツミを睨みつけていた。彼女はどれだけツミの話を聞いていたのだろう？ 彼女を見ている限り、話の内容よりも田の前の人の間をどう扱うかだけ考えているように見える。

「ひどい顔だね。そんなでは、凛々しい顔にしわができるてしまうよ」とツミ。

「あなたの後ろにいる」 アカは無視した 「もう一人のあなたは、今何をしているの？」

「もう一人の僕は 僕は 月神 と呼んでいるけど この古い世界を壊すための奇蹟を実行し続けているよ。

月神 はね、まあ機械みたいなものだ。ツミが、つまり今ここにいる僕がプログラムを組み、月神 に打ち込む。すると 月神 に持たせた衝動的なモチベーションに沿って、月神 は奇蹟をおこしていく。一人の僕はそれぞれ物理的にも隔絶していてね、

この方法は少し手間がかかるんだけど、他に思い通りに世界を変える術を見つけられなくてね」

「思い通り?」とボクが言つ 「こんなやり方が、ご主人様の思い通りなの?」

彼はにっこりと笑つ。まるで、ほしいものを手に入れた子供のように、無邪気に。

「前にも言ったよね? 僕は悪夢^{いたみ}によつて世界を平らなものにした
いと。そのために僕は罪を負い、世界に等しく痛みを与える。
でもね、こういうことは加減が難しくてね。少しでも神の力に引き
ずられてしまつたら、全部を壊してしまつんだよ。その分、ここま
でよくやつてきたと思つんだ。」「どうかな?」

「そんなの変だよ!」ボクは大声で言つた。

「流された血は土が吸い込んでしまう。痛みの後にできた世界は、
結局誰かの痛みを土台にしないと続いていけなくなつちやつよ!」

彼は何も言わない。物のわからない子どもを相手にする父親のよ
うな微笑を顔に張り付かせたまま、刀を抜いた。

その刀 天乃常立^{あめのときたち} の刃は、白く、雪のような光を放つ。冷
たくて、命の持つべき温かみを全く感じさせない、そんな光。
アカも剣を構える。ボクも……戦うために力を練り始めた。

「あんたを消すと、すべては終結するの?」

「いいや、月神^{つきのかみ}をどうにかしないとダメだね」

なら、とアカは横目でボクを見る。闘志のみなぎつた、熱い視線。

「チヨ、あんたは先に行つたらどう? この調子だと、放つておけばあと一時間くらいで現は壊されると思うんだけど」

「たしかに、君が現を守りたいのだったら、一刻も早く月神に会うべきだろ? でも……僕たちはもう話すことはないのかな? 今後、僕たちが話し合ひ機会はないと思つけど」

けどボクの心はもう決まつていた。

夜闇の向こうにある、次の場所に向かうためのポイントを感じ取り、そつちにつま先を向ける。

「（）主人様は…………壊れてるよ。人間は、命や心は粘土みたいに分けたりできるものじゃない。神とか何とかはわからないけど、今のご主人様にボクの言葉は届かない。だからその前に、まずご主人様のしていることを止めるよ」

そう言い残して、ボクはその場を後にした。

*

「行かせてよかつたのかい?」

チヨがいなくなつてからツミは言った。

「アカ、君にとって僕は偽物なんだろう? それなのに、“本物”を他人に渡していいのかい?」

一人がいる場所は、床と天井という名の強固な剛体板に囲まれた、高さ二メートル、水平方向には無限に広がる亜空間だった。アカとツミだけの二人だけの世界。

ツミの問いを、アカは鼻でせせら笑つた。

「シミは一人も三人もいらない。あんたは目障りだから」の手で消す。それに、チヨができるのは時間稼ぎくらいよ

彼女は月神をチヨが倒せるとは思っていなかった。

「君なりにチヨを利用したってことか。アカも人が悪いね」

アカは返事をしない。

やおら剣を両手持ちし、一息でシミに打ちかかった。

神の力を持つ刃と刃がぶつかり合う。

凄まじい衝撃波が生じ、無限の彼方へと消えていった。当然その衝撃は一人にも当たるが、攻撃と同時に防御の術も展開している一人には、強い風が吹いたくらいにしか感じられない。

まず七合ほど剣戟を交わし、少し離れてシミは言った。

「その狩衣、なかなか良いね。やつぱりアカには炎色の狩衣が似合うよ」

「ありがとう。あんたの浪人侍みたいな恰好もなかなか似合っているわよ」

「浪人……。ほめられているのかけなされているのか、よく判らないな」

邪悪に笑うアカと、苦笑するシミ。

そしてまた打ち合い。

剣が触れ合ったびに耳を轟する轟音が、否、頭蓋を割るような、というより音と呼ぶにはあまりに強すぎる空氣の波が一人の耳を掠める。

無尽蔵に近い一人は、剣戟によつて力を周囲にまき散らす。それらは渦となつて二人を囲み、夜を基調とした空間に光と熱を絶やさず放ち続けていた。

「……少し、冷やしてみようか」

アカの斬り下げる弾いたあと、ツミはそう言って少しあがつた。

「夜は静けさと眠りなり。月は氷華を白く輝かせん……」

一瞬にして一人の周囲が白く凍りつく。輝く力の渦も消えた。

アカの身近だけが凍つていなかつた。いや、赫い狩衣の長い袖の端が凍りついている。わずかに動かすと、そこは硝子のように砕けた。

「…………縛王陣！」
ヒオウジン

腕力任せに、アカは 高御産巣日たかみむすひ を床に突き刺す。

これも一瞬。半径一百メートルの床に八卦図のよつた円陣が浮かび上がり、一刹那後に炎上した。

真紅の炎の中、ツミは光の球に包まれ立つている。恋人の炎を、めでるよう恍惚とした表情を浮かべて。

「！」

炎の向こうから、アカに向かつて光の波。すかさずかわすと、波は波濤となつて砕け、幾多の矢となりて再び襲いくる。

「この――！」

剣を振るい、矢を落とす。だが矢は素早く、また何本もある。その上、火炎の光から次々と新しく生まれていた。

「光を使うつてわけ？　光を使えるのはあんただけじゃないのよ。
レンガコウレシ
蓮華光烈！」

光が破裂した。周囲に満ち満ちていた光の一切が破裂し、時空をも震撼させるエネルギーが発生する。

一通りの激震の後、また夜が再生はじめる。

闇の中で、アカは倒れ伏していた。攻撃に偏る彼女は、自らが発

動させた術を防ぎきれなかつたのだ。

「 ま、それでも君は治癒できるから良いんだろうね」

「つ伏せになつたアカの後頭部を見下ろしてツミが言つた。
さすがの彼も無傷ではない。着物は焼け、左腕は力なく下がつて
いる。彼の力を受けて燃える青白い篝火も、やや頼りなく揺らめい
ている。

俄かにアカの全身が炎に包まれた。治癒が始まつたのだ。
「火の中で命を再生させる存在。まるで不死鳥だね」

アカが身体を裏返し、仰向けになつてツミを見上げる。

見開かれた瞳は、爛と金色に輝いていた。

「ずいぶんボロボロね。 どうやら、月の属性には私が持つほど
の治癒力はないみたいね」

「そうだね、防御は強いはずだけ。 でも、なら僕はどうやつ
て君を倒せばいいのだろう」

のそりと彼女は立ちあがる。狩衣も無残な状態だが、それが彼女
にある種の迫力を持たせている。

「 約束を、忘れてないよね？」

静かに、彼が問うた。

「負けたほうが勝つたほうの奴隸になるつてやつ？ ぐだらな
い。私はあんたを抹殺するためにここにいるのよ」

アカは吐き捨てるように言つ。

ツミは残念そうに、寂しげに微笑んだ。

「アカ……君は今も僕のことを愛してくれているかい？」

彼女の答えは刃を振り下ろすことだった。

ツミも応戦し、鍔迫り合いとなる。

ぎりり、と刃のこすれあう音。半田になつた金眼の彼女が、低い

声で言ひ。

「私のことを愛せないといったあなたが、そんなこと言わない」と
ね。 気づいている? あんたはいかれているのよ。だから
その匂いと焼きつくしてあげるわ」

その時、 高御産巢日 が閃いた。

天乃常立 が折られ、そのままアカの斬撃はシミの半身を削り
ながら下に落ちる。

しかし、肉体の損傷と痛みにシミが顔を歪めることはなかつた。

「 ガツ ! ?」

それはアカの声。

アカが倒れる。彼女の後頭部があつたそのちょうどの位置に、シ
ミが手のひらを当てている。

彼女の赫い後ろ髪を、さらに赤い液体が染めていた。

「 あんた、何を埋め込んだの?」

延髓の上を探ると、固い突起があり、その内側に突起物の本体が
あるのを彼女は感じる。

アカは立ち上がりうとする。しかし、その足に力が入らない。

「何つてこともないわ。君を奴隸にするための術を結晶化させたよ
うなものだよ」

頭痛。後頭部の柔らかい部分をかき回され挟み開けられるような、
筆舌に尽くしがたき痛み。彼女は声も出せずに床に手をつく。

「 声を出せないのは僕が禁じているからだよ。 手も使えなくし
ようか」

途端にアカの手から力が抜け、彼女は顔面を床にぶつける。

「苦しいよね? 何か言ってよ

苦痛に喘ぐアカの口が開かれる。

彼女はそこに、ありつたけの憎しみをこめて言った。

「この
きちがい」

7・3 「月には裏表」（後書き）

ツリーの話が予想以上に長くなりました。
そもそも当初の予定ではたんに偽物つてはずだつたのですよ。しかし
それもあれかなあ、とか思つてえてみました。
今回、字数は多めでした。またノートが変わったので。

7・4 「夜裂く鳳凰の舞」

ボクの『ご主人様は、ボクの知らないものになってしまった。言葉が届かないと感じた。集めて積み上げてきた想いも、理解されない気がした。

まるで空にあって、手が届きそうに見せているのに届かない月のように。

一つに分かれた『ご主人様』。“ツミ”という名を捨て、神となつた方にボクは会いに行く。

でも、この胸はかつてないほどに戸惑つている。目的のために名前まで捨ててしまつた大切な人を、ボクみたいな大したことのない存在が邪魔していいのかと。

『あなたの願いは何ですか?』

ふいに、サキの声が心の中に響いた。　念話とかじやない、單なるボクの想像だけ。

ボクの願い、それはこの世界を本当に安らかなものにしたいということ。この世界のみんなが幸せになつてほしいこと。もちろん『ご主人様』も。

だけど、こんなやり方じゃ誰も幸せになれないに決まつてる。だから　ボクは『ご主人様』のやつていることを止めるんだ。

それと、『ご主人様』は自分を孤独に追い込んでいた。たつた一つの神となつて、世界中にある罪を全部自分に集めて、それで誰も届かない場所に登つて世界を治めようとしている。

だけど、そんなのも間違つていて。夜空に浮かぶ月さえ、本当は孤独じやない。自分の正体を歪めて、さらに名前を失くしたつて、孤独になれはしない。

名前を呼んであげたい。ボクが思い出すのも、その人がいる場所

に着くのも、あと少しだった。

世界の果てと始まりの場所へ。

* *

アカはツミの裸の足を舐めていた。指の間まで、丹念に。もちろん、これはツミが彼女に埋め込んだ術を使い、彼女に強制していること。だが、彼女自身は自分が何をさせられているのか認識できていなかつた。絶え間なく彼女を苦しめる肉体と精神の両方の痛みが、彼女の認識能力を著しく低下させていたからだ。

にもかかわらず、アカの氣高い心は屈辱に震えていた。痛みと共に、刻一刻と自分というものが書き換えられていくことを感じていたからだ。

独り悦に入つて話すツミ。

「月神^{ムツノミコト}は大雑把なことしかできないからね。僕が新世界の統治者となるための準備は、すべてツミがやらないといけないんだ。そのため月の子を組織した。けど彼女達には月神^{ムツノミコト}のこととは教えなかつた。何故か？……月は孤独なものだと思つたからかな」

アカはその話を、彼の前に這いつくばりながら聞いている。
唾棄するべき話だと思ったが、禁じられて言い返すこともできなかつた。

「僕が月読命^{シベヨウミノミコト}の力を得ているように、君も天照大神^{アマツヒルスのおおカミ}の力を持つている。その点では僕達は同等だ。でもね、神の力を得ることと、神に

なることの違いはわかるかな？

神の力は強い意志と訓練さえあれば人でも使える。だけど、神とならなければ奇跡は起こせない。世界を創りなおすことも、人々を根源的に支配するのも、神でなければできない。だから僕は神となつた。心が壊れるのも承知でね。

ねえ、だから僕が少し狂つっていても仕方ないだろ？……僕が狂つたことを、許すといつてよ、アカ」

アカの口が開き、音を作りかける。しかし、彼女は絶対の意思でそれに抗つた。

「すごいね……！ それでこそ僕のアカだよ。ねえ、今思つてることを身体で表してよ」

身体の拘束が解ける。激痛に虫食まれる身体を立ち上がらせ、アカはツミと視線の高さを合わせる。

そして、その少年の顔を拳で張り飛ばした。

「 そう来ると思ったよ」

ツミは喜々として言った。

「 次はキスでもしてくれるかい？ ……っ！」

今度は蹴りが入った。

痛みでアカは立っているのも辛かつた。だが、彼女の意地が、憤りが、彼女を立ち続けさせ、さらに言葉を発することも可能にした。

「 あなたを見ているとね……吐き気しかしないのよ。…………憎いとも思わない。」

誰が本物で偽物なのか、そんなことはどうでもいい。私はツミを愛した。そして憎んだ。また会つて殺しあうこと望んだけど、いらないならそれでもよかつた。だけど できそこないの渾みたいな奴がいることだけは、どうにも腹が立つのよ……！」

それは愛しい思い出を守りたい想いか、変わり果てた恋人を恨む想いか、如何なる想いなのか彼女には解らなかつた。だが、そんなことはどうでもいいことだつた。理屈よりも、今この胸にある感情の方がアカにとつて重要なことなのだから。

アカは彼の襟首をつかみ、上に持ち上げる。大して背丈の変わらない二人なので、そんなにツミが持ち上げられることもないが。「覚えてる？ 初めて会つたとき、あんたは私の火を見て怖がつた」ツミは特に抵抗するでもなく、むしろ楽しむかのように彼女の手にぶら下がっている。

「そうだつたね。あれは怖かつた。でも同時に、君という存在に引かれ始めた最初の瞬間だよ」

アカは上目づかいにツミを睨みつける。その瞳は金ではなく、彼女と同じ名の色。

「あの時の恐怖を、もう一度味あわせてあげるわ」

ツミの目と鼻の先にある、アカの手が燃え始めた。単に燃えているわけではない。いつものように体表の上に火を走らせるのではなく、彼女の手自体、身体自体が燃焼しあじめているのだ。

「はは……！」

ツミは顔を焼かれる。だが、肉体に与えられる痛みは彼にとつて重要ではない。

指が燃えてしまつと、自然とアカは彼を落としてしまう。床に倒れるツミ。その上に、全身に火を付けたアカが覆いかぶさり、彼の頬を両手で包みこむ。一人ともすでに眼球が焼かれ視界が利かなかつたが、アカは彼の息吹を感じていた。

熱いね、アカの手は。

ツミはそう言おうとしたが、口を焼かれ話すことはできない。

まだ戦闘を放棄していない彼は、火を纏う女の胸を突き飛ばして立ち上がる。

「この時彼の片腕は燃やさせてしまうが、まだ腕は一本ある。その腕で、自分の前方に巨大で複雑な術陣を描き、精神で唱えた。

月光は魔を断つ刃。魔とは我が敵。抗つものよ、我が刃をその身に受け、あさましき動きを止めるがいい。

青白い月光の刃が、アカを、炎を貫く。刃に触れた炎は輝きをそのまま、写真に撮られたかのように動きを止める。暦を司る月読命の属性の一つ、時を操る能力だった。

まもなくして、アカの動きは完全に停止する。しかし、

『火は一時として同じ姿を見せない。命も、想いも、みんな同じ。止まつたときは死んだとき。私は生きている。まやかしのあんたには解らないでしようけど』

火炎の輝きが増し、月光を打ち消す。

焰はそのまま、鳥の形をとつて前に飛び出した。

「！」

無数の光の槍が、迎撃のために射出される。どれも停止の力を持つものだ。

アカは 焰の鳥はそれを旋回したり、曲芸飛行で回避しつつツミを目指す。焰の翼が羽ばたくたびに、爆発するような火炎と衝撃が空間に放たれる。

だが鳥が自由に飛ぶには、高さが三メートルしかないこの空間は狭かった。特にツミが誘導するわけでもなく、焰の鳥は天井という名の空間壁にこすれる。

その隙をツミは逃がさない。密集した光の矢が、しつこく焰の鳥を狙う。

「！」

啼鳥。その声は時空を引き裂くか如く響き、矢の群れを薙ぎ払う。なら、これはどうかな。

ツミは極太の光砲を放つ。まるでミサイルのように、それは鳥を追いかける。

しかし次の瞬間、ツミは我が目を疑った。

再度、空間壁に激突した焰の鳥は、そのまま壁を歪め始めた。膨大なエネルギーをもって、壁を突き破らんばかりに。

無茶だ、ツミは思う。彼女が空間壁に身体を押し付けている限り、歪んだ空間の影響で自分の攻撃は届かないが、神でもないアカが時空に干渉すれば間違いなく身を滅ぼす。

だが焰の鳥は飛び続けた。空間を壊し、歪め、同時に自分の再生力を空間に分け与えることで、空間の損傷を最小限のものとして。

「君は何もかも矛盾している。破壊しながら再生するなんて、僕には信じられないよ。　だけど、それが君の力……！」

「昔はこの矛盾も怖かった。でもツミがいたから、私は……。
受けなさい、私の炎を！」

夜の闇をどこまでも白く照らしだす、激情の炎。
月光を融かしながら、光の速さで駆け抜ける。
よく知った熱の中で、ツミは自分という存在が融かされていくの
を至福と共に感じた。

**

羽目板張りの床を歩く姿がある。

赫い長めの髪に、暖かい珊瑚色の瞳の女。大きな真紅のワンピースを着て、金色の素足に白いスニーカーを履いている。その風貌は、城という重々しい空間からは浮いているかのように見える。しかし胸の前で合わされた両手の中には、焼け焦げて黒くなつた觸體しゃれいづべが収まっていた。

『君は、誰かな?』

觸體が発す、声なき声。

「私は……」彼女は少し長く逡巡する。十メートルほど歩き、さらに階段を登り切つてから答える。

「私はアカ。

それ以外の何者でもないわ」

『そつか……。大好きな僕のアカ。僕には君が遠くに行つてしまつた気がするよ』

觸體の声に耳を傾ける、今の彼女の表情は穏やかそのものといったところだった。毅然としていて、わずかに微笑んでいるようにも見える。まるで舞踏会に臨む姫君のような心躍るような表情にも見える。

「私はずっと同じところにいた。同じところにすぎて、そのまま腐りそうになつたくらいに。遠くに行つたのはツミの方。私はずっと待つてやつていたのに」

彼女が“ツミ”と口にするとき、それは手の中にある觸體を対象としてはいなかつた。

彼の方にもそれは分かつっていた。その理由は分からず、あえて推し量りうとも思わなかつたが。

『ねえ、左を見て』『らん』

アカが言われたとおり首を曲げると、直径五十センチメートルくらいの鏡があり、そこに若い娘の顔があつた。……自分の顔だが、若すぎる。そう、ちょうど現に来た五年前はこんな顔だった気がする。

『ちょっと悪戯させてもらつたよ。成熟した君も魅力的だつたけど、なんだか過ぎてしまった時を感じてサミシクなつたからね』

「……勝手なことを」

ぼそりと、ほんの少しの苛立ちをこめてアカは言う。だが……これも悪くないかもしない。彼の言つとおり、若いままの彼の顔を見ていると自分が身体ばかり老けた氣がして、惨めな氣がするのも確かだ。心はある時と変わらないのに。

しかし、一つ思つ。世界は生まれ変わつとしているのに、自分は何一つ変わつていないと。まあ、自分にはどうでもいいことだけだ。

「本当に勝手なことをするわね」 もう一度彼女は言つ。

「シミは我儘よ。私の思いを棒に振つて、勝手に神になつて、世界を創り変えようとして。 我儘があんたの罪よ」

髑髏は苦笑する。

『それはお互い様。 でも、顔を変えたことはその鏡を送ることで許して。気づいた? それは やたのかがみ八咫鏡 だよ。神器の一つだから、持つていけば何かしら力になると思つよ』

アカは気づいていた。けれども、鏡を受け取ることは拒否した。歩きながら、髑髏を顔に近づける。

口づけ、想いを込めるように。そして手には力を込め、髑髏を漬した。

『歪な欠片だけど、僕の思いを君に捧げるよ』

彼の最後の声。心に入り込んだ思いは、深く吟味せずに隅へと追いやる。どうせ彼は自分のことを愛してくれていないのだから。アカは行く。腕づくでも何でも、とにかく今度こそ愛しい者を自分ものとするため。

7・4 「夜裂く鳳凰の舞」（後書き）

「あなたは誰？」

という感じの問い合わせ、この後しばらく続きます。

この物語に限らず、一体どれだけの人が自分といつもの断言して定義できるのでしょうか。

いよいよ次はラスボス戦に突入です。みんな話が多くてバトル分が少なめですが、熱くやってみたいですね。

7・5 「白き円と神」

ここがどこなのか、ボクにはもう表現することはできない。

確かにボクは東京湾の中央に出現した城を下から順に登ってきたけど、この城は造りからして変だつた。階段は何十とあり、積み重なる階の構造は下のそれとまるで一致しない。おまけに所々の窓から見える風景は、まるで雲の上にいるような俯瞰だった。

果てしない道筋。でも、少しずつ終わりが近づいているのはわかる。

襖障子が目の前に現れる。縁が奈落のように黒い、真っ白な襖。一枚あけると、その向こうも襖だつた。またあけても襖。その向こうにも、さらに向こうにも、しつこいくらいに襖がある。

二十九の襖があつた。すべてをくぐると、そこに真っ白な空間。足をつける固い床面はどこまでも雪原のように広がり、そこから上はぽつかりと黒い空。星がなくて、ど真ん中に骨のように白い大きく円かな月が一つ。色のない光で、月下は煌々と昼間のように明るかつた。

そして、少し離れた所に白い人の形をした“何か”。

白い直衣を着た、白髪が背丈よりもずっと長く伸びた人。肌も白く、目には黒眼がない。茹で卵みたいな目で、その人は天を仰ぎ見ている。

それは状況からいえば、ボクの『主人様以外の誰でもなかつた。でもその人が放つ雰囲気は異様過ぎて、ともすれば人間にさえ思えない。

ボクは声もなく彼に歩みよる。彼は月の海クレータみたいな奇妙な模様の

陣をつくるのは灰色の線で、テレビの砂嵐みたいにうごめいてい

魔法陣の中に座っている。

る。足で踏んでもこっちに何もないけど、線は逃げるよつて動いて形を変えていた。

一メートル。座っている彼の目線を上から覗き込んで、石のような目に反応を見ることはできない。色あせた唇は、何かを唱えて幽かに動いている。

「『』主人様……？」

ボクは呼びかける。

声に反応して、白い顔がこっちに向けられる。そこに、人間らしい表情は一切ない。

「僕は……誰かな？…………君は誰？」

彼の声は砂漠みたいに味気ない。おまけに男声とも女声とも判別できない、機械的な喋り方だった。

ボクは自分のことをご主人様に分かつてもらえなかつたことに驚かない。自分のことすらわからない彼が、ボクのことをわかるはずがないと予想できたから。……少し悲しいけど。

「ボクはチヨだよ。『』主人様の……あなたの猫だよ」

「僕の猫？…………ああ、記憶の中にあるね。それで……僕は誰？」

？」

彼の話し方は途切れ途切れだった。ボクを見る 黒目がないから本当に見えているのかわからぬけど 表情もだらんとしていて、彼の心の状態が危ういことを表している。

「あなたは……」ツミだよ、と言いかけて止めた。

この名前は夢に行つたときに、自分の名前を忘れてしまったご主人様がとつさにつけた名前で、本当の名前じやない。彼にとつてもボクにとつても真実ではないうえに、もつこの名前は捨てられてしまった。

それに……やつと今、思い出せたから。

「あなたは、光樹。^{みつき} ボクの『ご主人様だよ』

「ミツキ……」

自分の名前の音を口にする『ご主人様』。

彼の眼に黒い丸が生まれる。緩んでいた顔の筋肉が、少しづつ緊張し始める。

「光樹^{みつき}、ボクの『ご主人様』」 ボクは呼びかける 「もう『こんなこと

は止めて、一緒に帰ろ？ アカもサキも、みんな待ってるよ」

「アカ、 サキ……僕は君の飼い主……僕に帰る場所があるのかい？」

「もちろんだよ。元住んでいた家でもいいし、新しい場所だってある。だから……」

深い穴のような黒い瞳は、次第に色を薄くして夢見るような琥珀色になる。陶器のような白い肌に血の気が差し、顔には感情が表れ始めた。

優雅な衣擦れの音をたて、彼は立ち上がる。すると、ゆったりとした白衣に隠れていた色鮮やかな錦の帯が顔を見せた。

「そうか やっと来てくれたんだね、チヨ。また会える日をどれだけ待つたことか」

光樹はボクの手をそつと取る。ボクが膝を着いて頭を低くすると、柔らかい彼の手がボクの頭を撫でてくれた。耳に触られると、喉が『ごろごろ』鳴った。

「ご主人様……」

ボクは彼の胸に頭を擦り付ける。懐かしいにおいを感じた。

「君の名前はチヨ」 どう主人様は言つ 「そう、ボクがつけた名前。でも、僕にとつて八年前のあの日、君と夜の散歩で別れてしまつた時からずっと僕は君の名前を忘れていていた。月神になつたとき君の名前を知ることはできたけど、それは思い出したうちには入らなかつた。今この瞬間まで、僕は君を見失つていたんだ」「ボクもご主人様の、光樹の名前を忘れていたよ。でも、ご主人様がくれた名前は覚えていたから、まだそんなに寂しくなかつた」

ボクらは抱きしめあう。ご主人様の体に体温は感じられないけど、深い奥の方に、それが眠つているのを僕は感じ取れる。

しばらく、そうしていた。まぶしい月下の、無音の世界で。

「でも……『ごめん。僕は帰れない。僕が統べた夢たちを、現に還してやらなければいけないから』

そう言つて、ご主人様はボクから離れた。

「どうして……！ ご主人様のやり方じや誰も幸せにできない。わかつてるんでしょ？ なのに……」

彼は余所余所しいまでの決意をみなぎらせて、ボクを見ている。静かにボクと見つめあつたあと、落ち着いた声で答えた。

「僕には僕のやり方がある。月神のやり方がね。世界は幸せになるさ。 そうだ、君ならどうするの？ 聞かせてほしいな」
だんだん、彼の口調が冷たくなつてくる。
ご主人様はボクが答えなくともいいと思つてゐる。どうでもいいんだ。……だけど、ボクははつきりと答える。

「夢と現は一つにするよ。だつて、夢は現から生まれたもので、還してあげなきや夢はいつまでも彷徨つたままだから。

でも、戦争は起こさなくてもそれはできる。夢と現は共存できる

よ。夢が現に戻れば現は変わり始めるけど、現の大きな大地に夢を包みこんで、少しずつ解き放つようにすれば現の変化はゆっくりとしたものになるはずだから

「だけど、それで世界は平らなものになるのかい？」

「それは、みんなが手を取り合ってやることだよ。今までと変わらない。夢の力もあるんだし、平和のためにだけに力を使えるようにすることは簡単にできる。ボクにでも、もちろんご主人様にも。だから、神の力は必要ない。神が世界を治める時代は、これから先も来る必要がないよ」

彼は失笑する。

「本当にそうかな？ 結局、君の言う管理のためにには、神に近い管理者が必要なんじゃないのかな。だつたら、絶対の力を持つ神がすなわち僕が、力だけではなく総てを納めてしまえばいい。

だけど、まあこの話はこれくらいでいいだろ？ そろそろね、

僕は戦いたくて我慢できなくなってきたんだ」

彼は口元を思いつきり、歪に曲げる。狂っている……彼から伝わる禍々しい気配に、ボクは背中に寒気が走るのを感じた。

「光樹……」

「結論として、君のいう方法には夢を操る権利が必要だよね。だけど、それは僕が持っている。因つて君は僕からその権利を奪い取る必要がある。それに、今ちょっと遅めているけど、現の終わりの時は刻一刻と迫っているよ。だから、どうあっても君は僕を倒さなければいけない」

彼は言外に要求する、戦いを。

月光の輝きが強くなり、彼の元から力がにじみ出始める。風ならざる風と、全身を竦ませる威圧感。彼に目を向けることが恐ろしく

なつてくる。

「光樹……」主人様……！」

でも、ボクは田をそらさずに、圧力の向こうに呼びかける。

「僕は光樹でも、君の飼い主でもない。月神だよ、地の代理者。さあ、次の千代^{ミレニアム}王国の命運をかけて、戦おうじゃないか」

力持つ者の、好戦的な視線。それはアカに似ている。

負けそう、冗談抜きで。

だけど退いてはいられない。ボクには負けられない理由があるから。

「……いくよ、月神！ あなたを倒す！」

*

「ボクが立つのは黒い大地。やわらかい土のしどね」

白い足場が、ボクの言葉で土の地面にすり替わる。
ふんわりとした黒土に、靴を沈みこませ力を練り始める。
油断すれば、消される。

対峙する月神からは脅威を、恐怖を、ひしひしと感じる。彼はもう人間ではないのだと、否応なしに悟らされる。

全力を出されれば、絶対に勝てない。でも今はまだ何も仕掛けてこないみたいなので、この時間を使って長い準備のいる大技の用意をしておく。

「土はボクの力。月に抗うもの」

月神に最低限ボクの力の源を奪われないための術。

「神を召喚する者、その肉を脱ぐことはできない。肉の欠けるとき、力の欠けるとき」

相手は実体を捨てて精神^{アストラル}だけでボクを攻撃できるけど、それを制限する術。

「地は動かざるものにして、固きもの」

今立つている場所から動かない限りは、かなり頑丈な結界を張ることができる。

そして、自分の後ろに六連の大砲を作り上げる。砲口は全部 月神^{アストラル}に向いている。素材は鉄の合金をメインに、足りない部分は土自体を焼き固める。

弾はない。
八尺瓈勾玉^{やさかにのまがたま} から抽出した神秘靈力を圧縮して装填する。

他にも後々の攻撃を考えて術を仕掛けた。まあ、それは後のお楽しみで。

「 てえ！」

砲口が光り、紅く光る玉が打ち出される。

月神^{アストラル}はよけない。六つの砲弾はすべて命中し、炸裂する。とりあえず目に見える効果は灼熱と閃光と爆風で、他にも重力の急激な増減や、天の属性を破壊する効果が付いている。

爆発の消えないうちに、ボクはいつたん地面に目を落とし、土の中から棒の一端を掴み上げる。

持ち手の反対側は、長い長い、全長二十メートルくらい。そして太く、最大で直径三メートルくらい。超特大棍棒って感じだ。

気合い一発、棍棒を振り上げる。この時は重力で軽くできるけど、あとで振り落とすときは自分の筋力だけでやらないといけない。

「！」

まだ持ち上げている最中で、月神が攻撃してきた。さつき張つた結界がそれを弾く。

「ぐら、えー！」

振り下ろす。その速さは大きく、半分くらい下ろしたところで空気と摩擦して高熱を生み、棍棒は火を纏いはじめる。

月神の頭上、少し浮いたところで棍棒は何かと激突する。

響く轟音。手首に痛いほど伝わる衝撃。

棍棒を受け止めているのは、月光が固まつた薄い盾だ。盾を打ち砕くために、棍棒に仕込んだ力を解放する。

彼の盾が少し歪み、棍棒が少し落ちる。いける、そう思つて渾身の力で棒を押し込む。

だけど、競り合いは途中で挫かれる。上空から降り注いだ月光の一撃で、棍棒はたたき折られ、ボクは後ろに吹き飛ばされた。

「ぐつ！」

何とか受け身を取つて着地。ダメージは小さい。

しかし気がつくと、目の前に光の有刺鉄線が張られていた。大した防壁じゃないけど、挑発的だ。

鉄線の向こうで、彼は微笑してボクを見ていた。

「折れる」

そつと彼が言葉を吐いた瞬間、ボクの右腕に見えない力が加わった。言靈　　言つたそのままに世界を変える神の能力か。

「彼は天でボクは地。天地は平等だから言靈は無効……！」

八尺瓊勾玉の余剰エネルギーの全部を使って、彼の言靈を無効化

させる。

これで神器は使えなくなつた。あとはボクと大地の力のみで 月神 と戦わないといけない。

「 割れろ！」

衝撃波を放ち、地面^{じゆん}と一直線に彼の防壁を裂く。迎撃として、無数のビームが発射される。それを重力レンズで逸らしつつ、力を右手に集中させる。

「 いけー！」

音速で踏み出す。空気の壁を切り裂きながら、月神 に突進し拳を叩きこむ。

拳はまたしても彼の防壁にぶつかる。でもひるまず、インパクトの瞬間に溜めていた力を解放する。

密着して大砲を撃つみたいな感じだ。ボクの攻撃は何層にも張られていた彼の結界を貫き、ついに彼自身に直撃する。

月神 は三歩後ろに下がつた。それだけだった。

だけど、それは彼の闘志に油を注ぐ結果となる。

「 いいね、面白いよ。 今度はこっちから行くよ」

月神 は右手を月光に、自らの象徴の光にかざす。

彼から発せられる気配が風となつてボクに押し寄せる。そんな中、白い月光は棒状に集まりやがて一本の錫杖となる。

しゃらん、と錫杖が鳴る。澄み切つたその音に、ボクは心の奥底が恐怖に震えるのを感じた。

「 天乃御中 ^{あめのみなか} 見せてあげようか、神の戦いを」

殺氣。それは絶滅の予告としてボクに伝わる。

心臓が止まるよつた、絶対の恐怖を感じた。

7・5 「白雲とひ神」（後書き）

シルはもつと前々から出しておけばよかつたかな、と思つての頃です。

今日の解説。あめのみなかぬしのかみ天御中主神は古事記で一番初めの神様です。宇宙そのものらしいですが、ここに出したことにはまつ深い意味はあります。

そういえば、同じ別天津神の天乃常立も何も喋らないで碎けてしましました。もつと登場人物を大切にするべきでしょうか。

なかなか最終幕は長いです。小説の構成としてはどうかなあと想いますが、今さら考えることも多すぎるんでやつたよりやつて思います。お付き合いくだれこ。

7・6 「天の是非」

深い水の底は闇の底だ。

その闇はやわらかく重みがあり、人を寝かしつけるように包み込む。中で動けば、衣擦れよりも幽かで優しい深い音が聞こえる。その音は人の身体に耳を突けたときに聞こえる音にも似ている。

誰かの胎内に收まり守られているような、そんな安心感が闇という水の底にある。

彼女もまた、そんな闇と水の中に沈み込んでいた。傷ついた身体と心はちくちくする外気から遮られ、有るか無いかの幽かな流れの中、彼女は閑かにたゆたつていた。

自分は眠っているのか、彼女は自問し、否と答えを出す。これは眠りにしては重くなく、意識は穏やかに目覚めている。現実の出来事は遙か遠くに感じ、目覚めのときが迫るような感覚も無い。

自分には何一つ欠けたところのない、満ち足りた永遠だけが与えられているのだと、彼女は確信できた。

そう 私は死の中にいるのだ。

二つに割れて擦れ合っていた心も、水の中で一つになつていて。こんな安らぎは何時振りだろうか。このまま、たゆたい続けたい。しかし、名を呼ぶ声が聞こえる。煩わしいけれど、彼女はあの声には応える責任があると思った。今ここにある安らぎは何ものにも替えがたいが、それでもあの声には応えなければならないのだ。

彼女は闇の中で眼を開いた。

* *

「　　さな！　さな！」

空色の瞳の少女が、彼女の上半身を抱き上げ、名を呼び続ける。高くあどけないその声は、少し嗄れ始めている。眼を開けた彼女は思つ。澄んだ瞳に、悲哀は似合わないと。

「ち、かぜ……」

だから彼女は言つ。目覚める前の身体を無理やり動かし、声を振り絞つて。安心して欲しい、私はここにいる。

「さな……！　ああ、よかつた！」

千風は彼女の身体をかき抱く。彼女の身体は千風の身体より少し大きいが、二本の腕に宿る力は強い。

少女の体温を始めとして、彼女の感覚が少しずつ生き返り始める。適度に明るい室内、ほどよい気温。下半身は床についているが、浅いぬるい水に浸っている。

「まつたく、ずいぶん長い」と待たされましたわ、さなさん」

頭上から少年の声。天色の瞳を一つ、それに加え不可思議な紫苑色の瞳を持つ白い髪の彼は、

「　サキ」

名を呼ばれた彼は大仰にうなづく。
そして、と彼女は自らに意識を向ける。

私は誰？

「ナゲキ……ではない」

それが私の主人格だけど、

「ササヤキ……でもない」

彼女は彼女の中に、もう一人の自分を感じられないでいた。

今の彼女は一つだった。それはもう半世紀近く前からなかつたこと。

“ナゲキ”も“ササヤキ”も、分たれた心に初めてつけられた名前であった。一つである、本当の自分の名は……

「私は……沙波^{さな}」

ずっとじずっと昔に失った名前 失った自分。

「取り戻してくれたのね、千風、私の名前を」

少女は沙波に抱きついて泣いている。

流れる涙の熱さを、沙波は首筋で感じる。

「うん……うん、だつてあたし、もう失くしたくなかったから。大好きな人を殺したくなかったから……！」

ああ、と沙波は思う。さつきは何と酷いことを、この無垢な少女に言つてしまつたのだろう。

彼女は私を殺したのではない。私を彼女に殺させたのだ。

守りたくて、けれど他に術がなく負わせてはならない罪を彼女に背負わせてしまった。そして私は、歪んだ運命の中で、彼女に罪を負わせたという罪を忘れ、彼女を傷つけようとしていた。

「……なのにあなたは私を殺さなかつた。そして当然だつたというのに。 千の風の名をもつ強い子、あなたの風の刃は縛れた絆を断ち切るのね。

もう泣かないで、千風。あなたが取り戻してくれたこの命^{めい}で、もう一度とあなたのそばを離れないから」

着物の袖で千風の涙をぬぐい、顔を拭いてやる。

二人は手と手を取り合つて立ち上がる。沙波はサキと視線を交わした。

「よろしければ、早く行きましょう。もうこの宴の、最後の演目がはじまっていますわ」

「うん、行こ？ 沙波、チヨが待ってる」

力強い促し。

沙波も負けじと力を込めて肯く。

「ええ、行きましょ、う」

もはや、過去に留まる理由もないから。

*

月神 と戦い始めて早十分が過ぎた。

初めの攻撃のチャンスを逃した今、ボクは防戦を強いられ続けていた。

彼は錫杖と光の矢を交えて攻撃してくる。光の矢はともかく、神杖 天乃御中 の攻撃力は恐ろしい。土当たるたびにスパークして電光は飛び散るし、かすつただけで肌が焼かれる。

ボクは全身を石の鎧で固めて防御力を上げている。錫杖を直接受けとめることはせず、籠手で受け流しながら隙があれば攻撃する。

「鬼ごっこは楽しいかい？ でもあんまり楽しんないと、現うつが碎けてしまうよ」

彼の言葉に乗せられるまま、ボクは焦り始めている。

今や、天と地が新しい時に臨んで唸り、鳴動していた。

頭上の月は大きさを増し、うるさいくらいの光を投げあおしていく。月面には、美しいくらいに複雑で緻密な文様が浮かび上がっている。あれは、あれこそが宇宙を塗り替えてしまう狂った奇跡のための術陣なのだ。

「この！」

ボクは回し蹴りを放つ。

思い切った攻撃は、月神の身体にクリーンヒットする。

「はは、いいね、そういうの」

カウンターで錫杖の大振り。それに伴って、全方向に空気の壁が押し出される。

迫る壁を掌底で碎く。

月神は錫杖を一つ鳴らす。それに応えて、天上から月光が瀑布の如く落ちてきた。

「黒曜の鏡！」

闇色の鉱物で月光を弾き返す。

袈裟掛けに錫杖が振り下ろされる。それも今の黒曜石の塊で受け止めた。

「へえ……」

力と力が激突し、空気を裂く音が走る。

彼の攻勢に尻込みせず、大地の力をありつたけ汲み上げて前に押し出した。

ばん、と音を立て、黒曜石の破裂と一緒に錫杖が弾かれる。月神も体勢を崩す。

ボクは渾身の力を肩こりめ、月神に体当たりした。

「！」

反射的に張られた薄い防壁がボクを阻もうとする。だけど、身にまとつていた防御の力をすべて破裂させ、突き破る。

「！」

月神 が弾け飛ぶ。受け身も取らず、土埃をあげて吹っ飛んだ。

一瞬の間。

倒れ伏した彼に、ボクは追撃をかけようと思つたけど、できなかつた。恐怖だつたのか、憐れみだつたのか、理由は分からぬ。けどしなかつたことだけが事実だつた。

月神 は何事もなかつたように立ち上がる。どにも怪我はなく、白い直衣が土で茶色くなつているだけ。

時間が止まつた。

止まつたのは現の夢の両方 この城を除く全宇宙の時間。絶えず動いている大地が鎮まつて、ボクはそのことを知つた。

「愛し合う者達の一瞬は永遠」 ねえ、神である僕はこんなこともできるんだよ

彼はいたくご満悦。だけど、

「ボクは認めない……！ こんなこと、あなたが力を誇示しているだけじゃないか。

あなたは確かに宇宙を支配している。だけど、力を誇示しているあなたはやっぱり人間だ。だつてあなたは“罪”に捕らわれている。罪に捕らわれるものが、神なはずがない。 あなたはアカにとつてのツミで、ボクにとつて光樹なんだ！」

停止した静寂に、ボクの叫びは響く。

すぐに答えはない。ゆっくりと、静かな空気が、憤るよつに震え始め

た。

「僕を否定するな」

裂けた。

一瞬のことだつた。裂けた空間に巻き込まれ、ボクの足が千切れ

為す術なく、痛みと血にまみれてボクは土の上に転がる。

月神 は少し浮遊してボクを見下ろしていた。埃の付いていた直衣は、いつの間にか純白に清められていた。

「ほり……所詮、君は足がなければ立つこともできない。自分の血で出来た泥にまみれながら、まだ君は神かみを否定するのかい？」

「 泥がなんだ。人であることが、地に立つことが悪いことなの！？」

うつ伏せになり、地を叩いて五十の人形を作る。

人形はそれぞれ斧や槍を持ち、一斉に 月神 に飛びかかる。

月神 は動かない。だけど、当たらない。

「鏡花水月 地を這いずる者達が天にある月の神に触れること能わず」

月光が一條降りてきて、ボクを背中から圧迫する。

背骨が軋み、肋骨が折れて肺に刺さった。

ボクは痛みを訴えることもできない。肺が血で満たされ、口から溢れた。

「人であつた僕が飼つていた猫だろうと、情けはかけないよ。神に逆らう者には神罰を。 死ね」

八尺瓈勾玉がボクの下で砕けた。言靈を封じていた術が壊されたからだ。

もう一度言われば、ボクは死ぬ。抵抗はできず、あつけなく。どうにかしなくちゃと思いつつも、身体は指一本動かない。

「シ…………」

彼の声を最後まで聞くことはなかつた。

* *

人を黙らせるには口を殴りつけるのが一番、と私は思う。炎を纏つた右ストレートを一発。直撃の瞬間に爆発もつけてやる。

「ぐ……！」

あいつは顔を仰げ反らせて、浮遊したまま後ずさりする。

「しばらく会わないうちに、ずいぶんと好い気になつっていたみたいね。 その傲慢」と焼きつくしてあげるわ」

「無駄だ。神でないお前が我を攻撃することなど

「！」

鳩尾にまず一発。身を屈めたところで頬を横殴りし、顎をかちあげる。あいた喉に正拳突き、仕上げに両肩を掴んで膝蹴りを密着して入れる。

効果は十分。彼は苦悶に顔を歪ませている。

「 口の利き方を忘れたみたいね。私は“お前”でも“君”でも“あなた”でもない。アカ、よ。何度も言つたら覚えるのかしら、ツ

「」

「私はシミではな ぐわッ！」

蹴り飛ばす。それでも浮遊しているあいつを、私は踵落としで土に叩きつけた。

「な、何故」

打撃に身体を軋ませるあいつが言つ。神である自分に何故“人間”の攻撃が利くのか、それに私は答えてやる。

「地を見ることが、シミ。見下ろすんじゃなくて、しっかりと向き合つて見なさい。

すごいと思わない、この術陣。詳しいことは分からぬけど、こんな複雑で入り組んだ模様を四層にも重ねているのよ。それぞれの模様に一つとして同じ部分はなく、でも干渉しあうこともなく、一つの効果だけを發揮させている。つまり、神の存在の禁止を。

完全ではないにしろ、あんたは神として不完全になつているのよ、シミ。これをチヨが組み立てたなんて、あんたは信じられる？」

と、チヨは一体どうしたんだろうか。

見ると、寝ている ではなく氣絶している。

放つておいても回復するだろうけど、気が向いたので再生の火を分けてやる。

それにもしても、彼女は本当に大したことをしていると思う。発動している術陣は力に溢れ、確実にあいつを弱らせている。しかも、力の供給源を大地だけではなく私にも指定しているところが面白い。

「これは、チヨが練りに練つた術なのだろう。

「僕は……神ではないのか」

背中に土をつけて、あいつは立ち上がる。その足は、地について

いる。

「……知らないわよ。ただ私は、あんたが偉そうにしているのが気に入らないだけ。あんたがツミであることを否定するのがむかつくだけ」

あいつは何も言わない。
私も何も言わない。

あいつは何も言わない。
私も何も言わない。

あいつが言う 「僕は“罪”^{シミ}。君は “垢”^{アカ}」

「もしかして、あんたは罪を穢れを恐れているの？まあ、なんだつていいのよ。ただこの胸にある想いが、そこにはあなたのを示すから。 あんたを私の物にしたい」

目と目が合^うう。
彼色^{かれいろ}の瞳が、たまらなく

「僕には君の想いがわからない。だから、教えてくれるかな」「いいわよ。それが……告白つてものでしょ」

私と彼は拳と拳を、力と力を、身体と身体をぶつけ合^うう。
これは戦い。 いや、これは遊戯。
心と心をぶつけ合^うう。想いを伝えるために。
私達は天へと昇る。月と太陽の狭間で、すべてを解放する。

喜びに世界は満たされ、
終結する。

カソケツ

7・6 「天の是非」（後書き）

今回は視点が三度切り替わりました。特に、なんで最後にアカの主觀が入るのかなあというのは、書いている私にも解りかねます。沙波が生き返りました。このまま死んでしまつたらどうしようかと本気で心配しました。

あと一回ぐらいで終幕まで持ち込もうかなと思います。

7・7 「地平」

じゆはどい？

じゆは夢、ボクは答えを得る。

だけじ、夢はどいにある？ 現は、つまり地球。太陽があつて、そこから水星と金星を挟んで千五百万キロメートル離れたところに地球はある。地球は自転もしていて、三十八万キロメートル離れて月も回っている。月も自転している。

夢は　夢は月にある？

それは正しく、同時に間違っているとボクは答えを得る。
今、月神によつて夢は月に集められている。そして、その一部は現にある。

でも元は夢は現にあった。現は夢を生み、夢は現を生む、それがかつてあつた姿だった。 現と夢は一つだった。

だけど、いつのまにか一つは二つになつていた。それはあつてはならないこと。引き裂かれた兄弟のように、二つは求めあつた。分かれた後は、夢は時空の狭間で、在るのか無いのか曖昧なところでさまよい続けた。そのとき夢は不安定で、互いに潰し合わないと存在を続けられなかつた。

そして願い続けた。還りたいと。それは夢も、現も同じだった。

だから、ボクは為そうと思う。帰還を希求する千のもの達に代わつて、地に代わって、ボクが謹んで為そつ。

開け。

閉じられた境界よ、開け。

*

身体を起こすと、傷が全部治っていた。アカが力を分けてくれたんだと悟り、心中でありがとうと言つ。

世界が眩しかつた。太陽と月が同時に輝き、世界を光で満たしていた。

莊厳で、壯麗。

真っ白な天空を震わせるものがあつた。震えの名は歡喜で、震えのもとは一組の恋人同士だつた。男の方は月の力を、女の方は太陽の力を従えている。

二人は神ではない。だけど人でもない。そういえば、ボクも人ではなく、猫でもなかつた。ボクはボクで、二人は一人なんだ。神でも人でもない、ありのままの二人の戦いは絢爛豪華なオペラのようで、見ているボクに胸を震わせる感動を与える。

「 て、うわっ！」

一人の激突の余波が、地にぶつかつて爆発した。

まずい、あの二人のせいでの世界が壊れるかも。
現とか夢とか関係なく。

神じやないけど、二人がすごい力を持つてるのは確かで、そんな二人がなりふり構わず戦えば常識では考えられない被害が出ることは明らかだつた。

どうしよう、と思う。こんなことになるとは思わなかつたから、二人を止める方法がまったく思いつかないし、そもそも恋人同士の時間にボクが横やり入れていいんだろうか？

「やれやれ、相変わらず迷惑な一人ですわね」

「 サキ！」

やつと、来た彼にボクは抱きつく。サキは腕を広げて待っていて、しつかりとボクを抱き締め返してくれた。

「まつたく、わたくし私とチヨはこんなにも無害ですのに」

サキの背後に立つ一人、千風とササヤキは彼の言葉に曖昧に笑っている。

ササヤキ？

胸の中で首をひねったボクに向かって、滄い髪の彼女はやんわりと笑顔を見せた。

「私の名は沙波。さな水よ、天に満ちる大気のすべてと、地の暗き深淵まであらゆることに存在する水よ。今ここに大地に癒しの力を与えましょう」

光に灼かれ荒れ始めていた土に、水の潤いが宿る。透明な水はしづしづと湧き出してきて、浅くボクらの足元を濡らした。

「あたしは千風。遙かな時空を駆け抜ける風達よ、よどみなく、おらかに吹いて大地を包む護りの手となつて」

風のなかつたこの場所に吹きわたる風。今世界に満ちる戦いのにおいをはらむ風は勇ましく、天から打ち寄せるエネルギーの波から大地を守つた。

「これを使って、あの二人を落としますわよ」

「そういって、サキは一枚の鏡を取り出す。」

「ハ咫鏡

サキが呼んだの？」

「いいえ、落ちてましたの」

不可解な返答。だけどあまり気にしないで、ボクは鏡を受け取る。八咫鏡は天の光を受けて煌めき始めていた。力を蓄えて、一気に打ち出す感じみたいた。

「かつて、天照大神の閉じこもった天之岩戸あまのいわどを開いたきっかけとなつたのは、この八咫鏡でした。それと同じように、現と夢の閉じられた境界を開くきっかけとなるのも、この神器がふさわしいと思いませんか？」

そうこうしている内に、八咫鏡のチャージが限界に近づいていた。ボクは足を肩幅に開き、鏡を頭の上に掲げる。……光がまぶしくて、目がちかちかする。

サキがボクの背中に身を寄せる。すると、目の前がすっと薄暗くなつた。

「無理する事はありませんわ。大地あまのいわどを護る闇はここにあります。さあ、お願いします」

「閉じられた空よ、開いて。夢を向かえる準備はできたよ。さまよつている者達、これからは、同じ地平に立つていくことを約束しよう」

八咫鏡が砕け、力を放出する。

七色の光。白い天に吸い込まれ、見えない爆発と、扉を開くような轟音が響いた。

天上で戯れていた一人が落下を始める。太陽は天の彼方に一步引き、そして

月が落ちてきた。

*

「我、今此処に風を伴い、西に立ちて白虎の名を借りりん」

「我、今此処に水を操り、東方に立ちて青龍の名を借りりん」

「我、今此処に黒き闇を従え、北方に立ち玄武の名を借りりん」

「我今此処に焰を司り、南に立ちて朱雀と名乗らん」

サキのアイデアで、できる限りボクの力を高めるために四神相応の術を使うことになった。

場所は富士山の麓の誰もいないところ。土地としては、日本一の山とそれに従う地脈がある以外はなんでもない場所だけど、あの月の城から出たらここに飛ばされて、他に移動する時間が惜しいということで、ここで月を迎えることにした。

地面は草に覆われ、山に向かってなだらかに傾斜している。真っ白い月の光が皓々と降り注ぎ、草つぱらだけど雪の中に立っている気分になる。

月は真上から少しづれて南の空にある。

見た目で直径四メートル以上ある月。巨大なそれからボクは目をそらさない。

背中には富士山があり、サキが立っている。左手方向には沙波、右手には千風、そして正面にはツミを背負ったアカガいる。ツミは眠っているみたいだった。

『『四神の形と理はそろえたり。我、四方に立つ者達の認証を受け、此處に土を司る黄龍の名を借りつけると宣するなり』』

とくん、と大地の力がボクの胎なかで脈打つを感じた。これまでにない強い力が、足の裏を伝つて入つてくる。地球という、大きな存

在に支えられているんだという感覚は、それだけでこの画面に立ち向かう勇気をくれる。

「……ボクの両腕は地の両腕。地の腕は、すなわち天を支える宇宙の柱！」

ボクは両腕をあげ月光の中にかざす。そつ、受け止めるよつ」。

「届く！

ずん、と身体に重さがかかる。もあらん、手の平の上に載る、月に見える物は何もない。

月の落下が止まる。

「う…………ううー！」

重くて、息が切れてい田の前が暗くなつてくる。両足が震えて、挫けてしまいそうだ。

「腕の力で支えてはいけませんわ。身体の……大地と一緒になった全身で、月を受けとめるのです。あら、でもそれって妬けますわね。チヨと一体になれるのは私だけですのに」

地球にもジヨラシーできるサキ。

そんな自分の半身にふつと笑みがこぼれ、身体に入っていた無駄な力が抜けた。

本当の力はもつと下の方から、しみじみと湧いてくる。ボクは大きな地球の、その表面に乗る小さな存在で、限りない力が向かうべき方向を指示していいだけなんだと自覚する。

顔をあげると、月が本当に間近に迫っていた。でも、今はもう身体を圧迫する力はない。

月面に浮かび上がる、海をなぞるように描かれた無数の円で出来た術陣。これがつまり、宇宙の狭間にほんやりと漂つ夢を、現に還すための扉。

「分かれたものを一つとするために、開け扉」

ボクの足元を中心に、同心円がいくつも重なったシンプルな術陣が現れる。

「ダウノンロード降着開始！」

月面と地面、向かい合つ術陣の間に七色の光がほとばしる。

降ろすのは情報としての夢まぼろしで、想いや魂といった形になる。物質のまま降ろすことはできない。

いつたん地面ある術陣に飲み込まれた情報は、一部はすぐに受肉、物質化して適当な場所に出てくる。けど大部分はしばらく地の底で眠らせて、それから少しづつ地上に現れることになる。やつしないと、現が変化に耐えられないでめちゃくちゃになってしまつかもしれないからだ。

夢が広がっていく。

これから世界はどうなるのだろうと思ひを馳せる。世界は一つになる喜びに震えているけど、その中に住む命がどう思ひのかはボクに分かるはずもない。不和は、あるだろう。その最たる例が月ムーンの子ネスハイアで、結局 月神ムーン男神 に裏切られたみたいになつた彼らはこれからどうするのだろうと思ひ。現にはこれまで眠つっていた、科学を超えた力が活性化するから、混乱は避けられない。

でもきっと明るい未来は来ると、ボクは樂觀する。夢まぼろしの力は、みんなの願う夢まゆを叶える力。みんなが安らかな世界を夢見ているなら、きっと世界はその方向に動くから。

「つまくいっているみたいね」

手のひらの上で青い水を弄んでいる沙波が、そつと言つた。

「うん、風が 世界の呼吸が強くなってきたるよ。ずっと世間に消えちゃった、色んなものの存在を感じる」

千風が言つのは、妖怪とか精霊とか、御伽噺トーヤクガタベシナに出でてくるような存在のこと。そうこうたものは夢おほゆめでは、凶暴な 異形イキヨウとしてしか出てこなかつたけど、あるべき姿にあつた世界でなら、無害で世界をより面白くさせる要素となるんだ。

「見てるだけ、はつまらないですわ。早く終わらせと、チヨドこちやいぢやしたいです」

そんなサキの軽口。ボクをリラックスさせようとしちゃるんだと解釈して、術に集中し続ける。

冷え切つた土の空洞に、温かな溶岩を注ぎ込むよつなのだと感じている。世界は芯から温まるけど、危険性はある。あせりゅーに落ち着いて……

ぱしり

小さな地割れ。 大丈夫。元氣なつた世界が、転んでちょっとと怪我したみたいなものだ。

だけど、ぱしり、ぱしり、と地割れは続く。風が吹き荒れ始めて、月が落ちてくる力が強くなる。 そう まるで悪夢のように。

「…………」までのようだね

ふいに、光樹が目を覚ました。

アカの背中から降り、手の中に錫杖スズツクを出現させる。そして彼はしゃらんと杖を鳴らして振り上げる。

琥珀の瞳はボクを見ている。感情のない瞳。

まさか、と思うけど術で精いつぱいで身体を動かすことができない。見つめられるまま、ボクは視線をそらさなかつた。

天に錫杖を掲げたまま、彼は杖を動かす。先端は、虹色の光の中で、白く淡い光を灯してゆっくりと軌跡を描く。ゆるやかな、弧を。

「チヨ」 そう発せられた彼の声は、穏やかそのものだった。
「君の術は完璧だった。君のおかげで、現と夢は反発することなく一つに溶け合い始めた。この美しい調和は、必ず人々の心にも響く。きっと、世界は穏やかに和していくよ」

ダウソード

降着が止まった。月が落ちてくる力もなくなつた。

月が遠ざかり、光はしめやかになる。空は群青を重ねた濃紺となり、星が瞬き始めた。

しん……と世界が静まる。世界中の人が、命が、この美しい星月夜に魅入っているんだ。

光樹はボクに背中を向けている。土埃の付いた白衣の背中に流れる白い髪は、優しい夜風にさらさらと梳かれていた。

「夢と現はすこし長く分たれてしまった。 誰のせいでもない、しかし一度で元に戻ることはできないんだ。だけど、これ以上夢を時空の端で漂わせることは、僕としてできない。

だから、僕は夢を連れてもう一度天へ、月へ昇ろうと思う。今度は侵略のためではなく、時を待つために。 少しずつ、夢を現に還していくために」

それってまさか……

「別に、この世界のいけにえとなるわけじゃない。罪の償いのために、僕が為せることを為したいんだ。」

僕はずつと罪を恐れていた。罪を背負っているといつて悪を為し、実際のところ罪から眼を背けていた。罪を背負うことで、視界から消したんだ。 けれど、それも止めにしよう。僕は罪を償

い、罪と向き合つ。そうすることで、僕は初めて“ツミ”となるんだ

胸を締め付けられるような、言ひようのない感情が込みあがつてくる。

「いやだ……」

言葉は絞りだされるよつに出た。

「そんなの……また光樹は独りになつちやう。……あの夜の公園で離ればなれになつてから、最後までボクらは別々になるの？ ねえ、ご主人様！」

『ご主人様は少し寂しそうにほほえむ。月光が、そんな彼の顔をはつきりと照らす。

「大丈夫、僕は』

“僕はアカのもの”でしょ、ツミ』

唐突にアカが割り込んだ。ご主人様と並び立つ、彼女にも当たる月光は、身にまとう真紅の振袖を燃え上がらせていた。

「今度こそ逃がさないわよ、ツミ。さもなければ、今すぐ殺してやるんだから」

彼は心底うれしそうに破顔した。アカに歩み寄り、彼は彼女を包みこむように抱きよせた。

「そうだね。僕は、君の想いに報いることにしよう

アカは彼の肩に頭を預けた。

赫い髪に鼻をよせた後、ご主人様はボクを いや、ボクの後ろに立つサキを見た。

「サキ、これからもずっとチヨの傍にいてあげてほしい。もちろん、君個人としてチヨを愛してほしいんだ。 言うまでもないことが

な

「ええ、あたり前ですわ。 アカ、 幸せにおなりなさいまし」
アカはちらりとこちらに微笑を見せただけで、 何も言わなかつた。

「沙波さん」と主人様は話しかける。

「あなたを弄んだこと、謝る権利すらないけれど、それでも謝らせてください。 だけど、沙波さんがいてくれたから僕はここにいられる気がします。 月の子^{ブランズブイア}達をお願いさせてください」

「 よろこんで。 それが私の役目だもの。 いつてらっしゃい、 私の可愛いレジミ、 アカ」

彼は千風にも顔を向ける。 千風は、 ちょっとだけもぞもぞした。

「君はこれから多くの人と絆を結び、 多くの人に愛される。 千風、 僕は君の幸運を祈るよ。 それと、 ありがとう。 チヨに力を貸してくれて。 元気でね」

「うん、 またね、 レジミお兄ちゃん。 それと アカお姉ちゃん」

意表を突かれたのか、 びくとアカの方が震えた。 それを見て、 千風はくつくつと笑つた。

「僕はいつか必ず戻る。 夢と現がひとつに戻るその日」。
それはあと千年かかるかもしれない。 でもここから始まる“帰還”の千代、 そのあの千代は^{＝ヒトムツ} 万物にある八百万^{すべて}が神となる満ち満ちた世界となる。だからチヨ、 この千代を君と君の血族が守つてほしい。 いつかまた、 全き世で僕達がめぐり合つたために

誓つような、 約束するような言葉。

誓約^{ハガク}。

「主人様からは、 ただひたむきにこの世界を思つ気持ちが感じら

れた。

でも

「うん……わかつたよご主人様…………」

涙の堰が壊れた。

しゃくりが上がってきて、何も言えなくなつた。

「一つ、神話を残して行こうつか」

・ 月虹は懸け橋となる

「月夜にかかる虹が夢を運ぶよ。そして、千度田の橋に僕とアカは渡ることにしてよ」

それが最後の言葉。

潤んだ視界の中で、月光の柱が降りてきたのを見た。彼はアカを連れ添つて柱の中に入つていく。

振り返りもしない、未練を残さないその背中。何か言わなくちや

気がつくと、夜は夜らしく静まり返つていた。世界の気配の奥にはちょっと違つるものがあるけど、夜は、彼が望んだとおりの安らかさを持つていた。

「ボクは…………」

地面につづくまつて、誰に言つともなく、言葉を吐く。

「ご主人様に、またねって言えなかつた

涙があふれ、落ちる。秋の入りの、枯れ始めの草の上でぼとつと弾ける。

「ボクは泣いてばかりだ。悲しいことなんて、悲しむべきことなんてないのに、どうして……」

「悲しむことがありますわ」

サキがそつとボクの傍にしゃがむ。

「大切な方とのお別れですもの。だけど、本当に再会があるのなら、別れ際の言葉など不要とは思いませんか？ シミさんも何も言わなかつた。それは、再会が絶対のものだということです。……あなたはなにも間違つていませんわ」

「ねえねえ、東の空を見なよ、チヒ」

朗らかな千風の声に促され、ボクは顔を拭つて顔をあげる。東の空には、夜明けがあつた。

朱の光が地平に沿つて燃え上つている。弱い心を突き飛ばすような、新しい刻の衝撃。

「新しい世界のはじまりだよ」
後ろを見ると、月が白んだ空に消えようとしていた。
また会える。そんなことは当たり前

「Where are we go？」

サキの問い。ボクは光る地平に向かつて言つ。

「もちろん、この先の世界に」

サキはくすぐつたそこに笑つた。千風はあははと笑い、沙波は悠然と足を踏み出す。

これでボクらの物語はおしまい。でも、世界はまだはじまつたばかり。
だから大地が、地球^{せかい}が言う。言い続けている。“はじめりはじめり”と。

7・7「地平」（後書き）

ラスボス戦という感じはないのでした。チヨは攻撃性が低いので、流れとしてこうなるのが当然だと思います。
……なんだか燃え尽きた感じがあります。
とりあえず次回の終幕へと行きましょう。

“大戦”から十六年が過ぎた。

かつて現と呼ばれ、戦乱と惰眠、貧困と飽和、矛盾した安定を持つていた世界は今やその安定を失い、日々変化し続けるようになっていた。

まず、“力”が活性化した。

古代には魔術や鍊金術とされていた力。近代に入り科学によつて駆逐された力だったが、夢の混和により再び人々の間にそれは広まつた。

物質に頼らず、感情のままに使うことのできる意志の力。それはまず戦争に利用されようとしたが、すぐに止められた。

力には意思があった。

戦うこと、他者を傷つけることよりも、他者に恵みをもたらすことに力は強く働いた。田畠を焼くより、田畠を広げ実りを豊かにすることに、その力は反応したのだ。誰にでも使える力だったが、邪な思いには応えなかつた。力は常に、善を為すように発現した。

次に、“人間”が変わり始めた。

大戦の後に生まれた子供達は、親の持つものを部分的に否定し始めた。

髪の色が違つたり、肌の色が違つたりした。ある子供は言葉を覚えなかつた。ある子供は風俗慣習をまったく無視して育つた。

そして子供達は“力”が強かつた。大人たちが暴力を振るい無理強いをすれば、すぐさま反撃できた。

無秩序のようだが、次世代の人間は親から学ばずとも世界から学び始めていた。変わりゆく世界、古い人間は戸惑つたり絶望したり

もしたが、次世代は世界と語らいながら、希望を持ち健やかに育つていた。

そして、戦後は終わった。混乱の中からも秩序は芽生え、平穏と呼べるもののが見え始めていた。

「では行つてきますね、千代。帰りはいつもどおりに」「うん、行つてらつしゃい後介。お仕事がんばってね」

一軒家の並ぶ、平凡な住宅地。

守宮・千代とその夫後介。チヨ、サキ、君達は「」普通の夫婦として暮らしている。

容姿の違いは始めだけ異様に見られはしたもの、今では町内会のおしどり夫婦として名を馳せている。

アスファルトの碎けた道の上を自転車で走り、後介ことサキは仕事に通う。

その背中を見送り、チヨ、君は一度家の中に入る。

少しして、また守宮家の扉は開かれる。今度は、君と四人の子供が出てくる。

「行つてまいります、お母様」

まず言葉を発するのは守宮家の長女、初音。^{はつね}十三歳の初音はとても落ち着いた雰囲気を持っている。

「いつて……きます……」

次いで眠そうに言う長男、夕霧。^{ゆうぎり}初音とは一歳離れている夕霧は、君譲りの尻尾を地面に垂らしている。

「行つて」「行つて」「きます」「きます！」
ちよつと氣の合わない声。次男と次女は双子で、それぞれと真木
と若菜といふ。夕靄からさりに一歳離れている。父親似の同じ顔を
同じように輝かせて、同じ猫の耳をぱたぱたしている一人。だけど、
真木の髪は綿のように白く、若菜の髪は炎のように赫いのはなぜか
な？

「行つてらつしゃい。遅くならないで帰つてくるのよ」

姉を先頭に、連なつて登校する四人の子供たち。それを見送る君。
妻となり、母となつたね、チヨ。いや、今は“千代”か。
今、君は幸せだ。

それでいい。世界には確実に、希望と幸福が存在しているのだから。

君の子供達を追つことにしよう。

子供達は一時間ほど歩く。この時代、もはや電車や自動車でセカ
セカ通う者は遅れている。

野を横切り、草木のなかを通る。木々に間には妖精たちが遊んで
いる。少し抉れた地面には、古い機械達が朽ちる時を待っている。
やがて到着する、新成第一学園。日本に八つある新成学園は次世
代の人間の教育を旨とする学園。帰化した夢の大人たちが教師や事
務員を務めているのが特徴の一つだ。

学園長は　ああ、そこにいるね。

「おはよつ、初音ちゃん、夕君、若菜ちゃん、真木君」

玄関の前に立ち、そう声をかける君の名前、今は水瓶富・沙波と名乗つてゐるんだつけ。

戦後、各地に散らばつていた 月の子 を集めていた君は、その中で子供達にふさわしい教育が為されていないことに気がついた。そして日本政府や、超科学に対処する国際組織 SEME と掛け合つて、この学園をつくることを決めた。

守衛の一代目達は一通り君に挨拶する。その愛らしい様子に君は相好を崩す。

「ねえ小母さん、歩は？」

そう問うのは小学部二年の真木。

歩とは君の息子。同じ年の真木とは仲が良いんだよね。

「歩は教室にいるはずよ」

君がそう告げると、真木は他の兄弟に先んじて行つてしまつた。

明確な登校時間はないので、それから一時間、まったく生徒が来なくなるまで君は玄関の前に立ち続けた。

それから自分の仕事場である、学園長室に入る。

「学園長、電話で伝言があります」

水晶のような青い瞳が美しい君の秘書。彼女も夢から帰化した人間だ。

「何かしら、アケルナル」

「えつと相川様からで、明日会いにいらっしゃることです」

相川・千風。今は SEME の特殊エージェントとして各地を回っている。

「そつ……久しぶりに日本に帰ってきたのね、あの子は」

椅子にすわり、窓の外を見やる。

そして君は、三十過ぎても未だ少女みたいな彼女のことを思つ。

「相川・千風。職場で、私用での電話は控える」

「久しぶりに会つたら、いきなり小言？ 名塚・鷺累」

旧漆黒委員会、今は SEME B 部署、日本支部のオフィスに緊張が走る。

千風、君は名塚氏とライバルのような関係になつてゐる。顔を合わせれば言葉を戦わせ、剣を合わせれば火花を散らさではいられない。

「小言ではない。組織の規範を示すのは必要なことだ」

「あ、そうなの？ でも今のは新成学園の学園長との連絡だから、あながち悪いってこともないよね」

「おやおや何ですか？ 朝から騒がしいですね」

守富・後介の登場。普通の会社員の如く通勤する君は、実際はこんなところで働いている。

後介と千風は互いを認め合い、笑みを交わす。まさしく旧友といった様子だ。

「久しぶり、後介。子供達は元気？」

「ええ、千風さんがいない間に、下の双子も学校に入つたのですよ。
そういうえば、あなたまだ独り身なんですか？」

千風、君は恋人も作らず旅を続けている。……その理由は、ここ
で探る必要もないけど。

それを言及されると君は気まずい顔をする。後ろめたい訳ではな
いが、とにかく苦手なのだ。

と、そこに一人の女性がお茶を持つて入つてくる。

「あ、でも千風さんは最近若い人をアシスタントに雇つたんですよ
」「つ！ 優見、余計なこと言わない！」

それを聞いた後介はにやりとする。

「若い人つて乾さん、その方は男の人ですか？」

「もちろん。感じのいい人ですよ」

千風の顔に朱が昇る。

騒がしくなる、力をもつて世界を見守る者達の集い所。なか
なか、面白そうだね。

「充秀！ 今までどこに行つてたのよ」

赫い髪の君が、眉を立てて待ち受けている。

「ちょっとあちこちを見て回つてたんだ、稚菜。……ああ、一
日経つてしまつたんだね。

朝、チヨを見てから、今はすっかり黄昏になつてしまつた。

もう太陽の沈みかけた西からの光は、君の影法師を作らない。君の姿は誰にも見えない。

神となるとこいつのは、思えばやつかいな」とばかりだね。時間感覚がすっかりおかしくなってしまったよ。

「それで言い訳しているつもり? ……で? どうだったのよ、久しぶりの地球は」

なかなか良かつたよ。しばらくは安心して彼女たちに任せとけそうだよ。

「わう。じゃあ帰るわよ」

君は光を放ち始める月を見る。

君はあまりここが好きじゃないみたいだね。

「当たり前よ。まだここは私達のいるべき場所じゃない。だから、私は“稚菜”としてしか存在できないし、あんたも“充秀”としか存在できない」

そうだね。帰ろうか。

君とともに歩く。見えない階まどはなしを上り、やがて淡い色の月虹に足がかかる。

ねえ、君たち。

これは地上に生きる人達への呼びかけ。

君たちは、君たちの大地に生きているんだよ。矜持をもって、責任をもって、君たちの大地を歩きつづけて欲しい。そう、僕は願

つよ。

地に足をつける者と、夢と円は共にある。

そして夢は現に還り、現実となる。

願わくば、人々が希望をもって夢を見たことを。

終幕（後書き）

最終話は結構手間がかかりました。あまりだらだらしないよう、文字数をできるだけ少なくしようとしました。

守宮の一代目の名前は、『源氏物語』のサブタイトルから来ています。“真木”は“真木柱”ですが。

ああ……終わりましたね。一年もかけてませんが、長い時間がかかりました気がします。その長い間に私というものは微妙に変化し、はじめ思っていたテーマと全然違うことを小説に入れてしました。この物語は私のエゴイズムだけで書かれているみたいなものです。それでも読んでくださった皆さん、ありがとうございました。つまらない、不完全なものですが、皆さん的心に欠片でも残るなら私は仕合せ者でしょう。

感想批評待ってます。

では、さよならです。夢が現実になることを願つて。

白亜・迄舞、
はくあ・じまご、
2008・10・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0947e/>

your earth

2010年11月8日19時29分発行